

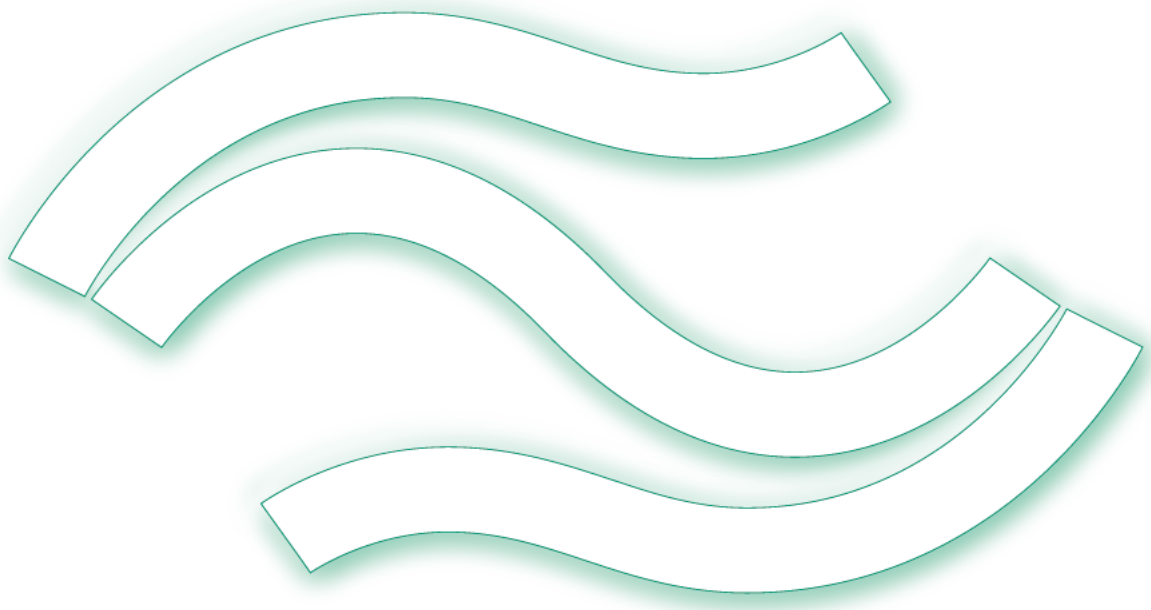
# 国際日本文化研究センター25年史：資料編

## 1987-2012

図書名	国際日本文化研究センター25年史：資料編 1987-2012
その他の言語のタイトル	25-year history of International Research Center for Japanese Studies
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006123">http://doi.org/10.15055/00006123</a>

# 国際日本文化研究センター25年史

[資料編 1987-2012]





凡例

- 1. 本書の記述対象時期は、原則として国際日本文化研究センターの創設前史から2011年9月末までとした。
- 2. 用字用語は常用漢字、現代仮名遣いを原則としたが、固有名詞、専門用語などこれによらないものもある。
- 3. 本書に記載するすべての人名は敬称を省略、敬語は使用していない。所属機関、役職名は当時のものとした。
- 4. 外国人名は日本語（カタカナ）表記を原則としたが、資料原本に従い外国語表記も残した。
- 5. 年号は西暦を原則とし、適宜和暦を併記した。

## 発刊ごあいさつ



国際日本文化研究センター  
所長 猪木武徳

1987年5月、諸先輩のなみなみならぬ努力によって国際日本文化研究センター（日文研）が創設され、今年で四半世紀の歳月を数えたことになる。設立の経緯を正確に記憶する人も少なくなり、創設後の学界や日文研を取り巻く社会環境の変化に対して、センターがどのような順応と対応を示してきたのかを語れる人間も限られてきた。

わたくしが2008年4月に日文研所長に就任した直後に、新しい執行部と事業計画を検討した際、われわれの属する組織の誕生と歴史を記録する資料が散逸していること、日文研の研究者が自己確認することができ、所員・職員の一体感を高めうるような「年史」の編纂が必要なことで意見が一致した。ひとつの組織がいかなる理念のもとに設置され、歳月の流れのなかで試行錯誤を重ねつつ、いかにその所期の目的と役割を果たしてきたのか。この問いかけに応えうるためのベースとなるような「記録」を、後の世代に残す時期に来ているという思いを確認したのである。

「過去を振り返る」ことは「過去に縛られる」ことを

意味しない。25年をひとつの区切りとして、国際的な日本文化の研究機関、海外の日本研究者への研究協力機関である日文研が、その本来の目的を見失うことなく、将来の発展への励みとなるような「年史」を編纂しようということになった。

早速、「25年史刊行委員会」（委員長 白幡洋三郎教授）を組織し、実行部隊としての「25年史編纂室」（室長 小松和彦教授、のちに瀧井一博准教授）が2008年5月に設置された。以後「刊行委員会」と「編纂室」のメンバーを中心に、所員と職員の集中力と粘り強い努力の結果、ここに『25年史』の完成を見るに至った。

『国際日本文化研究センター25年史』は、「創設への道」、「研究と活動の足跡」の二部構成をとっており、それに詳細な資料編と沿革年表が加えられている。この『25年史』を通読するだけで、正確なデータに裏打ちされた世界の日本研究の推移と現状をかなりの程度把握できるのではないかと思う。時代とともに日本研究の内容と方法がどのように変化してきたのか、海外

の日本研究者の研究分野の変遷、あるいは日本研究が盛んな国・地域の微妙な変化の軌跡も具体的に見て取れよう。ここに集められた資料は、日本国内や世界の人文・社会科学の変遷の歴史を反映しており、学問の世界の「不易」と「流行」を示す資料ともなりうる。

この『25年史』は多くの方々の協力によって完成を見た。多忙にもかかわらず、インタビューに快く応じてくださった先輩諸氏、文書資料と口承資料を編纂した日文研の諸兄姉、資料編のデータを整えた日文研・管理部の皆さん、そして本誌の編集を担当して下さった株式会社エトレおよび小野利家氏にこころよりの謝意を表したい。

『国際日本文化研究センター25年史』を、これからの日本研究を担って行く若い世代の研究者とともに、日文研創設25年を祝いつつここに手にできたことを慶びたい。

2012年3月





正門から玄関へのアプローチ

緑豊かな環境の中で行われる日本文化研究



国際日本文化研究センター全景（2010年）



## 研究者の自由な交流を促す空間



コモンルーム  
研究者同士が語り、くつろぎ、ときに休息をとる自由なスペース



図書館  
三層吹き抜け構造の円形閲覧室





講堂  
講演会をはじめ、演劇、伝統芸能、音楽など多目的な使用に対応できる



第1共同研究室



第5共同研究室

幅広い研究の成果を伝え、ともに考え、共感し合う



第7回 日文研フォーラム (1988年)



第2回国際研究集会 公開講演会 (1989年)



日本研究・京都会議 (1994年)



第4回東京講演会 (1994年)



ヨーロッパ国際シンポジウム (ベルギー、ルーヴァン・カトリック大学 1998年)



目 次

発刊ごあいさつ 国際日本文化研究センター所長 猪木武徳	004
口 絵	006
【第1部】創設への道	015
第1章 国際日本文化研究センター構想の誕生	016
第2章 創設準備の推進	028
第3章 国際日本文化研究センターの創設	034
【第2部】研究と活動の足跡	039
第1章 研究活動① 共同研究	040
共同研究一覧	044
第1期 1987(昭和62)～1993(平成5)年度の記録	048
第2期 1994(平成6)～2002(平成14)年度の記録	080
第3期 2003(平成15)～2011(平成23)年度の記録	134
第2章 研究活動② 国際研究集会／海外活動	200
国際研究集会の記録	204
海外シンポジウムの記録	230
日本研究会の記録	233
海外研究交流シンポジウムの記録	234
第3章 研究活動③ その他の活動	236
基礎領域研究の記録	238
暖話会の記録	239
所長特別研究会「日本文化と個人」の記録	240
ジャポニスム・セミナーの記録	241
Saturday Seminarの記録	242
「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフと日本」の記録	244
第4章 研究協力活動	246
シンポジウムの記録	262
日本在住外国人シンポジウム・ 「世界の日本研究」シンポジウムの記録	267

文化資料研究企画室シンポジウムの記録	268
レクチャーの記録	269
日文研フォーラムの記録	276
木曜セミナーの記録	292
Nichibunken Evening Seminarの記録	302
その他のシンポジウムの記録	311

第5章 教育活動	312
----------	-----

第6章 普及活動	316
----------	-----

東京講演会の記録	320
学術講演会の記録	322
公開講演会の記録	325
公開セミナーの記録	326
文明研究プロジェクト公開講演会の記録	330
伝統文化芸術総合研究プロジェクト公演会の記録	331
日文研・地球研合同シンポジウムの記録	332
特別開催講演会の記録	333
出版活動の記録	336
日本研究／Japan Review／日文研叢書／ NICHIBUNKEN MONOGRAPH／特別研究関係出版物／ 日文研／NICHIBUNKEN NEWSLETTER／ 日文研所蔵図書目録／海外日本研究機関一覧／その他	
その他の普及活動の記録	353
一般公開／出前授業	

第7章 運営と組織	358
-----------	-----

【第3部】資料	363
---------	-----

評議員／運営協議員／運営会議委員／顧問・役職員／名 誉教授／専任教員／寄附研究部門教員・特任研究員／客 員教員／外国人研究員／外来研究員／研究員	
--------------------------------------------------------------------------------	--

年度決算推移表	426
年表	428

編集後記	430
------	-----

25年史編集関係者一覧	431
-------------	-----

第1部 創設への道



## 第1章 国際日本文化研究センター構想の誕生

国際日本文化研究センター（以下、日文研）は、2012（平成24）年5月21日に創設25周年を迎える。現在の正式名称は、大学共同利用機関法人／人間文化研究機構 国際日本文化研究センターという。わが国の過去から現代に至る膨大な文化的営みを対象に、国際的、学際的、そして総合的に研究しようという、近代国家においてはきわめて稀な試みがなされて四半世紀、着実に実績を積み重ねてきた。

いかなる発想の下に、創設に至る道筋が描かれたのか。その全体構想はいかにして形成されたか。国際日本文化研究センターの構想から設立に向かう準備作業の推移を中心とした「前史」を、さまざまな史料を再配置することによって明らかにしていく。併せて、創設直後から主要施設の竣工を待って実施された桂坂での開所記念式典までの初期の日文研の活動を、ここで総括的に言及する。創設以降の全体の活動の軌跡については、「共同研究」や「研究協力」などの大きな枠組みごとに、第2部において改めて記述する。

### ●京都で生まれた構想

日文研創設構想の淵源<sup>えんげん</sup>は京都市にあった。京都市は、第2次世界大戦の戦禍が僅少であったということもあって、地場産業の復興や国際的な文化観光都市として脚光を浴びることで、戦後一貫して順調な発展を遂げてきた。しかし、1970年代後半になると頼みの観光客数も停滞し始め、魅力ある新しい都市像の模索が求められるようになった。こうした背景の下、1978（昭和53）年10月、船橋求己 京都市長は「世界文化自由都市宣言」を発し、京都市の革新を企図して新しい都市像の構築に踏み出した。

「都市は、理想を必要とする。伝統の深い省察の上に立ち、市民がその実現に努力するならば、その都市は世界史に大きな役割を果たすであろう。われわれは、ここにわが京都を世界文化自由都市と宣言する。世界文化自由都市とは、全世界のひとびとが、人種、宗教、社会体制の相違を越えて、平和のうちに、ここに自由につどい、自由な文化交流を行う都市をいうのである」（「世界文化自由都市宣言」より抜粋）。

この宣言の具体的施策について、船橋市長は事前に昵懇<sup>じっこん</sup>であった梅原猛 京都市立芸術大学長に打診し

ていた。梅原学長はこれを受けて、師に当たる桑原武夫 京都大学名誉教授に「京都市世界文化自由都市推進懇談会」の座長就任を依頼し、京都市は同懇談会に「世界文化自由都市」の具体的構想を諮問した。そして、2年後の1980（昭和55）年11月、桑原座長は各分野の代表31人の衆議の結果をまとめ、宣言を具体化するために4項目の施策を京都市に提案した。

一つは、「新しい町づくり」として歩行者の道の充実や史跡・遺跡を結ぶ歴史の道づくり、さらに市民と観光客がふれあう市民ひろばの建設。二つ目が「国際交流」で、京都市は国際理解・交流の先駆的役割を果たすべきとして、姉妹・友好都市との留学生交換、語学講座、外国・日本文化セミナーの開講など。三つ目が、市民に国際的にも最高レベルの文化芸術を提供することができる「市民劇場」の建設。最後の四つ目が、「日本文化研究所」の創設であり、日本文化を総合的に研究する独立機関の必要性を提唱したものとしては戦後初めてのプランであった。この最後の提言の骨格は日文研創設の意図と同様であり、これが日文研構想の淵源に当たるものといえる。

では、肝心の「日本文化研究所」はどのような機関として提唱されていたか。以下は、京都市世界文化自由都市推進懇談会が提案している「日本文化研究所の創設」の「提案の主旨」全文である。

明治以来100年、日本は西洋から科学技術文明を学び、一応近代化に成功したが、今や、ひとつの重大な問いの前に立っている。日本とは何か。日本文化とは何か。そして日本は、世界においていかなる意味をもち、いかなる役割を果たすべきか。

このような問いにたいして、今の日本は、十分によく答えることができないであろう。日本及び日本文化を総合的に研究する研究機構が欠如しているからである。たしかに、多くの大学には日本の歴史や日本の文学を研究する講座はあるが、日本の思想、宗教あるいは民俗などを研究する講座はほとんどない。まして、日本に関する多くの学問の成果を総合して、日本及び日本文化とは何かを研究する機構は全くないが、そういう機構なしに、日本についての問いに答えることは不可能であろう。

このような日本文化研究機構の欠如は、ただ、国

内的問題にとどまらない。諸外国は、日本文化について、ほとんど知ることがなく、日本はただ、勤勉と幸運によって異常な経済的発展をとげた不思議な国とみなされている。われわれは、日本の文化を深く研究して、そのすぐれた特色を外国人に知らせねばならない。それはひいては、国際政治にも影響し、国家の安全にもかかわる。

日本はこの100年、外国から文化を移入するのに大きな努力を払った。しかし、自国の文化を外国に移出するのに、その努力の100分の1も払わなかったといえる。最近、国は、このような欠点に気づき、多少の施策を行い始めたが、効果はまだ十分とはいえない。

この問題には、やはり、長期的根本的な解決が必要である。日本及び日本文化に関する深くかつ正確な研究のないところ積極的な日本文化の紹介移出はあり得ない。

われわれは、以上の2つの要求を解決しようとするために、この日本文化研究所の設立を緊急の課題と考えるものである。

この提案では、研究所で実施すべき研究内容等についても具体的に提案している。概略は、以下のとおりである。

「日本文化研究所」は、研究部、紹介部、展示及び図書資料部の三部を設ける。

研究部には、▽自然・都市（地質、地理、日本人、都市Ⅰ、都市Ⅱ・京都）▽社会（考古、歴史、法律、経済、民俗）▽言語・文学（日本語Ⅰ、日本語Ⅱ・方言、日本語Ⅲ・隣接言語、文学Ⅰ・詩歌、文学Ⅱ・散文）▽思想・宗教（神道、儒学・儒教、佛教、科学思想、近代思想）▽芸術（美術、建築、音楽、演劇、伝統芸術）の五分野を置く。

紹介部には、日本の文献の外国語への翻訳を組織的に行う翻訳部門のほか、一般市民向けの研究講座の開設も行う。

また展示及び図書資料部には、日本及び京都の文化が視覚的、聴覚的に把握できるような常設展示部門のほか、日本文化に関する図書を集めるとともに、関係資料がどこの図書館にあるかを明らかにするための目録等を作成する。

建設地は京都市内とし、設立主体は国が望ましいとされた。この構想は、その後も1982（昭和57）年度より2年間、京都市から「日本文化基本構想研究会」に委託されて継続的に検討された（桑原武夫、梅原猛とも同研究会の中心メンバーに名を連ねていた）。しかし、その検討作業の実際は、同時期に国立民族学博物館

で始まった文部省（当時）の科学研究費補助金による調査研究プロジェクトに引き継がれることになり、発展的に「日本文化研究所」構想は国の補助金の付いた調査研究に委ねられることになった。「日本文化研究所」を国立の研究機関として構想するには、国の調査研究プロジェクトとして進めたほうが良いと関係者は判断したのであった。

### ●科学研究費補助金による調査研究始まる

#### (1) 研究方法の研究

日文研構想を模索する最初の本格的な調査研究は、1982（昭和57）年4月より、「昭和57年度科学研究費補助金による調査研究：日本文化の総合的研究方法に関する研究」（代表：梅原猛）として始まった。研究者個人が申請する形式の、文部省の科学研究費補助金（補助金額260万円）を得ての調査研究であった。ただし、この調査研究の受入研究機関としては、将来的なプロジェクトの方向性を考慮して国立民族学博物館とした。

[研究の名称]	
日本文化の総合的研究方法に関する研究	
[代表者]	
梅原猛(京都市立芸術大学教授)	
[研究分担者]	
石井米雄(京都大学東南アジア研究センター教授)	
伊藤郷爾(工学院大学長)	
上山春平(京都大学人文科学研究所長)	
ドナルド・キーン(コロンビア大学教授)	
桑原武夫(京都大学名誉教授)	
杉本秀太郎(京都女子大学教授)	
高橋富雄(東北大学教養部教授)	
中根千枝(東京大学東洋文化研究所教授)	
芳賀徹(東京大学教養学部教授)	
埴原和郎(東京大学理学部教授)	
藤村久和(北海道開拓記念館主任研究員)	
源了圓(東北大学文学部教授)	役職は当時
[研究成果の概要]	

1982(昭和57)年5月から1983(昭和58)年2月までの間、7回にわたり研究会を開催し、日本文化の総合的研究の方法論をめぐる討論を行った。まず、研究代表者より、研究の柱として、1)日本文化の形成、2)日本の芸術、3)日本の近代化、という3つのテーマが提示され、これを受けて各研究分担者より、それぞれ、「日本人の起源」、「日本文化と日本列島」、「ア



イヌ研究の現状」、「日本文化の母体としての日本社会の特質」、「日本の思想について」、「日本語と日本文学」、「日本の造型美術」、「歌ごころと絵ごころ」、「文武の芸を通じての日本人の自己修練の型」、「樹木の肖像」、「日本近代化論」、「東南アジアにおける日本研究」に関する報告が行われた。

これらの報告は、いずれもそれぞれ専門の立場から、将来、日本研究をすすめるに際して、どのような方法論上の問題が存在するか、という共通の問題意識に貫かれたものであって、本研究の主題である「日本文化の総合的研究方法」を構築する上に、きわめて有益な議論を導き出した。とくに研究分担者の構成が、全国の多様な研究機関の多様な専門分野にわたり、また、外国人で日本文化に造詣の深い学者の参加をもとめたこと、さらに、狭義の日本研究者ばかりでなく、外国における日本研究の現状の評価という視点をふまえて人選を行ったことは、毎回の多角的かつ具体的な議論の展開に多大の貢献をしたものと考えられる。

本年度の研究の結果、将来行われるべき、学際的な日本文化の総合的研究の可能性についての展望を得ることが出来たので、今後はここで得られた方法論をさらに深めるとともに、その方法を実践するための望ましい研究機構のあり方をめぐる議論の必要性が痛感されるところである。なお、本研究のための研究会は、東京と京都において交互に開催された。（『国際日本文化研究センター創設の経緯等に関する資料』収載の「研究成果の概要より」）

報告書はこのように調査の概要をまとめ、「日本文化研究」の総合的アプローチの重要性和その手法開発への意欲を強調して、早くもこの段階で日文研のあ

(2) 真に学際的な研究体制を求めて

続いて翌1983（昭和58）年度には、同じように「昭和58年度科学研究費補助金による調査研究：日本文化総合研究の研究体制のあり方に関する研究」（代表：梅原猛）が、補助金360万円を得て継続された。ここにおいて、真に学際的な日本研究を推進するための研究組織として考えられる研究体制のあり方が取り上げられた。このプロジェクトの概要は以下のとおりである。

[研究の名称]  
日本文化総合研究の研究体制のあり方に関する研究  
[代表者]  
梅原猛(京都市立芸術大学長)  
[研究分担者]  
石井米雄(京都大学東南アジア研究センター教授)  
伊藤鄭爾(工学院大学長)  
上山春平(関西外国語大学教授)  
河合隼雄(京都大学教育学部教授)  
桑原武夫(京都大学名誉教授)  
作田啓一(京都大学教養部教授)  
杉田繁治(国立民族学博物館助教授)  
杉本秀太郎(京都女子大学文学部教授)  
高橋富雄(東北大学教養部教授)  
ドナルド・キーン(コロンビア大学教授)  
中根千枝(東京大学東洋文化研究所教授)  
芳賀徹(東京大学教養学部教授)  
埴原和郎(東京大学理学部教授)  
藤村久和(北海学園大学教養部教授)  
源了圓(国際基督教大学教養学部教授)  
安場保吉(大阪大学経済学部教授)  
山田慶兒(京都大学人文科学研究所教授)  
[特別委員]  
岡本道雄(京都大学名誉教授)  
木田宏(国立教育研究所長) 役職は当時  
[研究のまとめ]

今年度の研究は、具体的な日本文化の研究対象領域として、次の6領域を設定した。「基層文化」「周縁文化」「伝統文化」「思想文化」「現代文化」「情報処理」の6つである。これらについて、研究の現状を分析するとともに問題点を出し、それら問題点の個別的検討を行った。

これらの作業によって、わが国における日本文化研究は、個々の専門分野の多年にわたる膨大な研究蓄積にもかかわらず、研究の諸分野における歴史的発展過程の相違による制約のため、各専門領域を横断して日本文化の全体像を総合的に把握し、解明する体制がいまだに十分には存在していない状況がますます明確になってきた。そしてこれらの問題解決のため、現存する個別的研究分野間の障壁を克服し、真に学際的な日本研究を推進するための研究組織として考えられる研究体制のあり方について取り上げ、その利害得失を検討した。

これらについては、今年度におけるひとまずの結論として述べてきたが、われわれは、これが、日本文化総合研究のあり方に関する最終の結論とは考えて

いない。あくまでも、将来に出すべき最終結論に達する道程であると考えている。  
（『研究報告書』『今年度研究のまとめ』より）

(3) 国立民族学博物館(民博)の研究活動としての調査研究へ発展

1984（昭和59）年度になると、同じ科学研究費補助金（科研費）の交付を申請するに際しても、調査研究のあり方が研究者個人のプロジェクト方式ではなく、民博の研究事業に位置づけられた。すなわち、「昭和59年度国立民族学博物館事業：日本文化研究に関する調査研究」（事業費511万円）として推進されたのである。このことにより、どのような組織形態によるかは不明ながら（とくに民博がどのように関わるかの予断は一切なかった）、総合的な日本文化研究機関を創設する方向性はさらに強固になったことは明らかであった。ほぼ1年間にわたる調査研究は、世界における日本文化研究のあり方を分析しながら、そのあるべき方法について具体的に検討していくこととなった。

[研究の名称]  
日本文化研究に関する調査研究  
[開催場所]  
国立民族学博物館  
[参加者]  
石井米雄(京都大学東南アジア研究センター教授)  
梅棹忠夫(国立民族学博物館長)  
梅原猛(京都市立芸術大学長)  
河合隼雄(京都大学教育学部教授)  
熊倉功夫(筑波大学歴史・人類学系助教授)  
桑原武夫(京都大学名誉教授)  
佐々木高明(国立民族学博物館教授)  
杉田繁治(国立民族学博物館助教授)  
中根千枝(東京大学東洋文化研究所教授)  
芳賀徹(東京大学教養学部教授)  
埴原和郎(東京大学理学部教授)  
源了圓(国際基督教大学教養学部教授)  
守屋毅(国立民族学博物館助教授)  
[研究会の概要]  
第1回(1984年5月30日)  
「基調報告：問題提起」(報告者=梅棹忠夫)  
第2回(同年6月26日)  
「普遍学としての日本学」(報告者=桑原武夫)  
第3回(同年9月18日)  
「海外における日本研究」(報告者=ドナルド・キーン)

第4回(同年11月20日)  
「東南アジアにおける日本研究」(報告者=石井米雄)  
「ラテンアメリカにおける日本研究」(報告者=クアルトゥッチ・ギジェルモ エル・コレヒオ・デ・メヒコ アジア・アフリカ研究センター教授)  
第5回(1985年3月2日)  
「ヨーロッパにおける日本研究」(報告者=J.クライナー ボン大学日本学研究所長)

この調査研究では諸外国における日本文化研究の現状報告がなされ、その地域や国ごとに異なった研究実態が報告されたが、同時に大きな問題点も指摘された。この調査事業を所管する立場にあった民博の梅棹忠夫館長が提示した問題提起である。日本研究を促すために前提となるべき重要な仕組みの欠落に関することであり、その問題提起の骨格は以下のとおりであった。

（前略）日本についての知的関心が広がるとともに、日本学の研究は近年世界的な広がりをもって行われてきている。研究者の数も、その分布にはかなりの偏りがあるが欧米諸国を中心に急激に増加している。とくに最近では多くの若手研究者が日本学に関心をもちはじめているとともに、その研究上の関心が著しく変化してきていると考えられる。従来は、日本の古典や伝統文化が主たる研究対象であったが、最近では日本の近代化や現代日本のもつ諸問題が若手の日本学の研究者の間で問題としてとりあげられてきている。  
このような状況は、かつての一部好事家による日本研究が主流を占めていた時代とは質的に異なるものである。それは新たな対応を我々にせまっていることを認識する必要がある。日本学の研究自体が現代化し、科学的精ちさがより強く要請されるようになったといえる。ところが、このような状況に対し世界各地の日本学研究者は必ずしも十分に対応できる体制を有していない。彼らは相互に比較的孤立した状態で研究を進めているのが現状であり、我国の側においても、世界の日本学研究者に対し、組織的に対応し、情報を提供し、研究の便宜を図る仕組みは、皆無であるといつてよい。

日本学研究者の相互の交流は、個人的コネクションを除けば、関連テーマのもとで個別に開かれている国際シンポジウム等の場で偶発的に行われているにすぎない。  
このことは、世界的に日本学研究の気運が広まり、日本学の研究が盛んになったにもかかわらず、日本に



それらの研究の窓口となるべきセンターが存在していないということを極めて明白に示している。センターというのは、国際的に日本学研究の現状と動向とを適確に把握し、研究者に対し必要な情報やサービスを適切に提供する仕組みのことである。こうした仕組み（センター）がないままに推移すれば今後普遍学としての日本学を確立してそれを発展させていく上で決定的な障害が生ずることは明らかである。

しかし、この仕組みをつくりあげ、日本学の国際的なセンターとして、効果的に運営していくことは、今まで我々が有していた経験にない新しい課題にとりくむことである。我々日本の研究者は、従来、実証的研究を自ら実施することについては、各分野でその能力を発揮してきた実績をもっている。

しかし、他の研究者、とくに諸外国の研究者に対し、必要な研究情報やサービスを適切に提供するというセンター的業務については、まことに経験に乏しいのが実情である。もちろん、正しい情報の提供や適切な研究のサービスの提供を行うためには、センターの側のそれぞれの分野であらかじめ十分な研究が行われていなければならないことは言うまでもない。このような「研究とサービス」をその機能とする機関は国立民族学博物館のような共同利用の機関を除けば、従来、日本にはなかったものである。

いずれにしても、現代において、普遍学としての日本学の成立と展開が世界的に現実の問題となっているにもかかわらず日本の側にはこれに対応する体制が欠如していること、このことが問題であり、この問題にどのような回答を出すか、が今後の我々に課せられた問題だということができる。（後略）（第1回研究会「基調報告:問題提起」より）

これによって、日文研の機能としての重要な柱ともいうべき「研究協力」が新たにクローズアップされ、調査課題に設定された。

●創設の意思決定から調査へ

(1) 中曽根総理大臣が関係者と懇談

民博の研究活動として「日本文化研究に関する調査研究」が進行している最中に、日文研創設に関してきわめて重要な出来事が京都市内であった。中曽根康弘総理大臣（第71代～73代、在任：1982年11月～87年11月）が京都を訪問し、1984（昭和59）年10月24日

に市内の南禅寺にほど近い野村別邸で、当構想を推進している中心的な研究者と懇談したのである。出席者は、今西錦司 京都大学名誉教授、桑原武夫 京都大学名誉教授、上山春平 京都大学名誉教授、梅棹忠夫 国立民族学博物館長、梅原猛 京都市立芸術大学長の5人の関係研究者で、中曽根総理大臣は誰も伴わなかった。

この懇談では、関係研究者はまず前段でそれぞれの立場から日本文化研究の現状を報告した。その仕上げとして日文研の必要性をアピールする手はずになっていたのだが、懇談はいつまで経っても一般的な話題に終始した。予定時間が迫ってきたので、ようやく桑原武夫が多少慌て気味に話を切り出したとされている。この間、中曽根総理大臣はもっぱら聞き役にまわったという。このときの模様を、後日、彼はインタビューに答えて、ごくシンプルに次のように回想している（インタビュー：2009年9月実施）。

「このときは、桑原さん以下、皆さん大勢集まって、『日文研をつくってくれ』という話だったね。それがそれからだんだん成長していったわけだね」。

中曽根は約5年にわたって総理大臣の職に就き、その檯舞台の一つであった主要8カ国首脳会議（サミット）に5回連続して出席している。さらに、中曽根は、政治家と文化との関係について、サミット出席の際の印象を引き合いに出しながら、この懇談でもかねてからの持論を展開した。「サミットの会合ほど怖いものはない。世界のトップが集まる場で、瞬時にしてその人間の品定めがなされてしまう。品定めは、単なる政治力や権力でなされるのではない。その人間の文化力によってなされるのです。権力は、結局、文化の力には勝てない」、というのである。——だから、日文研構想に政治的思惑は全くなく、「文化」に対する年来の尊敬の念から一貫して支持、関係者にもそのように伝達してあったというわけである。

この懇談を契機に、日文研創設の動きは急速に具体化することになった。懇談後の年末（1984年12月）、文部省は国立民族学博物館の予算として「国際日本文化研究センター（仮称）」調査費2,000万円が計上された。これは、同年夏の文部省の概算要求には入っておらず、明らかに中曽根総理大臣のトップダウンの意思が反映されたものであったと推測される。日文研創設は、この段階でほぼ国としての意思決定がなされたといつてよいだろう。

(2) 創設準備の環境整備と調査

1985（昭和60）年度予算として調査費2,000万円が計上されたことで、創設準備作業も相当急がれることが予測できた。しかし、事態のスムーズな進行には相応の環境整備が不可欠であった。政界や学界、関係者への根回しが周到になされなければならない。最初に手がけられたのが、幅広い視野からの環境づくりとして「国際日本文化研究センター（仮称）」に関する懇談会」（座長：中川秀恭 前国際基督教大学長）を組織したことである。この懇談会は、1985年度内に3回開催され、日文研の必要性を認知してもらうための周辺理解を深める役割を担い、大所高所からの議論の取りまとめが行われていった。

また、自民党政務調査会のなかに日本文化研究・交流に関する小委員会が組織され、政党サイドからの応援体制が整えられた。

さらに、国立の新しい研究所を設立するには文部省管轄の学術審議会の審査に合格する必要があった。日文研創設にとって、最大の難関がこの学術審議会にあった。というのも、当時の経済状況から新しい研究所づくりは一般的には厳しい環境にあり、そうしたなかで、別途「学術情報センター」構想が学術審議会に諮られており、すでに何回か先送りになっていたのである。いかに総理大臣の後押しがあったとはいえ、「学術情

報センター」構想を差し置いて日文研を先に設置するのは困難な状況であった。そこで、1985年7月25日、学術審議会（会長：山村雄一 大阪大学総長）は、「学術情報センターの創設を先行させる。その後に国際日本文化研究センター（仮称）を創設する」とする、後に「山村評定」と評される名裁定を下して難局を切り抜けたのである。

一方、調査費2,000万円が計上された民博では、1年がかりの本格的な調査活動に取り組むことになった。この調査活動は、①前述した3回にわたる懇談会、②調査会議、③専門委員会を中核にして、関係機関との懇談会や研究者の意見聴取を交え、次のステップをにらんだ特別委員会、集中検討会などが実施されていった。

[標 題] 国際日本文化研究センター（仮称）に関する調査について（昭和60年4月6日 国立民族学博物館長裁定）	
1. 趣 旨	日本文化研究を学際的、総合的、国際的に推進するとともに、海外での日本文化研究に必要な情報提供等を行うことを目的とする国際日本文化研究センター（仮称）（以下「センター」という。）の構想について検討するため、必要な調査を実施するものとする。
2. 調査事項	(1) センターの必要性

この部分は公開に適さないため削除されています。



<p>(2)センターの事業内容に関する事項</p> <p>(3)センターの設置形態及び組織・運営に関する事項</p> <p>(4)その他センターに関する事項</p> <p>3. 調査の実施方法</p> <p>(1)学識経験者の協力を得て調査を実施する。</p> <p>(2)調査会議の構成は別紙のとおりとする。ただし、必要に応じて、専門的事項について、その他の学識経験者の協力を得るものとする。</p> <p>4. 調査期間</p> <p>昭和60年4月12日から昭和61年3月31日までとする。</p>	
<p>調査会議メンバー、及び専門委員会委員は以下のとおりである。</p>	
<p>〔国際日本文化研究センター（仮称）調査会議メンバー〕</p> <p>石井米雄（副座長、京都大学東南アジア研究センター所長）</p> <p>伊藤幹治（国立民族学博物館教授）</p> <p>井上忠司（甲南大学文学部教授）</p> <p>上山春平（座長、京都国立博物館長）</p> <p>梅棹忠夫（国立民族学博物館長）</p> <p>梅原猛（京都市立芸術大学長）</p> <p>加藤秀俊（放送大学教授）</p> <p>河合隼雄（京都大学教育学部教授）</p> <p>桑原武夫（京都大学名誉教授）</p> <p>佐々木高明（国立民族学博物館教授）</p> <p>中根千枝（東京大学東洋文化研究所教授）</p> <p>芳賀徹（東京大学教養学部教授）</p> <p>埴原和郎（東京大学理学部教授）</p> <p>源了圓（国際基督教大学教養学部教授）</p> <p>山折哲雄（国立歴史民俗博物館教授）</p> <p>山田慶児（京都大学人文科学研究所教授）</p> <p>米山俊直（京都大学教養部教授）</p>	
<p>〔国際日本文化研究センター（仮称）調査会議専門委員会委員〕</p> <p>宇治日出二郎（財団法人千里文化財団事務部長）</p> <p>熊倉功夫（筑波大学歴史・人類学系助教授）</p> <p>小山修三（国立民族学博物館助教授）</p> <p>杉田繁治（国立民族学博物館助教授）</p> <p>園田英弘（京都大学人文科学研究所助手）</p> <p>谷直樹（大阪市立大学生活科学部講師）</p> <p>垂水稔（国立民族学博物館助教授）</p> <p>守屋毅（国立民族学博物館助教授）</p> <p>横山俊夫（京都大学人文科学研究所助教授）</p>	

(3) 精力的に調査検討作業を推進

国際日本文化研究センター（仮称）に関する調査会議を中心とする調査活動は、各部門で精力的に推進されていったが、その主だったものを列記すれば次のとおりである。

〔国際日本文化研究センター（仮称）に関する懇談会〕	
第1回:	1985年4月11日（東京・霞山会館）
第2回:	同年7月4日（東京・東海大学校友会館）
第3回:	1986年3月26日（文部省）
〔調査会議〕	
第1回（1985年4月12日）、第2回（同年4月26日）、第3回（同年5月31日）、第4回（同年6月24日）、第5回（同年7月5日）、第6回（同年7月29日）、第7回（同年9月12日）、第8回（同年11月11日）、第9回（1986年1月20日）、第10回（同年3月1日）、第11回（同年3月27日）	
〔専門委員会〕	
第1回（1985年4月27日）、第2回（同年5月7日）、第3回（同年5月20日）、第4回＝調査会議との合同会議（同年7月29日）、第5回（1986年1月27日）、第6回（同年1月31日）、第7回（同年2月21日）	
〔特別委員会〕	
第1回（1985年11月11日）、第2回（同年12月9日）、第3回（1986年1月19日）、第4回＝専門部会との合同会議（同年2月11日）	
〔集中検討会〕（大阪ガーデンパレス）	
1985年6月9日～10日	
〔中間報告の公表〕（文部省記者クラブ）	
1985年8月29日	
〔関係機関との懇談会〕	
1985年7月4日（関係機関:東北大学文学部附属日本文化研究施設、東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所、大阪大学文学部、国文学研究資料館、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館）	
〔社会学者との懇談会〕1985年7月24日	
〔研究者の意見聴取〕1985年12月11日、12日、16日、17日	

こうした経過の中で、6月に大阪で行われた集中検討会が中間報告の中身を集中的に詰めていくための山場を形成した。また、中間報告の発表により日文研構想は正式に公のものとなり、社会的な論議の対象となっていくた。

なお、二つの委員会の役割は以下のようなものであった。具体的な内容を検討、成案していく実行部隊として重要な役割を担った。

1) 専門委員会：調査会議で、専門知識をもって集中的に審議すべき事項とされた事案に対して、具体的な構想までを審議・検討・立案し、調査会議に諮問する部門。主として、中間報告・最終報告をまとめ上げる実行

部隊として意欲的に活動した。

2) 特別委員会：調査会議の最終報告に反映されるべき、次の準備段階をあらかじめ予測した、人事案なども含んだ業務体制や施設等に関する具体的計画を立案し、調査会議に諮問する部門。

こうして、民博による国際日本文化研究センター（仮称）に関する調査会議は、1985（昭和60）年8月29日に、「国際日本文化研究センター（仮称）の構想について（中間報告）」を発表し、中間報告へのさまざまな反応や具体的な準備段階の構想も加味して、予定どおり1986（昭和61）年3月31日付で「国際日本文化研究センター（仮称）の構想について（報告）」にまとめ上げた。ここにいたって、改めて国際日本文化研究センター（仮称）創設の緊急性が強調され、構想の全容が明らかになった。

なお、調査会議が中間報告を終了した1ヵ月後、1985（昭和60）年9月25日、中曽根康弘総理大臣は大阪訪問に際して、再び関係研究者と懇談した。面談した研究者は、前年の京都における懇談の場合と同じで、今西錦司、桑原武夫、上山春平、梅棹忠夫、梅原猛の面々であった。この懇談では、さしたる新しい方向性が提示されたわけではなく、「国際日本文化研究センター（仮称）の構想について」の中間報告も出て、順調に調査活動が進行していることを確かめ合う和やかなものであった。

●国際日本文化研究センター（仮称）構想――調査会議最終報告全文――

Ⅰ 国際日本文化研究センター（仮称）設立の必要性	
我が国の国際的地位の向上に伴って、日本に対する世界各国からの関心は著しく高まり、海外における日本研究者の数も急速に増大しつつある。近年のこうした状況の変化にもかかわらず、我が国の対応は遅れており、それは特に文化の領域において著しい。海外諸国には日本に関する古い固定観念がなお残されており、加えて多くの新しい誤解も生じ、これを放置することが国際的な摩擦や緊張を生むひとつ	

の原因になっている。日本が世界の国々と平和的に共存できるようにするためには、こうした摩擦や緊張は一刻も早く除去されなければならない。そのためには、日本はすべてを吸収するのみで、自らの姿を顕わそうとしないという非難を打破するべく、世界に対する日本文化の可視性を高めていかなければならない。

日本と世界各国との関係は、彼我の歴史的関係の深浅ばかりでなく、各国のもつ固有の文化、歴史など複雑な要因によって微妙に異なっている。したがって、このような状況への対応は、学術的研究の成果に支えられ、異なる文化的、歴史的背景をもつ世界の各地域のそれぞれについて、きめ細かになされることが必要である。

こうした要請に応えるためには、なによりもまず、国際的視野をもった内外の日本文化研究者を結集し、従来の枠組みにとらわれることなく、清新な視角に立った共同研究を行い、その研究成果を世界に向かって提供して、日本の国際的理解を深める努力が必要である。

翻って、我が国の現状を見るに、日本文化の諸相について、各専門分野の研究は活発に行われてきた。しかし、世界における研究の動向は、古典や伝統文化を中心とする研究のみにとどまらず、現代的な諸課題をも包括するものへと転換してきている。このような状況の中で日本文化の全体像を総合的にとらえ、それを国際的な広い視野から研究する必要性は、一層その重要度を高めてきている。また、世界各地の研究者に対する日本文化研究に関する情報の提供等も、これまでのところ、主として個々の研究者の善意と努力とによって断片的に行われるにとどまり、体系的かつ組織的にはなされていない。

こうした要請に十分に応え、日本文化の国際的理解を深めるためには、日本文化の研究と、それに関する情報の提供等の研究協力活動を目的とする相当の規模の恒久的組織を創設することが必須である。この目的を達成するために、「国際日本文化研究センター」<sup>（仮称）</sup>を速やかに創設することが緊要である。

Ⅱ 特 色

1. 日本文化の国際的、学際的、総合的な研究

現在、世界の日本文化研究は、新しい方向に転換しつつある。従来の古典や伝統文化を中心とする研究から近代化や現代日本の諸問題に至る極めて広範で国際的な問題が、その研究の対象になってきている。

このような状況に対応し、国際日本文化研究セン



ター（仮称）（以下、センターという。）においては国際的な観点から研究課題を設定し、国際的、学際的な体制のもとに日本文化の総合的研究を行う。

2. 流動性に富む組織形態

①研究部門制をとらず、新しい仕組みを導入することによって本センターの研究活動を弾力的に展開する。教官は固定的な所属から離れて、共同研究や研究協力の活動を機動的に行う。

②本センターの研究活動の中心は共同研究であるが、外国人を含む多数の研究者を客員の教官、共同研究員として組織することによって、その構成の弾力化を図る。

3. 国際性の高い研究運営体制

①国際的な研究の推進を図るため、多数の外国人の研究者を本センターの構成員に加える。

②本センターの研究が国際的な問題の先端をとらえて展開できるよう国際研究委員会（仮称）を設け、海外から研究活動及び研究協力活動について助言を受ける。

4. オーガナイザー的役割

本センターはその本来の機能として、内外の研究者を組織して共同研究その他の研究活動を展開する。このようなオーガナイザー的役割を担うことによって、本センターは国際的な日本文化研究の中心としての役割を果たす。

5. 研究協力活動の重視

①本センターにおいては研究と研究協力の二つの機能は等しい価値をもつ。

②すべての教官は、研究活動とともに世界各地の日本文化研究者に対する研究協力活動を担当する。

Ⅲ 目 的

世界における日本文化研究の現状と動向を的確に把握しつつ、日本文化の研究を国際的、学際的、総合的に行うとともに、内外の日本文化研究者に対し、日本文化研究に関する情報の提供等の研究協力活動を行うことを目的とする。

Ⅳ 設置形態

独立した国立大学共同利用機関とする。

Ⅴ 活 動

1. 二つの機能

本センターは、日本文化の研究と、内外の日本文化研究者に対する研究協力の推進という二つの大きな機能を果たすことを目的とする。両者は、センターの活動全体において同等の価値を有し、センターの教官はすべて両者を等しく分担する。

研究活動によって裏付けられた研究協力活動は、研究者相互の研究交流の一環として行われるものであり、一方的に本センターの教官からの研究情報の伝達として行われるものではない。このような研究協力活動は、世界各地の日本文化研究者の研究の状況、問題意識等を知る上でも極めて有効であり、更に、本センターの研究活動が国際的視野から問題を把握しつつ展開する上でも、また、共同研究班の適切な構成員候補者を見出す上でも欠くことのできないものである。

一方、共同研究を主体として行われる研究活動は、同時に研究者の接触の場でもあり、研究上の情報交換等が行われ、本センターが目指す研究協力活動の機能を果たす場となることが多い。

このように、本センターの二つの活動は、現実活動するときには、密接に関係し、相互に二重の機能を合わせて発揮する場合が多いのであって、この意味でも本センターの教官が二つの活動を等価値のものとして分担することは重要である。

2. 研究活動

①研究活動の枠組み

本センターの研究活動は、研究部門のような固定的な組織を単位として行うものではない。本センターにおいては、新しい試みとして研究域・研究軸を設定し、それらが示す方向にそって共同研究を組織し研究活動を行うものとする。すなわち、研究域・研究軸は、本センターの研究活動についてその方向を規定し、枠組みを与えるものである。このため、その適否の検討は常に運営協議員会議等で行い、研究の進展や研究状況の変化に対応しつつ最も適した研究域と研究軸の設定が図られねばならない。

研究域・研究軸を枠組みとしようとした原則は、日本文化の全体像を把握するための視座として、まず研究域を設け、次にそれらを分節して研究軸を設けたものである。研究軸は研究域の示す視座の中で、

いくつかの方向を特定するものである。このことによって本センターの行う共同研究の課題決定が可能となる。

以下、研究域と研究軸の具体的内容を示すこととする。

〈第一研究域（動態研究）〉

日本文化は、それを一個の独立した研究対象とすると、まず第一に時系列的な変化に焦点を当て、日本文化のダイナミズムを通時的な視点から研究することが必要である。第一研究域（動態研究）は、こうした研究の方向を指向する。

研究軸：現代、伝統、基層  
現代は主として現代文化ダイナミズムを明らかにし、伝統は歴史時代における、基層は歴史時代以前における、長期・短期の文化の変動を対象とする。

〈第二研究域（構造研究）〉

時系列的な変化にもかかわらず、比較的固有の性格を保ち続けている部分に注目し、共時的な視点から文化の構造的分析を行うことが必要である。第二研究域（構造研究）は、こうした研究の方向を指向する。

研究軸：自然、人間、社会  
日本文化を、自然（環境、ヒトなど）、人間（心理、行動など）、社会（経済、政治、技術など）の三つの相に即して分析し、その構造を明らかにする。

〈第三研究域（文化比較）〉

世界各地域の文化と日本文化の比較研究は、日本文化の特質を普遍的な立場から理解し、世界における日本文化の位置を認識する上で必要なことである。第三研究域（文化比較）は、このような方向を指向する。

研究軸：生活、制度、思想  
日本文化と異文化の特色を、生活（衣、食、住など）、制度（組織、国家、体制など）、思想（宗教、芸術など）の三つのレベルに応じて比較研究する。

〈第四研究域（文化関係）〉

文化の特色を相互に比較するとともに、日本文化と異文化間の相互関係の研究も国際的な日本文化研究としては極めて重要な問題となる。日本と異文化間の交流・摩擦・相互変容の研究が課題となる。第四研究域（文化関係）は、このような方向を指向する。

研究軸：旧交圏Ⅰ、旧交圏Ⅱ、新交圏  
過去、現在における日本との文化的関係を考慮し、

世界の諸地域を旧交圏Ⅰ（古代以来）、旧交圏Ⅱ（大航海時代以来）、新交圏（現代）の三つの研究軸にまとめ、文化関係の研究を行う。

〈第五研究域（文化情報）〉

諸外国及び日本における日本研究と日本認識の研究を行うものである。諸外国における日本研究の蓄積は欧米諸国と非欧米諸国との間では大きな差があり、それに応じて別の研究軸を設けた。世界各地域における日本研究について研究するこの研究域は、研究活動と研究協力活動をつなぐパイプの役割を果たすこととされている。したがって、他の四つの研究域とは異なり、優れて実践的指向性をもった研究域がこの第五研究域だと言えるであろう。

研究軸：外国における日本研究Ⅰ、外国における日本研究Ⅱ、日本における日本研究  
諸外国における日本研究については、欧米諸国における日本研究と、非欧米諸国における日本研究との二つの軸に分け、日本における日本研究とあわせて三つの軸とする。

日本研究に関する資料の解析を通して日本研究の研究史的把握を試みるとともに、情報解析理論による新しい日本文化研究の展開を目指す。日本像あるいは日本観といった日本認識についての研究も含まれる。

②研究活動の形態

本センターの研究活動は、個人研究のほか、共同研究がある。

本センターにおいては、共同研究が重視される。共同研究には、研究者からの提案に基づいて設定されたテーマについて共同研究班を組織し研究を実施するものと、センターとして長期的な視点から設定したテーマについて研究班を組織し計画的に研究を実施するものの二つの形態がある。いずれの研究形態においても、広く内外の研究者の参加を求める。とりわけ、本センターが多様な文化的背景にもとづく日本研究を重視するという特性にかんがみ、外国人研究者が積極的に参加できるよう、特別の配慮がなされなければならない。

また、本センター設立の趣旨にかんがみ、古典や伝統文化の研究にかたよることなく、日本の近代化や現代日本の諸問題についての研究課題を十分に取り上げるとともに、人文科学者のみならず、広く他の分野の研究者の参加を得るよう配慮する必要がある。

更に、世界各地の日本文化研究者の交流の場として、また本センターで行った共同研究の成果を発表する場等として国際シンポジウムを開催する。

3. 研究協力活動

研究協力活動には二つの側面がある。一つは日本文化研究に関する情報の収集・整理・提供であり、他の一つは世界各地域の実情に即した国際的な研究協力である。

①情報の収集・整理・提供

本センターは、その活動の進展に対応しながら、資料・情報等を整備、保管して、情報管理施設を通じて内外の研究者の利用に供する。

収集する資料・情報は、国内外の日本文化研究の動向に関する文献資料等であり、教官が収集し、分析し、整理を行うものとする。

なお、海外における日本文化研究の研究状況に関する情報については、本センターにおいて独自のデータベースとして形成する。

②国際的な研究協力

国際的な研究協力は、世界の諸地域のそれぞれが日本との歴史的関係や、その文化構造や国際社会内での立場などが異なることを考慮して行わなければならない。本センターの教官はそれぞれの地域を分担し、各地域における日本文化研究の動向の解析などを行うとともに、当該地域の日本文化研究者の要請に応じ、研究企画への協力、調査活動の支援、適切な研究情報の提供などの研究協力に当たることとする。

このような活動は、日本文化の各分野にわたる多数の研究者の協力を必要とする。したがって、研究協力活動を推進するため、例えば「研究協力者」として関係分野の研究者の協力を得る方法等について考慮する必要がある。

世界の諸地域の区分については、次のとおりとすることが適当であろう。

東アジア／東南アジア／南アジア／西アジア／西ヨーロッパ／東ヨーロッパ／アフリカ／北アメリカ／南アメリカ／オセアニア

VI 普及活動

本センターの研究活動の成果を、『研究報告』、『紀要』等のかたちで出版するとともに、世界におけ

る日本文化研究の現状や動向を知らせる『年報（年間展望）』の出版を行う。

また、一般国民を対象として、市民講座、公開講演会等を開催し、日本文化研究への関心を高めるなどセンターの必要とする普及活動を行う。

VII 関係機関との協力関係

1. 他の日本文化研究機関等との協力

日本文化の研究機関や、本センターの活動と関係の深い諸機関と積極的に協力関係をもつことが必要であり、本センターの運営においてこのことは十分配慮されなければならない。

2. 大学院教育への協力

国際的視野をもった日本文化研究者の養成に資するため、大学と協力して大学院学生（外国人留学生を含む）の研究指導を行う。

VIII 組 織

1. 所 長

本センターに所長を置く。所長は、所務を掌理する。

2. 研究調整主幹

本センターに若干名の研究調整主幹を置く。研究調整主幹は、所長の命を受け、本センターの研究活動及び研究協力活動について、企画し、及び調整する。研究調整主幹は、教授をもって充てる。

3. 研究部

専任及び客員教官は、研究部に属する。研究部は、①共同研究に関してテーマの設定、代表者の選定、共同研究班員の人選など計画の具体化、②研究協力活動の重点を置く地域の設定あるいは具体的方法の検討、などの機能を果たす場である。

また、本センターの運営上必要な各種内部委員会の構成員の選出母体としての機能を有するとともに、研究者間の接触の場となり研究情報や意見の交換等の効果をあげることが期待される。

4. 管理部

本センターの庶務、会計、施設及び研究協力等に関する事務を処理する。

その所掌事務を分掌させるため、庶務課、会計課及び研究協力課の3課を置く。

研究協力課には、研究協力に関する高度な知識と能力を有する専門官を相当数置くことが望ましい。

5. 情報管理施設

情報管理施設においては、日本文化研究に関する情報等を整備し、保管し、利用に供し、及びこれらに関する情報管理システムについて開発研究を行う。

その所掌事務を分掌させるため、資料課及び情報課の2課を置く。

情報課には、情報処理に関する高度な知識と能力を有する専門官を相当数置くことが望ましい。

6. 評議員

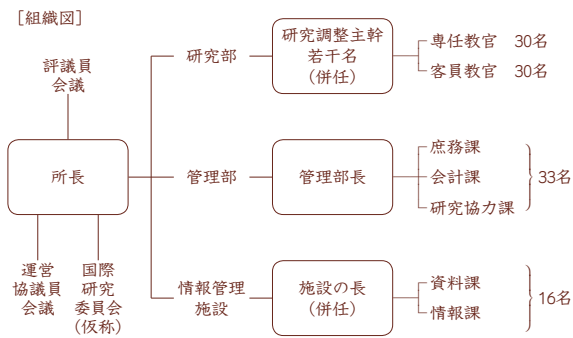
評議員は、センターの事業計画その他の管理運営に関する重要事項について、所長に助言する。

7. 運営協議員

運営協議員は、センターの研究計画及び研究協力計画に関する事項その他の運営に関する重要事項について、所長の諮問に応じる。

8. 国際研究委員会（仮称）

本センターの研究活動及び研究協力活動の運営について助言を得るため、世界各地における日本文化研究者の中から、所長が委員を委嘱し、国際研究委員会（仮称）を組織する。



※上記組織及び所要人員（専任職員80名）は、今後計画の具体化に伴い調整する必要がある。

IX 施 設

前述のような活動を十分に果たせるよう施設を整備する必要がある。施設の概要は、次のとおりである。

1. 研究関係施設 約3,600㎡  
(1) 教官室（専任・客員教官室、外国人研究員室、共同研究員室、外国人共同研究員室等）  
(2) 共同研究室（セミナー室、演習室等）
2. 研究協力関係施設 約2,200㎡  
(講堂、オリエンテーション室等）
3. 管理関係施設 約1,000㎡  
(事務室、会議室等）
4. 情報管理関係施設 約2,700㎡  
(電算機室、書庫、研究情報整理室、資料閲覧室等）
5. その他 約4,700㎡  
(廊下、機械室等）
6. 宿舍 約1,800㎡  
(1) 共同研究員宿舍  
(2) 外国人宿舍  
合計面積 約16,000㎡  
(注) 上記建物面積は、今後計画の具体化に伴い調整する必要がある。

このようにして、1982（昭和57）年11月に京都で芽生え、独立した日本文化研究機構を創設しようとした夢は、わずか3年余にして国際日本文化研究センター（仮称）という具体的な構想となって実を結んだのである。

しかも、それは誰もが予測だにできなかった特色ある、ユニークなものであった。とりわけ、

- ①日本文化の国際的、学際的、総合的な研究
- ②流動性に富む組織形態
- ③国際性の高い研究運営体制
- ④オーガナイザー的役割
- ⑤研究協力活動の重視

などは、いずれも従来の研究機関になかった画期的な構想であった。そして、1986（昭和61）年度を迎え、国際日本文化研究センター（仮称）構想は、ついに創設準備段階へと入っていった。



## 第2章 創設準備の推進

### ●創設準備委員会と創設準備室の制定

#### (1) 国立民族学博物館内に創設準備機構を設置

国際日本文化研究センター（仮称）の創設構想は、調査会議での最終報告の骨格がまとまりつつあった1985（昭和60）年12月28日に、昭和61年度予算案に創設準備経費として6,400万円が計上されたことにより、次の創設準備段階に入った。

1986（昭和61）年3月12日、文部省は民博館長に国際日本文化研究センター（仮称）の創設準備事務を委嘱した。その後、4月5日に文部大臣裁定として創設準備室等組織要項が発令され、同日付で実施された。その全文は以下のとおりである。

〔国際日本文化研究センター（仮称）の創設準備室等組織要項〕

1. 当分の間、国立民族学博物館（以下「準備機関」という。）に、国際日本文化研究センター（仮称）の創設準備に関する事務を処理するため、創設準備室を置く。
2. 創設準備室に、室長、次長、主幹その他必要な教職員を置き、室長は準備機関の教授、次長は準備機関の教授又は助教授をもって、主幹は事務職員をもってそれぞれ充てる。
3. 準備機関に、国際日本文化研究センター（仮称）の組織運営、施設・設備その他の創設準備に関する重要事項を審議する機関として、創設準備委員会を置く。  
創設準備委員会には、必要に応じ、専門部会を置くことができる。
4. 創設準備委員会は、準備機関の長が適当と認める者で構成する。
5. 創設準備室の事務室は、文部省に置く。
6. その他、創設準備室及び創設準備委員会の運営等に関する細目については、準備機関の長が定める。

附則

1. この要項は、昭和61年4月5日から実施する。



文部省に設置された国際日本文化研究センター（仮称）創設準備室（1986年）

#### (2) 創設準備室長に梅原猛氏

創設準備室の設置とともに、人事も発令された。創設準備室長には梅原猛 前京都市立芸術大学長、次長に園田英弘 国立民族学博物館助教授が就任した。準備室の事務室は文部省内に設置されたため、梅原室長と園田次長は東京在住で常勤という態勢を整えて、膨大な創設準備事務に対応した。

準備室の組織化に合わせて、1986（昭和61）年5月に入って、準備委員会委員、準備委員会特別協力者の選定もすすめられた。準備室が文部省の応援を得て準備事務一切を取り仕切り、新たに委嘱する準備委員、特別協力者で構成される準備委員会で創設準備作業を構築していくという計画であった。準備委員会委員、特別協力者、専門部会委員は以下のとおりである。

〔国際日本文化研究センター（仮称）創設準備委員会委員〕

飯田経夫（名古屋大学経済学部教授）  
石井米雄（京都大学東南アジア研究センター所長）  
石川栄吉（東京都立大学人文学部教授）  
伊藤鄭爾（工学院大学教授）  
井上忠司（甲南大学文学部教授）  
井上秀雄（東北大学文学部附属日本文化研究施設教授）  
市川惇信（東京工業大学大学院総合理工学研究科教授）  
河合隼雄（京都大学教育学部教授）  
河竹登志夫（早稲田大学文学部教授）  
佐々木高明（国立民族学博物館教授）  
中西進（筑波大学歴史・人類学系教授）  
中根千枝（東京大学東洋文化研究所教授）  
芳賀徹（東京大学教養学部教授）  
埴原和郎（東京大学理学部教授）

山折哲雄（国立歴史民俗博物館教授）  
山田慶兒（京都大学人文科学研究所教授）  
米山俊直（京都大学教養部教授）

〔国際日本文化研究センター（仮称）創設準備委員会特別協力者〕

石川忠雄（慶應義塾大学長）  
井上和子（津田塾大学教授）  
上山春平（京都国立博物館長）  
梅棹忠夫（国立民族学博物館長）  
遠藤周作（日本ペンクラブ会長）  
岡本道雄（科学技術会議議員）  
尾上久雄（大阪産業大学教授）  
木田宏（日本学術振興会理事長）  
桑原武夫（京都大学名誉教授）  
小山弘志（国文学研究資料館長）  
土田直鎮（国立歴史民俗博物館長）  
角山栄（和歌山大学経済学部教授）  
坪井清足（前奈良国立文化財研究所長）  
中川秀恭（前国際基督教大学長）  
西島安則（京都大学長）  
西原春夫（早稲田大学長）  
林知己夫（前統計数理研究所長）  
林屋辰三郎（前京都国立博物館長）  
源了圓（国際基督教大学教授）  
山本達郎（東京大学名誉教授）  
山本正男（沖縄県立芸術大学長）

〔国際日本文化研究センター（仮称）創設準備委員会専門部会委員〕

柴田正美（三重大学人文学部助教授）  
横山俊夫（京都大学人文科学研究所助教授）  
杉田繁治（国立民族学博物館第五研究部助教授）  
木村直（文部省大臣官房文教施設部計画課長）  
秦明夫（国立民族学博物館管理部長）  
西口千秋（文部省大臣官房文教施設部指導課監理室長）

#### (3) 創設準備が進む

国際日本文化研究センター（仮称）第1回創設準備委員会は、1986（昭和61）年5月14日、文部省で行われ、13人の委員（欠席者4人）、文部省学術国際局から植木局長以下9人、民博から佐々木高明館長事務代理以下2人、創設準備室から梅原室長以下3人が出席して開催された。

関係者の挨拶の後、委員長に中根千枝委員が選出

され、委員長は副委員長に河合隼雄委員を指名して審議に入った。

まず、前年度調査会議までの経過報告を了承した後、委員会の任務と今後のスケジュールが確認された。委員会は、センターの創設準備にかかる具体的事項（組織、運営、研究設備、施設等）について審議し、1987（昭和62）年度に創設要求することを前提に作業を進め、当面7月中旬をめどに案をまとめていく。そのため、委員会は年間3～4回開催されることになった。また、より広い立場からの意見をうかがうために特別協力者会議を設置することになった。

しかし、7月中旬までという短期間に成果を上げるためには、効率的かつ集中的な取り組みが必要である。このため、三つの専門部会を組織し、各委員を分属して月に2回程度の開催頻度で集約することになった。また、専門部会専属の研究者の専門委員を若干名委嘱することになった。各部会が集中的に取り組んだ課題は以下のような事項であった。

○研究体制部会：共同研究をどう進めるか。共同研究の成果を世界に問う国際シンポジウム、そして国際研究協力のあり方など。

○情報・設備部会：ハード・ソフト両面での研究情報の提供方法、情報管理施設の設備。

○施設部会：上記2部会を集約し、それを実現するための建物および周辺環境整備計画。

こうして、創設準備委員会の審議は、実質的には分科会ともいうべき専門部会において進行し、8月29日に行われた第2回創設準備委員会においては、各部会での審議・検討事項の概略として、総括的に報告された。ちなみに、この間に行われた専門部会は、以下のとおりである。

〈研究体制部会〉＝第1回：1986（昭和61）年5月26日、第2回：同年6月6日、第3回：同年6月24日、第4回：同年7月7日

〈情報・設備部会〉＝第1回：1986（昭和61）年5月26日、第2回：同年6月9日、第3回：同年6月25日

〈施設部会〉＝第1回：1986（昭和61）年7月14日、第2回：同年11月28日、第3回：1987（昭和62）年2月6日

#### (4) 創設の骨格が決まる

1986（昭和61）年8月29日、各専門部会での審議も順調に進み、1987（昭和62）年度の予算概算要求枠も決定したことを受け、第2回創設準備委員会が開催された。



この委員会では、単なる各部会の進捗状況の経過報告とはせず、総括資料として概略をまとめて説明した。このため、国際日本文化研究センター（仮称）の創設時の全体的な骨格と具体的な事業内容が示されることになった。主だったものを挙げると以下のとおりである。

〈共同研究について〉

共同研究は、①テーマが大きくて、かつテーマを分割して議論する形で進められる総合的、理論的な方向性をもった「域共同研究」、②15の研究軸を単位とした「軸共同研究」とし、それぞれ準備1年、共同研究3年、まとめ1年の5年サイクルを標準とする。

〈国際研究集会について〉

一部の「域共同研究」は、国際研究集会に連動させる（「域共同研究」の発表の場として国際研究集会を位置づける）。

しかし、創設後3カ年間は「域共同研究」が完結せずに成果が出ないため、国際研究集会に代わって日本文化研究に関する方法論についての国際シンポジウムを行う。テーマ案：「海外における日本文化研究の現状と問題点」、「日本における日本文化研究の現状と問題点」、「日本文化研究の新しいパラダイム」。

〈特別研究について〉

外国で書かれた日本文化研究図書の収集を行っていくこととしているが、収集された図書の整理・分析と連動して、特別研究「海外における日本認識の形成過程とその現状」を創設時から10年計画で行う。また、「日本文化の自然的背景」、「近代世界における日本の位置」を創設3年後から5年計画で行う。

〈情報の収集・整理・提供について〉

外国で書かれた日本研究図書の収集目標冊数を15万冊とする。

データベース化した情報の検索方法として「日本文化多元検索システム」（文字・音響・人名・年表等検索可能）を構想している。

〈組織について〉

副所長：対外折衝等で所長の職務を助けるため、建物完成時に要求する。

〈国際研究委員会について〉

国際研究委員会予算要求が困難になったので、国際研究集会に出席された研究者に助言をもらう形で国際研究委員会を行うこととする。



創設準備委員会（1986年）

〈候補地選定について〉

埋蔵物調査や地域住民との事前折衝が不要であるうえ、新興開拓地であることなどの理由から京都市桂坂地区を最有力候補地に内定。

〈施設計画〉

1987年度：基本設計と各種調査

1988年度：実施設計、工事着工

1989年度：工事

1990年度：工事竣工 4月、遅くとも10月オープン

〈仮事務所について〉

京都市洛西ニュータウン内センタービルに借家する。

〈名称について〉

名称は、（仮称）を外して現行のままとする。

（5）一部に創設反対の声も

順調に創設への準備を進めていた日文研ではあったが、学会の一部には批判的な声も上がっていた。

その批判の主なもの、この構想が日本学術会議や関連学会など関係者の声を汲み上げた構想ではなかったこと、構想の出発から創設準備に至るまで一部の研究者の間だけで進められていること、背景に中曽根総理大臣の関与が類推され、その政治思想を体現するためのものではないかというようなものであった。こうした趣旨で、日本史研究会（代表：脇田修 大阪大学教授、会員：2,400人）、考古学研究会（代表：近藤義郎 岡山大学教授）、京都民科歴史部会委員会、文化財保存全国協議会などから、1986（昭和61）年3月から6月にかけて反対声明が出された。代表例として、日本史研究会委員会の名前で1986年3月付で発表された「「国際日本文化研究センター」の設立構想について—日本史研究会の見解—」の要点を抜粋する。

（前略）この計画は、一昨年秋以来の中曽根首相の積極的な姿勢によって急速に具体化してきたものであるが、首相がこれに期待を寄せるところはしばしば首相自身の言葉で語られ、ひろく知られているとおりである。首相は、自ら機会あるごとに唱えてきたいわゆる「戦後政治の総決算」論にたって、いまこそ「もう一回、日本のアイデンティティというものを、これだ！というものをつくるときがきたと思うのです。だから私は『国際日本文化研究センター』をつくろうじゃないかと言っているのです。」と述べている。つまり、この内閣が数年来すすめてきた新たな国家主義による国民の統合を促すための、いわばその理論的・思想的中核をつくりだすという、きわめて強い政治的役割と使命とをこの計画に期待しているのである。ここでは、当初から特定の「日本学」に関心が寄せられている。それは、西欧文明が行きづまり、日本の伝統文化の中に将来の打開の道があるとして、東西文明の融合による人類文明の創造を訴えるような「日本学」なのである。とてい科学的・国際的検討にたえうるようなものではない。（後略）

これらに対しては、構想の準備は1982（昭和57）年における科学研究費補助金による調査研究以来十分な検討を重ねてきたこと、また日本文化研究というテーマそのものが従来の学会の枠を超えた総合的なものであり、特定の学会等との関連が見出しにくかったことなどを指摘して疑問に答えた。また、中曽根総理大臣が確立したいと言及する「日本文化のアイデンティティ」については、急速な日本経済の発展などを契機に、諸外国の日本に対する興味と関心は高まり、日本とはどういう国なのか、日本の国の本質は何なのかを世界各国は知りがっている。これにこたえて、世界の中で日本文化を捉え、学問的・科学的な根拠に立脚した日本文化の特質を明らかにしていくことが急務であるとした。ちなみに、日文研設立趣旨について、こうした批判や疑問についての最終回答として、中曽根総理大臣自身は1987（昭和62）年1月26日の第108回国会総理所信表明演説の中で次のように述べている。

第一は、世界において多様な生活信条や異なる文化が存在することを認識し、それらを理解し受け入れる寛容さと、更に積極的に相互協力を進める熱意がなければならないということです。

その基本的立場に立って、我々日本人が新しい世界文明の創造に意欲的に参加し、貢献していかなければなりません。そのためには、まず、我々が、我が

国の長い歴史の中ではぐくんできた文化的特質や伝統をもう一度掘り下げて分析し、学問的批判に十分耐え得る科学研究成果を体系化し、積極的にそれを世界に向けて正しく説明していくことが必要であります。このような観点から、「国際日本文化研究センター」を設立することにしております。

●創設に向けてカウントダウン

（1）創設初年度の予算案決まる

1986（昭和61）年8月29日に開催された第2回創設準備委員会において、日文研は翌1987年度に創設される見通しであることが明らかになった。創設に向けての準備作業、スケジュールが具体化され、文部省の初年度予算概算要求額も約3億円が見込まれることになり、創設準備作業は施設、建物などの具体的なハード面の詰めに入っていくことになった。

それを集約していったのが、施設部会（第2回：11月28日、第3回：1987年2月6日）である。これにより、研究系、国際研究協力系、情報管理施設系、国際シンポジウム・一般市民対象の講演会を開催する場である普及事業系、国内外の研究者の宿舍施設系、福利厚生施設系、施設全体を維持・管理するための事務管理系、設備機械室系……などの施設の全体像が浮き彫りになった。施設の基本計画は1986年度内に立案されなければならなかったため、関係5者（梅原猛創設準備室長、伊藤鄭爾創設準備委員会施設部会長、民博、文部省学術国際局、同文教施設部）による協議をもとに、梅原室長らの強い意向を受けて建築家・内井昭蔵氏に委託された。氏は同年3月に竣工したばかりの世田谷美術館の設計で名を馳せている、日本を代表する建築家の一人であった（昭和45年度日本建築学会賞受賞）。

新年度の予算成立後、直ちに日文研が創設されることを前提に、創設準備委員会は1987（昭和62）年3月5日（第3回）、同年3月23日（第4回）と連続して開催して、詰めの協議を行った。

第3回創設準備委員会では、当然ながら予算案の概要説明と質疑応答に多くの時間が割かれた。予算案の概要は以下のとおりである。

事業費	2億4,500万円
ア、建物基本設計料、土地調査、地形調査	2,000万円
イ、共同研究、国際研究集会開催経費等	5,500万円
ウ、資料収集費	4,200万円
エ、その他（創設設備費、事務所借料、運営費等）	1億2,800万円



人件費	6,300万円
創設経費	計 3億800万円

具体的事業に関わる予算措置としては、共同研究、国際研究協力セミナーを常時行うほか、図書収集に相応の枠をとっていることなどが明らかになった。定員は23人と想定された。

また、施設建設の進捗状況、スケジュールなどが確認された。これらにより、国際日本文化研究センター（仮称）は、予算成立の翌日に創設されることになった。また、名称についても、この日の委員会で再度現行案が確認された。

第4回創設準備委員会では、各部会のまとめに引き続き、創設される国際日本文化研究センター（仮称）の当面の活動について意見交換を行った。このなかで、共同研究については、前もって一律な限定はしないほうが良いという意見が大半を占めた。取り組みやすいモデルが示されたほか、オーガナイザーの情熱の持続、共通の目的意識の確認の重要性など、共同研究の重要性を意識した意見が改めて強調された。

また、国際シンポジウムは拙速な開催は避け、1年後の1988（昭和63）年開催でよいという意見が大勢を占めた。海外との提携については、機関提携から個人接触などの方法論を含め、「国際」にふさわしいネットワーク形成の期待が寄せられた。

より広い視点からの意見を集約する場として設けられた特別協力者会議は、合計2回開催され（第1回：1986（昭和61）年8月29日、第2回：1987（昭和62）年3月24日）、研究と研究協力の両立の問題、タイムスパンの長い研究におけるデータベースの所有権問題、外国人との共同研究における著作権問題…など、多面的な問題について有意義な意見交換がなされた。こうした意見を参考に、いよいよ国際日本文化研究センター（仮称）の創設の日は目前に迫ってきた。

## (2) 仮事務所において業務を開始

国際日本文化研究センターの創設は、昭和62（1987）年度の国家予算が成立すると同時に実現する運びになっていた。当予算案は、1986（昭和61）年12月24日に閣議決定された後、ようやく1987（昭和62）年1月26日に国会に提出されたが、売上税問題で審議が遅れて年度内成立ができず、衆議院本会議で可決されたのは4月23日であった。昭和62年度予算が参議院で可決成立したのは5月20日である。したがって、日文研が誕生したのはその翌日、1987（昭和62）年5月21日のことであった。初代所長には予定どおり梅原猛



洛西センタービルに設けられた日文研の仮事務所  
書棚で仕切られた研究部教員スペース（1987年）



仮事務所での管理部執務風景（1987年）

創設準備室長が就任した。

業務は、当日をもって仮事務所において開始された。仮事務所は、財団法人洛西ニュータウン管理公社が建設・管理する「洛西センタービル」の4・5階計616㎡を借り受けて開設し、本棟竣工までの仮住まいの地とした（所在地：京都市西京区大原野東境谷町2丁目5番9）。洛西ニュータウンの西地区のほぼ中央に位置し、日文研本棟の建設予定地である桂坂地区とは国道9号線を挟んだ対面に位置していた。

初年度の定員は23人（所長、専任教員9人、その他13人）、他に客員教員5人の陣容であった。組織としては、教員が所属する研究部、職員が所属する管理部（総務課、研究協力課）からなり、この研究部と管理部だけの部分開所であった。仮事務所での研究活動、その他業務は1990（平成2）年7月の桂坂研究棟の部分完成による移転まで続いた。

なお、開所式など正式なセレモニーは、桂坂での主要施設竣工（1990年12月）を機に改めて実施されることとなり、創設当日はささやかな祝杯のみで、新たな国立研究機関の出発が祝われた。

## (3) 創設に関わる政令の公布と施行

日文研の創設に関わる政令等は、下記のとおり公布、

施行された。これにより、大学共同利用機関国際日本文化研究センターが正式に発足した。

〔政令第一四八号 国立学校設置法施行令の一部を改正する政令〕

内閣は、国立学校設置法（昭和二十四年法律第百五十号）第三条の二第二項、第四条第二項及び第三項並びに第九条の二第一項の規定に基づき、この政令を制定する。

国立学校設置法施行令（昭和五十九年政令第百三十号）の一部を次のように改正する。

（中略）

第六条の表に次のように加える。

国際日本文化研究センター

日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力

附則

この政令は、公布の日から施行する。

（以下略）

〔国立大学共同利用機関組織運営規則の一部を改正する省令〕

○文部省令第二十号

国立学校設置法（昭和二十四年法律第百五十号）第十条及び第十三条の規定に基づき、国立大学共同利用機関組織運営規則の一部を改正する省令を次のように定める。

昭和六十二年五月二十一日

文部大臣 塩川正十郎

国立大学共同利用機関組織運営規則の一部を改正する省令

国立大学共同利用機関組織運営規則（昭和五十二年文部省令第十二号）の一部を次のように改正する。

目次中「第十条の三」を「第十条の四」に改め、「第六章 岡崎国立共同研究機構（第二十五条の十四－第二十五条の十八） 第六章の二 学術情報センター（第二十五条の十九－第二十五条の二十一）」を「第五章の四 国際日本文化研究センター（第二十五条の十四－第二十五条の十七） 第六章 岡崎国立共同研究機構（第二十五条の十八－第二十五条の二十二） 第六章の二 学術情報センター（第二十五条の二十三－第二十五

条の二十五）」に改める。

（中略）

第五章の四 国際日本文化研究センター  
（内部組織）

第二十五条の十四 国際日本文化研究センターに、次の二部を置く。

一 管理部

二 研究部

（管理部）

第二十五条の十五 管理部においては、庶務、会計及び施設等並びに研究協力に関する事務を処理する。

2 管理部に、その所掌事務を分掌させるため、文部大臣が別に定めるところにより、課を置く。

3 管理部及び課に、それぞれ部長及び課長を置き、事務職員をもって充てる。

4 部長は、所長の命を受け、部の事務を掌理する。

5 課長は、上司の命を受け、課の事務を処理する。  
（研究部）

第二十五条の十六 研究部においては、日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究並びに世界の日本研究者に対する研究協力を行う。

2 研究部に、研究調整主幹一人を置き、教授をもって充てる。

3 研究調整主幹は、所長の命を受け、研究部における研究、研究指導及び研究協力に関し、総括し、及び調整する。  
（各部の連携）

第二十五条の十七 各部においては、国際日本文化研究センターの目的を効果的に達成するため、相互に緊密に連携し、所務の一体的な処理に当たるものとする。

（以下略）



運営協議員の日文研建設予定地視察（1988年）



## 第3章 国際日本文化研究センターの創設

### ●研究活動と組織づくりを同時進行

#### (1) 最初の「共同研究」がスタート

創設の日である5月21日より早速業務を開始した日文研は、23人という最終体制（80人）の3分の1以下の小所帯ではあったが、活動領域は研究活動、研究協力活動、普及活動、組織運営の全般にわたっていた。

とりわけ初年度に力を注いだのは、「共同研究」の早期起ち上げであった。夏までに4班のプロジェクトが編成され、記念すべき第1号の共同研究「日本文学と『私』」（代表者：中西進）は早くも9月1日には研究発表会をスタートさせた。引き続き残る3班に新たに1班も加わって、初年度だけで5班の「共同研究」が順調な研究活動に入った。

いずれも、4年から5年サイクルの中長期型のプロジェクトであった。翌1988（昭和63）年度には、さらに新たに3班、翌々年度には4班がスタートし、早くも創設3カ年で12班の共同研究が同時進行中という盛況ぶりをみせた。以降、「共同研究」は常時15班程度が活動している状況になっていった。

また、総合テーマ「世界の中の日本」の下、国際研究集会（国際シンポジウム）が1988（昭和63）年3月に3年連続企画として始まった。日文研にとって最初のビッグイベントであったため、創設早々から担当者の枠を越えた総員体制で準備作業を進め、見事に成功させることができた。この国際シンポジウムは、その後、計画どおり翌年、翌々年と連続して実施され、新設の日文研の存在意義を世界に向けて強力に訴求することができた。

一方、10年計画の特別研究「世界における日本認識の形成過程とその現況に関する研究」も始まった。これは、世界各地における日本認識（日本像）がどのようにして形成され、現在はどうなっているかを調査・分析するもので、初年度は北アメリカを取り上げ、以降順次地域を拡大していった。また、日文研にとっては、この特別研究と双璧をなすビッグプロジェクトとして位置づけていた、世界中における「日本研究」の実態を時間をかけて徹底調査し、データベース化しようとする「世界における日本研究動向調査」も緒についた。

研究協力活動は、内外の日本研究者を対象に研究情報の提供と、パーソナルな研究交流を目的とする国際研究協力の二つに大別できる。研究情報の提供は、まずはその前段階の研究資料の収集から取り組むべく、1987（昭和62）年7月には第1回の研究資料委員会をスタートさせ、以降ほぼ1カ月に1回のペースで収集（購入）活動を開始した。新設機関ということもあって、購入予算にも創設準備費という予算枠があったので、メインコレクションとなるべき外国語で書かれた日本研究書など、日文研ならではの研究資料の収集を積極的に行っていた。また、創設1年後の1988（昭和63）年4月には、情報管理施設として資料課を設置した。

一方の国際研究協力は、当初専任教員が、世界を10地域に分けて分掌し、それぞれの国や地域の実情に応じた研究協力体制を分担構築することを試みていった。さらに一方では、国際研究協力セミナーの開催による研究交流や、個別に研究上の協力を行う研究相談を中心に実施していくことになった。このうち、来日中の外国人研究者に自由なテーマを選んで発表してもらう「日文研フォーラム」は、1987（昭和62）年10月に第1回が開催、以来2カ月に1回程度の割合で開催され、1989（平成元）年度からは毎月開催し、現在も継続されている日文研の名物研究交流会に育っていった。このほかに、日文研教官が設定したテーマを発表する、または来日中の優れた外国人研究者と日文研教員が共同で学際的なテーマを設定して開催する「セミナー」も始まった。

#### (2) 組織づくりも進む

研究者の招致や運営組織づくりは、創設直後からの大きな課題であった。当然のことながら梅原猛所長の当初の関心事は、研究活動の早期起ち上げや初期的な業務と組織の円滑な運営に集中していたが、同時に、改めて日文研を「羅漢の集まり」にすることにあった。創立10周年を機に編纂された文集（『日文研』17号）で、次のように回想している。

二十年ほど前に亡くなった高橋和己と話をしてい  
たとき、高橋和己は、「梅原さん、学者や作家の集い  
は羅漢の集いでなければなりません。一人一人が全

く個性的な格好をして、その顔もその精神も異なっ  
ている。しかしみな自由人で、しかも高い志をもっている。  
こういう羅漢の集いこそ学者や作家の集いでなくて  
はならないのです」と言ったことがある。これを語った  
高橋の相貌を今でもありありと思い出すのは、私がよ  
ほどこの高橋の話に共感したからであろう。

回想にあるように、「羅漢」すなわち個性的で独創性にあふれている「人財」ハンティングが進められていった結果、創設時に23人であったスタッフは、1年半後の1988（昭和63）年10月には、所長、教授9人、助教授6人、助手、管理部職員19人、情報管理施設職員4人の計40人体制となり、他に客員教授6人、客員助教授3人を迎えて研究陣容も一気に充実した。

その後、桂坂の主要施設が竣工し、開所式（1990年12月10日）も終わって、建物や付帯施設も整った段階で日文研の陣容もほぼ完成形に近づきつつあった。

創設5年目に当たる1991（平成3）年4月には、専任教員だけで30人に達した。研究要員は最大時60人（専任・客員合わせて）としていたが、専任はほぼ目標を達成することができた。事務職関係では、管理部職員30人、情報管理施設11人の計41人に増強された。

こうして、日文研は実質的には満4年で施設と陣容をほぼ整えて、創設5年目の1991年から本格的な活動期に入ったといえる。先行していた「共同研究」の中から成果集約に入ったプロジェクトも出始めて、外形と内実がほぼ整いつつあった。



国際日本文化研究センター完成予想図（1990年）

#### (3) 施設の建設も進む

施設の新営工事は、1986（昭和61）年8月29日の第2回創設準備委員会での施設建設に関する立地、工事スケジュールの承認を受けて、年度末までには設計事務所の内定まで進んでいた。1987年度中には、周辺環境のアセスメント調査を含めて基本設計を完了し、1989（平成元）年に工事着工、第1期工事は1990年10月の竣工をめざすとされていた。

基本設計は内井昭蔵建築設計事務所によって行われ、1987年11月に完成した。以下は、そのプランに基づく日文研施設の全容である。

〈地名・地番〉京都市西京区御陵大枝山町3丁目2番地  
〈敷地面積〉3万1,132㎡

〈建築面積〉1万451㎡

〈延床面積〉1万6,270㎡

第1期計画：研究系、国際研究協力系、情報管理施設系（図書館含む）、事務管理系、福利厚生施設系、宿舍施設系…小計1万1,562㎡

第2期計画：普及事業系（講堂）、情報管理施設系、宿舍施設系…小計4,708㎡

立地は、国道9号線を挟んで洛西ニュータウン北東部に造成された桂坂団地の北端に位置し、野鳥公園に隣接した閑静な住宅街である。研究にいそしむにも、研究者が集って交流するためにもうってつけの好立地といえた。

工事は、1989（平成元）年4月14日に研究棟新営工





開所記念式典（1990年12月10日）

事の安全祈願祭を執り行い、翌4月15日から始まった。工事は順調に進行し、1990（平成2）年7月に研究棟の一部が完成したため同月27日研究陣は仮事務所から移転した。続いて、11月末には情報管理施設棟の一部、事務管理棟、図書館が完成した。設計者が「日本文化を象徴し、日本建築のもつ精神性を現代の建築技術、並びに手法を駆使して表現したい」とした「和の伝統美」と「機能性と合理性」の融合がなったのである。これにより、日文研はすべて仮住まいを解消し、晴れて桂坂に集結した。

なお、施設工事はその後1991（平成3）年10月に北研究棟を竣工して第1期工事が完了。1994（平成6）年に講堂、福利施設、世帯用宿泊施設（日文研ハウス）、図書資料館などの第2期工事の主な施設が次々と竣工した。最後に1999（平成11）年に単身者用宿舎が竣工して、設計段階からほぼ10年がかりで日文研施設は完成の運びとなった。

### ●晴れて開所記念式典を挙行

主要施設が完成し、ほとんどの研究活動や研究協力活動の推進が桂坂において実行できる体制が整ったことを受けて、1990（平成2）年12月10日、晴れて竣工した施設において国際日本文化研究センター開所記念式典が執り行われた。

記念式典は、竣工した桂坂施設のほぼ中央に位置する図書館（開架閲覧室：書架は未搬入の状態）において午後2時から3時にかけて厳かに挙行された。梅原猛 所長の式辞、秦明夫 管理部長による経過報告、



開所記念祝賀会で披露された上方舞「衣通姫」

保利耕輔 文部大臣ほかによる来賓祝辞、祝電披露、工事関係者への感謝状贈呈などが滞りなく行われて、日文研の本格的な門出を祝った。その後、国際研究協力セミナー室、第1共同研究室、コモンルームなどの交流・研究用のスペースの施設披露が行われた。

続いて午後5時から、会場を京都市内の都ホテルに移して祝賀会が行われた。祝賀会では梅原猛 所長自らが作詞した謡いで舞う上方舞「衣通姫」（そとおりひめ）が披露され、祝賀ムードを盛り上げた。

以下は、開所記念式典における梅原猛 所長の式辞（一部）である。

本日、ここに来賓多数の御臨席を得まして、国際日本文化研究センター開所記念式典を挙行する運びとなりましたことは誠にこびにたえないところでございます。

国際日本文化研究センターは、12番目の大学共同利用機関として昭和62年5月21日に創設されました。

その目的とする所は、世界における日本文化研究

の現状と動向を的確に把握しつつ、日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究を行うとともに、内外の日本文化研究者に対し、日本文化に関する情報の提供等の研究協力活動を行うこととでございます。

創設以来3年半が過ぎましたが、このたびセンターの主だった建物の工事が完了し、内部の施設、設備もいちおう整ったのを期に、皆様方に御披露させていただきます。

おかげをもちまして、国際的、学際的な日本研究を総合的に行うにふさわしい組織、建物ができました。

ここにいたしますまでに、多くの皆様方の御協力と御支援があったことを、私どもは忘れることができません。

かえりみますれば、昭和57年、日本文化の総合的研究の方法に関する研究を故桑原武夫京都大学名誉教授らとともに実施しましたのが本センター創設への第一歩となったわけでございます。その後、研究を重ね、昭和60年国立民族学博物館に調査会議が設置されました。翌61年には調査会議の最終報告を受け創設準備室が設置され、昭和62年5月国際日本文化研究センターが誕生したわけでございます。

この間、歴代の文部大臣、その他の各大臣方、国会議員の皆様、文部省はじめ関係各省庁の方々、

及びセンター誘致に御尽力いただいた京都市、京都府の皆様をはじめじつに多くの皆様方のお手をわずらわせましたが、ここに改めて心から深い感謝を捧げる次第でございます。（中略）

日本の国際的理解を深めるためには、なによりも国際的視野をもった内外の日本文化研究者を結集し、従来の枠組にとらわれることなく、清新な視角にたった共同研究を行い、その研究成果を世界に向かって提供していかなければならないと考えており、現在それに沿って実施しているところであります。

また、世界各地の研究者に対する日本文化研究に関する情報の提供等も、これまでは主として個々の研究者の善意と努力とによって、断片的に行われるにとどまっており、今後は体系的かつ組織的にやっていくこととしております。

しかし、研究活動、研究協力とも緒についた所でございます。所員一同、今後ますます学術研究の発展と日本文化研究の充実のため不断の努力を重ねて参りますが、皆様方におかれましても、一層の御協力と御支援を賜りますよう心からお願いいたします。開所記念式典の御挨拶といたします。



南西方向から玄関を望む（1992年ころ）

第2部

研究と活動の足跡





## 第1章

研究活動①  
共同研究

## 日文研の研究活動の特徴

## (1)「共同研究」を中心に

国際日本文化研究センターの研究活動は、大きく「個人研究」と「共同研究」に分けられる。

「個人研究」では、教員個人の研究テーマに基づいて日々研鑽を積むことが求められ、日文研研究陣の一員として、所内の研究交流や定められた媒体を通じて成果を発表することができる。また、日文研独自の講演会やシンポジウムに参加して成果発表するなど、定められた規定に従って自由に発表の場を所外に求めることもできる（国立の研究所である日文研では、発足時から研究職に就く教授・助教授・助手等を総称して「教官」、2004年4月の法人化以降は「教員」と称している。ただし、これ以外に外国人研究員、外来研究員という研究職の枠もある）。

一方で、日文研教員には重要な研究活動が義務づけられている。それは、日文研の研究活動の中核である「共同研究」に関して、自ら課題を提起し、それに基づいて共同研究班を編成・組織化し、日本文化をテーマとする国際的、学際的、そして総合的な研究を遂行すること、またはより多くの共同研究に班員として参加し、研究に携わることである。

共同研究は、テーマおよび参加人員、期間などで「特別研究」「一般研究」に分けられる。また、その成果は、「共同研究報告書」（市販）や「日文研叢書」（日文研発行）などの出版物として一般に公開・普及されるほか、世界各地の日本研究者の交流の場、日文研で行った共同研究の成果を発表する場として「国際研究集会」を開催している。共同研究は、つねにこうした国際的な視点で日本文化を総合的に捉えることによって、真の日本文化のアイデンティティを浮き彫りにすることを企図して推進されている。

日文研創設以来、共同研究は1テーマ（課題）につき3年間の研究期間を想定して行われてきた。現実的には、準備期間や取りまとめの期間を入れて、4～5年に及ぶものもあった。平均すると常時10～15テーマのプロジェクトが並行してすすめられてきた。この25年間で約130の共同研究が実施され、日本文化研究の国際化と総合化が学際的な方法によって強力に推進され、国立研究機関ならではのスケールとバラエティに富んだ、多くの研究成果をあげてきた。

## (2)独自の「研究域・研究軸」の下で

日文研の共同研究は、研究テーマが「研究域・研究軸」という独自に考案された枠組みによって位置づけられているところに大きな特徴がある。それは、従来の伝統的な部門別枠組みに比べて、はるかに柔軟性のある枠組みであっただけではなく、日本文化を国際的かつ学際的に、そして総合的に研究することをより容易にする仕組みでもあった。

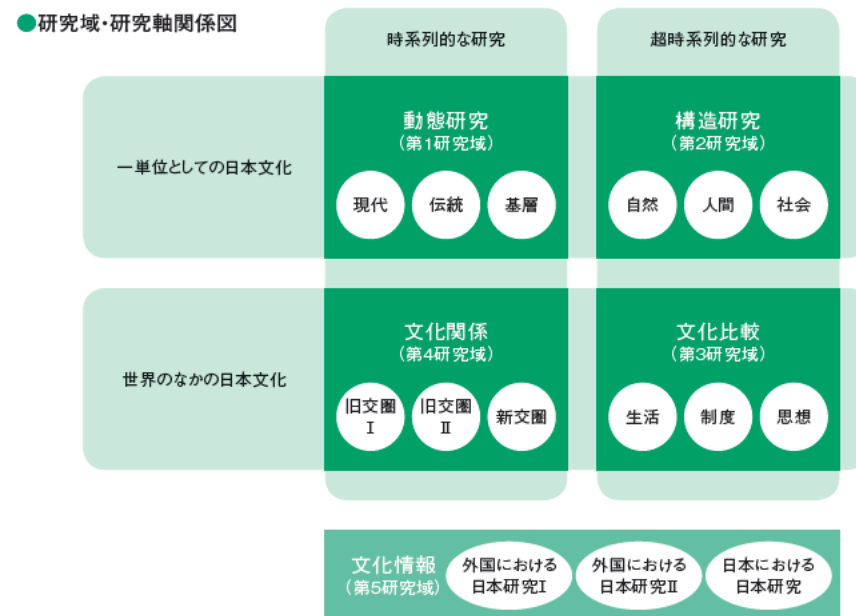
研究域・研究軸は、それぞれの研究テーマを日本文化研究総体のなかで位置づける座標軸の役割を果たしている。この「研究域・研究軸」に取まらない共同研究があるとの考えも存在するが、すべての共同研究はこの座標軸＝枠組みによって日本文化研究のなかで位置づけられるとの想定で推進されている。これらの関係を図示したのが、次の「研究域・研究軸関係図」である。

まず、大きな枠組として五つの研究域がある。日本文化研究を、どういうベクトルで行うかというものである。この大きな枠組設定によって、その共同研究がどこに位置づけられるかを明確に示すことができる。

第1研究域では、日本文化を諸外国の状況からある程度独立した研究単位として捉えた上で、その時系列的な「動態」を研究する。

第2研究域では、同様に日本文化を独立的な研究単位と捉えた上で、時系列的な変

化ではなく比較的固有の性格を保ち続けている「構造」に焦点を当てる。



第3研究域では、日本文化を他の文化単位との関連でグローバルに捉え、その構造を比較検討する「文化比較」である。

第4研究域では、第3研究域が時系列的にはあまり変化しない構造に焦点を当てるのに対して、特定の地域との時系列的な文化交渉の有り様に焦点を絞って研究する「文化関係」の研究とすることができる。

そして、日文研ならではの研究域として、第5研究域では、研究テーマ自体が日本文化研究および日本認識に関するものに特定される。いわば、研究の研究であり、「文化情報」ということができる。

以上の五つの研究域には、その「域」を構成する「軸」がそれぞれ三つずつ設定されている。したがって、研究軸は計15軸が設定され、通常の共同研究はこの15軸のなかのいずれかの軸にその場を占めることになる。

## 意欲的に「共同研究」始まる

## (1)「共同研究」のあらまし

「共同研究」は、日文研創設初年度（1987年度）に早々と5班のプロジェクトが始動するなど、日文研の中核とされるだけの勢いと意気込みのなかでスタートした。第1号の「日本文学と『私』」は、創設間もない3カ月後の9月1日、洛西センタービル5階の仮住まい事務所で個別研究の発表会が行われ、以降4年6カ月にわたる研究会の口火を切った。共同研究は、日文研創設調査段階から想定モデルを立案するなどして事前準備を進めていたため、実際の起ち上がりも早かったのである。

では、「共同研究」はどのような仕組みで推進されていたのか。以下にそのあらましを示す。

## 〈研究テーマの選定〉

共同研究を主宰しようとする教員が代表者となり、補佐する幹事らとともに研究テーマを選定する。その際、研究域・研究軸という枠組みのなかでの位置づけを勘案しつつ設定してゆく。これによって、共同研究参加者（班員）の編成（オーガナイズ）、班員の

個別研究テーマの設定などが鮮明になり、共同研究テーマの広がり と 深さが保障される。

研究テーマは、人文学、人文科学、社会科学、自然科学の4分野がバランスよく取り入れられた、学際的な視点からのアプローチがしやすいもので、総合的な共同研究の実現が図れるように選定される。

〈研究組織〉

共同研究を構成する標準的なメンバーは、30人規模の研究班を例にとると、おおよそ次のようになる。代表者1人、幹事1人ないし2人、コアメンバー5人（代表者、幹事を含む）、外部共同研究員15人、日文研専任教員5人、客員教員5人。このほかに、ゲストを数名招待することが一般的である。コアメンバーとは研究班を組織する立場であり、自らの研究推進とともに研究の円滑な運営を取り仕切ることが期待されて設けられた。

〈進行スケジュール〉

研究期間はおおよそ3年間と設定されていたが、準備と取りまとめに1～2年間延長されることもあった。また、プロジェクトによっては、1～2年で集中的に実施するケースもあり、近年ではやや短縮化の傾向が出てきている。研究期間の長短にもよるが、研究会は1カ月ないし2カ月に1回と、研究班の状況に応じて設定されている（1994年度から始まった公募制による共同研究は、期間が1年間に限定された）。研究会は、共同研究員の個別研究の発表を中心とした討論会形式で行われることが多い。なかにはシンポジウム形式を取り入れることによって、共同研究のスケールアップや研究手法の革新を図ったり、学術的に重要なテキストを学際的な視点で輪読するといったケースもあった。

〈成果発表〉

共同研究の成果は、市販の単行本や日文研の出版物として普及が図られるほか、「国際研究集会」という国際的な舞台を設けて発表機会を持つこととされている。これらによって、日文研の共同研究は、ほとんどがその成果を内外の日本文化の研究者や学生、一般社会人に公開されている。また、共同研究に参加したことにより、個人研究の深化が進み、その結果、個人研究の発表としてのモノグラフ（単著）という形の成果を生むことにもつながっている。

〈自由な雰囲気なかで〉

人文系の共同研究といえば、日文研創設以前は京都大学人文科学研究所での取り組みが成功事例として著名であった。その代表的な成果のひとつに「ルソー研究」（研究代表者：桑原武夫）がある。ルソー研究も学際的な共同研究ではあったが、ここでの「共同」は、研究代表者によって仕組まれたものであった。日文研の産みの親の一人であった桑原武夫は、いわばオーケストラの指揮者のように研究者の「学際的ペアリング」を編成し、そのペアとなった2人の共同論文の集大成が「ルソー研究」という壮大な交響曲になった、というわけである。2人の組み合わせの妙も発揮されている。ただし、それは事前に代表者によって既に仕掛け済みのことであった。—このように、最終的な最大効果を狙ったトップダウンの共同研究を実際にやってみせたのが桑原方式であった。

こうした事例と比較したとき、同じ関西を拠点にしながらも、日文研の共同研究のスタイルは明らかに異なっていた。研究域と軸による独特の枠組みと、さらに学際的な広がりをもっている日文研の共同研究の編成は、少なくとも結果を想定した「仕掛け」は困難で、それぞれ異なった専門領域の自主性がそのままに反映され、個々人の個性を最大限に生かした緩やかなチームワークが形成された。代表者のリーダーシップは発揮されたものの、研究の実際の場面では班員間の上下関係は取り払われ、異なった視点からの発表に対してお互いをリスペクトする姿勢が貫かれていた。

このため、日文研が推進した共同研究は、代表者によって一元的な価値観で統制されたものではなく、多元的な価値観を醸成する傾向が強いものとなった。自由闊達な討論のなかから、さまざまな方向づけがなされた。班員の自己成長を促しつつ、漠然と「日文研方式」とも呼ぶべき共同研究の開放的な新しいスタイルが生み出されていった。

(2)「特別研究」の推進

共同研究は、研究域・研究軸の枠組みのなかで位置づけられ、計画されることとされている。「域」と「軸」を特定して、研究の位置づけを確定することで、研究テーマのバランスを調整するとともにレベルの高質性を保っている。

こうした標準的な形態以外に、それぞれ三つある「軸」をすべて網羅して、「域」の広がり を保持した長期・大型の共同研究を「特別研究」、または「域研究」として日文研が一体となって取り組むものとされていた。しかし、実際は1987（昭和62）年の初年度からスタートした「世界における日本認識の形成過程と現況に関する研究」のみで終わった。この特別研究は、10年計画で取り組まれたもので、世界各地において日本認識（日本イメージ）はどのようにして形成され、現在にいたっているのかを、年次計画の下に各種文献、オーディオ・ビジュアル資料、現地調査を通じて、比較社会学的な視角から体系的に明らかにしようとした。当初は10年をメドに集約的に一括して成果発表の予定であったが、これまでのところ、『世界の日本研究』のタイトルで年次報告書として逐次出版を継続して公開している。

共同研究の全記録

以下に、「共同研究」の全記録を3期に分けて収載する。

まず1993年度末（1994年3月）までに研究を開始した27のプロジェクトまでを第1期とした。この第1期の特徴は、専任教授に就任することによって日文研の創設そのものに積極的に参画した研究者が、みずからリーダーシップを発揮して、それぞれに日文研スタイルの「共同研究」をスタートさせ、あるいは成果物を公開した時期である。まさに、創設スタッフによって礎を築いた共同研究自体の創設期でもあった。

第2期は、助教授や外国人研究者が代表者となる若返りと国際化が同時進行し、また公募研究が始まったことにより、共同研究の編成・性格の多角化が始まった時期である。一方では、第1期のプロジェクトが2巡目に入って継続され、この継続研究によって日文研「共同研究」の認知度も進んでいった。多彩な研究の推進と成果に対する評価の高まりが同時に達成されたのが、この第2期の特徴である。時期的には、1994年度から2002年度スタートのプロジェクトあたりまでとするのが妥当であろう（研究番号28から80まで）。

第3期は、それ以降から2011年度（2012年3月）までに進行しているすべてのプロジェクトを含む（研究番号81以降）。この時期になると、研究者の大部分は日文研が創設されてからの入所者ということになり、研究代表者の入れ替わりはもちろん外部班員も多彩になった。研究テーマも、明らかに「アジアの中の日本」といった視点を導入したものが増え、日文研収集の資料を活用した事例もみられるなどは、来るべき日文研「共同研究」の方向を示唆しているかのようでもある。

以下、上記のような3期に区分することによって「共同研究」の歴史的趨勢の仮の枠組みとして措定したうえで、この枠組みのもとに時系列によって全共同研究を配列し、その目的と研究の推移の概略、研究班の構成と班員名、研究活動の記録、研究成果物（出版物）を収載する。



共同研究一覽

● 第1研究域「動態研究」

● 第2研究域「構造研究」

● 第3研究域「文化比較」

● 第4研究域「文化関係」

● 第5研究域「文化情報」

研究テーマ	代表者名	班員数	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003					
001 日本文学と「私」	中西進	34	9	3																				
002 日本文化の基本構造とその自然的背景	埴原和郎	33	11	3																				
003 世界における日本研究の知識社会学的研究	梅原猛	67	11	3																				
004 「場」の日本文化	村井康彦	31	1	3																				
005 江戸時代の芸術における外国文化(中国を中心として)の受容と変容	ドナルド・キーン／杉本秀太郎	25	1	3																				
006 日本人の他界観	久野昭	25	7	3																				
007 日本型モデルのメリットとデメリット	濱口恵俊	25	1	3																				
008 日本思想の重層性	山折哲雄	25	1	3																				
009 市場制度の国際比較	村上泰亮	20	4	3																				
010 市場制度の動態—日本を中心に—	飯田経夫	11	10	3																				
011 東アジアの本草と博物学の世界	山田慶児	33	10	3																				
012 歴史認識と歴史意識：日本の歴史研究	速水融	16	1	3																				
013 日本人の自然観	伊東俊太郎	29	4	3																				
014 昔話、そのアフリカ・アジアに通底するものの研究	河合隼雄	22	4	3																				
015 交渉行動様式の国際比較	木村汎	41	7	3																				
016 「理想郷」の比較文化史	芳賀徹	49	10	3																				
017 日本の科学と文明	伊東俊太郎	32	4	3																				
018 日本の想像力	中西進	39	4	3																				
019 近代化過程における人口と家族	速水融	36	4	3																				
020 世界の中の日本型システム	濱口恵俊	34	4	3																				
021 生命と現代文明	早川閑多	21							4	3														
022 日本文化の新断面—かざり並びに奇人研究—	辻惟雄	45							4	3														
023 公家と武家	村井康彦	24							4	3														
024 短冊の研究	杉本秀太郎	17							4	3														
025 日本人はキリスト教をどのように受容したか	山折哲雄	29							4	3														
026 日本文化の深層と沖縄	梅原猛／山折哲雄	35							4	3														
027 総合雑誌「太陽」の総合的研究	鈴木貞美	46							4	3														
028 日本人および日本文化の地域性	尾本恵市	41							4	3														
029 制約に基づく日本語の構造の研究	郡司隆男	15							4	3														
030 歴史のなかの病いと医学—日本を中心に—	山田慶児	38							4	3														
031 現代日本人の労働・遊び観および行動の歴史的発達	セップ・リンハルト	21									4	3												
032 魔女と気候の文明史—アニミズム世界の再発見—	安田喜憲	36									4	3												
033 日本型システムの編成原理	濱口恵俊	27									4	3												
034 日本における中産階級の成立過程—人口・家族・職業・階層—	園田英弘	26									4	3												
035 近代日本の女たち—その表象と自己表現—	芳賀徹	54									4	3												
036 身体技法を通してみた東アジアの宗教交流史	石田秀実	23									4	3												
037 現代日本の社会科学におけるアメリカニズム	飯田経夫	13									4	3												
038 転換期における法と社会	石井紫郎	18											4	3										
039 文学における近代—転換期の諸相—	井波律子	51											4	3										
040 日本人と英語：英語化する日本の学際的研究	津田幸男	17										4	3											
041 公家と武家—その比較文明史的考察—	笠谷和比古	37											4	3										
042 東アジア地中海世界における文化圏の形成過程—3世紀から7世紀にかけて—	千田稔	44											4	3										
043 大正期総合雑誌の学際的研究	鈴木貞美	58												4	3									
044 日中考古学の文化比較研究	高崇文	25												4	3									
045 家族と人口の歴史社会学	落合恵美子	51												4	3									
046 将棋の戦略と日本文化	尾本恵市	22												4	3									
047 日本社会における会合の実態とその持つ意味についての歴史的研究	小泉和子	16												4	3									
048 画像資料が物語る身体の文化史	栗山茂久	36												4	3									
049 日本における怪異・怪談文化の成立と変遷に関する学際的研究	小松和彦	36												10	3									
050 通婚圏、配偶者選択および性淘汰によるヒトの進化	赤澤威	26												10	3									
051 危機管理と予防外交	木村汎	31												10	3									
052 高精度分解能の気候変動と文明の盛衰	安田喜憲	31													4	3								
053 日本における情報化とジャーナリズム機能の変容—日米国際比較を軸として—	柴山哲也	33												4	3									
054 日本の語り物—口頭性・機構・意味—	アリソン・トキタ	45												4	3									
055 19世紀の日本「発見」—旅行と旅行記の中の異文化像—	白幡洋三郎	35												4	3									
056 ベトナム・日本関係のアジアにおける役割と影響—太平洋協力関係の現在と未来—	グエン・ズイ・ズン	17													4	3								
057 類似性の科学と模倣の情報文化に関する研究	山田葵治	30													4	3								
058 平安人物志の研究	光田和伸	25													4	3								
059 日本人の時間意識の変遷	橋本毅彦	18													4	3								
060 日本の政治経済とアジア諸国	村松岐夫	20													4	3								
061 聖なるものの形と場	頼富本宏	48													4	3								
062 武器の進化・退化の学際的研究(考古・歴史編)	石井紫郎	18													4	3								
063 大英帝国・英連邦の文明論的研究—日本との比較を中心に—	川勝平太	24													4	3								
064 日本のモダニズム—関西を中心とした学際的研究—	鈴木貞美	36														4	3							
065 公家と武家—王権と儀礼の比較文明史的研究—	笠谷和比古	50														4	3							
066 王権と神祇	今谷明	20														4	3							
067 徳川日本の家族と社会	落合恵美子	31														4	3							
			S62	S63	H元	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15					

研究テーマ	代表者名	班員数	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
068 ●「東アジア」的空間と都市との関係系の形成と変容	千田稔	39		4			3												
069 ●欠如・逆欠如の観点から見た日本の生活文化	園田英弘	22		4				3											
070 ●生きている劇としての能：謡曲の多角的研究	ジェイ・ルービン	18		6	3														
071 ●日本語系統論の現在	アレキサンダー・ボビン	20			4	3													
072 ●モンゴロイドの自然誌	赤澤威	26			4			3											
073 ●日本植民地法制度の形成と展開に関する構造的 research	浅野豊美	21			4	3													
074 ●表現における越境と混淆	井波律子	28			4			3											
075 ●近代中国東北部(旧満州)文化に関する総合研究	劉建輝	39			4			3											
076 ●歴史的空間情報の解析・解釈法の研究	宇野隆夫	30				4		3											
077 ●日本人の異界観—その構造と意味—	小松和彦	29				4		3											
078 ●旅の「情報」と「表現」—交流と孤立から見た日本文化史の再検討—	白幡洋三郎	21				4		3											
079 ●近代化と日本人の身体感覚	北澤一利	13				4		3											
080 ●1920-1970の五十年間にわたる日本文学・日本文化の連続性・不連続性	エドゥアルド・クロッペンシュタイン	19				4	3												
081 ●コマーシャル映像にみる物質文化と情報文化	山田葵治	25					4			3									
082 ●公家と武家—官僚制と封建制の比較文明史的研究—	笠谷和比古	52					4			3									
083 ●京都を中心とした、日本の伝統工芸の過去・現在・将来	稲賀繁美	67					4				3								
084 ●性欲の文化史	井上章一	27					4				3								
085 ●文化としての植物—日本の内と外—	光田和伸	19					4			3									
086 ●戦間期日本の社会集団の相互関係とネットワークについて—政・官・軍・メディア・経済界・教育事業家などを中心に—	猪木武徳	23					4				3								
087 ●出版と学芸ジャンルの編成と再編成—近世から近現代へ—	鈴木貞美	69					4				3								
088 ●「封建・郡県」論を巡った中国と日本における思想連環—漢字文化圏における他国認識と自国改革—	張翔	27					8	7											
089 ●日本文明史の再建—21世紀の環境・経済・文明—	安田喜憲	78						4			3								
090 ●日本の近代化過程における技術と身体 の思想	木岡伸夫	23						4	3										
091 ●日本の朝鮮・台湾支配と植民地 官僚	松田利彦	31						4			3								
092 ●「関西」史と「関西」計画—文化の生成と自然的・社会的基盤—	千田稔	31						4			3								
093 ●近代東アジアにおける二字熟語概念の成立に関する総合的研究	馮天瑜	25						8	7										
094 ●日本における「死の場所」と死生観の変遷に関する総合的研究	近藤功行	14							4	3									
095 ●「文明交流圏」としての「海洋アジア」	川勝平太	24							4			3							
096 ●王権と都市に関する比較史的研究	今谷明	23							4			3							
097 ●日本における住まいの風土性・持続性	オギュスタン・ベルク	12							4	3									
098 ●前近代東アジア三国の交流と文化的波長	崔博光	55							7	6									
099 ●幸田露伴の世界	井波律子	15									4		3						
100 ●怪異・妖怪文化の伝統と創造—前近代から近現代まで—	小松和彦	31									4			3					
101 ●文化の所有と拡散	山田葵治	30									4			3					
102 ●近代東アジアにおける知的空間の形成—日中学術概念史の比較的研究—	孫江	41								4	3								
103 ●TOWARDS A NEW JAPAN? —Bridging the Perception Gap Concerning Japan's Contemporary Cultural Identity—	リーン・T・セーヘルズ	21								6	5								
104 ●古代東アジア交流の総合的研究	王維坤	30										4	3						
105 ●日本文明史の再建—生命文明の時代を求めて—	安田喜憲	69										4			3				
106 ●性欲の社会史	井上章一	26										4				3			
107 ●近代日本の公と私、官と民—比較の視点から—	猪木武徳	20										4				3			
108 ●都市文化とは何か？ —ユーラシア大陸における都市文化の比較史的研究—	白幡洋三郎	36										4				3			
109 ●18世紀日本の文化状況と国際環境	笠谷和比古	53										4				3			
110 ●東アジアにおける知的システムの近代的再編成	鈴木貞美	85										4				3			
111 ●アジアにおける家族とジェンダーの変容：近代化とグローバル化の時代に	落合恵美子	31										4			3				
112 ●「満州」学の整理と再編	劉建輝	43										4				3			
113 ●民謡研究の新しい方向	細川周平	27										4				3			
114 ●戦後政治・外交政策の検証と再定義	池内恵	20																	
115 ●仏教からみた前近代と近代	末本文美士	29												4				3	
116 ●植民地帝国日本における支配と地域社会	松田利彦	34										4				3			
117 ●「東洋美学・東洋的思惟」を問う：自己認識の危機と将来への課題	稲賀繁美	89										4					3		
118 ●文明と身体	牛村圭	23											4				3		
119 ●日本の近代化とプロテスタンティズム	上村敏文	39												4			3		
120 ●日本における翻訳の文化史	ジェフリー・アングルス	22												8	8				
121 ●怪異・妖怪文化の伝統と創造—研究のさらなる飛躍に向けて—	小松和彦	28														4			3
122 ●生命文明の時代を創造する	安田喜憲	71														4		3	
123 ●近代日本における指導者像と指導者論	戸部良一	22														4			3
124 ●帝国と高等教育—東アジアの文脈—	酒井哲哉	19														4			3
125 ●「日本浪漫派」とアジア	呉京煥	21														4		3	
126 ●東アジア近現代における知的交流—概念編成を中心に—	鈴木貞美	76														4			3
127 ●日記の総合的研究	倉本一宏	58														4			3
128 ●文学の中の宗教と民間伝承の融合：宮沢賢治の世界観の再検討	ブラットゥ・アブラハム・ジョージ	16													6	5			
129 ●夢と表象—メディア・歴史・文化—	荒木浩	29															4		3
130 ●徳川社会と日本の近代化—17～19世紀における日本の文化状況と国際環境—	笠谷和比古	33														4			3
131 ●「心身／身心」と「環境」の哲学—東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み—	伊東貴之	32														4			3
132 ●新大陸の日系移民の歴史と文化	細川周平	17														4		3	
133 ●仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論	フィリップ・ボナン	24														6	5		
134 ●デジタル環境が創成する古典画像資料研究の新時代	楊曉捷	17															7	6	
			H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27

\*本研究会は研究班編成後に代表者が急遽他機関へ異動したため、実際には研究会の開催には至らなかった



第1期

1987(昭和62)～1993(平成5)年度の記録

●日本文化研究のスターが集結して

第1

初の10年間

(1987年～1996年)と設定することもできる。要するに、日文研の設立理念に賛同して創設とほぼ同時に日文研教員となった、日本文化研究をさまざまな領域からリードしていた当時の第一線の研究陣によってスタートが切られ日文研の共同研究の方向と方法を確立していた時期である。それは、少なくとも10年間は主流として継続されたといえるが、この間に、同時に新しいタイプの公募研究が始まり、代表者の世代交代も進んだことも事実なので、一応そのような新しい要素が生まれる前の、いわば創設者たちの時代を第1期とすると、1993年度までに研究がスタートした7年間弱(実質6年半)ということになる。

すでに何度も触れているように、日文研での研究の眼目は「共同研究」にあった。そのため、創設時の教員の選定にあたっては、これまでの日本文化研究のあり方を変革し、新たに国際的・学際的・総合的な共同研究をリードできる問題意識をもち、実践できる研究者が求められた。「こういうテーマで、こんな研究をしてほしい」—こ、準備期に進められて教員就任依頼の決まり文句であった。こうしたことから、共同研究の課題(テーマ)も、日本文化を真正面に見据えたスケールの大きな、正統派モデルともいべきものが並んだの然とであった。

本文伝のと

」性の考究

(「日本文学と『私』」、研究代表者:中西進)、世界における日本研究の社会学的アプローチ(「世界における日本研究の知識社会学的研究」、研究代表者:梅原猛)、日本文化の起源に関する二重モデルをめぐっての学際的な研究(「日本文化の基本構造とその自然的背景」、研究代表者:埴原和郎)、日本文化の空間特性を、都市空間・建築・庭園などの「場」にこだわって世界の各地域との比較を通して明らかにする研究(「『場』の日本文化」、研究代表者:村井康彦)、桃山期以降～江戸の諸芸術が外国文化の影響を受けていかに日本文化化したかを独自の分析視角で提示した研究(「江戸時代の芸術に中を中て)の受容と変容」、研究代表者:ドナルド・キーン/杉本秀太郎)度に選推進

する研究代表者の顔ぶれを一覧しただけでも、創設期ならではの並々ならぬスケールの大きさとレベルの高さがう。

また、こうした研究スケールの大きさや研究代表者の著名性のためか、この時期の研究成果はほとんど一般学術書として市販され、研究の裾野の拡大に貢献した。

●国際性・学際性・総合性を貫く

た、期あらてあげられることは、「共同研究」の基本的なあるべき姿＝備えるべき要が、厳正に守られたことである。それは、言うまでもなく、国際性、学際性、総合性の3大要素であった。

具体的には、「共同研究」の計画立案にあたっては、その目的と研究方法の双方から、国際的な比較の視点(世界の中での日本)、研究班を構成する班員の研究領域の広がり(多分野の研究領域を交えた学際性)、共同研究としての総括的結論の獲得(個別から普遍的総合性へ)が、めざすべきものとして遵守された。特に留意されたのは、そのバランスであった。この3点は、日文研の共同研究を特徴づけるアイデンティティというべきものであったが、これに関して第1期のいずれの事例においても、「共同研究」の申請の段階で審査されるほど徹底された。

また、「研究域・研究軸」の配分も、全体としてバラエティなもののように配慮された。

●学際的研究の道を拓く

共同」、の初7年度)から順調に研究活動を開始したが、その活動を支えたのはリーダーである研究代表者(初年度所長を含めて専任教授5人が研究班のリーダーとなっていた)であり、またチームとしての研究班のまとめ役と研究発表会の推進役を担った幹事の役割が重要な要素であった。幹事は、初年度5人、2年目に1人増員して6人となる専任助教授と助手(2年目の1988年度に1人入所)が受けもった。ところが、教授職が2年目の1988年度に専任9人(所長含む)、客員4人へと一気に3倍増となり、それに呼応するように新たな共同研究が始まると、幹事役の助教授・助手の人材がたちまち払底することになった(助教授も1988年度に専任1人、客員2人増となったが、幹事は研究事務等も手がけなければならなかったので

する研究代表者の顔ぶれを一覧しただけでも、創設期ならではの並々ならぬスケールの大きさとレベルの高さがう。

また、こうした研究スケールの大きさや研究代表者の著名性のためか、この時期の研究成果はほとんど一般学術書として市販され、研究の裾野の拡大に貢献した。

●国際性・学際性・総合性を貫く

た、期あらてあげられることは、「共同研究」の基本的なあるべき姿＝備えるべき要が、厳正に守られたことである。それは、言うまでもなく、国際性、学際性、総合性の3大要素であった。

具体的には、「共同研究」の計画立案にあたっては、その目的と研究方法の双方から、国際的な比較の視点(世界の中での日本)、研究班を構成する班員の研究領域の広がり(多分野の研究領域を交えた学際性)、共同研究としての総括的結論の獲得(個別から普遍的総合性へ)が、めざすべきものとして遵守された。特に留意されたのは、そのバランスであった。この3点は、日文研の共同研究を特徴づけるアイデンティティというべきものであったが、これに関して第1期のいずれの事例においても、「共同研究」の申請の段階で審査されるほど徹底された。

また、「研究域・研究軸」の配分も、全体としてバラエティなもののように配慮された。

●学際的研究の道を拓く

共同」、の初7年度)から順調に研究活動を開始したが、その活動を支えたのはリーダーである研究代表者(初年度所長を含めて専任教授5人が研究班のリーダーとなっていた)であり、またチームとしての研究班のまとめ役と研究発表会の推進役を担った幹事の役割が重要な要素であった。幹事は、初年度5人、2年目に1人増員して6人となる専任助教授と助手(2年目の1988年度に1人入所)が受けもった。ところが、教授職が2年目の1988年度に専任9人(所長含む)、客員4人へと一気に3倍増となり、それに呼応するように新たな共同研究が始まると、幹事役の助教授・助手の人材がたちまち払底することになった(助教授も1988年度に専任1人、客員2人増となったが、幹事は研究事務等も手がけなければならなかったので

専任教員に限定されていた)。結果的に、この創設期の専任助教授・助手は、否応なしに複数の共同研究の幹事を担当することになったのである。

いわば半ば強制的なこの研究班の編成が、実は複数の共同研究の幹事役を担うことによって、若い助教授や助手に「学際的研究」の意義と醍醐味を体験させることになった。当時、3～4班の共同研究に参加した幹事は、いかに研究会で発表される内容が自分にとって異分野の領域に属するものであっても、幹事としてのまとめ役である以上それぞれに真剣に立ち向かい、新しい知見に刺激を受け、それを自分のものにしていった。そして、リーダーを手助けして研究成果を市販の学術書籍としてまとめあげる過程で、つまり総合化を図るときになれば、こうした学際的研究実績が次世代の日文研リーダーの育成に威力を発揮したのであった。

このような初期に集中的に現れた「学際的研究」の効果は、その後も共同研究のさまざまな局面で現れている。しかし、第1期のこの現象は、同時に日文研「共同研究」のスタイルを築き上げることになったという意味で、歴史的な意味をもっている。

001 日本文学と「私」

●研究域
第1研究域 動態研究(伝統)
●共同研究期間
1987(昭和62) 年9月～1992(平成4) 年3月
●研究の概要
日本文学における「私」の問題を、学際的、国際的なさまざまな角度から探ることを目的とする本研究が、「共同研究」の先駆けとなったことは象徴的なことといえる。なぜなら、日本文学における私性については、従来、日本文学の特徴として「私小説」の特異な隆盛がいわれ、論じられ尽くした感があったが、それは文学という1領域内のことだけであって、ここで取り上げられたような学際性、国際性という視角が斬新であり、ここに日文研の「共同研究」の真骨頂がうかがえるからである。
日本文学では、作者が作中に「私」として登場する場合がある。私小説や日記などを例にして、これがしばしば日本独特の形式のごとくにいわれるが、実際に私小説の「私」は作者なのか、日記における「私」は私であり得るのか、さらには、この問題はなお日本独自といえ得るのか、未だに明快ではない。また、和歌や俳句などで想定できる主語が「われ」であるとき、その「われ」と作者はどう関わっているのかという表現上の「われ」の問題もある。さらに、連歌、連句の座における連衆の中で、個人はどのように位置づけられるかも問題となる。さらに国際的な視野の下で考えてみれば、日本人における「私」とは、アジアや欧米の概念の中で何に当たるのだろうか。エゴという言葉とどう関係するのか、そしてこれが日本の近代化の中でどう処理されてきたのだろうか。
本研究では、こうした「私」をめぐる緒論点を、整序的に取り扱っていくのではなく、いわば無限定的に論じあい、日本人における「私」性を文学のなかに探り、日本文化の特質の一端を4年という時間をかけて多面的に考

えていこうと試みた。
このため、共同研究班の3分の1は外国人研究者とし、哲学・社会学・言語社会学・日本史学・民俗学・美術史学・人口学・比較文明学・コミュニケーション論……など、半数以上は文学以外の分野からの研究者の参加を得て、大いに学際的な議論を巻き起こすなかで進められていった。期間が長かったため、その成果は文芸誌等に報告され、全体としては1993年に単行本としてまとめられ、出版された。
●研究代表者
中西進(日文研教授、日本文学)
●幹事
上垣外憲一(日文研助教授、比較文化)
鈴木真美(日文研助教授、日本文学)
●班員
大飼公之(宮城学院女子短期大学教授、日本古代文学)
マーガレット・ウェルス(京都大学人文科学研究所研修員、日本演劇論)
モリス・J・オーガスティン(関西大学文学部教授、比較文化)
夏剛(京都工芸繊維大学助教授、日本近代文学)
小松和彦(大阪大学文学部助教授、民俗学)
佐伯彰一(中央大学文学部教授、比較文化)
坂部恵(東京大学文学部教授、哲学)
鈴木孝夫(杏林大学教授、言語社会学)
田代慶一郎(福岡女学院大学教授、比較文学)
茅田道太郎(明治学院大学教授、コミュニケーション論)
ニコラス・ジョン・ティール(同志社女子大学学芸学部教授、日本古代文学)
野口武彦(神戸大学文学部教授、日本近世文学)
光田和伸(武庫川女子大学文学部助教授、日本近世文学)
満谷マーガレット(東京工業大学工学部助教授、日本近代文学)
持田公子(東京造形大学造形学部助教授、記号学)
山田有策(東京学芸大学教育学部助教授、日本近代文学)
李御寧(日文研客員教授／梨花女子大学校教授、日本文化論)
伊東俊太郎(日文研教授、比較文明学)
杉本秀太郎(日文研教授、比較文学)
上野千鶴子(日文研客員助教授／京都精華大学人文学部助教授、社会学)
宇佐美齋(日文研客員教授／京都大学人文科学研究所助教授、仏文学)
アンドリュー・ガーストル(日文研客員助教授／オーストラリア国立大学日本語センター上級講師、日本文学)
ドナルド・キーン(日文研教授、日本文学)
ロイヤル・タイラー(日文研客員教授／オスロ大学上級講師、日本文学)
馬興国(日文研客員助教授／遼寧大学日本研究所副教授、日本文学)
早川聞多(日文研助教授、日本美術史)
連水融(日文研教授、歴史人口学)
別役恭子(日文研寄附研究部門教授、日本美術史)
卞立強(日文研客員教授／北京大学日本研究中心常務副主任、日本文学)
村井康彦(日文研教授、日本史)
リービ英雄(日文研客員助教授／スタンフォード大学アジア言語学部準教授、日本文学)
●成果物
中西進編『日本文学における「私」』(河出書房新社、1993年12月)
●研究発表
1987年 9月 1日 中西進「共同研究の方針と問題の所在」
山田有策「近代文学における“私”の発生」
1987年 9月 2日 大飼公之「古代的私の構造」
ニコラス・ジョン・ティール「小野小町における“私”の意識」
佐伯彰一「パーソナル・モードー比較文学的考察一」
1987年 9月 3日 ドナルド・キーン「総括と今後の展望」
1987年 11月 26日 光田和伸「連歌俳諧と私」
満谷マーガレット「樋口一葉の私」



	ハルオ・シラネ「リリズム・インターテクスチュアリティー・“私”—中世歌論を中心として—」
1987年 11月 27日	夏剛「『私小説』的発想と日本的“私”」 上垣外憲一「日本語の助辞と私表現」
1988年 3月 15日	マーガレット・ウェルス「戦なる風体—喜劇の“私”達—」 田代慶一郎「夢幻能について」
1988年 3月 16日	宇佐美齋「近代日本のロマン主義と“私”」
1988年 5月 13日	杉本秀太郎「“私”の隠れ蓑—徒然草をめぐる—」 野口武彦「源氏物語における語りと“私”」
1988年 5月 14日	上垣外憲一「対概念の一項としての“私”」
1988年 7月 29日	モリス・J・オーガスティン「日本と西洋の文学言説における愛の構造」 大剣公之「仮合の前蹤」
1988年 7月 30日	梅原猛「古代日本人の他界観」
1988年 9月 30日	鈴木孝夫「〈私〉と〈あなた〉の東西比較—人称代名詞構造から—」
1988年 10月 1日	持田公子「私の混同—川端康成の場合—」 坂部恵「かたりと〈私〉」
1988年 11月 18日	光田和伸「連歌俳諧 または『私』の救済」 小松和彦「悪霊祓いの儀礼、悪霊の物語」
1988年 11月 19日	ロイヤル・タイラー「謡曲に於ける『私』の深層—ワキ・シテ・不二という解釈の試み—」 田代慶一郎「謡曲における他界観」
1989年 2月 20日	アンドリュース・ガーストル「18世紀の庶民的自意識・歴史観の発展—浄瑠璃を通して—」
1989年 2月 21日	夏剛「インタビュー・ノンフィクションにおける“私”の可能性—猪瀬直樹『日本凡人伝』をテキストに—」 山田有策「〈僕〉たちの文学—人称の文学史—」
1989年 2月 22日	ニコラス・ジョン・ティール「『古今集』における das Ich」
1989年 4月 3日	卞立強「中国人から『日本文学』と私」をどう見るか—私小説を中心として—」 上垣外憲一「少女の日記『にあんちゃん』」 早川聞多「絵画表現と『私』—主に与謝蕪村をめぐる—」
1989年 4月 4日	溝谷マーガレット「神秘と演技の間—女性形の『私』についての—考察—」
1989年 6月 22日	中川久定「J・J・ルソーにおける私の問題—中江兆民『民約訳解』にも触れながら—」
1989年 6月 23日	成恵卿「イエイツと能—転身のドラマー—」 中西進「“私”における和歌と物語」 村上孝之「近代文学における恋愛と個人主義」
1989年 9月 29日	村井康彦「公と私」
1989年 11月 29日	宇佐美齋「作家の恋愛書簡に見る『私』と『他者』の問題」 後藤明生「日本近代文学における『私』」
1989年 11月 30日	鈴木貞美「日本現代文学における自己像幻視—都市大衆社会と『私』—」 川村湊「生まれ変わり」と転生」 川田順造「肖像の問題」
1989年 12月 1日	上垣外憲一「鶴屋南北をめぐる」 大澤吉博「伝統を夢みる『自我』」 山田有策「鏡花文学における自己像幻視—〈近代の罪〉ということ—」
1989年 12月 2日	夏剛「私ノンフィクションの支点—『第三の目』、『私Ⅲ』と『世界Ⅲ』—」 大剣公之「身の実（核）」 中西進「総括—日本文学における私—」
1990年 2月 3日	パネルディスカッション「日本の現代小説＝表現の歴史的重層性と『私』」

	パネラー：大庭みな子、後藤明生、中村真一郎 司会：鈴木貞美
1990年 3月 28日	持田公子「漱石『手紙』と書簡体小説」 李国棟「漱石の自己と中国人の自己」
1990年 3月 29日	光田和伸「俳諧における自己確認—芭蕉の場合—」 平川祐弘「新井白石と自己」
1990年 5月 7日	溝谷マーガレット「近代女性の日記における『私』—中島湘煙と樋口一葉—」 大久保喬樹「明治知識人の『私』、その近代性と伝統性—漱石・鷗外を中心として—」
1990年 5月 8日	上垣外憲一「夏目漱石の『私』」
1990年 8月 3日	佐伯順子「男女関係における『私』」 モリス・J・オーガスティン「宗教的世界観と『私』」
1990年 8月 4日	リヴィア・ロディカ・モネ「宇宙の性—あるいは幻視の母が孕むもの—」 夏剛「幸田露伴の芭蕉評釈と金型嘆の杜詩、唐詩選批からみた日本的『私』と中国的『私』」
1990年 12月 12日	テーマ「小説の中の『私』」 鈴木貞美「問題設定」 曾根博義「『私小説』形成から昭和10年前後まで」 コメンテーター：後藤明生 吉田照生「戦中・戦後の『私』」 コメンテーター：河合肇雄
1990年 12月 13日	饗庭孝男「古典と近代文学の『私』」 コメンテーター：リービ英雄
1991年 2月 26日	森岡正博「手塚治虫『火の鳥』に見る生命観」
1991年 2月 27日	熊倉千之「小説の視点と私—川端賞作品を読む—」 ニコラス・ジョン・ティール「小町像の変遷」
1991年 7月 24日	夏剛「メビウスの環…『私』と『我』を巡って—散点的『連環体』の考察の試み—」 宇佐美齋「啄木における自己意識の突出について」 田代慶一郎「夢幻想に見られる非人称化の傾向」 光田和伸「蕪村における私—『芭蕉庵再興』連句を読む—」
1991年 7月 25日	上垣外憲一「日本語・韓国語の助辞と私表現」 中西進「非『私』的なもの」

002 日本文化の基本構造とその自然的背景

●研究域  
第2研究域 構造研究（自然）  
●共同研究期間  
1987（昭和62）年11月～1993（平成5）年3月  
●研究の概要  
文化をつくりだすのは人間であるが、自然環境もまた文化の全体に枠組みを与え、文化を育んでおり、人間・文化・自然は相互に関係している。そのことを共通認識として、本研究では日本文化の基本構造と形成過程を、主体としての日本人とそれを包む日本列島の自然環境の分析を通して明らかにしようとした。  
特に東アジア・太平洋地域と日本の比較、および日本列島内諸地域の比較を通して、差異と共通性を抽出し、日本文化ならびに日本人の核となる要素とその変容に寄与した諸要素の分析に重点をおいて、古代から中世（ほぼ15世紀）までを対象に研究を進めた。  
研究代表者の埴原和郎自身が提唱している日本文化の基本構造としての

「二重構造モデル」を取り上げ、考古学、歴史学、環境学、家畜学、言語学、遺伝学、ウイルス学、地理学、比較文明学…など、関連すると思われる学問領域を総動員して、縄文人を南方系、渡来人（弥生人）を北方系としたこのモデルへの多面的な接近を試みた。その結果、自然人類学的データの分析から提唱されたこの二重構造モデルが、他の分野においても当てはまることが明らかになり、最終的には、文化現象を含めて人文・自然科学に共通する構造モデルとして認知されるものとの考えにいたった。

●研究代表者
埴原和郎（日文研教授、自然人類学）
●幹事
白幡洋三郎（日文研助教授、庭園史）
安田喜憲（日文研助教授、地理学・環境考古学）
北川浩之（日文研助手、地球化学）
●班員
大林太良（東京女子大学現代文化学部教授、民族学）
尾本恵市（東京大学理学部教授、分子遺伝学）
加藤晋平（千葉大学教養部教授、考古学）
久野健（仏教美術研究所長、東洋彫刻史）
小山修三（国立民族学博物館教授、民族考古学）
阪口豊（東京大学理学部教授、自然地理学）
崎山理（国立民族学博物館教授、言語人類学）
佐々木高明（国立民族学博物館教授、人文地理学）
佐原真（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、考古学）
武光誠（明治学院大学一般教育部助教授、日本史）
田名部雄一（麻布大学獣医学部教授、家畜学）
徳川宗賢（大阪大学文学部教授、国語学・方言学）
日沼頼夫（塩野義医科学研究所長、ウイルス学）
實来聰（国立遺伝学研究所助教授、人類遺伝学）
森脇和郎（国立遺伝学研究所教授、哺乳類遺伝学）
吉崎昌一（北海道大学文学部助教授、考古学）
伊東俊太郎（日文研教授、科学史・比較文明史）
上田正昭（日文研客員教授／大阪女子大学長、歴史学）
汪向榮（日文研客員教授／中国中日関係史研究会常務理事、中日関係史）
小野芳彦（日文研助教授、情報学）
杉本秀太郎（日文研教授、比較文学）
鈴木貞美（日文研助教授、日本文学）
園田英弘（日文研助教授、社会学）
中西進（日文研教授、日本文学）
中根千枝（日文研客員教授／㈱農村環境整備センター理事長、社会人類学）
早川聞多（日文研助教授、美術史）
村井康彦（日文研教授、日本史）
山折哲雄（日文研教授、宗教史）
山田慶児（日文研教授、科学技術史）
●成果物
埴原和郎編『日本人と日本文化の形成』（朝倉書店、1993年5月）
●研究発表
1987年 11月 13日 埴原和郎「共同研究の目的と研究方針」
1988年 1月 13日 埴原和郎「共同研究問題点の整理」 全員「共同研究組織の検討」
1988年 3月 22日 阪口豊「第四紀の自然環境について」
1988年 5月 20日 小山修三「縄文時代日本における資源の評価」 加藤晋平「東アジアの旧石器文化から見た日本旧石器文化」
1988年 5月 21日 佐々木高明「異説・縄文文化考—古民族植物学の成果をもとに—」
1988年 7月 6日 安田喜憲「家畜と森林破壊」 佐原真「家畜の去勢、ヒトの去勢」
1988年 7月 7日 田名部雄一「家畜のルーツ、特に犬の遺伝子からみた

	日本人の成立」
1988年 10月 6日	山折哲雄「『得』の信仰」 大林太良「第二次諸文明における平行進化」
1988年 10月 7日	上田正昭「古代日本と渡来文化」 徳川宗賢「ことばの地域差」 久野健「仏教美術の中国化・日本化」
1988年 12月 9日	伊東俊太郎「万葉集の自然観」
1989年 2月 9日	尾本恵市「遺伝子分布からみた日本人」 中根千枝「地域性をこえた日本社会の基本構造について」
1989年 5月 26日	山田慶児「記紀における科学技術」 武光誠「漢語と日本古代文化」
1989年 7月 19日	村山七郎「アイヌ語とオーストロネシア語」 井川史子「日本と北米の狩猟採集民—特に日本列島北部の縄文後・晩期について—」
1989年 9月 26日	汪向榮「私からみた吉野ヶ里遺跡」 埴原和郎「日本人の二重構造モデルについて」
1989年 12月 16日	實来聰「ミトコンドリアDNAの遺伝子増幅とその人類学的応用」 佐原真「吉野ヶ里遺跡に関する最近の考古学的知見」
1990年 2月 16日	上田正昭「古代日本と道教の信仰」 日沼頼夫「ATLレトロウィルスの分布—日本と世界—」
1990年 2月 17日	田名部雄一「食物忌避現象の自然及び社会的背景」
1990年 4月 23日	小山修三「縄文人の宇宙観」 吉崎昌一「北海道における初期農耕研究に関する最近の資料」
1990年 4月 24日	久野健「東北地方の古代彫刻」
1990年 6月 12日	崎山理「日本語の形成をめぐる」 森脇和郎「東アジアにおけるハツカネズミ種の遺伝的文化と移動」
1990年 6月 13日	伊東俊太郎「東西の自然観」
1991年 3月 25日	石田肇「アジアにおけるヒトの拡散と分化」 埴原恒彦「日本人とアジア・太平洋諸民族の類縁関係—歯の形態から—」
1991年 3月 26日	鈴木隆雄「日本人の構造論における古病理学—弥生から古墳時代における渡来人と疫病の関係—」 梅原猛「行基仏について」
1991年 6月 13日	埴原和郎「東北エミシと藤原四代の出自について」 小片丘作「韓国における古人骨事情」
1991年 6月 14日	久野健「天平仏と平安初期木彫の誕生」
1991年 12月 13日	塚本勲「日本語の起源と高句麗語・朝鮮語」 吉崎昌一「北海道考古学の現状と課題」
1991年 12月 14日	大塚和義「アイヌとアムール諸民族の文化的共通性」
1992年 3月 17日	徳永勝士「HLAからみた日本人の起源と形成」
1992年 5月 14日	石田貴文「ATLウィルス感染症に基づく日本人の近縁性」
1992年 5月 15日	加藤九祚「北東アジア諸民族の起源について」

003 世界における日本研究の知識社会学的研究

●研究域  
第5研究域 文化情報（外国における日本研究I）  
●共同研究期間  
1987（昭和62）年11月～1992（平成4）年3月



●研究の概要	
本研究は、世界における日本研究の現状を、知的伝統や研究体制、研究情報などの観点から総合的に明らかにするという、日文研にとっては中核的な特別研究に位置づけられるべきものである。研究代表者には所長自らが就き、5年という長期にわたる大型共同研究として設計された。	
日本研究を支える学問史的背景を検討するために科学史を、日本研究を支える教育・研究組織を分析するために教育社会学を、そして海外の日本研究の成果に関する書誌学的検討を行うために図書館情報学などを共同研究の中心に据え、テーマの国際性に加え明確に学際的な広がりを設定した。1989～90年度にはゲスト・スピーカーによる報告を集中的に受け、海外における日本研究の情報収集に努めた。	
かつての伝統的なジャパノロジーを支えていたのは多かれ少なかれ「エキゾティズム」であった。現在では、さらに高度な知的関心によりさまざまな専門領域から研究が進められるようになり、むしろかつての統合性を失っているといえる。つまり、日本研究者はその実体的な概念を失いつつある。このため、研究者個人よりも研究組織に着目して日本研究を分析する枠組みをつくる方向が注目されてきている。一つは言うまでもなく大学であり、さらにはソ連科学アカデミーや中国社会科学院のような国立研究機関であり、そして三つ目が民間のシンクタンクである。こうした機関による日本研究が集中的に行われているという点では共通しているが、研究課題などその他の点では大きく異なっていることが明らかになりつつある。	
●研究代表者	
梅原猛（日文研所長、哲学）	
●幹事	
園田英弘（日文研助教授、社会学）	
●班員	
天野郁夫（東京大学教育学部教授、教育社会学）	
雨宮夏雄（国際交流基金総務部人事課長、日本研究）	
潮木守一（名古屋大学大学院国際開発研究科教授、教育社会学）	
小野沢永秀（日本学術振興会事業部研究協力課長）	
岡村敬二（大阪府立夕陽丘図書館整理課主査、図書館情報学）	
榊原通紀（国際交流基金日本研究部日本研究課長、国際交流）	
柴田正美（三重大学人文学部教授、図書館情報学）	
新堀通也（武庫川女子大学文学部教授、教育社会学）	
中岡哲郎（大阪市立大学経済学部教授、科学史）	
中山茂（神奈川大学経営学部教授、科学史）	
秦明夫（国立教育研究所企画調整部長、研究組織論）	
疋田正博（㈱シー・ディー・アイ代表取締役、図書館情報学）	
水谷慶一（金蘭短期大学教授、マスコミ論）	
山野井敦徳（富山大学教育学部教授、教育社会学）	
横山俊夫（京都大学人文科学研究所助教授、日本文化史）	
リチャード・ルビンジャー（京大大学教養部招へい外国人学者／ハワイ大学、比較教育学）	
李御寧（日文研客員教授／梨花女子大学校教授、日本文化論）	
飯田経夫（日文研教授、経済学）	
伊東俊太郎（日文研教授、科学史・比較文明学）	
井上章一（日文研助教授、文化人類学）	
上野千鶴子（日文研客員助教授／京都精華大学、社会学）	
王曉平（日文研客員助教授／天津師範大学中文系、日本文学）	
汪向榮（日文研客員教授／中国中日関係史研究会常務理事、中日関係史）	
小野芳彦（日文研助教授、情報学）	
アンドリュース・ガーストル（日文研客員助教授／オーストラリア国立大学日本文学上級講師、日本文学）	
笠谷和比古（日文研助教授、日本史）	
河合隼雄（日文研教授、心理学）	
柏岡富英（日文研助教授、社会学）	
上垣外憲一（日文研助教授、比較文化）	
ドナルド・キーン（日文研教授、日本文学）	
北川勝彦（日文研客員助教授／関西外国語短期大学、経済学）	

北川浩之（日文研助手、地球化学）	
木村汎（日文研教授、政治学）	
グラント・K・グッドマン（日文研客員教授／カンザス大学教授、近代日本史）	
久野昭（日文研教授、比較哲学）	
黒須里美（日文研助手、社会学・人口学）	
ポーリン・ケント（日文研助手、社会学）	
佐藤知己（日文研助手、言語学）	
白幡洋三郎（日文研助教授、庭園史）	
杉田繁治（日文研客員教授／国立民族学博物館、コンピュータ民族学）	
杉本秀太郎（日文研教授、比較文学）	
鈴木貞美（日文研助教授、日本文学）	
ロイヤル・タイラー（日文研客員教授／オスロ大学東洋研究所上級講師、日本文学）	
田代和生（日文研客員教授／慶應義塾大学、経済史）	
中西進（日文研教授、日本文学）	
馬興国（日文研客員助教授／遼寧大学日本研究所、日本文学）	
埴原和郎（日文研教授、自然人類学）	
濱口恵俊（日文研教授、日本論）	
早川開多（日文研助教授、美術史）	
速水融（日文研教授、歴史人口学）	
ベアトリス・M・ボダルト＝ペイリー（日文研客員助教授／オーストラリア国立大学太平洋研究所、日本語・日本歴史）	
カレル・フィアラ（日文研客員助教授／カレル大学日本学科長、言語学）	
ユルゲン・ペルント（日文研客員教授／フンボルト大学日本研究所、近代日本文学史）	
卞立強（日文研客員教授／北京大学日本研究中心常務副主任、日本文学）	
三谷博（日文研客員助教授／東京大学教養学部助教授、日本史）	
村井康彦（日文研教授、日本史）	
村上泰亮（日文研教授、比較政治経済学）	
村松岐夫（日文研客員教授／京都大学法学部、行政学）	
ミコワイ・メラノヴィッチ（日文研客員教授／ワルシャワ大学日本研究学科、日本文学）	
森岡正博（日文研助手、哲学）	
安田喜憲（日文研助教授、地理学・環境考古学）	
山折哲雄（日文研教授、宗教史）	
山田慶兒（日文研教授、科学史）	
リービ英雄（日文研客員助教授／スタンフォード大学準教授、日本文学）	
サトヤ・プジャン・ワルマ（日文研客員教授／ジャワハラル・ネルー大学、言語学・日本文学）	
●成果物	
梅原猛編著『日本とは何なのか―国際化のただなかで―』（日本放送出版協会、1990年9月）	
●研究発表	
1987年 11月 10日	園田英弘「世界の日本研究と日文研の事業計画」
	疋田正博「諸外国における日本文化研究主体の現状」
	新堀通也「『海外における日本研究』の研究」
1988年 5月 13日	フォスコ・マラーニ「イタリアの日本研究」
	藤津滋生「海外の日本研究書の書誌学的研究」
1988年 5月 14日	白幡洋三郎「東欧における日本研究事情」
1988年 7月 15日	柴田正美「日本研究者の位置―AHCI87に見る―」
	山野井敦徳「米国における日本研究者を取り巻く環境―市場・組織・キャリア形成―」
1988年 7月 16日	上垣外憲一「韓国の日本研究五百年」
1988年 11月 11日	横山俊夫「イギリスの日本研究私見―外交官を中心とするいわゆるアマチュアリズムの伝統をめぐって―」
	園田英弘「日本研究の環境情報―British Library会議に出席して―」
1988年 11月 12日	小野沢永秀「ソ連における日本研究の動向について―ソ連出版年鑑（1761～1984）のデータに基づいて―」

	V・フルイノフ「ソ連科学アカデミーの日本研究」
1989年 1月 13日	雨宮夏雄「国際交流基金における日本研究事業の経緯」
	中西進・卞立強「中国の日本研究の現状」
1989年 1月 14日	中山茂「科学者の日本評価」
1989年 3月 13日	サヴィトリ・ヴィシュワナタン「インドにおける日本研究」
	キム・レーホ「ソ連における日本研究」
	エリック・セイズレー「フランス国立科学研究所における『日本学』について」
	ハロルド・ボライソ「ハーバードの日本研究」
	金春美「高麗大学日文科カリキュラム」
	鶴田欣也「ブリティッシュ・コロンビア大学における日本学の歴史と現状」
	イ・ケット・スラジャヤ「インドネシアの日本研究」
	ペーター・パンツァー「ドイツ・オーストリアにおける日本学の現状」
	ジェニー・ワキサカ「サンパウロ大学の日本研究」
	オロフ・G・リディン「ベルギーの日本研究」
1989年 6月 23日	ジョージ・アキタ「米国の日本研究―日本研究者第一世代―」
	潮木守一「研究の場としての大学―19、20世紀―」
1989年 6月 24日	勝又英子「世界の民間研究機関の日本研究」
1989年 10月 27日	N. F. LESHCHENKO「ベレストロイカ以降のソ連の明治維新研究」
	I. P. LEBEDEVA「ベレストロイカ以降のソ連の現代日本経済研究」
1989年 10月 28日	Yu. D. MIKHAILOVA「ベレストロイカ以降のソ連の日本文学・思想研究」
1990年 1月 26日	岡村敬二「中国の日本研究書誌」
	J. DONGALA「経済学者が見たアフリカの日本研究」
1990年 1月 27日	黄智慧「台湾の日本研究」
1990年 3月 6日	〈特別研究会〉
	セルチュク・エセンベル「トルコにおける日本研究の現状」
	ヴラースタ・ヴィンケルホーフローヴァ「チェコスロバキアにおける日本研究」
	アハマド・M・ファトヒ「エジプトにおける日本研究」
1990年 6月 1日	柳田利夫「スペインの日本研究」
	グラント・K・グッドマン「米国陸軍日本語学校卒業生のその後」
1990年 6月 2日	園田英弘「世界の日本研究―総合討論―」
1990年 11月 17日	土屋哲「ナイロビ大学の日本研究」
	Peter KORNICKI「欧州所在日本古書総合目録作成計画」
	天野郁夫「『世界の日本研究の鳥瞰』枠組について」
1991年 2月 16日	Josefa SANIEL「フィリビンの日本研究」
	Stephan LEONG「マレーシアの日本研究」
	ツベタナ・クリステワ「ブルガリアの日本研究」
	Prasert CHITTIWATANAPONG「タイの日本研究」
1992年 1月 31日	秦明夫「国立研究組織の研究外の機能」
	藤津滋生「海外文化交流年表について」
	園田英弘「世界の日本研究の現状」

## 004 「場」の日本文化

●研究域
第3研究域 文化比較（生活）
●共同研究期間
1988（昭和63）年1月～1993（平成5）年3月
●研究の概要
日本の文化は、都市空間・建築・庭園・室内・室内調度品など、さまざまな「場」でその具体的な表現がなされる。それらは、美意識であり世界観であり、社会の階層構造や自然環境の反映である。本研究においては、これまでの文化史研究が時間軸に沿った歴史的展開に重点を置いてきたのに対して、むしろ空間、文化に関わるあらゆる要素が集中的に表現される「場」に着目し、世界の各地域との比較を通して、その日本の特色を解明しようとした。
具体的な個々の「場」という、「文化の肉声」が発せられるところへのこだわり、これを横断的に分析することにより、従来は専門分野ごとに個別に研究されてきた日本文化における空間の特色を、世界的な視野からの比較を踏まえつつ総合的に明らかにしようとした。
●研究代表者
村井康彦（日文研教授、日本史）
●幹事
井上章一（日文研助教授、文化人類学）
●班員
飛鳥井雅道（京都大学人文科学研究所教授、日本文化史）
井上忠司（甲南大学文学部教授、社会心理学）
上田篤（京都精華大学美術学部教授、建築学）
上野千鶴子（京都精華大学人文学部教授、社会学）
ウォルター・D・エドワーズ（松本歯科大学助教授、文化人類学）
加藤祐三（横浜市立大学文理学部教授、東洋史）
熊倉功夫（国立民族学博物館教授、日本文化史）
千田稔（奈良女子大学文学部教授、歴史地理学）
田中淡（京都大学人文科学研究所助教授、中国建築史）
谷直樹（大阪市立大学生活科学部講師、生活史）
玉井哲雄（千葉大学工学部助教授、建築学）
角山榮（奈良産業大学経済学部教授、経済史）
中村一（京都大学農学部教授、庭園学）
福井勝義（国立民族学博物館第三研究部助教授、生態学）
藤森照信（東京大学生産技術研究所第五部助教授、建築史）
船越昭生（奈良女子大学文学部教授、地理学）
テオドル・C・ベスター（コロンビア大学東アジア研究所助教授／東京都立大学人文学部客員研究員、社会学）
ホルスト・S・ヘンネマン（沖縄県立芸術大学美術工芸学部教授、比較文学）
守屋毅（国立民族学博物館第一研究部助教授、日本文化史）
矢守一彦（関西大学文学部教授、地理学）
吉見俊哉（東京大学社会情報研究所助教授、社会学）
李御寧（日文研客員教授／梨花女子大学校教授、日本文化論）
笠谷和比古（日文研助教授、日本史）
白幡洋三郎（日文研助教授、庭園史）
園田英弘（日文研助教授、社会学）
早川開多（日文研助教授、美術史）
別役恭子（日文研寄附研究部門教授、日本美術史）
馬興国（日文研客員助教授／遼寧大学日本研究所、日本文学）
山折哲雄（日文研教授、宗教史）



●研究発表		
1988年 1月 12日	村井康彦「総括報告」	千田稔「山を見る『場』のことなど―『望山学』事始―」
1988年 4月 15日	井上章一「関西という物語」	園田英弘「近代平安京の成立―囲い込まれた郊外―」
1988年 4月 16日	守屋毅「江戸時代の『芝居』―元禄期を中心に―」	
1988年 6月 24日	吉見俊哉「日本近代と国家イベントをめぐる戦略―研究のための準備ノート―」	山折哲雄「王位継承の場としての『玉座』」
1988年 6月 25日	飛鳥井雅道「維新期の『京』と天皇―不安定な『場』、京・大和・大坂・東都―」	村井康彦「遷都と天皇」
1988年 9月 16日	中村一「ニハとシマー―日本庭園の美学的原理―」	玉井哲雄「『にわ』と住居」
1988年 9月 17日	白幡洋三郎「江戸・大名庭園考」	川島昭夫「イギリスの植物園・1750～1850」
1988年 11月 25日	熊倉功夫「日本の空間―茶室と露地―」	全員 京都武者小路千家官休庵見学会
1988年 11月 26日	ホルスト・S・ヘンネマン「茶湯風体と場の真、草」	谷直樹「堺の住環境と茶の空間」
1989年 4月 4日	田中淡「茶館論」	角山榮「コーヒーハウス論」
1989年 4月 5日	井上章一「茶屋の看板娘」	村井康彦「茶室の源流―韓国民家との関連―」
1989年 7月 12日	シンポジウム「『いなか』と日本文化」	～14日
―いなかの諸相―		
杉本秀太郎「都の鄙ぶり」		
山折哲雄「東北の百姓」		
―図像としてのいなか―		
白幡洋三郎「日本見聞記にみるいなか」		
千田稔「名所案内記にみるいなか」		
―いなか論の可能性―		
園田英弘「いなかの社会学」		
米山俊直「いなかの人類学」		
―世界のいなか―		
リー・A・トンプソン「日米比較のなかで」		
ホルスト・S・ヘンネマン「日独比較のなかで」		
―総括―		
村井康彦「いなかと日本文化」		
1989年 11月 10日	笠谷和比古「大名留守居組合の政治の『場』―宴會政治の両義性―」	藤森照信「『場』と空間」
1989年 11月 11日	ウォルター・D・エドワーズ「結婚式が語るもの―スビーチとデコレーションに見る日本―」	
1990年 5月 21日	鈴木貞美「家族の集まる場所―小説にみるリビングルーム―」	井上忠司「食事の場と作法の心理」
1990年 5月 22日	橋爪紳也「見世物の場と空間」	井野瀬久美恵「ミュージック・ホールはどこまで大英帝国を語れるか？」
1990年 9月 17日	西川美紀「盛り場の社会学―客数を左右する要因について―」	高田公理「『スナックM』の飲み人たち」
1990年 9月 18日	矢守一彦「金沢城下の絵画とコスモロジー」	
1991年 1月 28日	森岡正博「電子メディアと場」	早川開多「場と江戸絵画」
1991年 1月 29日	木股知史「文学と空間―前田愛以降の近代文学研究―」	コメント：上垣外憲一
1991年 7月 15日	瀧浪貞子「村井史学を語る」	

	上田正昭「書評『平安京と京都』」
1991年 7月 16日	光田和伸「書評『文芸の創成と展開』」
	笠谷和比古「書評『武家文化と同朋衆、乱世の創造』」
	熊倉功夫「書評『花と茶の世界』」
1991年 12月 2日	村井康彦「古代史から見たアジールの諸相」
	笠谷和比古「アジールの場と近世日本の政治秩序」
1991年 12月 3日	山折哲雄「宗教的奥所としてのアジール」
	熊倉功夫「近世の芸能とアジール」
	網野善彦「中世社会とアジール」
1991年 12月 4日	井上章一「裸体を封じる近代史」
	吉見俊哉「近代史におけるアジールの変容」
	園田英弘「ターミナル文化とアジール」
1991年 12月 5日	白幡洋三郎「出島から居留地へ」
1993年 2月 22日	今谷明「京都・1547年―描かれた中世都市―」
	玉井哲雄（コメンテーター）
1993年 2月 23日	園田英弘「京都園の思想」
	船越昭生「新訂万国全国の成立」

## 005 江戸時代の芸術における外国文化（中国を中心としての）受容と変容

●研究域
第4研究域 文化関係（日交園1）
●共同研究期間
1988（昭和63）年1月～1993（平成5）年3月
●研究の概要
日本の諸芸術は、古くから中国をはじめとする海外文化に感化されてきたが、本研究では特に桃山期以降～江戸という時代に焦点をあて、日本の絵画、書、陶磁器、音楽、舞踊といった諸芸術が、将来された文物あるいは渡来した人々によってさらに光り輝き、どのようにそれらを「日本文化」として血肉化したかを探ろうとするものである。
江戸時代は文化の成熟期として、日本のみならず世界史的にみても興味深い時代である。外来の文化がどのように受け入れられ、どのようにして生活の場面にまで取り込まれたか。その過程を探ることはきわめて有意義であり、こうした観点で江戸時代の諸芸術の受容と変容の実相を研究するならば、外来文化におけるその基本的な仕組みと特性が浮かび上がってくるという予測のもと、研究が進められた。
研究領域は多岐にわたり、諸ジャンルの個別分析を行ってそれを単純に総合化するのではさしたる成果は期待できない。そのため、研究方法論の開拓を同時に達成することにより、例えば、「文化の受容における見立ての機能」というような共通する分析視点を導入し、異文化間の受容と変容の仕組みの特殊性、相互関係を解明する手がかりをつかもうとした。
●研究代表者
ドナルド・キーン（日文研教授、日本文学）
杉本秀太郎（日文研教授、比較文学）
●幹事
早川開多（日文研助教授、東洋美術史）
●班員
大庭脩（関西大学文学部教授、日中交渉史）
奥平俊六（大阪府立大学総合科学部講師、近世絵画史）
狩野博幸（京都国立博物館学芸課室長、近世絵画史）
河野道房（京都大学人文科学研究所助手、中国美術史）
小林忠（学習院大学文学部教授、近世絵画史）
茅田道太郎（武庫川女子大学家政学部教授、日本文化史）
田中優子（法政大学第一教養部教授、近世史）

崔博光（成均館大学／天理大学外国語学部）	
佃一輝（煎茶道一茶庵嫡承／茶道華道連盟常務理事、近世文化史）	
羽生清（京都芸術短期大学造形芸術学科教授、意匠学）	
源了圓（元国際基督教大学大学院教授、日本思想史）	
吉田孝次郎（画家、服飾史）	
汪向荣（日文研客員教授／中国中日関係史研究会常務理事、日中文化比較）	
アンドリュー・ガーストル（日文研客員助教授／オーストラリア国立大学上級講師、日本文学）	
上垣外憲一（日文研助教授、比較文化）	
白幡洋三郎（日文研助教授、庭園史）	
鈴木貞美（日文研助教授、日本文学）	
田代和生（日文研客員教授／慶應義塾大学文学部教授、経済史）	
芳賀徹（日文研教授、比較文学）	
卞立強（日文研客員教授／北京大学常務副主任、日本文学）	
村井康彦（日文研教授、日本文化史）	
山田慶兒（日文研教授、科学史）	
●研究発表	
1988年 3月 1日	ドナルド・キーン「江戸の文学における中国と日本」 エンゲルベルト・ヨリッセン「南蛮人の見た日本」
1988年 5月 20日	小林忠「江戸時代の唐絵」 奥平俊六「遊楽園の中の形」
1988年 5月 21日	早川開多「文人画の受容について」
1988年 7月 22日	狩野博幸「江戸絵画と文学―俳文学と漢詩の場合―」 河野道房「文人画について―南北二宗論の形成とその実状に関する報告―」
1988年 7月 23日	源了圓「江戸時代の武藝―剣法における『型』の問題を中心にして―」
1988年 10月 7日	田中優子「水滸伝ものについて」 徳田武「日本近世小説と中国文学」
1988年 10月 8日	大矢マルグリット「近世日本漢詩と中国詩の比較」
1989年 1月 20日	大庭脩「江戸期の漢籍輸入の諸問題」 羽生清「江戸のデザイン―明清版画と浮世絵の間―」
1989年 1月 21日	上垣外憲一「中国語と日本漢文の比較」
1989年 4月 10日	アンドリュー・ガーストル「悲劇―比較論の立場から―」 芳賀徹「蘭学事始の現場―西洋文化への接近の心理と心情―」
1989年 4月 11日	山田慶兒「本草学とその起源」
1989年 7月 14日	吉田孝次郎「祇園祭の染織」 白幡洋三郎「あさがおと博物趣味」
1989年 7月 15日	李秀石「『金瓶梅』と西鶴の世界における女性像について」
1989年 9月 29日	早川開多「方法としての見立て」 山折哲雄「方法としてのもどき」
1989年 9月 30日	光田和伸「俳諧と見立て」
1989年 12月 8日	朱捷「見立てと配合」
1989年 12月 9日	佃一輝「煎茶における見立て」 笠谷和比古「見立てとしての家―村上泰亮他著『文明としてのイエ社会』を中心に―」
1990年 2月 19日	狩野博幸「18世紀の日本美術」
1990年 2月 20日	小林忠「江戸絵画における見立て―鈴木春信をめぐる―」 奥平俊六「寛文美人図の一姿型をめぐる」
1990年 5月 11日	成瀬不二雄「桃山の洋風画と江戸の洋風画」 冷泉勝彦「円山応挙の写生」
1990年 10月 26日	上垣外憲一「徳川日本における中国文学の翻案―浅井了意の伽婢子―」 田代和生「朝鮮通信使行列絵巻の研究―正徳元年（1711）の絵巻仕立てを中心に―」

1992年 2月 7日	王勇「日本芸術の中国への流入」
	リプシェ・ポハーチコヴァー「ボヘミア文化における日本的靈感」

## 006 日本人の他界観

●研究域
第2研究域 構造研究（人間）
●共同研究期間
1988（昭和63）年7月～1994（平成6）年3月
●研究の概要
本研究は、日本人の他界観の特質を、特に現世と他界との関係がどのように想定されてきたかを中心に、その構造的考察（他界の概念等）、歴史的考察（他界観念の変容等）、ならびに比較文化的考察（他の文化圏の他界観との比較）を有機的に組み合わせて行うことをめざした。また、各専門領域からのアプローチにより、人間にとって基本的な思想上の問題の、日本文化における位相を学際的展望と国際的視野の下で多角的に考察しようとした。
その結果、日本の特殊性を含みつつも、国際的普遍性をもつ思想としての「日本人の他界観」を明確に把握するとともに、日本の精神史の再構築に貢献することができたと考える。
●研究代表者
久野昭（日文研教授、比較哲学）
●幹事
白幡洋三郎（日文研助教授、庭園史）
●班員
青山玄（南山大学文学部教授、キリスト教学・教会史）
有福孝岳（京都大学総合人間学部教授、哲学・倫理学）
ミーラ・S・ビスワナサン（ブラウン大学助教授、比較文学）
大峯顯（龍谷大学文学部教授、宗教学）
氣多雅子（金沢大学教育学部助教授、宗教学・哲学）
古東哲明（広島大学総合科学部助教授、哲学・比較思想史）
鐸木道剛（岡山大学文学部助教授、美術史）
ハルドール・ステファンソン（大阪学院短期大学国際文化学科教授、文化人類学）
高田信敬（鶴見大学文学部助教授、国文学）
竹市明弘（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、哲学）
ジェームス・C・ドビンズ（オベリン大学助教授、宗教学）
新田博衛（大阪芸術大学教授、美学）
野崎守英（中央大学文学部教授、日本思想史・倫理学）
長谷正當（京都大学文学部助教授、宗教学）
カレル・フィアラ（京都大学教育学部招へい外国人学者、言語学）
藤村久和（北海学園大学教養部教授、民俗学）
カール・ベッカー（京都大学総合人間学部助教授、宗教哲学）
山下晋司（東京大学教養学部助教授、文化人類学）
上垣外憲一（日文研助教授、比較文化）
ロイヤル・タイラー（日文研客員教授／オスロ大学上級講師、日本文学）
早川開多（日文研助教授、美術史）
正木見（日文研客員助教授／中京女子大学助教授、密教学）
山折哲雄（日文研教授、宗教学）
●成果物
日文研叢書3、久野昭編『日本人の他界観』（日文研、1994年3月）
●研究発表
1988年 7月 27日 久野昭「日本人の他界観―問題提起―」



1988年 11月 25日	青山玄「伝来した16・7世紀のキリスト教と日本人キリシタンの来世観」 藤村久和「霊の世界」
1988年 11月 26日	山下晋司「古代日本の死―死の人類学の視点から―」
1989年 1月 13日	山折哲雄「他界における垂直モチーフと水平モチーフ」 高田信敬「他界とのかかわり方―源氏物語の場合―」
1989年 1月 14日	野崎守英「構造としての他界―死という言葉の現象学―」
1989年 4月 7日	大峯顯「浄土の遠さと近さ―日本仏教における浄土―」 氣多雅子「浄土―救済する世界―」
1989年 4月 8日	ロイヤル・タイラー「此界と他界の統一―人間富士山を中心に―」
1989年 7月 17日	久野昭「祇園御霊会の問題」
1989年 7月 18日	カール・ベッカー「仏教における他界観」 鐸木道剛「西洋美術に表現された他界もしくは神の国」 早川開多「見立てにおける他界について」
1989年 7月 19日	ハルドール・ステファンソン「調査報告 森町における仏―儀礼と信仰―」
1989年 11月 10日	古東哲明「もう一つの他界論」 有福孝岳「道元の生死・業・来世観」
1989年 11月 11日	久野昭「他界とは何か」
1990年 2月 9日	竹市明弘「つゆのふるさと―日本人の在所と自然を探ねて―」 上垣外憲一「南北歌舞伎の“あの世”」
1990年 2月 10日	白幡洋三郎「墓地から墓園へ」
1990年 5月 18日	長谷正當「他界の観念と夜のイメージ」 井上章一「とむらいの近代」
1990年 5月 19日	新田博衛「絵の構図と他界の重み」
1990年 7月 16日	青山玄「キリスト教他界観の系譜と日本人による受容」
1990年 7月 17日	久野昭「浦島子伝説における他界」
1990年 10月 5日	野崎守英「他界観の諸相」
1990年 10月 6日	カール・ベッカー「現代医学が起こす日本の他界問題」
1990年 12月 17日	鎌田東二「ネ・ハラ・タケー日本神話における他界の形成―」
1990年 12月 18日	森岡正博「いのちの構造」
1991年 2月 8日	杉山二郎「極楽浄土と他界観」
1991年 2月 9日	白幡洋三郎「他界の造形」
1991年 5月 24日	正木晃「他界の図像学」 青木孝夫「近松にみる日本人の他界観」
1991年 5月 25日	高田信敬「川を渡る―平安時代和歌に見る他界の側面―」
1991年 6月 21日	古東哲明「他界からの視線」 西村道一「他界観の原像へ」
1991年 6月 22日	井本英一「他界観の諸相」
1991年 12月 6日	山下晋司「日本人の他界観と観光」
1991年 12月 7日	氣多雅子「他界の存在」
1992年 2月 21日	久野昭・白幡洋三郎「他界観研究のまとめ方」 大峯顯「浄土教における日本的なもの」
1992年 5月 15日	能「無能の井」観賞 コメンテーター：カール・ベッカー
1992年 10月 5日	正木晃「浄土とマンダラ」
1992年 10月 6日	新田博衛「絵画に映った日本人の他界観」 大峯顯「円環と瞬間」 藤村久和「アイヌの他界観」
1992年 10月 7日	青山玄「キリシタン他界観とその日本における意義」
1993年 5月 7日	藤本浄彦「日本浄土教と他界観」
1993年 9月 24日	天野雅郎「櫛の話」

## 007 日本型モデルのメリットとデメリット

●研究域
第2研究域 構造研究（社会）
●共同研究期間
1989（平成元）年1月～1992（平成4）年3月
●研究の概要
国際比較の視点に立つとき、日本人およびその構成する日本社会には、伝統的文化に基礎づけられた独自のシステム特性が見出される。だが、この「日本らしさ」とでもいうべき文明・文化的特異性の構造と機能については、これまで十分な社会科学的分析がなされていない。
本研究は、このことを踏まえて二つの側面からその欠を補おうとした。ひとつは、生活システムの諸側面（人間観・行為類型・対人関係・文化型・組織形態等）に関して、「日本らしさ」を明確化するための理論構築を試みることである。そのため、これまで普遍的に妥当するとされていた方法論的個人主義（Methodological Individualism）の再検討と、それに基づく新たな分析パラダイムの設定を行った。もうひとつは、日本型モデルのメリットとデメリットに関して、イデオロギー的ではなく、客観的なアセスメントを学際的に加えることである。その評価作業では、社会科学・人間科学の諸領域の研究者の協力を得て、生活システムの各種の領域にわたって慎重に検討した結果、これからの国際化・情報化の進展の中で、日本人ならびに日本社会に関するモデルの有効性を評価することができるかどうか、その手がかかりをつかもうとした。
●研究代表者
濱口恵俊（日文研教授、日本論・心理人類学）
●幹事
園田英弘（日文研助教授、歴史社会学・教育社会学）
●班員
井上俊（大阪大学人間科学部教授、文化社会学） 今田高俊（東京工業大学工学部教授、社会学・システム論） 岩田龍子（国際大学大学院国際関係学科教授、比較経営学） 大村英昭（大阪大学教養部教授、宗教社会学） 木村敏（京都大学医学部教授、精神医学） 塩原勉（大阪大学人間科学部教授、理論社会学） 祖父江孝男（放送大学教養学部教授、文化人類学） 高橋三郎（京都大学教養部教授、社会学） 田崎篤郎（東京大学新聞研究所教授、社会心理学） 角山榮（奈良産業大学経済学部教授、経済史） 長谷川三千子（埼玉大学教養学部教授、比較思想） 日置弘一郎（九州大学経済学部助教授、比較経営学・組織論） 星野命（北陸学院短期大学長、文化心理学・臨床心理学） 柳父章（桃山学院大学文学部助教授、言語学） 山田洋子（愛知淑徳大学文学部教授、臨床心理学） 吉田和男（京都大学経済学部教授、理論経済学） 小野芳彦（日文研助教授、情報学） 笠谷和比古（日文研助教授、日本史） 柏岡富英（日文研助教授、社会学） 金児曉嗣（日文研客員助教授／大阪市立大学文学部助教授、社会心理学） 黒須里美（日文研助手、社会学） ポーリン・ケント（日文研助手、社会学・比較文化論） 杉田繁治（日文研客員教授／国立民族学博物館教授、コンピュータ民族学・比較文明学）
●成果物
濱口恵俊編著『日本型モデルとは何か―国際化時代におけるメリットと

デメリット―」（新曜社、1993年4月）
●研究発表
1989年 6月 10日 岩田龍子「経営システムにおける型の認識をめぐって」 吉田和男「人間主義モデルについて」
1989年 8月 5日 塩原勉「類型認識と日本型モデル」 星野命「パーソナリティ心理学と隣接領域における人間モデルについて―資料に見る―」
1989年 12月 2日 金児曉嗣「日本人の宗教観にみる日本人らしさ」 木村敏「もの・こと・あいだ」
1990年 2月 3日 柳父章「日本語における「間」をつくりだす言葉」 杉田繁治「情報社会における日本型システム」
1990年 6月 16日 濱口恵俊「日本型モデルの基本的性格―個性性と関係性との接合の問題―」 大村英昭「『恥の文化』と演技」 ポーリン・ケント「市民にとっての恥の意識―調査データに基づいて―」
1990年 9月 22日 高橋三郎「経営書としての『戦記物』」 園田英弘「ストックとしての日本文化」
1990年 11月 10日 長谷川三千子「見える自己と消える自己―恥の現象学―」 祖父江孝男「日本文化における地域差の問題―文化人類学の立場から―」
1991年 1月 19日 吉田和男「日本的雇用関係のメカニズム・日本的企業行動について」 角山榮「日本情報システムの形成―『領事報告』について―」
1991年 3月 16日 公文俊平「日本ネットワーク文明」 前田成文「対人主義再考」
1991年 5月 18日 井上俊「武道のディスコース」 山田洋子「『自己―母』像とその発達―日本・アメリカ・イギリスの青年のイメージ画より―」
1991年 7月 13日 田崎篤郎「世論調査データから見た日本人の特質」 日置弘一郎「社会システムの機能分節の日本の特質」 今田高俊「東南アジアにおける日本的経営のイメージ」
1991年 12月 7日 濱口恵俊、園田英弘「『日本型モデル』論―パラダイム・シフトに向けて―」
1991年 12月 8日 塩原勉、金児曉嗣「日本型モデルのメリットとデメリット」 星野命、日置弘一郎「日本型モデルとグローバリゼーション」

## 008 日本思想の重層性

●研究域
第3研究域 文化比較（思想）
●共同研究期間
1989（平成元）年1月～1993（平成5）年3月
●研究の概要
日本の思想は、神道、仏教、儒教の相互交渉のなかで形成され、それに山岳信仰や陰陽道が密接に結びついて発展してきた。外来の思想と土着の文化が長い期間にわたって接触をくり返し、近代にいたるまで複雑な重層構造を生み出してきた。
本研究は、このような日本思想における重層性の展開の諸相を歴史的に明らかにするとともに、その特質を、特に文化比較の観点から検討しようと

したものである。具体的には、世界の各地域の思想との比較のために個別の事例研究を持ち寄り、歴史的な諸条件を加味してそれらを総合的に分析し、より広い文化の枠組のなかに位置づけることにより、日本文化の特質としての「日本思想の重層性」についての一般理論の構築をめざした。
●研究代表者
山折哲雄（日文研教授、宗教史）
●幹事
森岡正博（日文研助手、哲学） 井上章一（日文研助教授、建築学） 鈴木貞美（日文研助教授、日本文学）
●班員
赤坂憲雄（東北芸術工科大学教養部助教授、思想史） 阿部泰郎（大手前女子大学文学部助教授、中世文学・中世思想） 阿満利鷹（明治学院大学国際学部教授、仏教思想） 上野千鶴子（京都精華大学人文学部教授、社会学） 落合恵美子（同志社女子大学講師、女性史） 黒住真（東京理科大学工学部助教授、近世儒学） 佐藤弘夫（東北大学文学部助教授、仏教思想史） 柴山哲也（朝日新聞日曜版編集部、マスコミ論・比較文化論） 朱捷（中京女子大学教養部助教授、民族宗教・比較文学） ケイト・ワイルドマン・ナカイ（上智大学比較文化学部助教授、近世儒学） 中沢新一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、人類学） 中路正恒（京都造形芸術大学芸術学部助教授、哲学） 中村生雄（静岡県立大学国際関係学部助教授、日本思想・比較宗教） 山下悦子（評論家・東京女性史研究会主宰、女性史） 山本ひろ子（評論家・中世精神史研究会主宰、中世史） エルンスト・ロコバント（東洋大学文学部助教授、神道学） 上田正昭（日文研客員教授／京都大学教養部教授、歴史学） 鎌田東二（日文研客員助教授／武蔵丘短期大学助教授、神道学） 白幡洋三郎（日文研助教授、科学技術史） 早川開多（日文研助教授、美術史） 別役恭子（日文研寄附研究部門教授、日本美術史）
●成果物
山折哲雄編『日本における女性』（名著刊行会、1992年1月）
●研究発表
1989年 3月 22日 山折哲雄「日本思想の重層性―その三つの柱について―」 上野千鶴子「ポストXデーと王権の現在、あるいは脱工業化社会を天皇制がいかにサバイバルするか」
1989年 5月 22日 佐藤弘夫「日本中世の国家と宗教」 鎌田東二「日本人の他界観の一例―政治と宗教―」
1989年 5月 23日 森岡正博「現代医療にあらわれる宗教性―〈おまかせ〉と〈おのずから〉―」 井上章一「性の近代―男女交際の下部構造―」
1989年 6月 23日 中路正恒「拉鬼体について―藤原定家と山中智恵子―」 黒住真「日本思想における儒教」
1989年 6月 24日 山下悦子「現象学的歴史学について―高群逸枝の場合―」
1989年 7月 17日 赤坂憲雄「折口信夫の大嘗祭論の可能性をめぐって」 山本ひろ子「天皇霊のかなたへ」
1989年 7月 18日 中村生雄「『たましい』と『からだ』―大嘗祭の周辺―」 森岡正博「誘惑的フェミニズムの誕生―上野千鶴子論―」
1989年 9月 1日 落合恵美子「『日本の母』の誕生」 ケイト・ワイルドマン・ナカイ「普遍思想としての儒学の受け入れ方―新井白石と水戸学の比較―」
1989年 9月 2日 早川開多「蕪村をめぐる重層性」
1990年 3月 26日 朱捷「異人論に関する二・三の思いつき」 鈴木貞美「表現・伝統・重層性―昭和30年代文学―」



1990年 4月 27日	上野千鶴子「オリエンタリズムとからごころ—比較文化におけるジェンダー・メタファー—」 山下悦子「転向文学とブラチック（慣習的行為）」
1990年 4月 28日	村井康彦「絵系図と絵系図詣り 一家の成立と女性の地位—」 井上章一「人形と日本文化」
1990年 5月 28日	エルンスト・ロコバント「日本の学問の女性性」 赤坂憲雄「日本思想の重層性をめぐって」
1990年 5月 29日	黒住真「徳川儒教における女性的なもの」 崔在穆「韓日の『陽明学』」 阿部泰郎「慈門における思想の重層性について」
1990年 6月 29日	中路正恒「〈いのち〉の問題—八代集を中心にして—」 ケイト・ワイルドマン・ナカイ「山川菊栄の思想形成—『武家の女性』の観点から—」
1990年 6月 30日	中村生雄「折口信夫の戦後天皇論」
1991年 1月 11日	佐伯順子「結婚と女性」 井上章一「結婚と女性 PartII」
1991年 1月 12日	瀧波貞子「女帝論」 西口順子「中世仏教と女性」
1991年 1月 13日	山折哲雄「総括討論」
1991年 4月 22日	山折哲雄「1991年度の基本方針について」 柴山哲也「1980年代の日本文化」
1991年 4月 23日	鈴木貞美「近代日本文学にみる自然観・生命観の変遷—海外思想の受容との関連で—」
1991年 5月 31日	井上章一「狂気と日本—近代日本の場合—」 佐藤弘夫「近代日蓮主義の天皇観」
1991年 6月 1日	朱捷「日本における毛沢東思想の幻想」
1991年 7月 19日	ケイト・ワイルドマン・ナカイ「後期水戸学における儒教体系の借用による『日本』の定義」 中村生雄「立憲君主制とヒメヒコ制—ポスト象徴天皇の可能性—」
1991年 7月 20日	山下悦子「日本の家父長制について」
1991年 9月 17日	エルンスト・ロコバント「近・現代国家指導部における重複と矛盾—日本型安定化の一つの手段—」 山本ひろ子「無題—総括大嘗祭に代えて—」
1991年 9月 18日	鈴木貞美「起源論の陥穽」
1992年 1月 6日	白幡洋三郎「余暇思想をめぐって」 黒住真「儒教とキリスト教の受容」 鎌田東二「神秘思想の受容」
1992年 1月 7日	中路正恒「伊東静男の『哀歌』におけるニーチェの影」 赤坂憲雄「柳田国男とフレイザー」 今村仁司「マルクス主義の受容」
1992年 6月 1日	山折哲雄「神／仏、感覚／観念」 赤坂憲雄「柳田国男、歴史学、東北」
1992年 6月 2日	森岡正博「科学、死、文学」 鎌田東二「宇宙、生命、宗教」
1992年 6月 3日	井上章一「自己顕示、ひねり技、実証主義」 鈴木貞美「雑種、無定形、切断」
1992年 11月 30日	中路正恒「中島みゆきの『季節』」 黒住真「近世思想の成立をめぐる三つの問題」 阿部泰郎「八幡神（信仰）における重層性」
1992年 12月 1日	中村生雄「苦しむ神、苦しむ仏、苦しむ人」 山本ひろ子「中世の神の重層性」 上野千鶴子「セクシャリティの問題化—レイプ、インセスト、ホモセクシャリティー—」
1992年 12月 2日	山下悦子「フェミニズムにおける重層性」 落合恵美子「出産観における重層性」

009 市場制度の国際比較	
●研究域	
第3研究域 文化比較（制度）	
●共同研究期間	
1989（平成元）年4月～1991（平成3）年3月	
●研究の概要	
現在、国家の多くは、「市場」と呼ばれるシステムを基礎においてつくられる。各国の市場システムは抽象的には同じ原理に基づいているが、具体的な制度の形にはかなりの違いがあり、それを支える慣行ないし暗黙の制度にもその相違は及ぶ。そのような相違は、各国経済のパフォーマンスにも少なからぬ違いをもたらす。さらに付け加えれば、ある特定の市場制度は、いわばその発展段階によって次々と変化していくのが実情である。	
本研究は、比較についての理論枠組を開発するとともに、漸次実証的なデータを蓄積して、市場経済の国際比較分析の端緒を提供することを目的としたものであった。結果的に、経済理論のみならず、政治学・社会学・技術論等からのアプローチを重ねることにより、ほぼ所期の目的は達成されたといえよう。また、この枠組の理論構築の方向は、欧米的、日本的、アジアNIES的な発展の可能性の評価をすべて含んだ、一般的な政治経済学の形をとることが期待されている。	
●研究代表者	
村上泰亮（日文研教授、比較政治経済学）	
●幹事	
柏岡富英（日文研助教授、国際社会学）	
●班員	
青木昌彦（京都大学経済研究所教授、理論経済学・企業経済学）	
猪木武徳（大阪大学経済学部教授、経済思想・労働経済学）	
大橋勇雄（名古屋大学経済学部教授、労働経済学）	
小池和男（法政大学経営学部教授、労働経済学・労使関係論）	
佐伯啓思（滋賀大学経済学部助教授、社会経済学）	
佐藤光（大阪市立大学経済学部助教授、経済学）	
杉村芳美（甲南大学経済学部教授、労働経済学・経済思想）	
松原隆一郎（東京大学教養学部助教授、社会経済学・相関社会科学）	
間宮陽介（神奈川大学経済学部助教授、経済理論・経済思想）	
宮本光晴（専修大学経済学部教授、経済学・産業社会論）	
村松岐友（京都大学法学部教授、行政学）	
吉沢英成（甲南大学経済学部教授、貨幣経済論・社会経済学）	
蠟山昌一（大阪大学経済学部教授、理論経済学・金融理論）	
トーマス・P・ローレン（スタンフォード日本センター所長／京都大学経済研究所、文化人類学）	
飯田経夫（日文研教授、経済学）	
笠谷和比古（日文研助教授、日本史）	
北川勝彦（日文研客員助教授／関西外国語短期大学助教授、経済史・国際関係）	
濱口恵俊（日文研教授、日本論・心理人類学）	
●研究発表	
1989年 6月 30日	村上泰亮「The Cultural Basis of Japanese Economy：Intertwining of Economy and Social Exchange」
1989年 9月 29日	「村上論文（The Cultural Basis of Japanese Economy：Intertwining of Economy and Social Exchange）の検討」
1989年 12月 1日	「小池和夫著『人材形成の国際比較』、『職場の労働組合と参加』の検討」
1990年 5月 26日	間宮陽介「村上論文“世紀末の保守と革新”の検討」

010	市場制度の動態—日本を中心に—
●研究域	
第1研究域 動態研究（現代）	
●共同研究期間	
1989（平成元）年10月～1995（平成7）年3月	
●研究の概要	
日本における市場制度の発展の動態を、明治期・大正期をたえず考慮しつつ、昭和期とくに第二次世界大戦後に重点を置いて、理論的かつ実証的に研究することを目的とした。	
ふつう経済理論が想定する市場制度はいわば不変で、発展の動態は考慮されないが、抽象のレベルを下げることで、時代の変遷による経済のパフォーマンスの違いを説明できるような理論的枠組構築をめざした。その際、別途進行中の共同研究「市場制度の国際比較」（代表者：村上泰亮）が意図するヨコの比較を、本研究ではタテ方向から試みることになるので、村上班との連携をつねに密接に保って推進した。	
研究の対象としては、(a) 労働市場・雇用慣行、(b) 情報市場・技術開発、(c) 金融市場・国際資本移動、(d) 官僚制を取り上げた。研究班の編成にあたっては、政治学・社会学・心理学・人類学・技術論など、経済理論以外の分野の研究者の参加を得て、理論の枠組の総合性を確保することに注力した。	
●研究代表者	
飯田経夫（日文研教授、経済学）	
●幹事	
柏岡富英（日文研助教授、社会学）	
●班員	
大橋勇雄（名古屋大学経済学部教授、労働経済学）	
北川勝彦（四国学院大学教養部教授、経済史）	
藪野祐三（北九州大学法学部教授、政治学）	
依田博（神戸大学国際文化学部教授、政治学）	
笠谷和比古（日文研助教授、日本史）	
ジョン・シャーキー（日文研客員助教授／パークレイズ・ド・ズート・ウェド調査員）	
中岡哲郎（日文研客員教授／大阪経済大学経営学部教授）	
濱口恵俊（日文研教授、日本論・心理人類学）	
村上泰亮（日文研教授、比較政治経済学）	
●成果物	
日文研叢書15、飯田経夫／柏岡富英編『市場制度の動態』（日文研、1998年3月）	
●研究発表	
1990年 1月 13日 飯田経夫「研究方法をめぐって」	
1990年 2月 10日 飯田経夫「日本市場の特性について」	
1990年 6月 1日 藪野祐三「北九州の産業構造とその変化」	
1990年 9月 14日 大野勇雄「春闘の興亡」	
1991年 3月 2日 北川勝彦「飯田経済学の後継」 笠谷和比古「飯田経済学ここに極まれり？」	
1991年 6月 22日 藪野祐三「ルソーとデュルケムにおける『勢い』の研究—『学問・芸術論』と『社会分業論』を中心に—」 柏岡富英「デュルケムとベルグソンにおける『勢い』—『集団的熱狂』と『エラン・ヴィタール』—」	
1991年 9月 7日 大橋勇雄「自動車産業の勢い」 北川勝彦「ホイジングにおける勢い観」	
1991年 12月 14日 芦田徹郎「現代の客人—市場制度のリナリティー—」 飯田経夫「イノベーションと勢い—シュンペーターを中	

	心に一」
1991年 12月 15日	黒須里美「出生率と社会の勢い」
1992年 2月 28日	イラリ・ティルニ “Goals, Strategy and Structure of Large Japanese Firms: With Spectal Emphasis on Improvement, Learning and Human Relations” 園田英弘「『逆欠如理論』について」
1992年 6月 20日	研究打合せ
1993年 6月 26日	依田博「村上泰亮『反古典の政治経済学』の合評」
1993年 12月 25日	植村博恭「S・A・マーグリン、J・B・ショアー編『資本主義の黄金時代・戦後経験の再解釈』（東洋経済新報社 1993）をめぐって」
1994年 2月 22日	依田博「マーケット・ポリティックス」 北川勝彦「アフリカ社会科学の反省」
1994年 4月 9日	藪野祐三「政治学におけるコンセプト・フォーメイション」 柏岡富英「アメリカ社会学（盛）衰記パートII」
1994年 6月 11日	飯田経夫、大橋勇雄「近代経済学の反省」

011	東アジアの本草と博物学の世界
●研究域	
第4研究域 文化関係（旧交圈II）	
●共同研究期間	
1989（平成元）年10月～1994（平成6）年3月	
●研究の概要	
本草は中国で生まれた薬物学であるが、同時に人間の周りにあるすべての物（動物・植物・鉱物）を「薬」という視点から把握しようとする一種の博物学であった。その集大成である明末の『本草綱目』が江戸時代初期に輸入され、その刺激の下に、日本における本草の独自の展開が始まった。日本における本草学は、薬物学研究のほかに、一方では園芸学や物産学と結びついて実学を生み、他方では博物学への道を歩み、その過程で東アジアの本草の成果を積極的に吸収してきた西洋の博物学と接触するのである。	
このような幅広い性格を持つ本草・博物学の世界を、ひとつの構築された知的宇宙としてのみならず、学問・産業・芸術のような分野への影響という観点からも多面的に分析しようとした。	
その結果、その多面的で発展的な性格を明らかにするとともに、中国・西洋・日本におけるその展開と国際的な伝播・影響関係を追跡することによって、18～19世紀の各国の文化形成をグローバルな視点で眺めることが可能になった。また、各国における本草的なものへのアプローチの仕方、学問化のあり方の相互比較を通して、各国文化の共通性と特殊性の一端を明らかにすることもできるようになった。	
●研究代表者	
山田慶児（日文研教授、科学史）	
●幹事	
笠谷和比古（日文研助教授、日本史）	
●班員	
石田秀実（九州国際大学法経学部教授、中国思想・科学史・日本医学史）	
磯野直秀（慶應義塾大学経済学部教授、日本動物学史）	
大庭脩（関西大学文学部教授、日中交渉史）	
川島昭夫（京都大学総合人間学部助教授、西洋史）	
木村陽二郎（東京大学名誉教授、生物学・科学史）	
小林清市（山口大学教育学部講師、中国科学史）	
佐原真（奈良国立文化財研究所研究指導部長、考古学）	



榊原吉郎（京都市立芸術大学美術学部教授、東洋美術史）
桜井謙介（塩野義製薬㈱研究所研究員、薬学）
宗田一（日本医史学会常任理事、日本薬学史）
高橋達明（京都女子大学文学部教授、フランス文学）
田中優子（法政大学第一教養部教授、近世史）
全相運（京都大学人文科学研究所招へい教授、科学史）
塚本洋太郎（京都大学名誉教授、植物学）
津谷喜一郎（東京医科歯科大学難治疾患研究所助教授、医学）
中野益男（帯広畜産大学畜産学部助教授、環境科学）
西村三郎（京都大学総合人間学部教授、生物学）
萩原延壽（著述家、近代日本史）
松田清（京都大学教養部助教授、比較文学）
真柳誠（北里研究所附属東洋医学総合研究所客員研究員、中国医学史・本草史）
三木亘（静岡精華短期大学教授、イスラム史）
安田健（財自然環境研究センター客員研究員、動物学）
安田善憲（日文研助教授、地理学・環境考古学）
小野芳彦（日文研助教授、情報学）
白幡洋三郎（日文研助教授、産業技術史）
杉本秀太郎（日文研教授、比較文学）
田代和生（日文研客員教授／慶應義塾大学文学部教授、経済史）
芳賀徹（日文研教授、比較文学）
早川間多（日文研助教授、美術史）
別役恭子（日文研寄附研究部門教授、日本美術史）
正木見（日文研客員助教授／中京女子大学助教授、密教学）
●成果物
山田慶兒編『物のイメージ・本草と博物学への招待』（朝日新聞社、1994年4月）
山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界（上）』（思文閣出版、1995年7月）
山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界（下）』（思文閣出版、1995年7月）
●研究発表
1989年10月27日 山田慶兒「共同研究の方針」 北村四郎「中国植物に関する日本の研究」 白幡洋三郎「本草図（スライド付）」
1989年10月28日 塚本洋太郎「中国・日本の本草書・園芸書の比較と園芸の発展」
1990年 1月19日 宗田一「東西交渉史上の本草薬物」
1990年 1月20日 安田健「享保元文緒国産物帳と丹羽正伯について」 笠谷和比古「近世政治史における本草学の位置」
1990年 4月 6日 大庭脩「展海令と徳川吉宗」
1990年 4月 7日 木村陽二郎「日本本草の発展形態」 白幡洋三郎「インド・ムガル朝の植物描写」
1990年 6月 8日 芳賀徹「日本の本草書の文章」
1990年 6月 9日 三木亘「アラブの薬種業―過去と現在―」 松田清「日本関係に欧本草」
1990年 7月 6日 篠原徹「サカナ・ウミウ・ニホンミツバチをめぐる民俗」
1990年 7月 7日 中野益男「本草の広がり―南米インディオの世界へ―」 白幡洋三郎「本草図（スライド）」
1990年10月19日 荒俣宏「博物園について」
1990年10月20日 榊原吉郎「土佐家粉本に見る植物写生」 ウィーベ・カウテルト「元禄長崎、Meisterとその周辺（スライド）」
1990年11月30日 松田清「オスカンプと幕末本草学」
1990年12月 1日 川島昭夫「イギリス重商主義時代のインドの植物園」
1991年 2月 1日 磯野直秀「唐蘭船持渡鳥獣之図」、「兩羽博物図譜」
1991年 2月 2日 山田慶兒「履巋叢本草について」
1991年 5月10日 京都試験農園見学

1991年 5月11日 笠谷和比古「徳川吉宗の享保改革と本草」 松田清「司馬江漢『動物図譜』（スライド）」
1991年 7月 5日 白幡洋三郎「ジョン・トラデスカントについて」
1991年 7月 6日 西村三郎「日本の海産動物を紹介した外国人学者たち」 松村浩二「17、18世紀日本における博物学的言説と『知』の特権化」
1991年10月 4日 村井康彦「茶湯・薬湯」
1991年10月 5日 石田秀実「宗・金以降の博物本草・実用本草と江戸の本草物産学」 高橋達明「松浦武四郎の蝦夷紀行刊本の博物図について」
1991年11月 1日 城山桃夫「葡萄の中国渡来」
1991年11月 2日 真柳誠「中国本草の渡来と受容」 白幡洋三郎「J・トラデスカントの珍品・奇品館」
1992年 1月31日 芳賀徹「平賀源内と18世紀の欧米博物学」
1992年 2月 1日 宗田一「今大路文庫に見る本草」 安田健「古文獻にみるトキ」
1992年 3月 6日 東野治之「正倉院の椰子の実」
1992年 3月 7日 掛谷誠「トンブウエの伝統医療」 小林清市「生物誌としての毛伝・鄭箋」
1992年 5月 8日 石上英一「日本古代のカリニエ」
1992年 5月 9日 奥田雅瑞「煙草の系譜」 桜井謙介「『大方家文書』の中間報告」
1992年 7月 3日 田代和生「享保六年（1721）対馬藩における朝鮮国「薬材買正」―倭館の薬種調査と日朝交流―」
1992年 7月 4日 京都府立植物園内大森文庫見学
1992年 9月 4日 石田秀実「治病の丹薬」
1992年 9月 5日 ウィリアム・ジョンストン「癌性疾患の系譜学」 白杉悦雄「救荒本草」
1992年12月 4日 正木見「密教から見た本草」 松田清・笠谷和比古「大森文庫所蔵の野呂元丈書状をめぐって」
1992年12月 5日 津谷喜一郎「東アジア伝統医学の国際化の諸相」
1993年 1月29日 松田清「江戸時代のプリニウス」
1993年 3月 5日 三木亘「ユーナーニ医学をめぐって」 正木見「チベットの植物と風土」
1993年 3月 6日 山田慶兒「効分け・食分け・見分け―本草から博物学へ―」
1993年 5月 7日 塚本学「江戸時代の動物認識」 杉立義一「稻生恒軒と若水の墓誌銘」
1993年 5月 8日 宗田一「輸入薬の流通をめぐって」
1993年 7月 2日 田代和生「朝鮮薬劑調査の背景」 磯野直秀「『随観写真』中の解剖図」
1993年 7月 3日 杉本秀太郎「『平家物語』と本草」
1993年 9月10日 若松正志「長崎貿易品の調達をめぐって」 真柳誠「三巻本『本草集注』と出土史料」
1993年 9月11日 川島昭夫「ベナン・シンガポールの植物園」
1993年11月 5日 中野益男「縄文本草の復元」 早川間多「シーボルト編動物植物図譜（エルミタージュ美術館蔵）」
1993年11月 6日 横山俊夫「隠者と本草―益軒『大和本草』をめぐって―」
1994年 1月21日 小林清市「清朝考証学派の博物学」 川島祐次「薬用人参の栽培と成分研究の現状」
1994年 1月22日 松田清「島津重豪と西洋本草」
1994年 3月 4日 安田健「わが国における秬稻（var.indica）の栽培史。付、B.LAUFER著『SINO-IRANIKA』の翻訳書の紹介」 松田清「ドネウス『草木誌』の書誌」

1994年 3月 5日 木村陽二郎「川原慶賀の植物園について」 磯野直秀「転写の系譜」
012 歴史認識と歴史意識：日本の歴史研究
●研究域
第5研究域 文化情報（日本における日本研究）
●共同研究期間
1990（平成2）年1月～1992（平成4）年3月
●研究の概要
「歴史」という言葉に込められた意味はさまざまである。それが日本語として成立したのは17世紀のことであったが、さらに欧米の「歴史学」輸入の前後ではその意味あいはい大きく異なってくる。東洋、特に中国では、「歴史」は、それによって世界全体をある構図の下に横断面的にとらえようとする知的営為であったが、西洋では、時間軸にそって記述されるところから、人類の進歩や変動を観察する傾向が強かった。
中国文化圏に位置する日本では、当然中国からの影響は強かったが、江戸時代のうちに独自の展開を見せ、さらに明治以降西洋の歴史学を積極的に取り入れた。本研究では、なにゆえに日本が非西洋でありながら、西洋産の歴史の認識方法を比較的容易に取り込むことができたか、それが歴史意識の変化とどのように関連したのか、現在の日本における歴史学のあり方に見られる特徴等について、「歴史意識の諸相」「歴史意識の形成」「科学としての歴史学の可能性」の3点から、歴史認識と歴史意識の根源にまでさかのぼって考察を試みた。
その結果、「歴史」という言葉が、学問的に見て、当該の国、置かれた時代環境によってどのように変化し、歴史意識や国のアイデンティティとかわってきたのかを、少なくとも日本に関しては総合的に解明できたといえるだろう。
●研究代表者
速水融（日文研教授、歴史人口学）
●幹事
ボーリン・ケント（日文研助手、社会学）
●班員
斎藤修（一橋大学経済研究所教授、経済史）
佐藤正幸（山梨大学教育学部助教授、史学史）
斯波義信（国際基督教大学教養学部教授、東洋史）
杉山伸也（慶應義塾大学経済学部助教授、経済史）
二宮宏之（東京外国語大学外国語学部教授、西洋史）
柳田利夫（慶應義塾大学文学部助教授、対外交渉史）
伊東俊太郎（日文研教授、科学史・比較文明学）
笠谷和比古（日文研助教授、日本史）
北川勝彦（日文研客員助教授／関西外国語短期大学助教授、経済学）
田代和生（日文研客員教授／慶應義塾大学文学部教授、日本史）
中西進（日文研教授、日本文学）
村井康彦（日文研教授、日本史）
安田喜憲（日文研助教授、地理学）
山田慶兒（日文研教授、科学史）
●研究発表
1990年 2月 9日 速水融「研究方法・計画について」
1990年 2月10日 佐藤正幸「歴史という概念の変遷」
1990年 4月27日 上横手雅敬「封建制の概念について」
1990年 4月28日 斎藤修「数量経済史と徳川時代」
1990年 6月22日 友部健一「農家経済からみたモラルエコノミー論」
1990年 6月23日 佐藤正幸「近代日本における西洋史学と中国史学の

	出合い」
1990年10月12日	二宮宏之「フランス現代歴史学における歴史認識論の問題」
1990年10月13日	竹岡敬温「『アナール』の発展と若干の問題点」
1991年 1月18日	佐藤正幸「東アジアの紀年法について」
1991年 1月19日	島田虔次「旧中国における『史』論の最終局面」
1991年 4月19日	吉田光男「朝鮮近世の都市商人」
1991年 4月20日	斯波義信「銭穆と洪業―近代中国史学の夜明け―」
1991年 6月21日	芝井敬司「EdwardGibbonの『文明』と『野蛮』」
1991年 6月22日	佐藤正幸「負の概念としての東洋史―近代日本における思考概念としての東洋・西洋の形成―」
1991年11月15日	川勝平太「速水教授『勤勉革命』テーゼの射程」
1991年11月16日	速水融「徳川日本の歴史の意義」
1992年 1月31日	岩橋勝「徳川日本の経済システム―貨幣を通じて―」 宮本又郎「物価史からみた江戸時代」
1992年 2月 1日	友部謙一「徳川日本の経済システム―人口を通じて―」

## 013 日本人の自然観

●研究域
第1研究域 動態研究（基層）
●共同研究期間
1990（平成2）年4月～1992（平成4）年3月
●研究の概要
日本人の自然観は、日本文化の基底をなす重要な一局面である、これを解明することは、日本文化の基本的特質を解明することに大きく寄与するであろう。さらに、人間と自然との関係が地球的な規模において真剣に問われている今日、人間が自然をどのように観、それとどのように関わっていくかということは、現代の環境問題を考えていく上にも大切な事柄であり、21世紀の人類の帰趨を決する重要な問題である。このときに当たり、われわれ日本人の自然観を取り上げ、それを歴史的に考察し、その特徴を明らかにし、これからの人類の自然にたいする関係のあり方の参考に供することは、極めて有意義であると考える。
本研究では、まず縄文時代より現代にいたる日本人の自然に対する態度や観方、感じ方や考え方を、考古学的遺物や神話、歴史的文献さらには文学作品や科学論文などの分析を通して通時的に解明し、ついで日本人の自然観と他文化圏のそれとの比較的考察を行い、最終的にはこの通時的と比較的研究とを統合することによって、日本人の自然観の特質を明らかにし、現代の環境問題に対するその意義を考察した。
●研究代表者
伊東俊太郎（日文研教授、科学史・比較文明学）
●幹事
小野芳彦（日文研助教授、情報学）
鈴木貞美（日文研助教授、日本文学）
●班員
荒川紘（静岡大学教養部助教授・日本古代科学史）
金子務（大阪府立大学総合科学部教授、科学史）
佐藤任（著述業、インド思想史）
杜石然（東北大学日本文化研究所客員教授、中国科学史）
平川祐弘（東京大学教養学部教授、比較文学・比較文化）
廣川洋一（筑波大学哲学・思想学系教授、ギリシア哲学）
福永光司（元京都大学人文研究所長）
牧野信也（東京外国語大学外国語学部教授、アラビア思想史）
正木見（トキワ松学園女子短期大学非常勤講師、日本文化史・密教学）



源了圓（国際基督教大学大学院教授、日本思想史）	
村上陽一郎（東京大学先端科学技術研究センター教授、科学史・科学哲学）	
矢野道雄（京都産業大学教養部教授、インド科学史）	
吉田敦彦（学習院大学文学部教授、比較神話学）	
吉田忠（東北大学文学部附属日本文化研究所教授、日本科学史・蘭学史）	
吉田光邦（京都府立文化博物館長、中国科学史）	
渡辺正雄（国際基督教大学教養学部教授、科学史）	
王曉平（日文研客員助教授／天津師範大学助教授、中国文学）	
上垣外憲一（日文研助教授、比較文学・文化）	
久野昭（日文研教授、比較哲学）	
小松和彦（日文研客員助教授／大阪大学文学部助教授、民俗学）	
白幡洋三郎（日文研助教授、庭園史）	
中西進（日文研教授、日本文学）	
ミコワイ・メラノヴィッチ（日文研客員教授／ワルシャワ大学教授、日本思想）	
安田喜憲（日文研助教授、環境考古学）	
山折哲雄（日文研教授、宗教思想史）	
リービ英雄（日文研客員助教授／スタンフォード大学準教授、日本文学）	
●成果物	
伊東俊太郎編『日本人の自然観—縄文から現代科学まで—』（河出書房新社、1995年8月）	
●研究発表	
1990年 5月 25日	梅原猛「縄文人の自然観」 安田喜憲「時代区分と自然観—縄文時代を中心に—」 吉田敦彦「縄文の神話」
1990年 5月 26日	金関恕「弥生人の自然観」
1990年 6月 29日	荒川絃「記紀創世神話における自然観」 久野昭「野遊び」
1990年 6月 30日	古橋信孝「歌の発生と『自然』」
1990年 9月 7日	小松和彦「小栗・照手譚と鞍馬・五条天神—天皇制のもうひとつの側面—」 中西進「古代人の自然観」
1990年 9月 8日	山折哲雄「中世日本人の自然観」 平川祐弘「ハーンと神道」
1990年12月 21日	正木晃「日本人の自然観と聖空間—曼荼羅・浄土に見る自然の位相—」
1990年12月 22日	上垣外憲一「新古今集の自然観」 源了圓「儒学者の自然観」
1991年 1月 25日	百川敬仁「国学者の自然観—本居宣長を中心に—」 鈴木貞美「近代日本文学にみる自然観—その変遷の概要—」
1991年 1月 26日	吉田忠「蘭学者の自然観」 渡辺正雄「近代における日本人の自然観—西洋との対比において—」
1991年 2月 22日	金子務「新自然観としての四次元問題—宮澤賢治を中心に—」 柴谷篤弘「今西錦司の自然観」
1991年 2月 23日	村上陽一郎「現代科学が日本人の自然観に与えた影響」 伊東俊太郎「湯川秀樹の自然観—中間子論形成における—」
1991年 5月 17日	小野芳彦「『日本人の自然観』、第一年次『通時的研究』のまとめ」 白幡洋三郎「自然観の東西比較—庭園観をめぐって—」
1991年 5月 18日	伊東俊太郎「『日本人の自然観』研究における地域比較について」
1991年 10月 18日	吉田敦彦「ギリシア神話の自然観」 廣川洋一「ギリシア哲学の自然観」
1991年 11月 15日	福永光司「日本文化と中国の自然観」

	朴石然「『天人之際』について」
1991年 12月 20日	カール・ベッカー「日本人の自然観と臨死体験」 矢野道雄「インドの医学書の自然観」 佐藤任「インドの自然観—svabhava論を中心に—」
1992年 1月 31日	伊東俊太郎「アラビアの自然観」 牧野信也「アラブの自然観の一断面」

## 014 昔話、そのアジア・アフリカに通底するものの研究

●研究域	
第4研究域 文化関係（新交圈）	
●共同研究期間	
1991（平成3）年4月～1994（平成6）年3月	
●研究の概要	
昔話はそれぞれの文化が、その固有の性格を反映させながら時代の差を超えて、民衆のなかに語り継がれてきたものである。このため、各文化間において差があるのは当然であるが、なお文化差を超えて共通の要素を持っていることも事実である。	
本研究では、アジア、アフリカ各地において収集された昔話を多角的に検討し、アジア、アフリカに通底する要素を明らかにするとともに、それらを基礎として各文化間の差を明らかにして、それぞれの文化特性を見出していくた。	
●研究代表者	
河合隼雄（日文研教授、心理学）	
●幹事	
小野芳彦（日文研助教授、情報学）	
黒須里美（日文研助手、家族社会・人口学）	
●班員	
梅原賢一郎（京都造形芸術大学教授、哲学）	
江口一久（国立民族学博物館助教授、文化人類学）	
大林太良（東京女子大学文化学部教授、神話学）	
小澤俊夫（筑波大学文芸言語学系副学長、ドイツ文学）	
小松和彦（大阪大学文学部助教授、民俗学）	
朱捷（中京女子大学家政学部助教授、比較文学）	
杉岡津岐子（京都文教短期大学、教育心理学）	
武井秀夫（天理大学国際文化学部助教授、文化人類学）	
田中優子（法政大学第一教養部教授、近世史）	
堀内勝（中部大学国際関係学部教授、アラブ文化）	
松原秀一（元慶應義塾大学文学部教授、仏文学）	
伊東俊太郎（日文研教授、科学史・比較文明学）	
井上章一（日文研助教授、文化人類学）	
長田俊樹（日文研助手、言語学）	
柏岡富英（日文研助教授、社会学）	
中西進（日文研教授、日本文学）	
山折哲雄（日文研教授、哲学）	
山口昌男（日文研客員教授／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長、文化人類学）	
山田慶兒（日文研教授、科学史）	
●研究発表	
1991年 4月 12日	山口昌男「異類婚について」
1991年 4月 13日	小澤俊夫「昔話のおわり方」
1991年 7月 5日	松原秀一「フランス民話・伝説の異類婚」
1991年 7月 6日	小松和彦「日本昔話の異類婚」
1991年 10月 11日	河合隼雄「深層心理学より見た異類婚」

1991年 10月 12日	朱捷「中国の昔話—異類婚をめぐる—」
1992年 2月 14日	大林太良「犬と穀物」
1992年 2月 15日	武井秀夫「アマゾン の『白人』起源神話」
1992年 5月 22日	杉岡津岐子「昔話の記憶と再生」
1992年 7月 24日	山折哲雄「夢見る夢見られる人—インドの昔話から—」 堀内勝「アラブの異類婚姻譚」
1992年10月 16日	小松和彦「ミクロネシアの昔話をめぐって」 河合隼雄「風土記の昔話」
1993年 1月 19日	井本英一「異類通婚の話」 田中優子「アジアの物語と日本の物語」
1993年 4月 19日	松原秀一「聖者になった犬」 杉岡津岐子「昔話を題材とした心理学実験の海外調査方法について」
1993年 6月 11日	朱捷「中国の伝説『聊斎志異』における異類譚」 杉岡津岐子、河合隼雄、小野康彦「海外調査（韓国）の詳細」
1993年12月 9日	江口一久、杉岡津岐子、小野康彦「韓国とカメルーンでの調査の報告」
1994年 3月 23日	中西進「日本人と異異譚」 河合隼雄「研究の総括」
1994年 3月 24日	全員「総合討論」

## 015 交渉行動様式の国際比較

●研究域	
第3研究域 文化比較（制度）	
●共同研究期間	
1991（平成3）年7月～1997（平成9）年3月	
●研究の概要	
国際交渉（negotiation）は、結局のところギブ・アンド・テイクの妥協で合意に到達する行為であるという点において、一般的なパターンに従う人間の行動様式である。その意味において、サイエンスの対象たりうる。しかし他方、国際交渉は、交渉者が所属する民族や国家システムの歴史、体制、国民性などの刻印を色濃く捺された、1回限りの、普遍化にはなじまない人間的行為でもある。	
本研究は、このような一般性と特殊性を併せ持った「交渉」を対象に、その一般理論の構築をめざすとともに、外交・軍縮・通商などの分野での二国間、または多国間の交渉のケース・スタディーを実施した。これらの作業を通じて、わが国学界ではまだ市民権を獲得するにいたっていない「交渉学」の確立をめざした。	
●研究代表者	
木村汎（日文研教授、政治学）	
●幹事	
上垣外憲一（日文研助教授、比較文化）	
小野芳彦（日文研助教授、情報学 平成8年3月～北海道大学文学部教授）	
柏岡富英（日文研助教授、社会学）	
早川閑多（日文研助教授、芸術史）	
●班員	
青山周（出経済団体連合会産業基盤部、経済学）	
安部文司（大阪教育大学教育学部助教授、日米関係・外交交渉）	
五百旗頭真（神戸大学法学部教授、国際関係学）	
伊東孝之（早稲田大学政治経済学部教授、歴史学）	
木戸蒔（神戸大学法学部教授、政治学）	
近藤重克（大阪国際大学政経学部教授、東南アジア）	

佐瀬昌盛（防衛大学校社会科学教室教授、国際関係論）	
佐藤誠三郎（東京大学教養学部教授、国際関係学）	
佐藤英夫（筑波大学社会工学系教授、国際関係論）	
神余隆博（大阪大学大学院国際公共政策研究科教授、国際関係論）	
鈴木董（東京大学東洋文化研究所教授、政治学）	
鈴木啓介（九州大学経済学部教授、経済学）	
須藤真志（京都産業大学外国語学部教授、国際関係論）	
高木誠一郎（埼玉大学大学院政策科学研究科教授、国際関係論）	
高橋和夫（放送大学教養学部助教授、国際関係論）	
竹内俊隆（大阪外国語大学外国語学部助教授、国際関係論）	
田所昌幸（姫路獨協大学法学部教授、政治学）	
田中明彦（東京大学東洋文化研究所助教授、国際関係学）	
土山實男（青山学院大学国際政治経済学部助教授、国際関係論）	
津守滋（大阪大学国際公共政策研究科教授、国連・安全保障）	
戸部良一（防衛大学校社会科学教室教授、政治学）	
中西輝政（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、国際関係論）	
西井正弘（京都大学大学院人間・環境学研究科教授、国際法）	
袴田茂樹（青山学院大学国際政治経済学部教授、社会学）	
平井友義（広島市立大学国際学部教授、政治学）	
藤田忠（国際基督教大学教養学部教授、経営学）	
森本忠夫（東洋レーヨン経営研究所顧問、経済学）	
薬師寺泰蔵（慶應義塾大学法学部教授、国際関係論）	
横手慎二（慶應義塾大学法学部教授、国際関係論）	
吉川洋子（京都産業大学外国語学部教授、国際関係論）	
渡邊昭夫（青山学院大学国際政治学部教授、国際関係論）	
笠谷和比古（日文研教授、日本史）	
黒須里美（日文研助手、社会学）	
ジョン・シャーキー（日文研客員助教授／パークレイズ・ド・ズート・ウェド調査員）	
中西寛（日文研客員助教授／京都大学大学院法学研究科助教授、国際政治）	
日置弘一郎（日文研客員助教授／京都大学経済学部助教授、組織論・比較経営）	
●成果物	
木村汎編『国際交渉学—交渉行動様式の国際比較—』（日文研、1998年2月）	
●研究発表	
1991年 10月 11日	藤田忠「交渉学の現状」 五百旗頭真「日米間交渉—沖縄返還交渉を中心に—」 土山實男「あいまいさと思決定」 田中明彦「日中間交渉」
1991年 10月 12日	上垣外憲一「韓国人の交渉様式」 鈴木啓介「ソ連の通商・貿易スタイル」 横手慎二「ソ連の外交スタイル」
1992年 3月 6日	佐藤誠三郎「日米交渉の枠組」 佐藤英夫「日米間交渉—纖維を巡る交渉を中心に—」
1992年 3月 7日	伊東孝之「ソ連・東欧間の交渉」 サヴィトリ・ヴィシュワナタン「日ソ交渉—1955年～56年—」
1992年 6月 19日	西田正「外交交渉とは何か」 木戸蒔「バルカン式交渉スタイル」
1992年 6月 20日	佐瀬昌盛「ソ連・ドイツ間の交渉」 鈴木董「オスマン・トルコ帝国の交渉行動」
1992年 9月 4日	戸部良一「日中和平工作にみられる日本の交渉態度」 吉川洋子「日比の政策決定の比較」
1992年 9月 5日	小倉和夫「日米経済摩擦」 青山周「日中交渉における特色」
1992年12月 4日	グレン・S・フクシマ「日米経済交渉の政治学」 孫崎亨「米加交渉」



1992年 12月 5日	岡部達味「日中交渉」 高橋和夫「日本・イラン交渉」
1993年 3月 5日	今井隆吉「米ロ核軍縮交渉」 須藤真志「開戦前夜の日米交渉」
1993年 3月 6日	平井友義「1929年夏のソ連・英独仏交渉」 姜範錫「ソウルオリンピックの誘致交渉の一断面」
1993年 6月 11日	田所昌幸「通貨外交における交渉スタイル」 鈴木啓介「チェメニ開発のプロジェクト交渉のケース・スタディー」
1993年 6月 12日	土山實男「日本の同盟外交におけるバーゲニング構造」 高木誠一郎「中国交渉行動の分析枠組み」
1993年 9月 10日	木村汎「交渉学入門― (1) ―交渉とは何か」 薬師寺泰蔵「技術トランスファーにおける『私的交渉』」
1993年 9月 11日	小野芳彦「『ゲーム理論』解説」 横田洋三「国連における会議外交―多国間交渉の実践と若干の理論的分析―」
1993年 12月 3日	袴田茂樹「ロシア人の国民的心理と交渉」
1993年 12月 4日	伊東孝之「東中欧三国（ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリー）のEC加盟交渉」 伊豆見元「南北両鮮交渉における韓国と北朝鮮の交渉行動様式の特徴を考える」 神余隆博「国連におけるMulti交渉と日本」
1994年 3月 4日	福永美津子「異文化間交渉コミュニケーション概説に関する一考察」 岡崎久彦「異文化間交渉の実際」
1994年 3月 5日	宮里政玄「アメリカの『ナショナル・スタイル』と対外政策」 渡邊昭夫「国際的相互依存下における交渉の力学」 木村汎「交渉学入門― (2) ―交渉の種類と段階」
1994年 6月 3日	枝村純郎「外交交渉の実際―インドネシアとロシアでの経験―」 横手慎二「ソ連外務省と外交交渉」
1994年 6月 4日	鈴木董「オスマン帝国の交渉行動―PartⅡ―」 佐藤英夫「日米交渉様式の比較―過去と現在―」 戸部良一「排日移民法（1924年）をめぐる日本の交渉態度」
1994年 9月 2日	高木誠一郎「『中国の特色をもった』交渉学は成立するか―中国交渉行動研究序説―」 青山周「日中長期貿易取決めに見られる交渉の特色」
1994年 9月 3日	江藤淳「所謂“無条件降伏”について」 吉川洋子「植民地的、途上小国の交渉行動の検討―フィリピンの対米関係を例に―」
1994年 10月 18日	〈日本研究・京都会議分科会〉 フレッド・イクル「国際秩序を樹立するための交渉」 ウィリアム・ザートマン「交渉学研究における最近の進展と論争」
1994年 10月 19日	〈日本研究・京都会議分科会〉 鈴木董「オスマン帝国の交渉行動：イスラム国家における紛争解決のケース・スタディ」 ロバート・フリードハイム「正義追求における節度―国際捕鯨交渉における日本のそのようなアプローチはなぜ失敗したのか―」 ピーター・バートン「日本人の政治と交渉行動の心理的次元」
1994年 12月 2日	平井友義「INF交渉にみる安全保障交渉と学習過程」 木村汎「交渉学入門― (3) ―文化と交渉」
1994年 12月 3日	高橋和夫「中東和平―PLO・イスラエル交渉を中心として―」 笠谷和比古「幕末日本の交渉態度」 須藤真志「『日米交渉』にみる日米双方の交渉態度」

1995年 4月 7日	木村汎「ソ連式交渉」 上垣外憲一「19世紀末アメリカの対韓政策と日本人の朝鮮観」
1995年 4月 8日	村松増美「国際交渉におけるユーモアの役割、そしていくつかの国民性比較」 竹内俊隆「ゲーム理論で言うバーゲニングとは」 柏岡富英「Irving Goffmanの対人行動研究における行動様式―ミクロの視点から―」
1995年 6月 30日	近藤重克「日米安全保障上のイシューの変化と両国間交渉」 五百旗頭真「日米比較外交論」
1995年 7月 1日	村田良平「体験としての外交交渉（論）」 佐瀬昌盛「ECのスロヴェニア・クロアチア・ボスニア独立承認をめぐる交渉過程―とりあえずの分析と暫定的結論―」 田所昌幸「国際連合における交渉について」
1995年 9月 1日	中西輝政「イギリス外交史に見る交渉行動の特徴―いくつかの事例研究を中心に―」 渡邊昭夫・押村高「交渉論の系譜」
1995年 9月 2日	尾本恵子「将棋の戦略」 神余隆博「予防外交と交渉」 袴田茂樹「ロシアにおける分離派的エトスとバザールのエトス」
1995年 12月 1日	鈴木董「対外交渉とエリートの周流―オスマン帝国と徳川日本の官僚における外交のキャリアー・パターンへの影響―」 上野景文「外交とアニミズム―文明VS文化―」
1995年 12月 2日	ピーター・バートン「国際交渉のcase studyメソッド―第一次大戦の日露関係を例にとって―」 土山實男「危機の交渉―キューバ危機再考―」 秋野豊「ポスト冷戦のユーラシアとロシア―中露国境交渉を中心に―」
1996年 3月 1日	木村汎「交渉学序説 (1)」 彭飛「日本人との付き合いの仕方―言葉から考える―」
1996年 3月 2日	山内康英「交渉の本質の本質―海洋レジームの転換と日本外交―」 マイケル・ブレーカー「日本は外交の超大国となりうるか?」 Joachim Glaubitz “Russo-Japanese Negotiation on the Northern Territories during Gorbachev and Yeltsin Administrations: A German Scholar's View”
1996年 5月 31日	木村汎「交渉学序説 (2)」 須藤真志「交渉学から見た日米交渉の失敗の原因」
1996年 6月 1日	田所昌幸「ブレトン・ウッズ交渉の分析」 安部文司「日米紳士協定―対米移民の“輸出自主規制”の交渉―」 鈴木啓介「対露交渉における『文化』の問題」
1996年 12月 6日	戸部良一「海軍軍縮会議における戦前日本の交渉態度―英米と比較して―」 青山周「日中長期貿易取り決めに見られる交渉の特色」 鈴木董「オスマン帝国の交渉行動―交渉様式・組織・交渉者―」
1996年 12月 7日	伊東孝之「民主化と交渉文化―1980年代のポーランド―」 佐瀬昌盛「ドイツ統一と『2+4』交渉」 津守滋「日本の対日ユーゴ貢献をめぐる日欧交渉」 中西寛「ダレス・吉田交渉の再検討」
1997年 3月 7日	上垣外憲一「李氏朝鮮の対日交渉様式」 土山實男「危機管理の失敗：日米危機（1941年）の分析」

1997年 3月 8日	鈴木董「イスラム帝国の交渉行動様式―オスマン帝国の場合―」 高橋和夫「中東和平の交渉の展開」 高木誠一郎「現代中国の交渉観―中国交渉行動様式序説―」 吉川洋子「フィリピンの対大国交渉行動」 早川開多「近世の風俗の研究」
1997年 3月 9日	横手慎二「ソ連の対米交渉の再検討」 平井友義「INF交渉の特質」 袴田茂樹「バザール主義と共同体および国家権力」

016 「理想郷」の比較文化史
●研究域
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅱ）
●共同研究期間
1991（平成3）年10月～1995（平成7）年3月
●研究の概要
古来、人間は、東でも西でも、さまざまに理想の空間を想い描いては、それを希望し、それを神話に、時に、小説に語り、また絵に表現してきた。エデンの園、蓬莱などの三神山、アルカディア、桃源郷、常世の国、エルドラド、千年王国、そして各種のユートピアにいたるまで、それぞれの時代、それぞれの民族の宗教的・詩的・政治的想像力による願望空間であり、今日なお心理の深層を動かす力を持っている。
本研究では、特に東アジアにおける理想郷、「好ましい場所」の系図に注目しながらも、それをより広い比較文化の視野で捉えなおした。
●研究代表者
芳賀徹（日文研教授、比較文化・比較文学）
●幹事
上垣外憲一（日文研助教授、比較文化）
北川浩之（日文研助手、地球科学）
●班員
石森秀三（国立民族学博物館助教授、文化人類学）
伊藤亞人（東京大学教養学部教授、文化人類学）
井波律子（金沢大学教養部教授、中国文学）
稲賀繁美（三重大学人文学部助教授）
今橋映子（筑波大学文芸・言語系専任講師、比較文学）
加納孝代（青山学院女子短期大学助教授、日本キリスト教史）
川端香男里（東京大学文学部教授、ロシア文学・比較文学）
小谷晴男（筑波大学哲学・思想学系助手、哲学）
杉田英明（東京大学教養学部講師、アラビア・ペルシア文学）
呉衛国（國學院大学客員研究員、近代中国文化史）
成恵卿（日本大学国際関係学部）
田中優子（法政大学第一教養部教授、日本文学）
張競（東北芸術工科大学助教授、中国文学・比較文学）
辻原登（作家、文学）
樋口忠彦（新潟大学工学部教授、景観工学）
日野龍夫（京都大学文学部教授、近世日本文学）
牧野陽子（成城大学経済学部教授、比較文学・比較文化）
松居竜五（東京大学教養学部講師、比較文学・比較文化）
三浦俊彦（和洋女子大学文政学部助教授、英国思想史）
横山俊夫（京都市大学人文学部研究所助教授、近代比較文化史）
脇明子（ノートルダム清心女子大学家政学部教授、幻想文学）
井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論）

江頭教夫（日文研客員教授／慶應義塾大学環境情報学部教授）
柏岡富英（日文研助教授、社会学）
河合隼雄（日文研教授、心理学）
姜希雄（日文研客員教授／ハワイ大学教授）
キム・レーホ（日文研客員教授／ロシア科学アカデミー世界文学研究所教授）
金春美（日文研外国人来訪研究員／高麗大学教授、日本文学・比較文学）
佐伯順子（日文研客員助教授／手塚山学院大学文学部助教授、女性文化史）
白幡洋三郎（日文研助教授、庭園史）
杉本秀太郎（日文研教授、比較文学）
鈴木貞美（日文研助教授、近代日本文学）
高橋晃子（日文研客員助教授／京都服飾文化研究財団キュレーター）
崔博光（日文研外国人来訪研究員／成均館大学校教授、比較文学文化）
辻惟雄（日文研教授、日本美術史）
中西進（日文研教授、日本文学）
朴正義（日文研外国人来訪研究員／圓光大学校師範大学日本教育学科副教授、日本説話文学）
早川開多（日文研助教授、日本美術史）
別役恭子（日文研寄附研究部門教授、日本美術史）
正木晃（日文研客員助教授／トキワ松学園女子短期大学非常勤講師）
リヴィア・ロディカ・モネ（日文研客員助教授／ミネソタ大学準教授、日本現代文学）
安田喜憲（日文研教授、地理学・環境考古学）
山折哲雄（日文研教授、宗教史）
李榮九（日文研客員教授／韓国中央大学教授、日本文学）
アントニー・V・リーマン（日文研客員教授／トロント大学教授、日本近代文学）
劉建輝（日文研客員助教授／南開大学外国言語文学部助教授、日本文学）
●研究発表
1991年 12月 20日 芳賀徹「桃源郷の系譜―陶淵明から小川芋銭まで―」
1992年 3月 13日 伊藤亞人「韓国における千年王国運動」 上垣外憲一「幻想の理想郷―XANADUをめぐる―」
1992年 3月 14日 三浦俊彦「ユートピア思考の類型学」
1992年 5月 9日 日野龍夫「国学者・蘭学者の理想世界」 鈴木貞美「日本近代文学におけるユートピア―震災前後のユートピア／ディストピア―」 辻原登「『村の名前』と桃源郷構想」
1992年 7月 17日 杉田英明「楽園としてのイスラム庭園」
1992年 7月 18日 加納孝代「旧約聖書の楽園」
1992年 9月 18日 張競「唐史における桃源郷」 井上章一「源義経と西郷隆盛」
1992年 9月 19日 川端香男里「庭園のユートピア」
1992年 11月 5日 正木晃「密教のユートピア思想」
1992年 11月 6日 キム・レーホ「ユートピア―老子とトルストイ―」
1993年 1月 8日 安田喜憲「桃源郷の地勢学（I）」 白幡洋三郎「逃避郷としての庭」
1993年 3月 18日 金春美「谷崎潤一郎の桃源志向」 佐伯順子「桃源としての女」 中西進「日本古代人のユートピア」
1993年 5月 14日 今橋映子「ボヘミアン・ユートピアとしてのカルチュラン」 樋口忠彦「理想郷のトポグラフィ―」
1993年 5月 15日 山折哲雄「理想郷としての王城」
1993年 7月 2日 金禹昌「桃源郷の比較文学」 脇明子「泉鏡花における異郷」
1993年 7月 3日 中野美代子「桃源郷とユートピア」 辻原登、村田喜代子「『異界への想像力』―異界をどう書くか―」（中西進と合同）



1993年 7月 4日	牧野陽子「ラフカディオ・ハーン—理想郷としての19世紀日本—」
1993年11月12日	横山俊夫「貝原益軒『本邦七美説』—日本礼賛論の一形態—」 河合秀和「ユートピアとサタイヤー—ジョージ・オーウェルを例として—」
1993年11月13日	上垣外憲一「仏教の極楽と平安貴族の理想郷」
1994年 1月 7日	オギユスタン・ベルク「アルカディア—ヨーロッパにおける理想的田園風景の系譜—」 鶴田欣也「川端康成の向う側空間」
1994年 1月 8日	芳賀徹「〈ユートピア〉の都市設計—トマス・モアとトマス・カンパネラの場合—」
1994年 3月 7日	アントニー・V・リーマン「『眠れる美女』における川端康成の“nature mate”」
1994年 3月 8日	川端香男里「18世紀ヨーロッパ旅行手記」 劉建輝「虚構の国家・幻の『楽土』」
1994年 5月13日	松居竜五「折口信夫の常世観」 早川間多「蕪村の理想郷—「夜色櫻台雪万家園」をめぐって—」
1994年 5月14日	安田喜憲「蛇と十字架の共存」
1994年 7月 8日	銭国紅「若き毛沢東のユートピア『湖南共和国』をめぐって」 小谷晴勇「『理想郷』としての茶会」
1994年 7月 9日	安田喜憲「蛇と十字架の共存」
1994年 9月16日	稲賀繁美「憧憬の空間的構造」 成恵卿「W・B・イエインの理想郷—初期の詩作品を中心として—」
1994年 9月17日	北川浩之「物理学者の夢—巨大加速器建設計画—」
1994年10月18日	〈日本研究・京都会議分科会〉 岩崎治子“Packaging of Passion in Late Edo Gesaku” 井波律子「金瓶梅における愛の手管」 千野香織「浮世絵春画の内と外—操作されているのは誰か—」 タイモン・スクリーチ「江戸のハーフ」 上野千鶴子「春画にみる女性のセクシュアリティの形成」 芳賀徹「愛のきわどさ、恋の場所」 マチアス・フォラー“Attributes in Shunga Illustration / Suggestive Non-Shunga Illustrations” 河野元昭「中国の春画と日本の春画」
1994年10月19日	〈日本研究・京都会議分科会〉 浅野秀剛「春画史の時代区分」 スミエ・ジョーンズ“Interminable Reflection” 田中優子「エロチックな布」 中野三敏「亀齡軒と『華月帳』—江戸末期の風流人—」 丹尾安典「江戸男色のサイン」 レジン・ジョンソン“Bodily, Bawdily Giving Tongue: The Lingual Pleasures of Gesaku” 早川間多「春画と笑い」 辻惟雄「性器崇拜と浮世絵春画」 井上章一「まねき猫と性崇拜」 山口昌男「江戸の小唄におけるエロスと性」
1994年11月11日	落合恵美子「女性学と家族研究の最近の動向」 井波律子「紅樓夢の女たち」
1995年 1月12日	芳賀徹「与謝野晶子—「みだれ髪」から婦人論へ—」
1995年 1月13日	井上章一「近代日本美人史」 佐々木英昭「〈新しい女〉の出現」
1995年 1月14日	上垣外憲一「〈女〉としての朝鮮」

017	日本の科学と文明
●研究域	
第1研究域 動態研究（伝統）	
●共同研究期間	
1992（平成4）年4月～1995（平成7）年3月	
●研究の概要	日本の科学技術を日本文明史の広い枠組の中において相対的に捉え直すことが本研究の目的である。  すでに中国の科学技術については、J・ニーダム『中国の科学と文明』という大著があり、アラビアの科学技術については、S・H・ナッスルの『イスラムの科学と文明』が完成している。他の文明圏についても同様の書物が出されつつあるが、日本の科学・技術については、こうした文明史的観点からの総合が、いまだなされていない。  本研究は、3年間の計画でこの目論みに挑戦した。
●研究代表者	伊東俊太郎（日文研教授、科学史・比較文明学）
●幹事	鈴木貞美（日文研助教授、日本文学・日本思想） 安田喜憲（日文研教授、環境地理学）
●班員	荒川紘（静岡大学教養部教授、科学史） 飯田賢一（東京工科大学工学部教授、技術史） 大野晋（東洋英和女学院大学人文学部教授、国語史・日本文化史） 金関恕（天理大学教養部教授、考古学） 川勝平太（早稲田大学政治経済学部教授、文明史） 菊池俊彦（中央大学法学部教授、日本科学史） 酒井シヅ（順天堂大学医学部教授、医学史） 下平和夫（国士舘大学教養部教授、日本数学史） 武光誠（明治学院大学一般教養部助教授、日本史） 角山榮（奈良産業大学経済学部教授、経済史・文化史） 道家達将（電気通信大学電気通信学部教授、日本科学史） 中山茂（神奈川大学経営学部教授、日本科学史） 尾藤正英（川村学園女子大学文学部教授、日本思想史） 福永光司（元京都大学人文科学研究所長、道教・日本文化史） カール・ベッカー（京都大学総合人間学部助教授、日本思想史） 源了圓（元国際基督教大学教授、日本思想史） 吉田忠（東北大学文学部附属日本文化研究施設教授、日本科学史） 吉野裕子（著述業、民俗学） 王家驊（日文研客員教授／南開大学教授、日本思想史） 小野芳彦（日文研助教授、情報学） 上垣外憲一（日文研助教授、日本文化史・交流史） 栗山茂久（日文研助教授、科学史） ウィリアム・ジョンストン（日文研客員助教授／ウェスリアン大学助教授、日本文化・科学史） 中西進（日文研教授、日本文学・日本文化） 芳賀徹（日文研教授、日本文化史） 正木晃（日文研客員助教授／中京女子大学助教授、宗教学） 松井孝典（日文研客員助教授／東京大学大学院理学系研究科助教授、比較惑星学・宇宙地球科学） 森岡正博（日文研助手、哲学・思想史） 山折哲雄（日文研教授、日本思想史・日本宗教史）
●成果物	
伊東俊太郎編『日本の科学と文明—縄文から現代まで—』（同成社、2000	

年2月）	
●研究発表	
1992年 4月24日	安田喜憲「縄文文化の世界史的位置」 大野晋「弥生文化の形成」
1992年 7月17日	小林達雄「縄文土器の起源」 甲元真之「農耕文化と家畜飼育」
1992年 7月18日	飯田賢一「古代日本の金属文化—鉄を中心に—」
1992年12月18日	吉野裕子「新祭日考—春日大社と大原神社の祭日について—」 武光誠「古代日本の雨乞いについて」
1992年12月19日	下平和夫「室町以前の知識人の数的知識」
1993年 2月12日	福永光司「江戸国学の唐心と倭心」 上垣外憲一「日本禅宗における中国的自然観の変容」
1993年 2月13日	酒井シヅ「古代日本の病氣」
1993年 5月24日	角山榮「近世日本人の時間意識と日本文明」 川勝平太「日本文明の形」
1993年 5月25日	源了圓「佐久間象山における西洋科学文明の受容—儒学と洋学の関係—」 芳賀徹「徳川日本における洋学の意味」
1993年 7月 9日	金容雲「朝鮮時代の数学」 下平和夫「江戸初期の数学」
1993年 7月10日	中山茂「改歴について」 道家達将「宇田川槐園・榕菴について」
1993年11月12日	正木晃「密教・科学・学問—日本・中国・朝鮮・チベット—の比較検討—」 吉野裕子「陰陽五行と日本の俗信」
1993年12月10日	金関恕「ガラスと絹—弥生時代の資料から—」 菊池俊彦「幕末における科学、技術の導入についての—考察—」
1993年12月11日	鈴木貞美「1910年代—産業構造の転換と生命主義—」
1994年 1月21日	尾藤正英「日本人の生活意識と仏教」 吉田忠「江戸時代における西洋学術分類の認識」
1994年 1月22日	若尾政希「安藤昌益の学問論」
1994年 2月18日	オギユスタン・ベルク、安田喜憲「討論『風土について』」
1994年 9月29日	「『日本の科学と文明』成果報告編集方針、これまでの報告のチェック欠落要素の検討」
1994年12月 2日	荒川紘「伝統技術と近代化—水車をめぐって—」 栗山茂久「徳川期の医学について」
1994年12月 3日	森岡正博「生殖技術の発展と日本のフェミニズム」
1995年 1月27日	エンゲルベルト・ヨリッセン「キリシタン宣教師のもたらした科学と文明」 笠谷和比古「徳川期の土木事業について」
1995年 3月24日	高木仁三郎「原子力エネルギーをめぐって—その過去・現在・未来—」 中岡哲郎「明治期の産業技術における伝統と西洋化」
1995年 3月25日	村上陽一郎「20世紀の科学と文明について」

018	日本の想像力
●研究域	
第1研究域 動態研究（基層）	
●共同研究期間	
1992（平成4）年4月～1995（平成7）年3月	

●研究の概要	従来、日本人は真面目でユーモアを解さず、とかく想像力が乏しいといわれてきた。しかし、これは誤解である。日本古来の芸術、生活様式、法律制度などのあらゆる分野にわたって、豊かな想像力を知ることができる。  この観点から、幅広い分野における想像力を追究し、日本人の精神構造の根底にあるものを明らかにする。  本研究には、精神力そのものと歴史的展開との両面が考えられるので、両面を不即不離の射程に入れて考察した。
●研究代表者	中西進（日文研教授、日本文学）
●幹事	上垣外憲一（日文研助教授、比較文化・比較文学） 早川間多（日文研助教授、美術史）
●班員	相原和邦（広島大学教育学部教授、日本文学） 稲垣直樹（京都大学総合人間学部助教授、比較文化） 乾昌幸（明治大学法学部教授、比較文化） 宇佐美齊（京都大学人文科学研究所教授、フランス文学） 小松和彦（大阪大学文学部助教授、民俗学） 小谷野敦（大阪大学言語文化部講師、比較文化） 田代慶一郎（福岡女学院大学人文学部教授、比較文化） 西成彦（熊本大学文学部助教授、比較文化） カレル・フィアラ（カレル大学教授／福井県立大学経済学部客員教授、日本語学） 古橋信孝（武蔵大学人文学部教授、日本文学） 松居竜五（東京大学教養学部講師、比較文化） 伊東俊太郎（日文研教授、科学史） 上田紀行（日文研客員助教授／愛媛大学教養部助教授、文化人類学） 江頭敦夫（日文研客員教授／慶應義塾大学環境情報学部教授、比較文化） 王家驊（日文研客員教授／南開大学教授） 王勇（日文研客員助教授／杭州大学日本文化研究センター所長） 河合隼雄（日文研教授、心理学） キム・レーホ（日文研客員教授／ロシア科学アカデミー世界文学研究所教授、現代日本文学史・比較文学） 金春美（日文研外国人来訪研究員／高麗大学校教授、比較文学） ツベタナ・クリステワ（日文研客員教授／ソフィア大学教授、比較文学） 厳紹壘（日文研客員教授／北京大学比較文学研究所教授、日中文化交流） 坂部恵（日文研客員教授／東京大学文学部教授、哲学） 鈴木貞美（日文研助教授、日本文学） 田畑千秋（日文研客員助教授／名瀬市立奄美博物館主幹、民俗学） 辻惟雄（日文研教授、芸術史） 芳賀徹（日文研教授、比較文化） バトリシア・フィスター（日文研寄附研究部門教員（助手）、日本美術史） 別役恭子（日文研寄附研究部門教授、日本美術史） 李栄九（日文研客員教授／韓国中央大学校教授、日本文学） リブシェ・ボハー・チコヴァー（日文研客員教授／ナブルステク博物館部長、日本美術史） 富田登（日文研客員教授／神奈川大学教授、民俗学） リヴィア・ロディカ・モネ（日文研客員助教授／ミネソタ大学準教授、日本現代思想・文学理論・女性学） 山口昌男（日文研客員教授／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授、文化人類学） 吉村作治（日文研客員助教授・早稲田大学人間科学部助教授、考古美術史） アントニー・V・リーマン（日文研客員教授／トロント大学教授、日本近代文学） 劉建輝（日文研客員助教授／南開大学副教授、日本文学）
●成果物	中西進編『日本の想像力』（JDC（日本デザインクリエイターズカンパニー）、1998年9月）



●研究発表			
1992年 2月 28日	中西進「趣旨説明」 河合隼雄「想像力とは何か」 鶴岡真弓「ケルトの想像力」 山口昌男「日本の想像力」		
1992年 6月 5日	佐伯順子「遊女をめぐる想像力」 リブシェ・ボハー・チコヅァー「根付と町人の想像力」		
1992年 7月 3日	中西進「辻惟雄『奇想の図譜』をめぐって」		
1992年 7月 10日	上垣外憲一「自然と想像力」 田代慶一郎「谷崎潤一郎の想像力」 古橋信孝「沖繩の想像力」		
1992年 9月 18日	山口昌男「とぶ話 機械をめぐる想像力」		
1992年 9月 25日	稲垣直樹「飛行機をめぐる想像力」 王勇「網野善彦著『異形の王権』をめぐって」		
1992年 10月 30日	青柳潤一「アフリカの想像力」 キム・レーホ「鼻と想像力」 小松和彦「宮田登著『妖怪の民俗学』をめぐって」		
1992年 11月 6日	辻惟雄、王勇「動物のイメージ」		
1992年 11月 27日	古橋信孝「小松和彦著『異人論』をめぐって」		
1992年 12月 18日	上垣外憲一「夢想国師の夢と自然」 鈴木貞美「エキゾチシズムとノスタルジー―北原白秋の詩と童謡を題材に―」 李栄九「芭蕉の想像力―時のイメージ―」		
1993年 1月 29日	宮田登「日本の民俗と想像力」 崔吉城「韓国の民俗と想像力」 田畑千秋「南島の想像力」		
1993年 2月 5日	中西進「谷川健一著『魔の系譜』を読む」		
1993年 3月 19日	石崎等、芳賀徹「夏目漱石『夢十夜』『永日小品』をめぐって」		
1993年 4月 2日	江藤淳、古井由吉、リヴィア・ロディカ・モネ「夏目漱石『夢十夜』をめぐって」		
1993年 5月 7日	早川開多「蕪村絵画の想像力『夜色樓臺図』をめぐって」 別役恭子「浮田一憲の想像力」		
1993年 6月 4日	相原和邦「『第三夜』を軸として」		
1993年 7月 2日	金春美「比較文学からみた想像力」、「月光」 トーマス・リーパー「エラブ想像力―源氏物語読者の場合―」		
1993年 8月 6日	ツベタナ・クリステワ「枕草子―開かれた作品として―」 オロフ・リディン「萩生徂徠の想像力」		
1993年 9月 3日	辻原登、村田喜代子「『異界への想像力』―異界をどう書くか―」（芳賀班と合同）		
1993年 11月 5日	アッタナシオ・ドナッテラ「夏目漱石―非人情から則天去私―」 伊東俊太郎「宮澤賢治と高村光太郎―想像力をめぐって―」		
1993年 12月 3日	村井康彦「海を渡る想像力―伝説化する人間像 源義経―」 蔡毅「海を渡る想像力―伝説化する人間像・韓志和―」 劉雨珍「海を渡る想像力―伝説化する人間像 楊貴妃―」 中西進「海を渡る想像力―伝説化する人間像 白楽天―」	源義経― 韓志和― 楊貴妃― 白楽	天―
1994年 1月 7日	大庭みな子、ポール・マッカーシー、中西進「中世の想像力―梅原猛著『中世小説集』をめぐって―」		
1994年 4月 15日	劉建輝「魔都の体験―文学における日本人と上海―」 芳賀徹「漱石の想像力―永日小品などをめぐって―」		
1994年 5月 6日	草野ダルシー・やすこ「三島由紀夫の想像力」 西成彦「宮澤賢治の考古学的想像力」		

1994年 6月 3日	アントニー・V・リーマン「宮澤賢治の歌う風景―風の又三郎―」 田代慶一郎「世阿弥の想像力―夢幻能の世界―」
1994年 7月 1日	松居竜五「『死者の書』の時間―折口信夫と想像の『古代』―」 中西進「大江健三郎と想像力」
1994年 8月 5日	小谷野敏「男の恋の消滅―中世日本文化の断層―」 坂部恵「山椒大夫の周辺」 ミリアム・サス「遠い視点、かけ離れて」
1994年 9月 2日	古橋信孝「和歌の想像力」 宮田登「フォークロアとしての落語」
1994年 10月 20日	〈日本研究・京都会議分科会〉 トーマス・シーボック「記号と想像力」 有馬朗人、エドゥアルド・クロッペンシュタイン、エドウィン・クランストン、辻井喬、大塚恭男、ミーラ・S・ビスワナサン「シンポジウム 日本の想像力」
1994年 11月 4日	乾昌幸「日蓮の力―太陽再生儀礼のプロセス―」 相原和邦「事実と想像―漱石と鷗外―」
1994年 12月 2日	ヴラディスラフ・ニコノロヴィッチ・ゴレグリヤード「古典文学における自然の役割」 宇佐美斉「曖昧と想像力（あるいは創造力）」

## 019 近代化過程における人口と家族

●研究域
第2研究域 構造研究（社会）
●共同研究期間
1992（平成4）年4月～1995（平成7）年3月
●研究の概要
人口や家族の構造、変動の方向は、その究明を通じて初めてその構成を理解できるようになる社会の基層部分である。現代社会におけるこれらの基層部分の状態が、とりまく環境との関わりあいながらどのように変化してきたのかを、観察可能なこの400年間を対象に追究した。さらに併せて、人口と家族との関連を、地域間比較、国際比較を含めて明らかにした。 本研究の研究方法は、単に構成メンバーやゲストの個人研究の報告会で終わらせるのではなく、世界各国の研究動向を見据えながら、計画に基づいた実証研究を実施して、そのヴィヴィッドな結果に基づく討議を中心に推進した。
●研究代表者
速水融（日文研教授、経済史・歴史人口学）
●幹事
ポーリン・ケント（日文研助手、社会学）
黒須里美（日文研助手、家族社会学）
●班員
岡田あおい（帝京大学文学部助教授、歴史社会学）
奥田伸子（名古屋市立女子短期大学助教授、社会史）
川口洋（帝塚山大学経済学部、歴史人口学）
鬼頭宏（上智大学経済学部教授、経済史・歴史人口学）
木下太志（江南女子短期大学専任講師、社会人類学）
小島宏（厚生省人口問題研究所主任研究員、人口学）
斎藤修（一橋大学経済研究所教授、経済史・歴史人口学）
佐々木陽一郎（千葉大学法経学部教授、経済史・歴史人口学）
高木正明（立命館大学産業社会学部教授、家族社会学）
高橋真一（神戸大学経済学部教授、人口経済学）

坪内良博（京都大学東南アジアセンター教授、東南アジア社会論）
坪内玲子（龍谷大学経済学部教授、社会学）
津谷典子（日本大学経済学部助教授、人口学）
友部謙一（徳山大学経済学部専任講師、経済史・歴史人口学）
二宮宏之（東京外国語大学外国語学部教授、フランス社会史）
ハラルド・フース（ドイツ日本研究所研究員、家族史）
古田和子（東洋英和女子大学文学部助教授、中国経済史）
松浦昭（神戸商科大学商経学部教授、経済史・歴史人口学）
松田武（元大阪大学医学部助教授／医学史研究会、公衆衛生史）
三浦忍（九州産業大学経済学部教授、人口史）
安元稔（駒澤大学経済学部教授、イギリス経済史・歴史人口学）
吉田光男（東京大学文学部教授、朝鮮社会史）
落合恵美子（日文研助教授、家族社会学）
小野芳彦（日文研助教授、情報学）
柏岡富英（日文研助教授、社会学）
川勝平太（日文研客員教授／早稲田大学政治経済学部教授、比較経済論）
ミッシェル・カルティエ（日文研客員教授／フランス国立社会科学高等学院主任教授、経済社会史）
ローレル・コーネル（日文研客員助教授／インディアナ大学助教授、社会人類学）
マーティン・コルカット（日文研客員教授／プリンストン大学教授、日本宗教史）
ウィリアム・ジョンストン（日文研客員助教授／ウェスリアン大学助教授、社会史）
園田英弘（日文研教授、歴史社会学）
バトリシア・ツルミ（日文研客員教授／ヴィクトリア大学教授、近代日本史）
安田喜憲（日文研教授、地理学）
●成果物
速水融編著「近代移行期の人口と歴史」（ミネルヴァ書房、2002年4月）
速水融編著「近代移行期の家族と歴史」（ミネルヴァ書房、2002年4月）
●研究発表
1992年 5月 29日 速水融「歴史人口学の世界」 斎藤修「人口転換以前の日本における死亡パターン」 ウィリアム・ジョンストン「理性の系譜学―日本における結核性―」
1992年 6月 26日 ビーター・ラスレット “The Emergence of the Third Ages”
1992年 7月 23日 速水融「歴史人口学の資料としての宗門改帳」 川口洋「『宗門改帳』のデータベースシステム（DAN-JURO）の開発状況と今後の課題」 小野芳彦「コンピューターからの挑戦：史料整理はどこまで計算機にまかせられるか」
1992年 7月 24日 M. グートマン “From Population Register to Demographic Analysis: Observations on Managing Historical Demographic Data” ローレル・コーネル “Analyzing the Consequences of Family Structure with Event History Analysis” 津谷典子「“Event History Analysis”の人口学への応用」
1992年 9月 10日 合評・速水融著「近世濃尾地方の人口・経済・社会」 司会 鬼頭宏
1992年 9月 11日 小島宏「アフリカ諸国における家族関係と出生行動」 安元稔「19世紀初頭イギリス工業都市の疾病―リーズ中欧篤志病院入退院簿（1815-1817）―の分析」 高木正明「家族周期論の歴史データへの適用について」
1992年 10月 30日 松浦昭「幼年比率の地域性について」 木下太志「東北―農村の結婚・出生」
1992年 11月 27日 速水融「明治期統計をめぐって」

	黒須里美「弘化三年の丙午―明治19年統計をつかって―」 高橋真一「明治期の人口推計および地域別死亡率について」
1993年 2月 5日	Solvi SOGNER “Reflections on Historical Development of the Gender System in Norway” Antoinette FAUVE-CHAMOUX “Women at Work in a Preindustrial French City”
1993年 3月 11日	奥田伸子「世帯経済と世帯構造―イギリスと日本―」 落合恵美子「近世末の〈出産革命〉はあったか」
1993年 3月 12日	岡田あおい「近世農村家族の継承戦略―陸奥国会津郡金井沢村の事例を中心として―」 佐々木陽一郎「飛騨高山の事例」
1993年 4月 16日	アン・ジャンネッタ “From Periphery to Center: The Dissemination of Jennerian Vaccination in Nineteenth Century Japan” 鬼頭宏「19世紀日本の乳児死亡：懐妊書上帳と衛生統計」
1993年 5月 21日	黒須里美、落合恵美子「多摩戸籍にみる明治初期の養子」 友部謙一「日本農村における出生力・母乳哺育・乳児死亡について」 松田武「近世日本の死亡と疾病について」
1993年 7月 16日	津谷典子「出生力の近接要因―その概念と計量モデル―」
1993年 7月 17日	坪内良博「マレーシアの一農村の家族変動：1971～1991」 川口洋「会津地域における子かへしの実態」 斎藤修「日本における歴史人口学の現状：近世と近代のブリッジをめざして」
1993年 10月 22日	吉田光男「近世朝鮮の戸籍」 小島宏「わが国における出生促進政策の可能性」
1993年 11月 26日	ジェラルド・キャロ “Fertility Trends and Family Policy in France” 高木正明「天保飢饉期の食糧摂取」 佐々木陽一郎「明治4年高山戸籍再論」
1994年 4月 8日	リチャード・イースタリン “Industrial Revolution and Mortality Revolution: Two of a Kind” 奥田伸子「Richard Wallの『適応力のある家庭経済モデル』とその日本への適用」 速水融「平成6年度の研究計画について」
1994年 5月 20日	坪内玲子「17、18世紀の南部藩家臣における家系の継承」 友部謙一「歴史人口学からの『間引き』考―近世日本農村における婚姻出生力の近接要因について―」 落合恵美子「個人はライフコースの中でいかなる世帯構造を経験してきたか―ケンブリッジグループCAMTABの多摩戸籍（1871）への適応―」
1994年 7月 1日	岡田あおい「近世農村家族の継承戦略（一）―会津山間部における家督権の継承―」 鬼頭宏「宗門改帳と懐妊書上帳」 小島宏「結婚・出産退職タイミングの規定要因とその政策的含意」
1994年 10月 7日	安元稔「センサス原簿からみた近代イギリスの人口移動」 高木正明「家族分類スキームと宗門改帳」 岡田あおい「近世会津山村の世帯形態」
1994年 10月 20日	〈日本研究・京都会議分科会〉 タマラ・ハレブン “Abortion, Infanticide and Neglect in Historical perspective”



	太田素子・沢山美果子 “An analysis of the motivation for <i>mabiki</i> and abortion as related to child rearing customs in early modern Japan: research based on non-quantitative evidence of the history of the people's mentality” ユン・ビンチェン “More or Less: Cultural and Medical Factors behind Marital Fertility in Late Imperial China” フランチェスカ・ブレイ “Meaning of Motherhood: Reproductive Technologies and their Uses in Imperial China” 速水融 “Sex-selective Infanticide: a Re-examination of the Eng-Smith Hypothesis” マヘンドラ・プレミ “Female Infanticide and Child Neglect as Possible Reasons for Low Sex Ratio in the Punjab 1881-1931” アルプ・マハトナ “Infant and Child Mortality During Famines in Late Nineteenth and Early Twentieth Century in India” ワン・ファン、ジェイムズ・リー、キャメロン・キャンベル “Marital Fertility Control among the Qing nobility: implications for two types of preventive check”
1994年 10月 21日	〈日本研究・京都会議分科会〉 ローレル・コーネル “Infant Homicide: Pictures versus Statistics. A Criticism of the <i>Mabiki</i> Thesis” 友部謙一 “Coale-Trussell Indices, Breast Feeding and Infanticide in Tokugawa Japan” セバスチアン・イルダヤラジャン “Abortion and Infanticide in a historical population: a case of India” ジェイムズ・リー、キャメロン・キャンベル “Gender patterns of mortality in rural Liaoning: infanticide, neglect, and the Far Eastern mortality pattern, 1774-1873” 村松松 “Abortion in Modern Japan” ワン・ファン “Abortion in Modern China” ウィリアム・メイソン、ウィリアム・レイブライ “Son preference in China: Sichuan 1950-1988” ミンジャ・キム・チョウ、スン・ヒュン・ハン “Family size ideal and reproductive behavior in South Korea”
1994年 12月 9日	小野芳彦 「ユーラシア・プロジェクト宗門改帳のデータ処理法」 小島宏 「タイにおける環境衛生要因の人口学的行動に対する影響」 奥田伸子 「近世日本における女性のライフコースー野母村1851～1871ー」
1994年 12月 10日	二宮宏之 「レチフ家再考ー近代移行期の家族をめぐってー」 ミッシェル・カルティエ “Regional Family Patterns in China” 速水融 「総括」

020	世界の中の日本型システム
●研究域	第5研究域 文化情報（日本における日本研究・外国における日本研究Ⅰ）
●共同研究期間	1992（平成4）年4月～1995（平成7）年3月
●研究の概要	グローバリゼーションが急速に進展する国際情勢の中で、日本型システムについての関心が高まっている。特に日本の経済面での急速な発展が、その社会システムの特異なあり方に基礎づけされていることから、日本型システムの編成と運用の特性を分析しようとする動きが強い。 しかし、その追究において欧米起源の分析パラダイムを適用し、日本型システムを主体性を欠く極めて特殊なものと断定する研究者もいる。だが内的立場から眺めれば、日本型システムはそれなりの社会的主体性を備えており、また「文化」ではなく「文明」のレベルでとらえれば、日本的経営の諸技法のように、かなりの国際的普遍性も認められる。 本研究は、世界の中の日本型システムの特性と機能を、客観的な視点から学際的に究明したものである。
●研究代表者	濱口恵俊（日文研教授、日本論）
●幹事	園田英弘（日文研教授、歴史社会学） 柏岡富英（日文研助教授、国際社会学）
●班員	今田高俊（東京工業大学工学部教授） 岩田龍子（九州大学経済学部教授、比較経営学） 梶田孝道（一橋大学社会学部教授、国際社会学） 久慈利武（三重大学人文学部教授、日本社会論） 公文俊平（国際大学グローバルコミュニケーションセンター教授、社会システム論・経済学） 佐々木瑞枝（横浜国立大学留学センター教授、日本語教育学） 塩原勉（甲南女子大学文学部教授、理論社会学・組織論） 柴山哲也（朝日新聞社東京本社編集部、社会史） 杉田繁治（国立民族学博物館教授、コンピュータ民族学） 鈴木良次（金沢工業大学人間情報システム研究所教授、生体情報システム論） 蘇徳昌（奈良大学教養部教授／復旦大学教授、日本論・日本語学） 筒井清忠（京都大学文学部教授、歴史社会学） 恒吉僚子（文京女子大学経営学部講師、比較社会学） 中谷巖（一橋大学商学部教授、理論経済学） 端信行（国立民族学博物館助教授、経済人類学） 長谷川三千子（埼玉大学教養学部教授、比較思想） 古川秀夫（大阪大学人間科学部助手、社会心理学） 柳父章（桃山学院大学文学部教授、言語学） 山田洋子（愛知淑徳大学文学部教授、臨床心理学） 吉田和男（京都大学経済学部教授、理論経済学） 米山俊直（放送大学教授、文化人類学） 渡辺慶子（静岡県立大学国際関係学部教授、社会システム論・情報社会論） 飯田経夫（日文研教授、経済学） ウィリー・F・ヴァンドゥワラ（日文研客員教授／ルーバン・カトリック大学教授、日本論・日中交渉史） 小野芳彦（日文研助教授、情報学） 笠谷和比古（日文研助教授、日本史） 金児曉嗣（日文研客員教授／大阪市立大学文学部教授、社会心理学）

ポーリン・ケント（日文研助手、社会学） アリソン・トキタ（日文研客員助教授／モナシュ大学日本研究学部助教授、日本の伝統音楽） 日置弘一郎（日文研客員助教授／京都大学経済学部助教授、比較経営学） オロフ・G・リディン（日文研客員教授／コペンハーゲン大学教授、日本思想史）	●成果物 濱口恵俊編著『日本文化は異質か』（日本放送出版協会、1996年4月） 濱口恵俊編著『世界のなかの日本型システム』（新曜社、1998年3月）
1992年 6月 13日	濱口恵俊 「グローバリゼーションと日本型システム ネットワーク型システムとしての日本人・日本社会・日本文明、日本システムの今後」
1992年 7月 18日	濱口恵俊、公文俊平「読書会 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎著『文明としてのイエ社会』」
1992年 9月 19日	笠谷和比古、公文俊平、村井康彦「読書会 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎著『文明としてのイエ社会』」
1992年 10月 17日	米山俊直（レポーター）、長谷川三千子、ポーリン・ケント（コメンテーター）「検討文献『菊と刀』ルーズ・ベネディクト」
1992年 12月 19日	恒吉僚子「日本人の行動と思考様式」 佐々木瑞枝「日本人の社会文化的形成 一言葉の面から考えるー」 討論者 古川秀夫、柳父章、山田洋子
1993年 2月 6日	公文俊平（レポーター）、中谷巖・筒井清忠（コメンテーター）「カレル・ファン・ウォルフレン著『日本／権力構造の謎 上・下』」
1993年 3月 27日	久慈利武「作田啓一著『恥の文化再考』（1967）について」 金児曉嗣「森口兼二著『自尊心の構造』（1992）について」
1993年 5月 8日	角山榮、高橋三郎、井上俊、前田成文「濱口恵俊編著『日本型モデルとは何かー国際化時代におけるメリットとデメリットー』についてのレビュー討議」
1993年 6月 5日	吉田和男「文化と経済」 端信行「日本的編成原理と経済文化」 岩田龍子「日本的経営の原基的性格」
1993年 9月 4日	鈴木良次「日本文化の変遷モデルーシステムの自律的変遷ー」 ウィリー・F・ヴァンドゥワラ「あやかりの文化」
1993年 10月 29日	オギュスタン・ベルク「和辻哲郎著『風土』をめぐって」 日置弘一郎、園田英弘「新渡戸稲造著『武士道』をめぐって」
1993年 11月 27日	岩田龍子「人間＝間柄主義ー日本モデルと中国モデルー」 渡辺慶子「日本の情報処理スクリーニングー社会化的コンフリクトー」
1993年 12月 22日	角山榮、筒井清忠「園田英弘著『西洋化の構造ー黒船・武士・国家』（思文閣出版、1993年）をめぐってー」
1994年 1月 29日	山田洋子「『母』は崩壊したか？ー韓国のイメージ画と映画『日本の悲劇』『一人息子』よりー」 金児曉嗣「此岸から彼岸へー日本人の現世利益信仰の昇華における講集団の役割ー」
1994年 2月 26日	公文俊平「日本型市場システムの特質」 古川秀夫「日本人における“ゆとり”感の構造」
1994年 6月 11日	吉田和男「検討文献 チャーマーズ・ジョンソン、矢野俊比古訳『通産省と日本の奇跡』TBSブリタニカ、1982（MITI and the Japanese Miracle, 1982）」

	塩原勉「検討文献 ハルミ・ペフ『イデオロギーとしての日本文化論』（増補版）思想の科学社、1990」
1994年 7月 2日	柴山哲也「ウォルフレンの『日本／権力構造の謎』からー日本のマス・メディアの構造と鉄の四角形論についてー」 柳父章「翻訳文化の象徴としての天皇制」
1994年 9月 10日	ポーリン・ケント「ベネディクトの研究の周辺」 日置弘一郎「経営学における日本論」
1994年 10月 19日	〈日本研究・京都会議分科会〉 チャルマーズ・ジョンソン “The Empowerment of Asia” 榊原英資「日本型資本主義の特色」 タキエ・リブラ「日本と他文化に見る人間性の認識」 公文俊平「日本は本当に異質・特殊か？」 別府晴海 “Uniqueness of NIHONJINRON: Universality of National Identity” 吉田和男「日本型システムの特異性と普遍性」 杉本良夫 “Similar Differences and Different Similarities: A Skeptical View” 濱口恵俊「日本研究における『方法論的關係体主義』」
1994年 12月 17日	梶田孝道「日本の外国人労働者問題ーその特殊性と普遍性ー」 園田英弘「日本の都会ー求心的都市化ー」
1995年 3月 3日	濱口恵俊「日本型システムの存在基盤」 柴山哲也「日本型システムとジャーナリズム」 筒井清忠「日本的教養について」 久慈利武「普遍的説明と文化的説明」 梶田孝道「文明の問題と文化の問題」 吉田和男「不均衡体系としての日本型システム」 米山俊直「日本型システムの源流を探る」 岩田龍子「比較の視点からみた日本型システムの基本構造」 中谷巖「経済発展と経済システムの合理性について」 塩原勉「ナショナリズムの諸問題」 長谷川三千子「日本異質・特殊論をどう克服するか」
1995年 3月 4日	佐々木瑞枝「日本語表現を通して見た『察し文化』」 柳父章「翻訳文化としての天皇制ー境界論と翻訳論ー」 山田洋子「母子関係イメージと人生の物語」 古川秀夫「日本人の幸福について」 金児曉嗣「仏教的信仰と生活観」 恒吉僚子「多文化時代の日本型学校システム」 渡辺慶子「日本型社会化システム」 日置弘一郎「商感覚の保有者」 端信行「日本的編成原理における解放系の問題」 公文俊平「コミュニケーションの新形態と日本型システム」 杉田繁治「技術的側面から見た日本型システム」 鈴木良次「日本型システムとシステムの自律性」 ポーリン・ケント「ベネディクト研究のレビュー」 園田英弘「逆欠如理論と歴史的発展段階説」 柏岡富英「アイデンティティの群雄割拠：新しい『日本的』伝統の発明に向けて」 全員「総括討議：世界における日本型システム」



021 生命と現代文明	
●研究域	
第1研究域 動態研究（現代）	
●共同研究期間	
1993（平成5）年4月～1996（平成8）年3月	
●研究の概要	
地球環境、末期医療、宗教と癒し…など、現代文明の下で「生命」をどのように考えていけばよいのかという一連の問題群に、いま、われわれは直面している。限られた地球環境の下、人間が自然や他の生命とどう折り合いをつけて生存していけばよいのか、あるいは先端テクノロジーの助けを借りながら人間はいかに充実した生を送ればよいのかという課題に、学問的に誠実に答えていくことは研究者に課せられた重大な使命である。	
そのためには、まず日本文化を含む各文化の「死生観」「宗教観」、あるいは芸術行為・儀礼に内在する「生命のコスモロジー」の比較研究を行い、われわれの社会の生命観の吟味を行う必要があった。その際には、文学研究・美術史研究・人類学研級などが蓄積してきた知見を総動員し、その上で、社会学・科学史・臨床医学など幅広い分野からの貢献を得て、末期医療・自然保護・南北問題などの現場で見られる「現代のいのち」の現状を把握し、今後の現代文明の流れの中でどのように評価していけばよいかを吟味していった。また、海外の同じ領域の研究者たちとの情報交換も積極的に行い、これらを含ませた徹底した議論を通して、「生命と現代文明」の問題解明のための方法論の形成に努めた。	
●研究代表者	
早川聞多（日文研助教授、芸術学）	
●幹事	
森岡正博（日文研助手、生物学）	
●班員	
池田清彦（山梨大学教育学部教授、生物学）	
鎌田東二（武蔵丘短期大学助教授、宗教哲学・日本思想史）	
鬼頭秀一（青森公立大学経営経済学部教授、科学史・科学社会学）	
五條しおり（聖徳大学短期大学部助教授、倫理学）	
後藤弘子（富士短期大学助教授、刑事法学）	
佐倉統（横浜国立大学経営学部助教授、生物学）	
武井秀夫（千葉大学文学部助教授、アマゾン先住民研究）	
立岩真也（信州大学医療技術短期大学部専任講師、社会学）	
戸田清（都留文科大学文学部非常勤講師、科学史・社会学）	
永井良和（関西大学社会学部助教授、医療社会学）	
カール・ベッカー（京都大学総合人間学部助教授、哲学・思想史）	
正木見（中京女子大学人文学部助教授、宗教学）	
宮地尚子（近畿大学医学部衛生学教室助手、医療人類学）	
村瀬学（同志社女子大学家政学部助教授、児童学）	
横尾京子（広島大学医学部助教授、母性看護学）	
吉岡斉（九州大学大学院比較文化研究科教授、科学社会学）	
上田紀行（日文研客員助教授／愛媛大学教養部助教授、文化人類学）	
鈴木貞美（日文研助教授、日本文学）	
山折哲雄（日文研教授、宗教史）	
●成果物	
日文研叢書9、早川聞多／森岡正博編『現代生命論研究』（日文研、1996年1月）	
●研究発表	
1993年 4月23日 早川聞多「研究会発足にあたって」、「生命と現代文明への問題提起・1」	
1993年 4月24日 森岡正博「生命と現代文明への問題提起・2」	

		鈴木貞美「生命と現代文明への問題提起・3」
1993年	5月 10日	原田正純「水俣病の医学的、社会的研究—水俣病の真の原因は何か—」 石牟礼道子「文明の母層・その自然—水俣より—」 リヴィア・ロディカ・モネ「原田、石牟礼両氏へのコメント」
1993年	5月 11日	山折哲雄「〈いのち〉の宗教学—食べること食べないこと—」
1993年	6月 7日	永井良和「〈有害環境〉という思想」 佐倉統「人工生命は現代のフランケンシュタインか？」
1993年	6月 8日	カール・ベッカー「生と死が会おうところ—臨死体験からQOLまで—」 森岡正博「1980年代の生命主義—ニューサイエンス・エコロジー・いのち論—」
1993年	9月 6日	鬼頭秀一「遺伝子の神話と分子生物学の思想」 上田紀行「いのちの〈かかわりのなさ〉について」
1993年	9月 7日	横尾京子「QOLと看護—患者の権利の観点から—」 村瀬学「奇形論—グロテスクの概念をめぐる—」
1993年12月	3日	戸田清「第三世界のエコロジー思想」 鎌田東二「生命／自我／霊性／魂」
1993年12月	4日	武井秀夫「こどものいのち、おんなのいのち—アマゾンという価値基準—」 正木見「生と死の図像学」
1994年	4月15日	中村雄二郎「〈臨床の知〉から〈汎リズム論〉へ」
1994年	4月16日	早川聞多「浮世絵春画論」 鎌田東二、正木見、井上章一「テーマ討議『セックスと生命』」
1994年	6月10日	井部俊子、片田範子、志自岐康子「特集 生命と看護」
1994年	6月11日	宮地尚子「死をめぐるポリティクス—医師の告知言説から—」 佐伯みか「医師の終末期医療観—46人の医師へのinterviewから—」
1994年	7月 1日	後藤弘子「誰に子どもをもつ『権利』があるか」 立岩真也「自己決定がなんぼのものか」
1994年	7月 2日	三石稔憲「哲学と社会の新しい関係—方法としての技術的な見方—」 吉岡斉「科学文明の解体課程について」
1994年	9月 9日	土屋貴志「人食のどこが悪い」 池田清彦「生命の形式—時間と恣意性の生物学—」
1994年	9月10日	村瀬ひろみ「黒木香論・仕組まれたセクシャリティの悲劇」 森岡正博「癒しとしてのロックンロール—尾崎豊における〈生命〉と〈宗教〉ver.2—」
1995年	4月14日	柴谷篤弘「〈差別〉の扱いかた」
1995年	4月15日	鈴木利廣「薬害HIVの構造」
1995年	6月 2日	金井淑子「フェミニズムと身体性」
1995年	6月 3日	永田えり子「人権論の限界」
1995年	7月 7日	要田洋江「共生システムの原理を求めて」 坂田昌彦「現代版・看取り結社の構築に向けて」
1995年	7月 8日	大討論会「共生とは何か—『生命と現代文明』総括・その1—」 上田紀行、森岡正博「いま共生をどのように考えるか」
1995年	9月29日	キャサリン・マッキノン「Pomography and Equality」
1995年	9月30日	鬼頭秀一「自然との〈共生〉・再考」
1995年12月	1日	森岡正博「総括討論：生命と現代文明で問われたもの—生命・環境・技術・宗教・ジェンダー—」 全員「〈生命と現代文明〉の可能性と限界」
1995年12月	2日	森岡正博「総括討論：生命の3つの本性と生命の欲望」

022 日本文化の新断面— かざり並びに奇人研究	
●研究域	
第1研究域 動態研究（基層）	
●共同研究期間	
1993年（平成5）年4月～1996（平成8）年3月	
●研究の概要	
日本文化の特徴を、従来はあまり顧みられなかった2つの断面を取り上げ、詳しく切り取ってみようとした。日本文化の伝統のなかで飾る行為と結びつた「かざり」と、古代から現代にいたるまで日本文化の創造的展開に貢献した「奇人」である。	
「かざり」の領域は極めて広く、その研究は単独の専門分野のないうところではなく、美術工芸・意匠・建築・庭園・芸能・民俗・生活文化・文学・美学・文化人類・宗教などの関連分野を総動員した学際的なものとなった。こうした多方面の専門分野の協力により、日本の「かざり」文化の構造を全体として把握しようとした。「かざり」における「奇」にも着目した。一方の「奇人」が関与する領域も、思想・宗教・科学・芸術などとさまざまであり、こうした分野からの学際的アプローチによって、彼らの事跡と意義を文化的創造性という文脈の下で再評価しようとした。そして、彼らを生んだ時代精神や、同時代の社会が彼らをどのように受容したかを検討した。また、多くの無名の「奇人」の存在にも照明をあて、彼らの果たした役割の発掘にも努めた。	
●研究代表者	
辻惟雄（日文研教授、美術史）	
●幹事	
井上章一（日文研助教授、建築史）	
早川聞多（日文研助教授、美術史）	
●班員	
池内紀（東京大学文学部教授、文学史）	
井上正（佛教大学文学部教授、仏教美術史）	
奥野卓司（甲南大学文学部助教授、文化人類学）	
奥平俊六（大阪大学文学部、美術史）	
狩野博幸（京都国立博物館、美術史）	
神崎宣武（著述業、民俗学）	
木下直之（兵庫県立近代美術館学芸員、美術史）	
切畑健（大手前女子大学文学部教授、工芸史）	
熊倉功夫（国立民族学博物館教授、文化史）	
小泉和子（生活史研究所代表、生活文化）	
佐野みどり（武蔵野美術大学造形学部助教授、美術史）	
朱捷（中京女子大学家政学部助教授、比較文学）	
杉山二郎（佛教大学文学部教授、芸術史）	
関井光男（近畿大学文芸学部助教授、日本文学）	
高階秀爾（国立西洋美術館長、美術史）	
高橋享（名古屋大学大学院人間情報研究科教授、日本文学史）	
田中優子（法政大学第一教養部教授、日本文学）	
立川武蔵（国立民族学博物館教授、仏教史）	
玉蟲敏子（助静嘉堂文庫学芸員、美術史）	
佃一輝（一茶庵家元、江戸文化）	
坪内祐三（目白学園女子短期大学、マスコミ学）	
中沢新一（中央大学総合政策学部教授、人類学）	
橋爪紳也（京都精華大学人文学部助教授、建築史）	
服部幸雄（千葉大学文学部教授、芸能史）	
日高薫（国立歴史民俗博物館助手、日本文学史）	
正木見（中京女子大学文学部助教授、宗教学）	

増淵宗一（日本女子大学人間社会学部教授、美学）	
丸山伸彦（国立民族学博物館助手、工芸史）	
宮田登（神奈川大学経済学部教授、民俗学）	
山路興造（京都市立歴史資料館長、芸能史）	
井波律子（日文研教授、中国史）	
岡部あおみ（日文研客員助教授／バリ国立高等美術学校客員教授、近現代美術史）	
ウィリアム・H・サモニデス（日文研客員助教授／マサチューセッツ大学助教授、日本美術史・文化史）	
杉本秀太郎（日文研教授、比較文学）	
鈴木貞美（日文研助教授、日本文学）	
中西進（日文研教授、日本文学）	
考賀徹（日文研教授、比較文化）	
バトリシア・フィスター（日文研寄附研究部門助教授、美術史）	
別役恭子（日文研寄附研究部門教授、美術史）	
村井康彦（日文研教授、文化史）	
山折哲雄（日文研教授、宗教学）	
山口昌男（日文研客員教授／静岡県立大学大学院国際関係学研究科教授、文化人類学）	
●成果物	
辻惟雄編『「かざり」の日本文化』（角川書店、1998年12月）	
●研究発表	
1993年	4月27日 辻惟雄「趣旨説明」 井上正「仏教美術における荘厳」 山口昌男「近代日本の奇人・序説」
1993年	4月28日 橋爪紳也「凱旋門と花電車—祝祭のディスプレイ—」 小泉和子「指物と日本人」 早川聞多「父早川幾忠を語る—その1 生い立ちから青年時代まで—」
1993年	5月28日 関井光男「奇人伝の系譜」 山口昌男「近代日本奇人論序説（2）」
1993年	6月22日 井上章一「広告人形の一世紀—まねき猫からカーネルサンダー—」 木下直之「造物趣向遅咲—細工見世物の行方—」
1993年	9月28日 井波律子「中国の奇人たち」
1993年10月27日	増淵宗一「かわい文化考」 本田和子「少女と飾り—実用性と部分増殖による非実用性への転換—」
1993年11月26日	池内紀「奇人について」
1994年	2月18日 山口昌男、坪内祐三「官武外骨と明治・大正文化史」
1994年	6月21日 泉万里「『日域金碧』の展開—15世紀のジャポニズム—」 辻惟雄「『風流』とつくりもの」
1994年	6月22日 杉山二郎「松岡静雄論」
1994年	8月10日 日高薫「うるし工芸とその文様構成」 丸山伸彦「野村コレクション—小袖屏風とその背景—」
1994年	9月24日 安村敏信「河鍋晩斎—その人と作品と—」 辻惟雄「源道人の絵画」
1994年12月14日	立川武蔵「日本におけるマンダラの諸相」 正木見「パンプルツホルテンの仏たちとマンダラ」
1995年	2月14日 須藤弘敏「仏教美術とくに浄土教美術を巾広い視野から専攻」 玉蟲敏子「日本中世・近世の装飾美術を新しい角度から考察」
1995年	7月 7日 坪内祐三「横山健堂の奇人伝について」 長田俊樹「言語学における三大奇人」
1995年10月13日	佃一輝「茶壳翁をめぐる奇人たち」 辻惟雄「『近世畸人伝』の奇人観」
1995年10月14日	佃一輝「煎茶家元一茶庵見学」



「一茶庵について総合討論」		
1996年	3月 4日	福井純子「光妙寺三郎の足跡」 赤瀬川原平「外骨の表現」
1996年	3月 5日	山口昌男「奇人論再論」

# 023 公家と武家

●研究域
第3研究域 文化比較（生活）
●共同研究期間
1993（平成5）年4月～1995（平成7）年3月
●研究の概要
表記のテーマは一見陳腐であり、すでに研究され尽くされた感があるが、実際には個々のケースに限られていて、総合的な研究はなさに等しい。
そこで、本研究では、日本の社会の母胎となった前近代の社会や文化の構造を理解する一環として、公家（貴族）や武家といった身分・秩序の形式や職能の差異を、日本以外に視野を広げ、アジアやヨーロッパなどの諸地域・諸民族の場合と比較検討することによって浮かび上がらせた。さらに、典型的な武士層が成長した地域と、文官支配が優越して武士の出現を見なかった地域のちがいは何かなど、官僚制の問題をふくめて関連する諸問題を取り上げた。
●研究代表者
村井康彦（日文研教授、日本文化史）
●幹事
笠谷和比古（日文研助教授、日本史）
●班員
井上浩一（大阪市立大学文学部助教授、西洋史）
江川温（大阪大学文学部助教授、西洋史）
大庭脩（関西大学文学部教授、東洋史）
瀧谷寿（同志社女子大学文学芸学部教授、日本史）
加納重文（京都女子大学文学部教授、日本文学）
川嶋将生（立命館大学文学部教授、日本史）
源城政好（宇治市立宇治歴史資料館長、日本史）
下坂守（京都国立博物館資料管理研究室、日本史）
高田信敬（鶴見大学文学部助教授、日本文学）
瀧浪貞子（京都女子大学文学部助教授、日本史）
谷口昭（名城大学法学部助教授、法制史）
竺沙雅章（大谷大学文学部教授、東洋史）
名和修（財陽明文庫、日本史）
西山恵子（宇治市立宇治歴史資料館、日本史）
橋本義則（奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部、日本史）
三木亘（静岡精華短期大学教授、西洋史）
買憲堂（日文研客員助教授／北京大学助教授）
姜希雄（日文研客員教授／ハワイ大学教授、東アジア史）
マーティン・コルカット（日文研客員教授／プリンストン大学教授、日本史・宗教史）
千田稔（日文研客員教授／奈良女子大学文学部教授、古代日本の歴史地理学）
園田英弘（日文研教授、社会学）
田畑千秋（日文研客員助教授／名瀬市立奄美博物館主幹、沖縄史）
●成果物
村井康彦編『公家と武家—その比較文明的考察』（思文閣出版、1995年10月）
●研究発表

1993年	4月 3日	村井康彦「公家文化と日本社会」 笠谷和比古「武家社会研究の諸問題」
1993年	6月 4日	三木亘「イスラム世界における文官と武官」 大庭脩「秦漢の中央官制と将軍」
1993年	6月 5日	姜希雄「変革の選択—10世紀の日本と朝鮮—」 井上浩一「ビザンツ貴族の家文書」
1993年	8月 6日	江川温「貴族・家人・騎士」 谷口昭「公家政権と武家社会—中世日本における官僚制の枠組み—」
1993年	8月 7日	高田信敬「平安時代の文学における人の呼称」 橋本義則「徒歩・騎馬・車行・乗輿」
1993年	10月 1日	加納重文「藤原道長門と周辺貴族」 瀧谷寿「記録にみる王朝期の武者」
1993年	10月 2日	竺沙雅章「宋代の科举制と士大夫社会」
1993年	12月 3日	川嶋将生「室町期武家放実の成立」 瀧浪貞子「散位と職事—律令官人の形成—」
1993年	12月 4日	西山恵子「氏の家司について」 源城政好「三条西実隆と地方武士」 下坂守「門跡寺院の組織と機能—寺院勢力と公家・武家—」
1994年	2月 5日	名和修「公家文化の伝来—近衛家の場合—」 田畑千秋「琉球王朝の形成過程」
1994年	4月 1日	姜希雄「科举—初期高麗王朝における制度改革—」 討議 本年度の運営と論集の作成
1994年	4月 2日	笠谷和比古「武家社会研究の諸問題」 村井康彦「公家と武家 総論」
1994年	6月 3日	三木亘「イスラム世界の文官について」 津田順子「琉球王府正月儀礼の成立過程」
1994年	6月 4日	井上浩一「11～12世紀ビザンツの軍事貴族と文官貴族」 高田信敬「呼称から見た平安時代後宮制度の一面」
1994年	8月 5日	下坂守「中世寺院の機構と経済」 平山朝治「日本社会の文明化における公家と武家」
1994年	8月 6日	フランソワ・マセ「豊臣秀吉の葬送儀礼」 加納重文「藤原道長の禁忌意識」
1994年	9月 10日	村井康彦「貴族とは何か—序論—」 竺沙雅章「宋代の士大夫」 三木亘「アラブの貴種」 江川温「中世フランスの貴族」 瀧谷寿「日本古代における『貴族』概念」 名和修「近世公家の文化と生活」 谷口昭「貴族・家職・官僚制」
1994年	10月 7日	瀧浪貞子「古代官僚制の形成」 橋本義則「後宮の成立—官人の変貌—」 西山恵子「関東申次について」 源城政好「三条西実隆と粟屋親栄」
1994年	10月 8日	川嶋将生「足利義持期の公武関係—法華八講をめぐる—」 加納重文「藤原道長の禁忌意識」

# 024 短冊の研究

●研究域
第3研究域 文化比較（生活）

●共同研究期間
1993（平成5）年4月～1996（平成8）年3月
●研究の概要
いまはほとんど廃れてしまったが、短冊は、室町時代から江戸時代を通じて、近年では明治時代にいたるまで筆のすざびの一つの形式として広く世に流布し、贈与および交換の品として極めて重宝がられてきた。短冊は持ち運びに軽便な形をそなえているばかりでなく、極端に長細い空間に文字を配し、さらにはその限られた空間に一幅の絵をも盛り込むなど、繊細な技巧によって独特の小宇宙を発明してきた。
本研究は、小笹喜三氏の蒐集になる日文研所蔵の947葉の短冊を主たる対象にして、まずその読解を進めることから始まった。その上で、江戸後期から明治初期を視野に、短冊のもつ伝統文化の贈与・交換の実態や美的構造など明らかにして、日本の伝統文化の未探査であった領域に光りを当てた。
●研究代表者
杉本秀太郎（日文研教授、比較文化）
●幹事
白幡洋三郎（日文研助教授、産業技術史）
光田和伸（日文研助教授、江戸文学）
●班員
赤瀬信吾（京都府立大学文学部、江戸文学）
夢田道太郎（武庫川女子大学生生活美学研究所長、比較文化）
佃一輝（煎茶宗匠、(出)茶道花道連盟、江戸文化）
羽生清（京都芸術短期大学助教授、江戸文化）
原章二（早稲田大学政治経済学部教授、哲学・美学）
吉田孝次郎（画家、工芸）
冷泉為人（大手前女子大学文学部助教授、日本絵画史）
ミハイル・ウスペンスキー（日文研客員助教授／ロシア国立エルミタージュ美術館上級学芸員、日本美術史）
佐伯順子（日文研客員助教授／帝塚山学院大学文学部助教授、比較文学比較文化）
園田英弘（日文研教授、歴史社会学）
辻惟雄（日文研教授、日本美術史）
早川閑多（日文研助教授、江戸時代の文化史）
バトリシア・フィスター（日文研寄附研究部門助教授、江戸時代の絵画）
別役恭子（日文研寄附研究部門教授、江戸時代の絵画）
●研究発表
1993年 5月 14日 杉本秀太郎「研究会発足にあたって」
1993年 7月 9日 『短冊』読会
1993年 9月 17日 『短冊』読会
1993年 11月 19日 『短冊』読会
1994年 1月 21日 『短冊』読会
1994年 4月 22日 『短冊』読会
1994年 6月 10日 『短冊』読会
1994年 7月 22日 『短冊』読会
1994年 9月 30日 『短冊』読会
1994年 12月 9日 『短冊』読会
1995年 1月 27日 『短冊』読会
1995年 3月 3日 『短冊』読会
『短冊』試作及び批評
1995年 4月 21日 『短冊』読会
『短冊』試作及び批評
1995年 6月 23日 『短冊』読会
1995年 6月 24日 『短冊』読会
1995年 9月 1日 『短冊』読会
1995年 9月 2日 『短冊』読会・批評

025 日本人はキリスト教をどのように受容したか
●研究域
第3研究域 文化比較（思想）
●共同研究期間
1993（平成5）年4月～1997（平成9）年3月
●研究の概要
日本人はキリスト教をどのように受容してきたか。16～17世紀のキリシタン時代から、江戸期のキリシタン禁制時代、幕末の洋学受容の時代、明治以降の近代化過程におけるキリスト教受容の時代にわたって、その受容のパターン、性格を明らかにし、それぞれの特徴を他の諸国におけるキリスト教受容の仕方と比較・研究した。
●研究代表者
山折哲雄（日文研教授、宗教学）
●幹事
長田俊樹（日文研助手、言語学）
●班員
池上良正（筑波大学哲学・思想学系助教授、宗教学）
小谷晴男（筑波大学哲学・思想系助手、哲学）
紙谷威広（東京立正女子短期大学教授、民俗学）
川村邦光（天理大学文学部助教授、宗教思想史）
川村湊（法政大学第一教養部助教授、現代文学）
米井力也（大阪外国語大学外国語学部助教授、キリシタン文学）
島蘭進（東京大学大学院人文社会系研究科教授、宗教学）
島田裕巳（日本女子大学文学部助教授、宗教学）
田中雅一（京都大学人文科学研究所助教授、文化人類学）
中牧弘允（国立民族学博物館教授、宗教人類学）
正木晃（中京女子大学人文学部助教授、美術史）
ヘレン・ボールハッチェット（慶應義塾大学経済学部助教授、近代日本思想史）
宮崎賢太郎（長崎純心大学人文学部教授、宗教学）
米村竜治（筑紫女学園大学文学部助教授、民俗学）
エンゲルベルト・ヨリッセン（京都大学総合人間学部、キリシタン思想）
赤坂憲雄（日文研客員助教授／東北芸術工科大学教養部教授、日本思想史）
井上章一（日文研助教授、建築学）
上田紀行（日文研客員助教授／東京工業大学大学院社会理工学科助教授、文化人類学）
リュドミーラ・エルマコワ（日文研客員教授／ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長、日本古代文学、神話、和歌史）
佐藤知己（日文研客員助教授／北海道大学文学部助教授、言語学・アイヌ語学）
白幡洋三郎（日文研教授、科学技術史）
鈴木貞美（日文研助教授、近代文学）
ヘルベルト・ブルチョウ（日文研客員教授／カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授、日本文化）
松田清（日文研客員助教授／京都大学総合人間学部助教授、日本洋学史）
フランソワ・マセ（日文研客員教授／フランス国立東洋言語文化研究所教授、宗教史・思想史）
マヤ・ミルシンスキー（日文研客員助教授／リュブアナ大学助教授、儒学）
森岡正博（日文研助手、哲学）
●成果物
日文研叢書17、山折哲雄／長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』（日文研、1998年11月）



●研究発表		
1993年 4月 19日	山折哲雄「研究会発足にあたって」 井上章一「日本人種論と聖書の影」	
1993年 4月 20日	長田俊樹「インド少数民族におけるキリスト教の受容と変容」 高橋孝信「宣教師と近代インド学」	
1993年 5月 28日	川村邦光「浦上四番くずれをめぐって」 正木晃「雲照大日本国教論をめぐって」	
1993年 5月 29日	紙谷威広「潜伏キリシタンの終末論」 米井力也「キリシタンの果報」	
1993年 6月 14日	川村湊「韓国のキリスト教系新興宗教」 島田裕巳「父教しの精神史」	
1993年 6月 15日	小谷晴勇「茶の湯とキリスト教」 米村竜治「隠れ念仏と隠れキリシタンの重層」	
1993年 7月 16日	宮崎賢太郎「カクレキリシタンの信仰構造」 松田清「蘭学時代のキリスト教知識」	
1993年 7月 17日	エンゲルベルト・ヨリッセン「イエズス会における日本文化考と宣教法（16・17世紀）」	
1994年 1月 13日	新保祐司「内村鑑三と日本思想史」 富岡幸一郎「内村鑑三とカール・バルトー『ローマ書』解釈の同時性―」	
1994年 1月 14日	島蘭進「日本のキリスト教と修養道徳」 鈴木貞美「大正期南蛮ブームのなかで―芥川龍之介と中里介山―」 佐藤泰正「日本近代文学とキリスト教」	
1994年 1月 15日	中牧弘允「インディオはイエズス会をどのように受容したか―日本人と比較して―」 重松伸司「南インドにおけるキリスト教受容」	
1994年 4月 25日	山折哲雄「日本人はどのようにキリスト教を受容したか―これまでの共同研究会をふりかえって―」 討論会「日本人はどのようにキリスト教を受容したか」 コメンテーター：井上章一・長田俊樹	
1994年 4月 26日	田中雅一「インドにおける二つのキリスト教―村落キリスト教とマリア崇拜―」 小谷汪之「インドの近代とキリスト教」	
1994年 5月 26日	星宮智光「中国におけるキリスト教伝播上の諸問題」 山口昌男「明治初年のプロテスタント教会と静岡」	
1994年 5月 27日	池上良正「クリスチャン・ヒーリングの今日的展開」	
1994年 6月 21日	ヤン・スィングドー「日本人とキリスト教」 森岡正博「尾崎豊における一神教的なものの癒しとしてのロックン・ロール―」	
1994年 6月 22日	山形孝夫「キリスト教―悲しみと癒しの側面から―」 園田英弘「森有礼とキリスト教」 御厨貴「クリスチャン宰相 大平正芳の政治哲学」	
1994年 7月 27日	秀村研二「韓国の社会とキリスト教」 渕上恭子「韓国のキリスト教とシャーマニズム―『祈禱院』60年―」	
1994年 7月 28日	フランソワ・マセ「神道について」 上垣外憲一「林羅山の耶蘇教観」	
1995年 3月 17日	総括討論「日本人はどのようにキリスト教を受容したか」 コメンテーター：川村邦光・長田俊樹 山折哲雄「『犠牲』モチーフの移植について」	
1995年 3月 18日	島田裕巳「現地報告―インドのサイバング訪問報告―」	
1995年 5月 19日	田中雅一「民衆ヒンドゥー教の供儀報告要旨」 島田裕巳「オウム真理教の宗教史的理解」	
1995年 5月 20日	阿部美哉「キリスト教とナショナリズム」 荒木美智雄「日本人のキリスト教受容をめぐって」	
1995年 6月 19日	上田紀行「アムウェイ・マルチ商法の宗教性」 米井力也「キリシタンとクリスマス」	

1995年 6月 20日	白幡洋三郎「反省会とキリスト教」
1995年 7月 17日	井上章一「天守閣（天主）と天主教―江戸後期キリシタン幻想をめぐって―」 宮崎賢太郎「生月山田の初田様の行事について」
1995年 7月 18日	川村邦光「いけにえとしてのキリシタン」 鈴木範久「キリスト教の受容―人脈の面から―」
1995年 9月 25日	岸英司「賀川豊彦におけるキリシタン教」 小谷晴勇「京都学派の系譜学（1）―『愚鈍』なる哲学者、または寄人としての西田幾多郎―」
1995年 9月 26日	五野井隆史「初期キリシタン布教について」 井手勝美「キリシタン時代のキリスト教受容について」
1996年 2月 29日	芳賀徹「16・17世紀におけるキリシタン文学とその宗教史的背景」 島蘭進「キリスト教との葛藤と進歩思想―日本宗教への評価と変動―」
1996年 3月 1日	平成7年度研究会の総括討論
1996年 6月 28日	「自由討議―キリシタンは要するにどんなキリスト教徒だったのか―」
1996年 6月 29日	「自由討議―キリスト教は近代日本人に要するにどんな影響を与えてきたのか―」
1997年 3月 12日	山折哲雄「遠藤周作ははたしてキリスト教徒か」 鈴木貞美「内村鑑三ははたしてキリスト教徒か」
1997年 3月 13日	申昌浩「日韓両国のクリスマスの位置づけ」 米井力也「東方の三博士―キリシタンの位置づけ―」 紙谷威広「宮崎賢太郎著『カクレキリシタンの信仰世界』をめぐって」 宮崎賢太郎「紙谷評に答える」
1997年 3月 14日	長田俊樹「言語学のキーワードで解く宗教学」

## 026 日本文化の深層と沖縄

●研究域
第4研究域 文化関係（旧交圈Ⅰ）
●共同研究期間
1993（平成5）年4月～1996（平成8）年3月
●研究の概要
日本の基層文化の特性を、沖縄文化との関連において明らかにすることが第一の目的であった。宗教面におけるニライカナイ信仰やユタが、日本人の信仰とどのような関連性をもつのか。沖縄の農耕文化は、日本の農耕文化の発展とどのような関係にあるのか。琉球語と古代日本語は、どのような関係にあるのか。このような各分野における比較対象を積み重ねることによって、日本文化と沖縄文化の相互関係の実態を明らかにしようとした。
さらに、沖縄と中国の関係、沖縄と東南アジア諸文化との関連に視野を広げることにより、アジア・太平洋地域における沖縄文化の位置づけを試み、日本文化との比較対照を行った。
最後に、専攻各分野や歴史上の時代ごとに、どのようなテーマの立て方をすれば最も有効な沖縄文化と日本文化の比較研究が行えるか、研究のあり方に関する基本的な構図の提起も行った。
●研究代表者
梅原猛（日文研顧問・名誉教授、哲学） 山折哲雄（日文研教授、宗教学）
●幹事
上垣外憲一（日文研助教授、比較文化） 長田俊樹（日文研助手、言語学）

●班員
伊従勉（京都大学大学院人間・環境学研究科助教授、建築史） 上原孝三（沖縄尚学高等学校教諭、宮古地方研究） 内間直仁（千葉大学文学部教授、言語学） 大塚和義（国立民族学博物館教授、文化人類学） 高宮広土（札幌大学女子短期大学部講師、考古学） 田畑千秋（大分大学教育学部助教授、民俗学） 下野敏見（鹿児島純心女子大学国際言語文化学部教授、民俗学） 高良倉吉（琉球大学法文学部教授、琉球史） 崔吉城（広島大学総合科学部教授、韓国民俗学） 中本正智（東京都立大学人文学部教授、言語学） 波照間永吉（沖縄県立芸術大学附属研究所助教授、八重山地方研究） 埴原和郎（財団法人国際高等研究所副所長、自然人類学） 比嘉康雄（明治学院大学非常勤講師、沖縄の宗教） 福永光司（元京都大学人文科学研究所長、道教） 外間守善（沖縄文化協会、沖縄文学） 真栄平房昭（神戸女学院大学文学部助教授、東アジア国際交流史） 皆川隆一（慶應義塾高等学校教諭、文化人類学） 宮田登（神奈川大学経済学部教授、民俗学） 山田孝子（北海道大学文学部、認識人類学） 渡邊欣雄（東京都立大学人文学部教授、社会人類学） 赤坂憲雄（日文研客員助教授／東北芸術工科大学教養部助教授、民俗学） 伊東俊太郎（日文研教授、科学史） 上田紀行（日文研客員助教授／愛媛大学教養部助教授、文化人類学） 尾本恵市（日文研教授、自然人類学・人類遺伝学） 笠谷和比古（日文研助教授、日本史（近世）） 河合隼雄（日文研教授、心理学） 佐藤知己（日文研客員助教授／北海道大学文学部助教授、言語学・アイヌ語学） 中西進（日文研教授、上代文学） 村井康彦（日文研教授、日本史（古代・中世）） 毛昭晰（日文研客員教授／杭州大学教授、考古学） 安田喜憲（日文研教授、環境考古学）
●成果物
日文研叢書12、山折哲雄編『日本文化の深層と沖縄』（日文研、1996年12月）
●研究発表
1993年 5月 31日 中西進「研究会発足にあたって」 田中耕司「日本稲作の源流―南島経由説とマレー型稲作論から―」 田畑千秋「奄美の狩猟採集文化」
1993年 7月 19日 比嘉康雄「久高島の神々―家・元家・殿・ウタキ・ニラー・ハラー―」 上原孝三「宮古島西原のユークイについて」 波照間永吉「沖縄八重山の祭祀歌謡の形態」
1993年 9月 6日 高宮広土「先史時代の沖縄における適応課程についての作業仮説」 内間直仁「琉球方言における調和構造」
1993年11月 1日 上村俊雄「考古資料からみた南島文化の諸様相―沖縄とその周辺地域間の文物交流について―」 皆川隆一「見える神・見えぬ神・見てはならぬ神」
1994年 1月 10日 伊従勉「琉球王国祭祀儀礼の空間：開得大御御新下り儀礼と地方年中祭祀儀礼に見る儀礼原則」 津田順子「近世琉球の王府儀礼の中の『音』をめぐって」
1994年 5月 16日 福永光司「思想信仰としての南船北馬」 渡邊欣雄「現代沖縄の墓地風水」
1994年 7月 4日 大塚和義「蝦夷と琉球を結ぶ文化交流」 下野敏見「琉球文化圏の墓制と祖霊祭」

1994年 9月 26日 宮田登「ヒヨリミビトの系譜―王権論の基礎―」 高良倉吉「近世琉球における海上交通の状況」
1994年11月 21日 赤嶺政信「沖縄の祖霊信仰の若干の問題」
1995年 6月 2日 田畑千秋「美女に化ける豚」 長田俊樹「稲作文化考―伝播論と普遍論―」
1995年 6月 3日 共同討議「久高島の祭祀をめぐって」 伊従勉「琉球の年中祭祀祭場の仮説性について従来 の祭場論の批判的検討：久高島の祭場を中心に」 比嘉康雄「久高島の祭祀の構造」
1995年 9月 11日 山田孝子「アイヌの火の神について」 下野敏見「日本の火の神信仰―特に南西諸島を中心として―」
1995年 9月 12日 内間直仁「琉球方言の可能表現について」 崔吉城「タンゴル巫の世襲性について―韓国と沖縄を 中心に―」

## 027 総合雑誌「太陽」の総合的研究

●研究域
第5研究域 文化情報（日本における日本研究）
●共同研究期間
1993（平成5）年4月～1997（平成9）年3月
●研究の概要
日本の近・現代の文化・思想の動態を検証するのに格好なツールとして総合雑誌がある。その代表的な事例として、明治・大正・昭和期3代にわたって継続的に発行されてきた『太陽』があり、この事例研究を基に、各時代の文化・思想の傾向を、その時代に即しなおすことでのちの時代のイデオロギーによって隠されてしまった事象の掘り起こし、再把握をめざした。
こうした手法の研究は、雑誌が取り扱う個々の分野の史的展開の再検討に資するとともに、「総合」雑誌であるかゆえに日本の近・現代総体に対する既存の文化・思想イメージをも再検討し、修正することに役立つであろう。
●研究代表者
鈴木貞美（日文研教授、日本文学）
●幹事
井上章一（日文研助教授、意匠論） 光田和伸（日文研助教授、江戸文学） 北川浩之（日文研助手、地球科学）
●班員
相原和邦（広島大学教育学部教授、日本文学） 池内輝雄（筑波大学文芸・言語学系教授、日本文学） 石川弘義（成城大学文芸学部教授、大衆社会論） 石田秀実（九州国際大学経済学部教授、日本医学史） 井上健（東京工業大学工学部教授、比較文学） 今村忠純（大妻女子短期大学部教授、日本文学） 岩見照代（麗澤大学外国語学部助教授、日本文学） ウルリク・ヴェール（広島市立大学国際学部講師、日本女性史） 大和田茂（東京都立城北高等学校教諭、日本文学） 小田三千子（東北学院大学教養学部、比較文化） 金子務（大阪府立大学総合情報センター教授、科学史） 鎌田東二（武蔵丘短期大学助教授、宗教学） 北岡伸一（立教大学法学部教授、日本政治史・外交史） 北川勝彦（関西大学経済学部教授、国際関係論） 佐藤一樹（二松学舎大学文学部助教授、中国近代思想・日中比較思想史） 佐藤誠三郎（埼玉大学大学院政策科学研究科教授、国際関係論）



佐藤バーバラ（成蹊大学文学部助教授、日本史）
杉岡津岐子（吉備国際大学社会福祉学部、教育心理学）
関井光男（近畿大学文芸学部助教授、日本文学）
銭嶋（神戸大学外国人教師、中国文学）
張鏡（國學院大學助教授、日本文化論）
坪内稔典（京都教育大学教育学部教授、日本文学）
坪内祐三（目白学園女子短期大学、マスコミ学）
中川成美（立命館大学文学部教授、比較文学）
林正子（岐阜大学地域科学部教授、比較文学）
藤本寿彦（都留文科大学、日本近代文学）
正木晃（中京女子大学人文学部助教授、日本美術史）
三谷憲正（佛教大学文学部助教授、日本近代文学）
呂順長（杭州大学日本文化研究所所員／神奈川大学人文学研究所客員研究員、中国文化交流史）
渡辺守雄（九州国際大学法学部助教授、メディア論）
柏岡富英（日文研助教授、社会学）
上垣外憲一（日文研助教授、比較文化）
マイヤ・グラシモヴァ（日文研客員教授／ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員、日本文学）
佐々木英昭（日文研客員助教授／名古屋工業大学工学部助教授、比較文学）
白幡洋三郎（日文研教授、庭園史）
園田英弘（日文研教授、社会学）
芳賀徹（日文研教授、比較文化）
ヘルベルト・ブルチョウ（日文研客員教授／カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授、日本文化）
リース・モートン（日文研客員教授／ニューカッスル大学現代言語学科教授、比較文学）
山折哲雄（日文研教授、宗教学）
山口昌男（日文研客員教授／静岡県立大学大学院国際関係学研究科教授、文化人類学）
劉建輝（日文研客員助教授／南開大学副教授、日本文学）
●成果物
鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』（思文閣出版、2001年7月）
●研究発表
1993年 4月 9日 関井光男「『太陽』のメディアとしての性格」
1993年 4月 10日 鈴木貞美「『太陽』創刊期のメイン論文」
1993年 5月 21日 全員「『太陽』創刊記事とその執筆者」
1993年 6月 25日 坪内祐三「『太陽』創刊号中伝欄、地理欄、小説欄、雑録欄」
1993年 6月 26日 全員 細目検討
1993年 7月 16日 鎌田東二「『太陽』創刊号『文苑』欄について」、「敵愾百首」 大和田茂「短歌」
1993年 7月 17日 関井光男「『太陽』創刊号『史伝』、『小説』について」
1993年 9月 17日 関井光男「『太陽』創刊号 史伝欄他」 岩見照代「『太陽』創刊号 家庭欄」
1993年 9月 18日 中川成美「『太陽』創刊号 海外彙報欄」
1993年 12月 17日 関井光男「文芸欄、その他」 鈴木貞美「『太陽』性格について」
1994年 5月 27日 大和田茂「『太陽』創刊号の反響」
1994年 5月 28日 鈴木貞美「創刊二年間の論説欄の動向」
1994年 7月 15日 ジャイルズ・リキター「明治期出版界における『太陽』」 坪内稔典「創刊期『太陽』の漢詩、和歌、俳諧」
1994年 7月 16日 鈴木貞美「明治29年政治欄」
1994年 11月 11日 劉建輝「明治20年代末の『太陽』に見る対中国観」 鈴木貞美「明治29～30年の『太陽』政治欄」
1994年 11月 12日 上垣外憲一「日朝関係について」 鈴木貞美「明治29～30年の『太陽』政治欄」

1995年 4月 21日	鈴木貞美「本年度計画について」 三谷憲正「報告—創刊期『太陽』における朝鮮観—」
1995年 4月 22日	相原和邦「報告—『太陽』と『女』—」
1995年 6月 16日	石田秀実「保健衛生思想について」 大和田茂「軍事について」
1995年 6月 17日	鈴木貞美「日清・日露戦争間の政治状況」
1995年 7月 21日	藤本寿彦「農業について」 ジャイルズ・リキター「明治期印刷術と出版界」
1995年 7月 22日	鈴木貞美「日清・日露戦争間の政治状況」
1996年 1月 19日	ジョン・クラーク「『太陽』など明治後期雑誌のグラフィック様式と大衆の視覚的意識の変容」
1996年 1月 20日	鈴木貞美「日清・日露戦争間の政治状況」
1996年 4月 19日	「第一回共同研究成果報告の検討と今後の課題」 ～20日
1996年 7月 19日	リース・モートン「明治期恋愛観と『太陽』」 林正子「高山樗牛、姉崎喃風往復書簡を中心に」
1996年 9月 20日	佐藤バーバラ「『太陽』に見られる20世紀初頭の家庭像」 小田三千子「『太陽』英文欄について—神田乃武のことなど—」
1996年 9月 21日	鈴木貞美「『太陽』日露戦争期の記事について」
1996年 12月 20日	岩見照代「家庭欄の変遷」 林正子「日露戦争後の〈生命〉の思想—姉崎喃風を中心に—」
1996年 12月 21日	藤本寿彦「農業欄記事の意味」
1996年 11月 15日	三谷憲正「日露戦争時の朝鮮観」 鈴木貞美「日露戦争と『太陽』」 大和田茂「浮田和民と『太陽』」



共同研究の成果をまとめた出版物（第1期）



「日本文学と「私」」共同研究会風景（1987年）



「総合雑誌『太陽』の総合的研究」共同研究会討議（1994年）



第2期 1994(平成6)～2002(平成14)年度の記録	
●公募型共同研究が始まる	今度は研究代表者としてリーダーへとステップアップして登場したことである。彼らは、幹事として日文研「共同研究」の手法を試行錯誤しながらみずから体得しただけでなく、研究成果をまとめて出版物に仕上げるノウハウも身につけていた。その結果、いざ研究代表者となるや、その学際的な共同研究の総合化という核心の部分で幹事時代の経験を生かして、自在に日文研スタイルを発揮することができた。
第1期の最終年度=1993(平成5)年度には、4月から新しい共同研究が一気に7件もスタートして、全体で17件が同時に進行している状態になり、まさに共同研究花盛り、の観を呈していた。そして、1994(平成6)年4月から、新しいタイプの共同研究が始まった。共同研究の公募制度をスタートさせたのである。	こうした新世代が生み出した代表的な事例をあげておこう。嚆矢は、「日本における中産階級の成立過程—人口・家族・職業・階層—」(1995～97年度、研究代表者：園田英弘)である。また、既に第1期で取り上げられた課題をシリーズとして引き継いだものに「公家と武家—その比較文明的考察—」(1996～98年度、研究代表者：笠谷和比古)がある。同様に、第1期末にみずからスタートさせた企画を引き継いだ「大正期総合雑誌の学際的研究」(1997～99年度、研究代表者：鈴木貞美)、日文研収集の図書=図版を活用した「19世紀の日本『発見』—旅行と旅行記の中の異文化像—」(1998～2000年度、研究代表者：白幡洋三郎)などがあり、彼らはこの期間中に複数の共同研究を推進するなど、中核を担うことになった。また、この時期にその後の共同研究を主宰する中堅どころの研究者の入所が続き、教員の世代交代も進んでいった。
この公募制度は、外国人研究者を含めた日本文化研究者を対象としたものであって、応募者は自らが研究代表者となって推進したい共同研究の研究課題(テーマ)と研究方法を提示し、書類審査を受ける。問題なしと判断されたら、日文研が推薦する幹事(日文研専任教員)とともに研究班を編成し、実施計画を作成し、各年4月～翌年3月の1カ年を期限として研究を進めていくというものであった。公募研究導入の目的は、日文研「共同研究」の推移が順調であること、そしてその成果が刊行物となって蓄積され、新しい日本文化研究の方法としての評価がすっかり定着したことを受けて、こうした有効な研究方法と機会を、広く外部研究者に開放しようとしたところにあった。また、これを機に若くて有能な日本文化研究者の開拓という意味あいも込められていた。期間が1カ年というのはいかにも短いが、研究課題を具体的にかなり絞っていること、運営の一切を日文研が補助しなければならないこと、外国人研究者の場合に契約期間が原則1カ年であったことなどの理由によるものである。	●長期シリーズ研究が定着し始める
最初の公募制度利用の共同研究は「制約に基づく日本語の構造の研究」(研究代表者：郡司隆男)で、1994年4月に始まり、翌1996年1月には同名の日文研叢書をその成果として発刊している。以来、この第2期の9年間で16件が実施された。その後、今日にいたるまで延べ33件にまで及んでいることは、国立研究機関としての公共性と開放的な研究風土、そして何よりも、文字通り国際的な「日本文化研究センター」として位置づけが明確になったればこそその結果であると言っても過言ではなからう。	日文研「共同研究」が国際性・学際性・総合性を標榜する以上、その課題(テーマ)のスケールは、大きければ大きいほど歓迎される傾向にあった。同じ大きな枠組みを課題として、その構成や展望を組み替えて研究の深化を図ろうとするのである。結果的に、共同研究のシリーズ化が始まった。
●第2世代が主役に	その第1弾となったのが、第1期にスタートした「公家と武家」(1993～94年度、研究代表者：村井康彦)であった。これは、いわば序論のような位置づけで、2カ年で行ったん終了した後、第2期から研究代表者が交代して本格的な多角的展開をすることになった。シリーズ第2回目の共同研究が、上述した「公家と武家—その比較文明的考察—」(1996～98年度、研究代表者：笠谷和比古)で、同じく第3回目が「公家と武家—王権と儀礼の比較文明的考察—」(2000～02年度：研究

代表者：笠谷和比古)、第4回目が「公家と武家—官僚制と封建制の比較文明的考察—」(2003～05年度、研究代表者：笠谷和比古)と引き継がれ、実に11年間にわたる長期共同研究となった。このため、「公家と武家」は、そのスケールの大きさと相まって、内容的にも日文研「共同研究」のシンボリック的存在になった。

また、日本文化における怪異・妖怪・異界文化に焦点をあてた共同研究は、資料収集も含めた長期にわたるシリーズとなっていった。その初回は、「日本における怪異・怪談文化の成立と変遷に関する学際的研究」(1997～2000年度、研究代表者：小松和彦)である。以降、「日本人の異界観—その構造と意味—」(2002～04年度、研究代表者：小松和彦)と第2期で連続して実施され、さらに「怪異・妖怪文化の伝統と創造—前近代から近現代まで—」(2006～08年度、研究代表者：小松和彦)、「怪異・妖怪文化の伝統と創造—研究のさらなる飛躍に向けて—」(2010～12年度予定、研究代表者：小松和彦)と、現在にいたるも継続中である。予定まで入れると、12年半という長きにわたる大型共同研究となって、こちらも日文研「共同研究」の代名詞的存在になっていった。この研究によって、関連する史料収集も進み、日文研はこの領域のメッカ的存在になっている。

もちろん、単発的なテーマでも日本文化へのアプローチは多彩に展開された。次の第3期に本格化する「アジア」の視座から日本文化を探究する試みなどが、この世紀をまたいだころから始められた。

028 日本人および日本文化の地域性
●研究域
第2研究域 構造研究(人間)
●共同研究期間
1994(平成6)年4月～1997(平成9)年3月
●研究の概要
日本人、または日本文化が決して均質なものではなく、その内部に地理的な差異が存在することはよく知られている。たとえば、東日本と西日本とでは、ヒトの身体形質をはじめとして言語、民俗、考古学的資料などについて、多岐にわたって差異が存在する。しかし、そのような差異がなぜ生じたのかという点については、いまだ必ずしも明確な説明がなされていない。
本研究では、したがって、日本人および日本文化の内部に存在するこの差異を、さまざまな研究分野についてできるだけ多く抽出し、そうした差異が生じるにいたった原因および歴史過程を、学際的な討論によって明らかにしようとした。このことによって、日本人論あるいは日本文化論に新たな視点を与えられることになった。——日本人や日本文化の内部の多様性にもっと注目すべきであると主張するにいたったのである。

●研究代表者	尾本恵市(日文研教授、自然人類学・人類遺伝学)
●幹事	小野芳彦(日文研助教授、情報学)
北川浩之(日文研助手、地球化学)	
●班員	青木健一(東京大学大学院理学系研究科教授、集団遺伝学)
井上史雄(東京外国語大学外国語学部、言語学)	
岩井宏實(帝塚山大学教養学部、民俗学)	
上野和男(国立民族学博物館助教授、社会人類学)	
大林太良(東京女子大学現代文化学部教授、民族学)	
河内真紀子(生命工学工業技術研究所人間環境システム部、形質人類学)	
小島美子(東京都江戸東京博物館、日本音楽史)	
小林隆(東北大学文学部、方言地理学)	
小山修三(国立民族学博物館教授、民族考古学)	
斎藤成也(国立遺伝学研究所助教授、集団遺伝学)	
佐々木高明(国立民族学博物館長、民族学)	
真田信治(大阪大学文学部助教授、言語学)	
佐原真(国立民族学博物館副館長、考古学)	
鈴木秀夫(清泉女子大学文学部、地理学)	
百々幸雄(札幌医科大学教授、形質人類学)	
徳川宗賢(学習院大学文学部教授、言語学)	
埴原和郎(日文研名誉教授／京都文化短期大学教授、形質人類学)	
春成秀爾(国立歴史民俗博物館教授、考古学)	
宝来聰(国立遺伝学研究所助教授、人類遺伝学)	
松崎憲三(成城大学文芸学部、民俗学)	
松下孝幸(土井が浜人類ミュージアム館長、形質人類学)	
松山利夫(国立民族学博物館助教授、文化人類学)	
松村博文(国立科学博物館、形質人類学)	
溝口常俊(富山大学文学部、地理学)	
都出比呂志(大阪大学文学部教授、考古学)	
村山聡(香川大学教育学部、経済学)	
山口敏(国立科学博物館人類研究部長、形質人類学)	
吉崎昌一(北海道大学文学部教授、考古学)	
王秀文(日文研客員助教授／大連民族学院基礎部副主任、日本語・文化)	
落合恵美子(日文研助教授、社会学・歴史人口学)	
笠谷和比古(日文研教授、歴史学・古文書学)	
柏岡富英(日文研助教授、社会学)	
黒須里美(日文研助手、社会学)	
千田稔(日文研教授、歴史地理学)	
中西進(日文研教授、日本文学・比較文学)	
宮田登(日文研客員教授／筑波大学歴史・人類学系教授、民俗学)	
安田喜憲(日文研教授、地理学・環境考古学)	
吉村作治(日文研客員助教授／早稲田大学人間科学部助教授、エジプト美術・考古学)	
●研究発表	
1994年 5月 19日	尾本恵市「遺伝子分布よりみた日本人の地域性」
	徳川宗賢「言語からみた日本の地域区分」
1994年 5月 20日	今後の研究の進め方についての提言と検討
1994年 7月 6日	青木健一「農耕の伝播と初期農耕民の分布」
	小島美子「音楽からみた日本海側と太平洋側の地域差」
	小山修三「夢の考古学」
1994年 7月 7日	埴原和郎「いわゆる寒冷適応について」
1994年11月24日	笠谷和比古「日本史における国郡制の枠組みについて」
	小野芳彦「地域性の検証理論と評価について」
1994年11月25日	吉崎昌一「考古学からみた縄文時代の地域性」
	大林太良「社会組織の地域的類型」



1995年 1月 12日	佐原真「考古学と地域性」 都出比呂志「古代国家形成期の地域性と共通圏」
1995年 1月 13日	松山利夫「『山地の文化』設定の可能性」 上野和男「日本の家族と祖先祭祀の地域性」 安田喜憲「鳥浜貝塚と三内丸山遺跡の比較」
1995年 3月 7日	宝来聰「DNA多型からみた日本人の地域差」 松下孝幸「弥生人の地域（性）差」 春成秀爾「熊祭の起源」 岩井宏實「大和、摂津、河内、和泉の地域」
1995年 3月 8日	斎藤成也「苗字分布から見た日本人の地域差」 真田信治「地域言語の動態―関西とその周辺部―」 小林隆「方言からみた日本の地域差」 宮田登「『民俗地図』をよむ」
1995年 5月 26日	松下孝幸「弥生人の地域性」
1995年 5月 27日	小シンポジウム「地域性という概念」
1995年 7月 21日	小シンポジウム「日本列島の地域性：マクロの視点から」 埴原和郎「日本人の地域性：古墳時代を中心として」 都出比呂志「古墳文化の地域性」
1995年 7月 22日	小林隆「活用からみた日本語の地域性」 小島美子「民俗音楽における日本海側と太平洋側」 佐々木高明「日本文化の東西」
1995年 9月 18日	小シンポジウム「日本列島の地域性：ミクロの視点から」 鈴木秀夫「日本文化の地域差」 比嘉政夫「社会構造からみた南西諸島の地域性」 上野和男「南島民俗の地域性」
1995年 9月 19日	土肥直美「人骨形態からみた南西諸島のヒト」 安里進「考古学における南西諸島の地域性」
1995年 11月 17日	小シンポジウム「地域性と環境要因」 尾本恵市「人類進化と環境」 足立己幸「食事と環境のかかわり」
1995年 11月 18日	河内真紀子「生体計測値の地域差と環境要因」 千田稔「聖なる空間の成立―山と川をめぐって―」
1996年 1月 19日	小シンポジウム「地域性と歴史要因」 青木健一「農耕の伝播に伴うヒトの移動と地域性」 斎藤成也「苗字の地域分布（一）九州に多いいくつかの苗字について」
1996年 1月 20日	安田喜憲「縄文時代の地域性」
1996年 3月 4日	小シンポジウム「地域制研究のあらたな方法」 小山修三「青森県の地域性：遺跡データベースの分析」 五島淑子「全国農産表からみたコメ地域とヒエ地域― 栄養学の視点から―」
1996年 3月 5日	村山聡「都市化プロセスにおける地域性―日本とヨーロッパ特にドイツとの比較―」 真田信治「伝播と言語フィルター」
1996年 4月 26日	平成8年度の計画、国際シンポジウムについて、他 ～27日
1996年 7月 8日	北川浩之「地域研究と時間」 小島美子「ヒトの体型と文化」
1996年 7月 9日	総合討論
1996年 11月 29日	大林太良「黒潮文化圏」
1996年 11月 30日	総合討論
1997年 1月 31日	江守五夫「環日本海文化圏」 春成秀爾「鳥根県加茂岩倉銅鑛と弥生社会」

029	制約に基づく 日本語の構造の研究
●研究域	
第2研究域 構造研究（人間）	
●共同研究期間	
1994年（平成6）年4月～1995（平成7）年3月	
●研究の概要	
日文研の共同研究が公募制を導入した最初の研究である。期間が1カ年と短期間に設定されていたため、課題は絞り込んだ集約的なものになった。	
本研究の目的は、制約に基づく文法理論に立脚した明示的な文法理論を枠組として設定し、日本語文法と英語などの他言語の文法の比較対照研究を行い、日本語がもつ言語の特徴を文法面から明らかにすることを試みることであった。また、認知科学や情報科学の知見を取り入れ、制約の静的な側面と言語処理という動的な側面を融合させる新しい言語理論構築のための学際的な基礎研究も行った。	
●研究代表者	
郡司隆男（日文研客員助教授／大阪大学大学院言語文化研究科助教授、言語学）	
●幹事	
小野芳彦（日文研助教授、情報学）	
●班員	
五十嵐義行（東京国際大学教養学部講師、言語文化学） 今仁生美（名古屋学院大学外国語学部助教授、言語学） 江口一久（国立民族学博物館教授、言語民族学） 白井賢一郎（中京大学教養部教授、認知科学） 白井英俊（中京大学情報科学部助教授、情報科学）	
外池俊幸（名古屋大学言語文化学部助教授、言語文化学） 富岡豊（松下電器産業マルチメディア研究所研究員） 中川裕志（横浜国立大学工学部助教授、情報工学） 橋田浩一（電子技術総合研究所研究員、認知言語学） 原田康也（早稲田大学法学部助教授、法学） 矢田部修一（立命館大学経営学部助教授、言語学） 長田俊樹（日文研助手、言語学） 中西進（日文研教授、日本文学）	
●成果物	
日文研叢書10、郡司隆男編『制約に基づく日本語の構造の研究』（日文研、1996年1月）	
●研究発表	
1994年 4月 30日 郡司隆男「研究会の趣旨」	
1994年 6月 6日 郡司隆男「経過報告、次回計画の打合せ」 今仁生美「日本語の否定の構造」 橋田浩一「制約と確率」	
1994年 7月 2日 松井理直「制約に基づく日本語音韻論の試み」 中川裕志「心理的因果性を表す複文における意味的役割間の制約―『ので』『のに』で接続される場合を中心にして―」	
1994年 9月 19日 外池俊幸「素性値の『可能な値』での自然な解釈」 矢田部修一「現代日本語における三種類の主格助詞省略現象」	
1994年 10月 8日 野口直彦「取り立て助詞の機能と解釈」 白井英俊「主題化と関係節」	
1994年 11月 14日 白井賢一郎「日本語の条件文：情報論的観点から」 富岡豊「日本語の句読法」	

1994年12月20日	宇田千春“On the syntax of <i>te-aru</i> resultatives” ピーター・セルズ“Subjectless complements in Japanese” 外池俊幸「強要（Coercion）：強要されて出来ること出来ないこと―その2―」
1994年12月 21日	津田宏“Processing Heterogeneous Natural Language Constraints” ダニエル・フリッキンジャー“Verbmobil HPSG English Grammar Project”
1994年12月 22日	矢田部修一“Three types of <i>ga</i> -ellipsis in Modern Standard Japanese” 飯田雅代“Zero Pronouns Unexpressed Arggument in the HPSG”
1995年 2月 4日	橋田浩一「制約と確率・まとめ」 松井理直・郡司隆男「制約に基づく日本語音韻の試み」 外池俊幸「強要：強要されて出来ること出来ないこと」 白井英俊「主題化と関係節・まとめ」 白井賢一郎「日本語の条件文：情報理論的観点から」 富岡豊「日本語の句読法」 宇田千春「『てある』の用法・まとめ」 五十嵐義行「日本語の時制と相」
1995年 3月 24日	小野芳彦「計算機が制約を自ら発見するには」 中川裕志「複文の意味論―まとめ―」 原田康也「取り立て助詞の機能と解釈―まとめ―」 全員「今仁論文『否定表現と状況依存性』検討」

030	歴史のなかの病いと医学 ―日本を中心に―
●研究域	
第4研究域 文化関係（旧交圏Ⅱ）	
●共同研究期間	
1994年（平成6）年4月～1997（平成9）年3月	
●研究の概要	
日本の医学は中国医学の受容に始まったが、漢方にしても、またそれから分離した鍼灸にしても、中国医学とは大きく異なる理論と治療の体系をつくりあげた。診断法にしても、脈診を棄てて腹診という特異な方法を編み出している。こうした独自の展開は、日本社会における病いの文化的位置づけと深く関わっているに違いない。	
病いは、時代と社会の文化的所産であり、疾病観、身体観、自然観、宗教観、社会観などによって、そのあり方が規定される。病いとのかかわり、日本の医学の展開を追跡することが本研究の課題であった。もとより、本研究には、中国、韓国、さらにはインドからヨーロッパにいたる諸地域との比較、交流の視点が不可欠であることはいうまでもない。	
研究方法は、主たる対象領域を近世に置き、宋・金・元医学に依拠した後世派と、それを批判して漢・唐医学への復帰を唱えた古方派の医学を、同時代の病いのあり方と思想潮流との関わりのなかで批判的に分析し、学問としての医学の体系を解明しようとした。それが、日本の医学の独自性を明らかにすることでもあるからであった。共同研究と並行して、基礎研究として後世派と古方派の代表的な著作の会読も行った。	
●研究代表者	
山田慶兒（日文研教授、科学史）	
●幹事	
栗山茂久（日文研助教授、医学史）	

笠谷和比古（日文研教授、歴史学）	
●班員	
石田秀実（九州国際大学経済学部教授、哲学） 磯野直秀（慶應義塾大学経済学部、日本動物学史） 伊東俊太郎（日文研名誉教授／麗澤大学教授、科学史） ミヒェル・ヴォルフガング（九州大学言語文化部助教授、比較言語文化） 小林清市（山口大学教育学部講師、中国科学史） 桜井謙介（塩野義製薬中央研究所主任研究員、薬学） 白杉悦雄（関西大学非常勤講師、医学史） 新村拓（京都府立医科大学教授、医学史） 杉本秀太郎（日文研名誉教授、文学） 田代和生（慶應義塾大学文学部教授、歴史学） 武田時昌（京都大学人文科学研究所、中国科学史） 塚本学（国立歴史民俗博物館名誉教授、産業技術論） 津谷喜一郎（日本医科歯科大学難治疾患研究所助教授、医学） 中野益男（帯広畜産大学教授、環境科学） 二本柳賢司（青島大学医学院、日本医学史） レギナ・ヒューブナー（立命館大学法学部、医療人類学） 昼田源四郎（福島大学教育学部、精神医療史） 正木晃（中京女子大学人文学部、宗教学） マセ美枝子（京都府立医科大学客員研究員、医学史） 真柳誠（茨城大学人文学部、医学史） 三木亘（元静岡精華短期大学教授、歴史学） 宗田一（日本医史学会常任理事、医学史） ハイドゥルン・ライセンヴェーバー・ヘーヴェル（北里研究所附属東洋医学総合研究所、日本医学史） 上田紀行（日文研客員助教授／愛媛大学教養部助教授、文化人類学） 落合恵美子（日文研助教授、女性史） 酒井シヅ（日文研客員教授／順天堂大学医学部教授、医学史） 白幡洋三郎（日文研助教授、産業技術史） 中岡哲郎（日文研客員教授／大阪経済大学経営学部教授、産業技術論） 芳賀徹（日文研教授、比較文学） 松田清（日文研客員教授／京都大学総合人間学部教授、比較文学） 森岡正博（日文研助手、哲学） 山折哲雄（日文研教授、宗教学） 梁峰（日文研外国人来訪研究員／北京中医薬大学助教授、医学史） 廖育群（日文研客員助教授／中国科学院自然科学史研究所副研究員、医学史） 吉田忠（日文研客員教授／東北大学東北アジア研究センター教授、科学史） ●成果物	
山田慶兒／栗山茂久共編『歴史の中の病と医学』（思文閣出版、1997年3月）	
●研究発表	
1994年 5月 20日 山田慶兒「共同研究の方針について」 宗田一「日本医学史の流れ」	
1994年 5月 21日 酒井シヅ「日本医学史研究の基本文献」	
1994年 7月 15日 栗山茂久「歴史のなかの病・病のなかの歴史」 二本柳賢司「丹劑と東洋医学」	
1994年 7月 16日 真柳誠「江戸期の中国医学の受容―輸入書と復刻書―」 アンドリュー・ゴープル「僧侶と中世医療の変遷」	
1994年 9月 16日 ミヒェル・ヴォルフガング「16・17世紀ヨーロッパ人が見た東洋医学」 横田則子「日本近世社会と癩」	
1994年 9月 17日 松田清「賀來佐之と西洋医学」	
1994年 11月 18日 昼田源四郎「狐憑きの心性史―常識と共同幻想の狭間―」 中野益男「トイレから見た病気」	



1994年 11月 19日	杉立義一「病草紙（主として旧関戸家本）について」
1995年 3月 3日	山田慶兒「医学における古学とはなにであったか 山脇東洋と職業及び学問としての医の自立」 小林博行「安藤昌益の医学と脾胃論」
1995年 3月 4日	白杉悦雄「失われた疝気の経験」
1995年 5月 19日	桜井謙介「田代三喜に関する二三の知見」 廖育群「江戸時代の脚気について」
1995年 5月 20日	酒井シヅ「レムリンの解剖書と翻案書」
1995年 7月 21日	小林清市「『斉民要術』のなかの家畜の病」 梁峰「後藤良山の医学について」
1995年 7月 22日	石田秀実「劉張別派という虚構から見えるもの」
1995年 9月 29日	高島文一「〈人体内景図〉における脂膜について」 松村紀明「紅毛外科と杉田玄白」
1995年 9月 30日	杉山章子「占領期の医療改革」
1995年 11月 25日	栗山茂久「表現としての身体―解剖学の歴史について―」
1995年 11月 26日	ハルトムート・O・ロータモンド「痲瘡神に関する二三の問題」 瀧澤利行「養生思想の歴史とその意味」
1996年 1月 19日	三木亘「『予言者の医学』について」 浅見恵「江戸時代の民間医療書について―『此君堂薬方』『奇行方法』などを中心に―」
1996年 1月 20日	山田孝子「西チベット・ラクダにおける病と医療」 カール・ベッカー「バイオエシックスと死生観―その歴史、理論、展望―」
1996年 3月 15日	阪上孝「日本における公衆衛生の誕生」
1996年 3月 16日	近藤均「三浦梅園の医学思想―先行研究の総括と今後の研究の展望―」 カール・ベッカー「バイオエシックスと死生観―その歴史、理論、展望―」
1996年 5月 17日	塚本学「江戸時代の医療需要と医師」 田代和生「倭漢の病と医師」
1996年 5月 18日	津谷喜一郎「プラセボ再考」
1996年 7月 19日	ハイドゥルン・ライセンヴェーバー・ヘーヴェル「荻野元凱（1737―1806）の治療について―『藤堂佐渡守往診記』の症例―」 吉田忠「徴候と診断」
1996年 7月 20日	ウィリアム・ジョンストン「女性の犯罪の医学的構築―阿部定の例―」
1996年 9月 20日	ロベール・デュケン「『童児経』とインド古典医学における小児科」 福田真人「結核のロマン化試論」
1996年 9月 21日	鈴木則子「江戸時代の温泉と医療」
1997年 1月 24日	金文京「中国近世における医者及び職業的知識人の活動」 田崎哲郎「三河における医師の拉がりと錦小路家の医師支配」
1997年 1月 25日	総括討論

031 現代日本人の労働・遊び観および行動の歴史的発達

●研究域
第1研究域 動態研究（現代）

●共同研究期間
1995（平成7）年4月～1996（平成8）年3月
●研究の概要
日本人の仕事における勤勉性はよく知られており、また企業に対する非常に強い忠誠心をもっていることは定説になっている。この勤勉性や企業忠誠心にあらわれている日本人の労働観や労働行動が、一方で日本の経済成長の重要な要因として高く評価され、他方では貿易摩擦に反映されたソーシャル・ダンピングの遠因として厳しい批判の対象となった。しかしながら、こうした国際的な一般論が盛んに行われていても、歴史的な事実に基づく研究成果はあまり存在しない。
本研究は、現代日本人の労働観およびその第二面ともいべき遊び観の歴史的発達過程を具体的に明らかにすることにより、日本人の労働観・遊び観の歴史的展開について新しい総合的な仮説を提示しようとしたものである。具体的な研究方法としては、多岐にわたる異分野の第一線研究者による学際的なセミナー形式の討論会を設定し、それぞれが作業仮説を提示できるように参加者は少なくとも2回発表を行い、最終的に論集を編んで成果公開した。（公募研究）
●研究代表者
セップ・リンハルト（日文研客員教授／ウィーン大学日本学研究所教授、社会心理学）
●幹事
井上章一（日文研助教授、建築史）
●班員
稲上毅（東京大学大学院人文社会学系研究科教授、労働社会学）
井上俊（大阪大学人間科学部教授、余暇社会学）
今井泰子（静岡県立大学短期大学部教授、日本近代文学）
桑原真人（札幌大学経済学部教授、日本近代史）
ブリギッテ・シテータ（ウィーン大学日本学研究室助手、文化人類学）
住谷一彦（立教大学名誉教授、社会思想史）
竹村民郎（大阪産業大学経済学部教授、経済史）
津金沢聡広（関西学院大学社会学部教授、余暇社会学）
暉峻淑子（日本女子大学人間社会学部教授、生活経済史）
原田信男（札幌大学女子短期大学部教授、生活史）
横山俊夫（京都大学人文科学研究所助教授、日本文化史）
鷺田清一（大阪大学文学部教授、哲学・倫理学）
飯田経夫（日文研教授、理論経済学）
上田紀行（日文研客員助教授／愛媛大学教養部助教授、文化人類学）
柏岡富英（日文研助教授、社会学）
白幡洋三郎（日文研助教授、産業技術史）
園田英弘（日文研教授、社会史）
芳賀徹（日文研教授、比較文化史）
山折哲雄（日文研教授、宗教史）
●成果物
日文研叢書16、セップ・リンハルト／井上章一共編『日本人の労働と遊び・歴史と現状』（日文研、1998年8月）
●研究発表
1995年 4月 21日 セップ・リンハルト「研究会をはじめるにあたって」
1995年 4月 22日 井上章一「労働と勉学の図像学―二宮金次郎像をめぐって―」
1995年 7月 14日 山折哲雄「『あそび』と『とむらい』」 白幡洋三郎「あそびの明治」
1995年 7月 15日 ブリギッテ・シテータ「睡眠論―労働でも余暇でもなく―」 横山俊夫「色道あれども風呂道なし」
1995年 9月 29日 柏岡富英「『はたらしぎの日本人』という言説への批判的検討」 セップ・リンハルト「19世紀の日本見聞記は、日本人の労働をどうとらえたか」
1995年 9月 30日 住谷一彦「ペラー再考、ウェーバー社会学の観点から

	日本人の労働観を考える」 井上章一「芸者遊びの空間誌―待合考―」
1995年 11月 10日	暉峻淑子「『現代、男の一生』労働と自由時間をめぐって」 井上俊「戦後日本における『遊び』言説の盛衰」
1995年 11月 11日	原田信男「中世～近世における農民の労働観・余暇観について」 今井泰子「日本人の労働観と遊び観・近代化する女の場合―与謝野晶子をめぐって―」
1995年 12月 15日	竹村民郎「遊びとしての郊外―PR誌『郊外生活』の分析を中心に―」 津金沢聡広「箕面有馬電車軌道（現阪急）の沿線開発にみられる遊び観―PR誌『山谷水郷』―（1913～1916年）の分析を中心に」
1995年 12月 16日	桑原真人「北海道開拓民にとっての労働とあそび」 園田英弘「団結と勤労」
1996年 3月 1日	鷺田清一「インダストリーと真空恐怖」 中川清「近代日本における労働意識の変遷―都市の生活構造との関連で―」
1996年 3月 2日	デーヴィド・レヒニー「国際水準と日本のレジャー政策」 芳賀徹「日本人の『遊び』観を俳句に読む―蕪村から現代まで―」 飯田経夫「近年日本経済の問題点」

032 魔女と気候の文明史 ―アニミズム世界の再発見―

●研究域
第2研究域 構造研究（自然）
●共同研究期間
1995（平成7）年4月～1997（平成9）年3月
●研究の概要
「魔女を生かしておいてはならない」――これは、旧約聖書の出エジプト記の一節である。魔女を生み出す背景には、森林の破壊や気候変動といった地球環境の破壊とそれから派生する食料危機や疫病が深く関わっていた。14～17世紀のヨーロッパでは魔女裁判の嵐が吹き荒れたが、このときも小氷期の気候悪化とペストの大流行が深く関わっていた。
本研究では、「魔女」を大地母神の系譜を引く者として位置づけ、魔女を生み出した背景を歴史気候学や医学、公衆衛生学、森林生態学、心理学などの自然科学の諸領域との関わりにおいて探究した。
21世紀には、地球環境の危機に直面することは避けられない。現代の地球を支配する欧米文明が抱える闇としての魔女とはいったい何者だったかを、地球環境問題のなかで再検討しなおす必要があるのである。
●研究代表者
安田喜憲（日文研教授、地理学・環境考古学）
●幹事
笠谷和比古（日文研教授、歴史学）
黒須里美（日文研助手、社会学）
徐朝龍（日文研助教授、中国考古学）
●班員
阿部泰郎（名古屋大学文学部助教授、国文学）
伊東俊太郎（麗澤大学国際経済学部教授、科学史・比較文明学）
井上正美（立命館大学文学部講師、西洋史）
植田重雄（早稲田大学名誉教授、宗教哲学）
上山安敏（奈良産業大学法学部、西洋法制史）

鎌田東二（武蔵丘短期大学助教授、密教学・神道学・日本思想史）
河合俊雄（京都大学教育学部、臨床心理学）
蔵持不三也（早稲田大学人間科学部教授、フランス民族学）
篠田知和基（名古屋大学文学部教授、フランス文学・民俗学）
杉村和子（元京都橘女子大学教授、19世紀フランス史）
園田稔（京都大学総合人間学部教授、宗教学）
高橋義人（京都大学大学院人間環境学研究科教授、ドイツ文学）
立川武蔵（国立民族学博物館教授、宗教学）
田中貴子（梅花女子大学文学部助教授、中世日本文学）
豊田園子（京都文教大学、臨床心理学）
長野晃子（東洋大学文学部助教授、民俗学（文化人類学））
中元藤茂（奈良県医師会看護専門学校、公衆衛生学）
西村賀子（市部学園短期大学教授、比較文化論）
辺見葉子（北里大学一般教育センター、中世英文学・ケルト神話）
牧純（北里大学医学部助教授、国際環境・熱帯医学）
松田義幸（実践女子大学生生活科学部教授、社会学）
吉田教彦（学習院大学文学部教授、神話学・西洋古典学）
吉野裕子（民俗学者、民俗学）
井波律子（日文研教授、日本・中国比較文学）
上田紀行（日文研客員助教授／愛媛大学教養部助教授、文化人類学）
梅原猛（日文研顧問・名誉教授、哲学）
岡部あおみ（日文研客員助教授／メルジャン軽井沢美術館チーフ・キュレーター、美術史）
栗山茂久（日文研助教授、比較医学史・科学史）
寺澤薫（日文研客員助教授／シルクロード学研究センター研究交流課長補佐、考古学）
樋口隆康（日文研客員教授／奈良県立橿原考古学研究所長、東洋考古学）
山折哲雄（日文研教授、宗教史）
吉田忠（日文研客員教授／東北大学東北アジア研究センター教授、科学史）
●成果物
安田喜憲編『魔女の文明史』（八坂書房、2004年1月）
●研究発表
1995年 4月 22日 安田喜憲「魔女学事始」 長野晃子「ヨーロッパの魔女」 立川武蔵「インドの魔女」 吉田教彦「魔女の比較文明論」
1995年 4月 23日 田中貴子「日本の魔女」 パネルディスカッション「世界の魔女」
1995年 5月 21日 阿部泰郎「キツネと魔女」 吉野裕子「蛇と魔女」 篠田知和基「オオカミと魔女」
1995年 5月 22日 パネルディスカッション「動物と魔女」
1995年 7月 8日 金原正明「寄生虫からみた古代日本人の生活」 牧純「中世ヨーロッパの魔女と寄生虫感染」 黒川正剛「魔女の図像学―その1―」
1995年 7月 9日 中元藤茂「病気と魔女の周辺」 豊田園子「魔女の精神病理学」
1995年 9月 23日 西村賀子「古代ギリシャの魔女」 上山安敏「魔女裁判」
1995年 9月 24日 安田喜憲「気候変動と魔女裁判」 井上正美「お天気と魔女」
1995年 9月 24日 スサンネ・フォーマネク「悪老女論―魔女の―タイプの社会史的な分析の試み―」
1995年 12月 16日 若宮御祭についての総合討論
1995年 12月 17日 若宮御祭の神事観察・体験
1996年 6月 29日 松田義幸「魔女はなぜ山羊が好きなのか」 辺見葉子「イギリス妖精画に見る妖精の“脱魔女化”の経緯」



1996年 6月 30日	総合討論—女性と魔女—
1997年 2月 22日	高橋義人「ヨーロッパの魔女」 伊東俊太郎「科学と魔女」
1997年 2月 23日	黒川正剛「魔女の図像学—その2—」 水上洋子「大地母神と魔女」

## 033 日本型システムの編成原理

●研究域
第2研究域 構造研究（社会）
●共同研究期間
1995（平成7）年4月～1997（平成9）年3月
●研究の概要
グローバル化の進展のなかで、日本型システムに対する関心が高まっている。しかし、その編成と運用についての原理はまだ十分には解明されているとはいえない。従来のような欧米原理の分析パラダイム（方法的個別主義＝methodological individualism）を無条件で採択するかぎり、「日本異質論」や「日本特殊論」のような見解が広がることになる。しかし実際は、日本型システムにおいては、人的な関係性に基礎を置いた柔軟で根強いシステムが構築され、うまく機能しているのである。
このことに注目し、本研究では、別途なされる実証的研究との密接な関連において、日本型システムの特質とその編成原理を、学際的な立場から、方法論に留意しつつ、理論的な比較検討を加えた。
●研究代表者
濱口恵俊（日文研教授、日本論）
●幹事
柏岡富英（日文研助教授、社会学）
黒須里美（日文研助手、人口学）
●班員
今井賢一（スタンフォード日本センター研究所長、経済学）
梶田孝道（一橋大学社会学部教授、国際社会学）
金児曉嗣（大阪市立大学文学部教授、社会心理学）
久慈利武（三重大学人文学部教授、日本社会論）
公文俊平（国際大学グローバルコミュニケーションセンター所長、社会システム論・経済学）
ポーリン・ケント（龍谷大学国際文化学部助教授、社会学）
幸泉哲紀（龍谷大学国際文化学部、文化経済学）
佐々木瑞枝（横浜国立大学留学生センター教授、日本語教育学）
柴山哲也（ハワイ大学日本学研究センター、ジャーナリズム論）
清水博（金沢工業大学「場」の研究所長、生物情報論）
鈴木良次（金沢工業大学人間情報システム研究所長、生体情報システム論）
恒吉僚子（東京大学教養学部、比較社会学）
日置弘一郎（京都大学経済学部助教授、経営学）
疋田正博（㈱シー・ディー・アイ代表取締役、社会調査法）
古川秀夫（龍谷大学国際文化学部助教授、社会心理学）
柳父章（桃山学院大学文学部教授、言語学）
山田洋子（愛知淑徳大学文学部教授、臨床心理学）
吉田和男（京都大学経済学部教授、理論経済学）
吉田民人（中央大学文学部教授、理論社会学）
飯田経夫（日文研教授、経済学）
小野芳彦（日文研助教授、情報学）
笠谷和比古（日文研教授、歴史学）
園田英弘（日文研教授、歴史社会学）
アリソン・トキタ（日文研客員助教授／モナシュ大学日本研究学部助教授、

日本の伝統音楽）
●成果物
濱口恵俊編著『日本社会とは何か―複雑系』の視点から―」（日本放送出版協会、1998年6月）
●研究発表
1995年 5月 20日 濱口恵俊「本共同研究室の趣旨説明と今後の進め方についての協議」 『日本型システムとその編成原理』について
1995年 7月 7日 日置弘一郎「日本のメゾレベル社会システムの構成原理」 濱口恵俊「日本型システムの編成原理における correlative dualism について―近年の日本論文文献から―」
1995年 7月 8日 金児曉嗣「真宗教団のディレンマ―門信徒の信仰と教団教義との乖離―」
1995年 9月 2日 吉田民人「ポスト分子生物学の社会科学」
1995年 10月 14日 清水博「生命的組織と場」
1995年 12月 16日 山田洋子「この世とあの世の関係イメージ―見えない『死者』から見守られる『私』という構図―」 公文俊平「日本型市場経済体制」
1996年 2月 3日 佐々木瑞枝「和語・漢語・外来語―高度成長の前と後、雑誌の分析から―」 吉田和男「非平衡系とジャーナリズム」
1996年 3月 2日 柴山哲也「日本異質論とジャーナリズム」 今井賢一「日本型組織の連続と非連続」
1996年 5月 18日 恒吉僚子「教育における日本型システム」 柳父章「オモテ・ウラの文化構造」
1996年 7月 6日 ポーリン・ケント「ベネディクトが『菊と刀』へ歩んだ道」 幸泉哲紀「社会編成原理としての八正道」
1996年 9月 14日 久慈利武「正村俊之著『秘密と恥―日本社会のコミュニケーション構造』に寄せて―」 吉田民人「自他文節の文化的プログラム」
1996年 10月 19日 濱口恵俊・金児曉嗣・古川秀夫・疋田正博「関係集約型人間による社会編成原理についての国際比較調査データの分析」
1996年 12月 14日 濱口恵俊・金児曉嗣・古川秀夫・疋田正博「関係集約型人間による社会編成原理についての国際比較調査データの分析と理論的考察」
1997年 1月 24日 公文俊平「量子論的社会論と日本社会」 恒吉僚子「『子供』をめぐる日本社会の編成原理」 鈴木良次「システムの知と自律性―生物・ヒト・機械・環境―」 佐々木瑞枝「言語の直接性と間接性―日本語のオノマトベの内包するもの―」 吉田和男「ホロン構造の日本社会」 ポーリン・ケント「文化システムにおけるシネジー」 園田英弘「濱口『間人主義』を考える」
1997年 1月 25日 幸泉哲紀「個人・人間・無人―人間観と日本型システムの編成原理―」 久慈利武「日本社会の構成―正村『秘密と恥』の説をめぐって―」 柴山哲也「『日本型システム』と日本文化論の関係―文化論の有効性と非有効性―」 柳父章「シンメトリー対オモテ・ウラ」 山田洋子「『たましい』のかたち―『この世』と『あの世』のあいだと移行プロセス―」 古川秀夫「ボランティア活動に見られる社会編成原理」

金児曉嗣「対人観尺度の構成とそれに基づく比較文化的研究」
疋田正博「対人関係観のクロス集計について」
濱口恵俊「社会編成原理のグローバル転換―『効用』から『信用』へ―」

## 034 日本における中産階級の成立過程―人口・家族・職業・階層―

●研究域
第3研究域 文化比較（制度）
●共同研究期間
1995（平成7）年4月～1998（平成10）年3月
●研究の概要
日本は総中産階級化したといわれているにもかかわらず、この階級が歴史的にどのようにして形成されたかについての本格的な研究は、まだない。その歴史起源、形成過程、規模、階層文化の様態など、多くの未知の部分を残している。
本研究は、この未知の分野を開拓すべく、まず多くの統計データの収集からはじめ、その分析によって、日本の中産階級の特性を明らかにした。あわせて、国際比較も行った。
●研究代表者
園田英弘（日文研教授、社会史）
●幹事
黒須里美（日文研助手、社会学）
●班員
天野郁夫（国立学校財務センター、教育社会学）
伊藤彰浩（名古屋大学教育学部、教育社会学）
稲垣恭子（京都大学教育学部、教育社会学）
刈谷剛彦（東京大学大学院教育学研究科、教育社会学）
川勝平太（早稲田大学政治経済学部教授、経済史）
菊池城司（大阪大学人間科学部教授、教育社会学）
柴山哲也（ハワイ大学東西研究センター、ジャーナリズム論）
菅山真次（東北学院大学経済学部助教授、経営史）
高橋一郎（大阪教育大学教育学部講師、教育社会学）
竹内洋（京都大学教育学部教授、教育社会学）
田中紀行（奈良女子大学文学部講師、社会学）
筒井清忠（京都大学文学部教授、教育社会学）
中川清（同志社大学経済学部教授、経済史）
永谷健（名古屋工業大学工学部講師、社会学）
濱名篤（関西学院大学短期大学、社会学）
廣田照幸（東京大学大学院教育学研究科、教育社会学）
三谷博（東京大学大学院総合文化研究科教授、日本近代史）
村岡健次（甲南大学文学部教授、イギリス史）
リチャード・ルビンジャー（京都大学人文科学研究所客員教授／インディアナ大学歴史学部教授、社会史）
井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論）
岩井洋（日文研客員助教授／関西国際大学短期大学部助教授、宗教社会学）
落合恵美子（日文研助教授、社会学・歴史人口学）
白幡洋三郎（日文研教授、造園学・産業技術史）
芳賀徹（日文研教授、比較文学・比較文化）
●研究発表
1995年 5月 26日 園田英弘「中産階級研究の諸問題」
1995年 5月 27日 菊池城司「『士族の歴史社会学的研究』を読みながら

	中産階級研究を考える」
1995年 7月 24日	高橋一郎「筒井清忠著『日本型教養の運命』」 筒井清忠「弁明と反論」
1995年 7月 25日	園田英弘「福沢諭吉の中産階級論」
1995年 10月 6日	廣田照幸「軍人と中産階級」 伊藤彰浩「新中間階級の形勢」
1996年 10月 7日	鈴木真美「福沢諭吉の階級論」
1996年 11月 17日	井上章一「女という階級」 竹内洋「教養知識人の運命」
1995年 11月 18日	E・H・キンモンズ「技術者と中産階級」
1996年 2月 24日	永谷健「明治・大正期の企業家と上流文化」 セップ・リンハルト「中産階級と余暇」 柴山哲也「中産階級とジャーナリズム」
1996年 6月 1日	田中紀行「ドイツ教養市民主義と身分文化の諸問題」 濱名篤「『女中』と中産階級」
1996年 9月 7日	菊池城司「日本における中産階級研究史」 刈谷剛彦「中産階級の拡大」
1996年 10月 12日	園田英弘「華族と中産階級」 佐々木啓子「東京市職員と中産階級」
1996年 11月 2日	中川清「日本の生活変動と中産階級像」 橋本紘子「中産階級としての医者」
1996年 12月 7日	天野郁夫「日本のニューミドルクラス」 廣田照幸「下級中間層と労働者の教育戦略」
1997年 12月 19日	千木曉子「明治期ホワイト・カラーの形成」 西川祐子「中産階級の形成と住まいの変遷」 米村千代「明治大正期の企業家のエスタブリッシュメントへの道」
1997年 12月 20日	園田英弘「中産階級研究・中間総括」
1998年 2月 28日	村岡健次「イギリスの中産階級」 菊池城司「中産階級と『進学校』の成立過程」
1998年 3月 28日	吉田文「地方名望家と中産階級」

## 035 近代日本の女たち―その表象と自己表現―

●研究域
第3研究域 文化比較（思想）
●共同研究期間
1995（平成7）年4月～1997（平成9）年3月
●研究の概要
日本でも、女性史、女性学の研究は近年ようやく盛んになってきた。近代日本史・日本文化史を捉え直し、これに豊かな肉づけをしようとするとき、従来の女性への視野・女性からの視野の不足ないし欠落は、たしかにゆゆしい問題であった。
だが、女たちの歴史は、少なくとも日本ではいまだに女性研究者の専有分野であるかの観がある。しかし、本研究では、近代日本史、比較文化史に関心をもつ男性研究者も加わって、女性側との応酬を通じて、相互に新しい歴史像を掘り起こそうとした。
とくに留意したのは、理論による整序よりは、個別・具体的なケーススタディの積み重ねを重視したことである。
●研究代表者
芳賀徹（日文研教授、比較文学・比較文化）
●幹事
落合恵美子（日文研助教授、家族社会学）



●班員	
相原和邦（広島大学教育学部教授、日本近代文学）	
秋山佐和子（歌人・文芸批評家、日本近代短歌史）	
井上輝子（和光大学人文学部教授、日本女性史）	
今泉容子（筑波大学文芸・言語学系助教授、フェミニズム）	
今橋映子（筑波大学文芸・言語学系講師、比較文学文化）	
上野千鶴子（東京大学文学部助教授、社会学）	
梅若猶彦（能楽師、芸能）	
エリス俊子（東京大学教養学部助教授、比較文学文化）	
大澤吉博（東京大学教養学部教授、日英比較文化史）	
萩野美穂（奈良女子大学文学部助教授、近代女性史）	
小田三千子（東北学院大学教養学部、英米文学・比較文化）	
加納孝代（青山学院女子短期大学教授、英文学・比較文学）	
木股知史（甲南大学文学部助教授、日本近代文学）	
ツベタナ・クリステワ（中京女子大学短期大学部、日本古典文学）	
小山静子（立命館大学理工学部助教授、教育史）	
佐伯順子（帝塚山学院大学文学部、日本近代女性史）	
斎藤恵子（共立女子大学文学部教授、英文学・比較文学）	
佐藤バーバラ（成蹊大学文学部助教授、日本史）	
塩川京子（京都市立美術館学芸員、近代日本美術史）	
成恵卿（日本大学国際関係学部、韓国比較文学）	
田中優子（法政大学第一教養部教授、日本近世文学）	
田邊玲子（京都大学総合人間学部助教授、比較女性文学）	
張競（國學院大學、国文学・比較文学）	
辻原登（作家、文学）	
中川成美（立命館大学文学部、日本近代文学）	
西川祐子（京都文教大学人間学部、女性生活史）	
松居竜五（元東京大学教養学部専任講師、比較文化）	
ヨコタ=村上ジェリー（大阪大学言語文化部助教授、比較文学）	
ヨコタ=村上孝之（大阪大学言語文化部助教授、日露比較文学）	
山下真由美（東北芸術工科大学教養部講師、フランス文学）	
横川寿美子（美作女子大学家政学部助教授、児童文学）	
井波律子（日文研教授、中国文学）	
稲賀繁美（日文研客員助教授／三重大学人文学部助教授、比較近代美術史）	
井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論）	
岡部あおみ（日文研客員助教授／メルシャン軽井沢美術館チーフ・キュレーター、美術史）	
郭永喆（日文研客員教授／漢陽大学校文科大学長、日本語学）	
上垣外憲一（日文研助教授、比較文学・比較文化）	
黒須里美（日文研助手、社会学）	
佐々木英昭（日文研客員助教授／名古屋工業大学工学部助教授、近代日本文学）	
レジン・ダイアン・ジョンソン（日文研客員助教授／ハーバード大学担当助教授、日本文学）	
鈴木貞美（日文研教授、近代日本文学）	
銭国紅（日文研客員助教授／国際文理大学準備室副主任、中国・日本比較思想・文化）	
園田英弘（日文研教授、日本社会史）	
高橋見子（日文研客員助教授／神戸女子大学家政学部教授、比較服飾史・比較衣装論）	
辻惟雄（日文研教授、美術史）	
早川聞多（日文研助教授、近代美術史）	
速水融（日文研客員教授／麗澤大学国際経済学部教授、経済史・歴史人口学）	
パトリシア・ジーン・フィスター（日文研寄附研究部門教員、日本美術史）	
ヘルベルト・ブルチョウ（日文研客員教授／カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授、日本文化）	
マーク・ポールトン（日文研客員教授／ヴィクトリア大学助教授、日本文学・	

演劇）	
光田和伸（日文研助教授、日本文学）	
ジェイ・ルービン（日文研客員教授／ハーバード大学教授、日本文学）	
●研究発表	
1995年 4月 28日	鈴木貞美「モダン・ガール―その生態と文学表象―」 芳賀徹「山川菊栄―その文章と歴史像―」 山下真由美「斎藤史―その人と歌―」
1995年 6月 23日	塩川京子「京都の三人の女性画家―梶原緋佐子・上村松園・伊藤小坡―」 辻原登「黒髪という事―女を描く、なんちゃって…―」
1995年 6月 24日	ヨコタ=村上孝之「性科学における女性」 千種キムラ・スティープン「大江作品に見る女性像―『個人的な体験』を中心に―」
1995年 7月 21日	ヨコタ=村上ジェリー「謡曲体系の形成―脇能における男女のヒエラルキー―」 高橋見子「『新しい女』―その表層の表象―」
1995年 7月 22日	太田雄三「デーモンのいる女性―自伝的文章に見る神谷美恵子―」
1995年 9月 8日	佐藤バーバラ「女性と修養」 西川祐子「生きられた家・描かれた家―住まい空間の文学史―」
1995年 9月 9日	中川成美「醜聞（スキャンダル）の女・男の醜聞」
1995年 10月 30日	巖安生「ノラは家出してからどうなったか―（鲁迅）をめぐって―」 ジェイ・ルービン「村上春樹の想像上の女性達―貧乏な叔母さんから現在のイザナミまで―」
1995年 10月 31日	光田和伸「われ歌う、ゆえに…『サラダ記念日』の昔と今」
1995年 10月 31日	稲賀繁美「女子割礼の問題と日本の大学における女性論」
1996年 1月 19日	相原和邦「『俯向く女』と『仰向く』女―漱石を軸として―」 梅若猶彦「能の身体論」
1996年 1月 20日	佐伯順子「明治女性作家による恋愛小説」
1996年 3月 8日	リース・モートン「歌のみだれ―鉄幹・晶子・登美子の歌垣―」 ジョン・ウォレス「平安朝日記文学の作者たち」 スミエ・ジョーンズ「〈地おんな〉の登場―江戸の日常生活と女たち―」
1996年 3月 9日	シャルリーン・オルボー「大正初期の文学における乃木静子」 蘆英姫「朝鮮舞踏家崔承喜をめぐって」 ジャニス・ブラウン「〈忘れられた〉詩人：日本近代詩において女性の主体を書くこと―林芙美子の『蒼馬をみたり』―」
1996年 5月 10日	鈴木貞美「生命主義と母性原理―らいてう、野枝、逸枝、かの子―」 加納孝代「羽仁もと子と『婦人之友』」
1996年 5月 11日	マーク・ポールトン「鏡花の女たち―『草迷宮』を中心に―」
1996年 7月 12日	田邊玲子「男の体を見る男の視線―ドイツ18世紀後半『教養小説』にみる視線のジェンダー化―」 辻惟雄「女性画像の変遷―江戸から明治へ―」
1996年 7月 13日	早川聞多「浮世絵・春画に描かれた女たち」 今橋映子「〈智恵子〉像の再検討―大正期女性画家の軌跡―」
1996年 9月 27日	君野隆久「宮澤賢治とその妹―作品と書簡から―」 秋山佐和子「『書く女―歌人三ッ島霞子（明治19～昭和2年）は近代をどう歌ったか―」 パトリシア・フィスター「近世日本美術における女性的

な知覚」	
1996年 11月 15日	斎藤恵子「若松賤子の英詩『花嫁のベール』をめぐって」 大澤吉博「イザベラ・バード日本旅行記―女性を見る女性―」
1996年 11月 16日	横川寿美子「吉屋信子と少女小説の世界」
1997年 1月 17日	成恵卿「イザベラ・バードの見た韓国と韓国女性」 井上章一「ズロースの考現学」
1997年 1月 18日	水島裕雅「堀達雄の女性像―物語の女たちと現実の女たち―」
1997年 3月 10日	岡部あおみ「ヌードと裸婦。その表象のダブルバインド―黒田清輝『智・惑・情』と裸体論争の系譜―」 游珮芸「台湾文学少女の『物語』―日本統治下の台湾における児童文化史の一頁―」
1997年 3月 11日	佐々木英昭「『き印し』那美さんはなぜ禅をするか―『草枕』の考古学―」

## 036 身体技法を通してみた東アジアの宗教交流史

●研究域
第4研究域 文化関係（旧交圈Ⅰ）
●共同研究期間
1995（平成7）年4月～1996（平成8）年3月
●研究の概要
東アジアのさまざまな宗教がもっている豊かな身体技法に着目し、それがどのような文化的交流を経て現在のような形に織りなされてきたか、あるいは交流が認められないのにほぼ共時的といってよい共通の身体技法体系を伝えているのはなぜなのか――本研究は、こうした諸点に考察を加えることによって、従来は教義の交流・変形に重点を置いて考察されてきた宗教交流史を、身体技法の体系とそれがもたらしたインパクトに重点を置いて検討し直すことによって、とくに観念的な要素に限定されがちだった研究を、身心を統合的に把握しようとする方向から変革をせまる試みであった。
あわせて、宗教儀礼や信仰治療についても、同様に「身体を通した認識」という方向から、そのあり方を探っていった。（公募研究）
●研究代表者
石田秀実（日文研客員教授／九州国際大学経済学部教授、哲学）
●幹事
鈴木貞美（日文研助教授、日本文学）
●班員
伊東俊太郎（麗澤大学国際経済学部教授、科学史）
梅原賢一郎（滋賀県立大学人間文化学部、美学）
加藤清（隈病院顧問、精神医学）
鎌田東二（武蔵丘短期大学、宗教学）
河合清（中京女子大学家政学部教授、化学）
川村邦光（天理大学文学部助教授、宗教学）
古東哲明（広島大学総合科学部助教授、哲学）
小林正佳（天理大学教養部、宗教学）
坂出祥伸（関西大学文学部教授、中国学―道教）
鈴木正崇（慶應義塾大学文学部助教授、民俗学―中国）
諏訪春雄（学習院大学文学部教授、民俗学―中国）
武井秀夫（千葉大学文学部助教授、医療人類学）
立川武蔵（国立民族学博物館教授、インド学）
鶴岡真弓（東北芸術工科大学芸術学部助教授、ケルト美術史）

野崎充彦（大阪市立大学文学部講師、朝鮮学）	
萩原秀三郎（民俗学者、民俗学）	
正木見（中京女子大学人文学部、宗教美術史）	
三浦國雄（大阪市立大学文学部教授、中国学―道教）	
山本ひろ子（フェリス学院大学非常勤講師、宗教学）	
上田紀行（日文研客員助教授／愛媛大学教養部助教授、文化人類学）	
山折哲雄（日文研教授、宗教学）	
●成果物	
石田秀実編『東アジアの身体技法』（勉誠出版、2000年10月）	
●研究発表	
1995年 5月 12日	立川武蔵「密教成就法実験報告」
1995年 5月 13日	加藤清「サイケデリック現象と魔境」
1995年 6月 23日	諏訪春雄「懐胎十月の歌の由来」 正木見・中島修一「離脱体験―中島修一氏の場合―」
1995年 6月 24日	川村邦光「巫女の憑依と心身統御」
1995年 9月 8日	萩原秀三郎「チガヤ信仰とタマ結び」 武井秀夫「ドラッグと呪文―あるいは瞑想とヴィジョン―」
1995年 9月 9日	石田秀実「性の儀礼から内丹へ―房中のさまざまな位相―」
1995年 10月 20日	小林正佳「舞踏論の視角」 正木見「修行と図像の間―コンカル・チョエデとバンコル・チョルテン―」
1995年 10月 21日	野崎充彦「韓国国仙道の世界」
1996年 1月 26日	鶴岡真弓「ケルト美術と宗教」
1996年 1月 27日	三浦國雄「太極拳論―陳鑫『太極拳図説』を読む―」
1996年 2月 23日	山本ひろ子「異神の系譜学―魔多羅神の姿態変換―」 「神楽の身体学」
1996年 2月 24日	鈴木正崇「追儼の系譜」 坂出祥伸「道教の存想法と密教の観想法」

## 037 現代日本の社会科学におけるアメリカニズム

●研究域
第5研究域 文化情報（外国における日本研究Ⅰ）
●共同研究期間
1995年（平成7）年4月～1998（平成10）年3月
●研究の概要
第二次世界大戦後の日本において、アメリカの影響は圧倒的であった。それは、社会科学の分野でも同様である。明らかにそのいくつかはプラスであったが、なかには問題もあった。たとえば、科学性を求めるあまり研究分野が細分化されすぎるとか、数理的方法を多用しすぎるなどの点が、ただちに思い浮かぶ。
本研究は、班員を経済学者、社会学者、政治学者など、社会科学のさまざまな分野の専門家で編成し、いわばアメリカ社会科学の栄光と悲慘とを、学際的に、批判的に検討し直した。それは、同時に戦後日本の社会科学を総反省し、その未来を模索することでもあった。
●研究代表者
飯田経夫（日文研教授、経済学）
●幹事
ポーリン・ケント（日文研助手、社会学 平成8年4月～龍谷大学国際文化学部助教授）
柏岡富英（日文研助教授、社会学）



●班員
大橋勇雄（名古屋大学経済学部教授、労働経済学）
北川勝彦（関西大学経済学部、経済史）
木村英憲（愛知学院大学文学部助教授、社会学）
マノジェ・シュレスタ（甲南大学経営学部、経営学）
竹村民郎（大阪産業大学経済学部教授、経済史）
東元春夫（京都文化短期大学教授、社会学）
藪野祐三（九州大学法学部教授、政治学）
依田博（神戸大学国際文化学部教授、政治学）
ガボール・パコシ（日文研客員教授／一橋大学経済研究所客員教授、比較経済学・現代日本経済）
ビジャイ・アナンド・ミスラ（日文研客員教授／名古屋大学経済学部客員研究員、都市計画）
●研究発表
1995年 6月 3日 藪野祐三「藪野祐三著『ローカル・イニシアティブ』（中公新書）」
1995年 8月 14日 柏岡富英「アメリカ流の『正しさ』について」
1995年 11月 25日 北川勝彦「ポスト・マンデラの南アフリカ」
1996年 1月 20日 マノジェ・シュレスタ「企業の多国籍化と知的財産権」
1996年 5月 11日 李均洋「経済小説と中国の経済」
1996年 7月 6日 ガボール・パコシ「日本のイノベーションとseed money」
1996年 11月 22日 C・ホビン “Skill Development and Economic Development in Singapore” 柏岡富英「EUから見たアメリカと日本」
1997年 2月 21日 竹村民郎「スポーツにおけるアメリカニズム：高校野球を中心として」
1997年 5月 17日 依田博「ボスニアの選挙」
1997年 11月 8日 ボーリン・ケント「ルース・ベネディクトのシナジ―理論」 竹村民郎「上機嫌のアメリカ」
1998年 3月 9日 佐伯啓思「『近代』再考」 藪野祐三「ゆたかさの中のローカル・イニシアティブ」 西部邁「公共性の21世紀の意味」
1998年 3月 11日 大橋勇雄「職場における高齢化」 宮本光晴 “Capitalism, Yes; The American Model, No” 井尻千男「市場原理と共同体原理の相克」

## 038 転換期における法と社会

●研究域
第1研究域 動態研究（現代）
●共同研究期間
1996年（平成8）年4月～1999（平成11）年3月
●研究の概要
「進歩」「発展」「成長」といった言葉を、未来へのプロセスに関して何のためらいもなく使って図式を描いてきた時代は終わった。現在の成功は明日の成功を約束しない。それどころか、福が転じて禍となる可能性さえある。レッサー・フェールの時代に「最小限の夜警国家のルール」であった法は、たしかにある時期、「ソーシャル・エンジニアリングの手段」へと機能変化させたが、法が良き未来を築くための軌道であることには変わりはなかった。
しかし、未来はいまや不確実性の霧の中にある。現に突きつけられた問題の解決のために何かの策を講じたとしても、その策自身が害悪を惹き起こすかもしれない、というディレンマにわれわれは直面していないだろうか。
本研究は、さまざまなところで見られるようになった「転換期の法」のディレンマの中で、法は何をなすべきか（何をしてはならないか）、何であるべき

か（何であってはならないか）という問いを立て、一時的で多様な「試答」しか期待できないかもしれないが、参加者が手慣れた専門の道具を放棄することから始めることによって「試掘」を大胆に進めて、最終的には諸問題に通底する「転換期の法」の構造的特質まで探ろうとした。
●研究代表者
石井紫郎（日文研教授、日本法制史）
●幹事
森岡正博（日文研助手、生命学 平成9年4月～大阪府立大学総合科学部助教授）
上垣外憲一（日文研助教授、社会学）
落合恵美子（日文研助教授、社会学）
●班員
井上達夫（東京大学大学院法学政治学研究科教授、法哲学）
井上治子（名古屋文理短期大学講師、社会学）
樫村志郎（神戸大学法学部教授、法社会学）
鄭暎恵（広島修道大学人文学部助教授、家族社会学）
土屋貴志（大阪市立大学文学部講師、倫理学）
中間成文（大阪大学文学部教授、倫理学）
長瀬修（障害・コミュニケーション研究所代表、政治学）
永田えり子（滋賀大学経済学部助教授、社会学）
宮地尚子（近畿大学医学部講師、文化人類学）
吉澤夏子（日本女子大学人間社会学部助教授、理論社会学）
嘉本伊都子（日文研中核の研究機関研究員、社会学）
田桓（日文研客員教授／中国社会科学院教授、日本戦後政治史）
村松岐夫（日文研教授、行政学）
鷺田清一（日文研客員教授／大阪大学文学部教授、哲学）
●研究発表
1996年 5月 24日 石井紫郎「開催にあたって」 森岡正博「問題提起『国家・責任・義務』」
1996年 5月 25日 長瀬修「身体的なものと社会的・文化的なもの：障害、ろう者、ジェンダー」
1996年 7月 20日 永田えり子「ミスコンと女性労働市場」
1996年 7月 21日 テーマ討議―自由主義について―
1996年 11月 30日 土屋貴志「インフォームド・コンセントの効用と限界」 テーマ討議―文化相対主義について―
1996年 12月 26日 森岡正博「優性保護法改正をめぐる法と倫理―女性と障害者の視点から―」
1996年 12月 27日 テーマ討議
1997年 5月 16日 井上達夫「法と規範―国際的な視野から―」
1997年 5月 17日 テーマ討議―子どもの権利と親権―
1997年 6月 14日 吉澤夏子「虚構としての性的身体」
1997年 6月 15日 テーマ討議―慰安婦問題 その1― 鄭暎恵「アイデンティティ・ポリティクスのジレンマ」
1997年 7月 14日 総合討論
1997年 7月 15日 ビデオ「手話の世界」検討
1997年 11月 29日 嘉本伊都子「国際結婚と国民形成」
1997年 11月 30日 テーマ討議―こんな私に誰がした―
1997年 12月 20日 樫村志郎「会話分析から見た規範と秩序」
1997年 12月 21日 永田えり子「道徳派フェミニスト宣言」
1998年 5月 30日 宮地尚子「当事者性の政治学―文化・倫理・精神医学―」
1998年 5月 31日 ビデオ「私はレイプをやめられるか―アメリカの加害者治療―」
1998年 7月 18日 鷺田清一「臨床哲学事始め」
1998年 7月 19日 土屋貴志「医療の倫理学から見た臨床哲学批判」
1999年 1月 9日 中間成文「欲望としてのケア？―援助のパラドックスあれこれ―」
1999年 1月 10日 井上治子「環境運動における主体性と排他性―池子米軍住宅建設反対運動の場合―」

## 039 文学における近代―転換期の諸相―

●研究域
第1研究域 動態研究（伝統）
●共同研究期間
1996（平成8）年4月～1999（平成11）年3月
●研究の概要
19世紀末、明治になって以降、日本の文学は創作の側からも受容の側からも、大きく変化した。しかし、その変化の様相はけっして一面的ではなく、西洋的な志向を積極的に取り込むとするケースや、逆に伝統的なもののなかから近代をすくい取ろうとするケースなど、多岐多様にわたった。
本研究では、イギリス・アメリカ・フランス・ロシア・中国など、他の外国文学のケースと比較しながら、日本文学にあらわれた近代の諸相を、創作と受容の両側面から検証し、浮き彫りにしていった。
●研究代表者
井波律子（日文研教授、中国文学）
●幹事
鈴木貞美（日文研教授、日本文学）
井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論）
●班員
池内紀（元東京大学文学部教授、ドイツ文学）
宇佐美齊（京都大学人文科学研究所教授、フランス文学）
鹿島茂（共立女子大学文芸学部教授、フランス文学）
上垣外憲一（帝塚山学院大学人間文化学部教授、比較文化）
君野隆久（白鳳女子短期大学国際人間学科助教授、比較文学）
小谷晴勇（白鳳女子短期大学国際人間学科、哲学）
小谷野敏（大阪大学言語文化部助教授、英文学・日本文学）
佐伯順子（帝塚山学院大学文学部助教授、日本文学）
柴田元幸（東京大学大学院総合文化研究科助教授、アメリカ文学）
杉本秀太郎（日文研名誉教授／文筆業、フランス文学・日本文学）
田中優子（法政大学第一教養部教授、日本文化・文学）
坪内稔典（京都教育大学教育学部教授、国文学）
鶴田欣也（龍谷大学国際文化学部教授、日本文学）
礪波護（京都大学大学院文学研究科教授、東洋史）
西成彦（立命館大学文学部教授、比較文学）
西川祐子（京都文教大学人間学部教授、フランス文学・日本文学）
沼野充義（東京大学大学院人文社会系研究科助教授、ロシア文学）
芳賀徹（大正大学文学部教授、比較文化・比較文学）
原章二（早稲田大学政治経済学部教授、哲学）
兵藤裕己（成城大学文芸学部教授、国文学）
三浦雅士（評論家、日本文学・舞踏史）
ヨコタ=村上ジェリー（大阪大学言語文化部助教授、比較文学）
山田慶児（日文研名誉教授、科学史）
吉田和久（帝京科学大学理工学部講師、比較文学）
石井紫郎（日文研教授、日本法制史）
稲賀繁美（日文研助教授、比較文学・比較文化）
大嶋仁（日文研客員教授／福岡大学人文学部教授、比較文学・比較文化）
長田俊樹（日文研助手、言語学）
落合恵美子（日文研助教授、家族社会学・歴史人口学）
王克非（日文研客員助教授／北京外国語大学言語学研究所教授、文化言語学）
王宝平（日文研客員助教授／杭州大学外国語学部助教授、日本文学）
柏岡富英（日文研助教授、社会学）
川勝平太（日文研客員教授／早稲田大学政治経済学部教授、比較経

済史）
金春美（日文研客員教授／高麗大学校文科大学日本語日本文学科教授、日本近・現代文学）
セオドア・ウィリアム・グーセン（日文研客員助教授／ヨーク大学人文学部準教授、近代日本文学）
栗山茂久（日文研助教授、科学史）
高文漢（日文研客員教授／山東大学外国語学院東方言語文学部教授、日本語学・日本文学）
小松和彦（日文研教授、文化人類学）
スミエ・ジョーンズ（日文研客員教授／インディアナ大学教授、比較文学）
白幡洋三郎（日文研教授、産業技術史）
千田稔（日文研教授、歴史地理学）
園田英弘（日文研教授、社会学）
津田順子（日文研中核の研究機関研究員、民俗学）
早川閑多（日文研助教授、美術史）
松居竜五（日文研客員助教授／駿河台大学現代文化学部助教授、比較文学）
光田和伸（日文研助教授、日本文学）
リヴィア・ロディカ・モネ（日文研外来研究員（国際交流基金フェロー）／モントリオール大学東アジア研究センター準教授、日本文化・文学）
森岡正博（日文研助手、生命学）
●成果物
日文研叢書22、井波律子／井上章一編『文学における近代―転換期の諸相―』（日文研、2001年3月）
●研究発表
1996年 5月 10日 井波律子「研究会主旨説明」
1996年 5月 11日 井上章一「百合若大臣の近代」
1996年 9月 13日 光田和伸「俳句の近代」 早川閑多「艶本の世界―近代のゆくえ―」
1996年 9月 14日 井波律子「露伴初期」
1996年 11月 1日 白幡洋三郎「新婚旅行と『文学』」 上垣外憲一「記者・戯曲者―桃水―」
1996年 11月 2日 原章二「近代における自伝と個人主義の思想・序説」
1996年 12月 6日 君野隆久「日本文学における菩薩本生譚―『捨身』をめぐる―」 杉本秀太郎「緑雨 蛇ノ目傘」
1996年 12月 7日 王宝平「中国・清朝における吾妻鏡の流布とその影響」
1997年 3月 7日 宇佐美齊「フランス近代詩移入の諸問題」
1997年 3月 8日 池内紀「芥川龍之介の抒情詩」
1997年 5月 23日 沼野充義「比喩の運命―ユーリィ・オレーシャの挫折とソ連文学の転換―」 鈴木貞美「日本の近代小説はいつはじまったかについて」の十二の説、ならびに、日本には『文学』概念がふたつあるということ」
1997年 7月 25日 稲賀繁美「『美術』の成立と日本近代」 鹿島茂「信用（クレジット）と19世紀文学」
1997年 7月 26日 鶴田欣也「川端康成の近代／反近代」
1997年 9月 12日 兵藤裕己「語り物の近代」 芳賀徹「日本と韓国、それぞれの近代詩」
1997年 9月 13日 礪波護「日本における東洋史学の成立」
1997年 11月 14日 小谷晴勇「茶の湯の近代をめぐる」 西川祐子「日記の近代」 井波律子「近代文学総論および今後の研究課題」
1998年 3月 13日 津田順子「沖繩宮古島の音楽における近代」 ヨコタ=村上ジェリー「能と近代―新作能を中心として―」
1998年 3月 14日 西成彦「浦島太郎の近代」
1998年 5月 15日 吉田和久「日本のモダニズムと小林秀雄」



	松居竜五「ウィリアム・プルーマーの日本駐在1926―1929」
1998年 7月 24日	鈴木真美「恋愛小説から『五重塔』へ」 ヴィン・シン「小松清とフランス、インドシナのかかわり」
1998年 7月 25日	佐伯順子「近代の恋愛観をめぐって―新しい女を中心に―」
1998年 9月 25日	柴田元幸「現代アメリカ小説について」 三浦雅士「『青春の研究』序説」
1998年 9月 26日	スミエ・ジョーンズ「犯罪と近代―血ぬられた時代―」
1998年 11月 20日	小谷野敦「つくられた近松神話」 大嶋仁「フランスのユダヤ思想家と近代日本」
1999年 2月 12日	金春美「日韓の文学にあらわされた『老い』」 井波律子「中国近代翻訳事情―『偵探小説』を中心に―」

040

日本人と英語：英語化する日本の学際的研究

●研究域
第1研究域 動態研究（基層）
●共同研究期間
1996（平成8）年4月～1997（平成9）年3月
●研究の概要
日本人と英語の関わりはますます強固に、かつ多様化している。しかし、そのことによって、日本人の言語・コミュニケーションの「英語化」の実態はどこまで進んでいるのだろうか。本研究では、何よりもその多様な側面を学際的に浮き彫りにすることによって、日本人の言語・コミュニケーションがどの程度英語化しているかを明らかにし、その上で、英語が日本人の自画像やアイデンティティー形成にどのような影響を与えているかを解明しようとした。
このため、日本人の言語行動における英語化の実態調査を進め、大衆文化としての「英会話」の社会的位置づけを明らかにすることによって、日本における英語教育と異文化交流のあり方にも提言を行った。（公募研究）
●研究代表者
津田幸男（日文研客員教授／名古屋大学大学院国際開発研究科教授、国際コミュニケーション論）
●幹事
柏岡富英（日文研助教授、社会学）
●班員
石井敏（獨協大学外国語学部教授、コミュニケーション論）
石原昌英（琉球大学法文学部助教授、英語学）
伊藤陽一（慶應義塾大学総合政策学部教授、国際コミュニケーション論）
井上治子（名古屋文理短期大学助手、社会学）
楠瀬佳子（京都精華大学人文学部教授、アフリカ文学）
高橋順一（桜美林大学国際学部教授、文化人類学）
田中優子（法政大学第一教養部教授、日本近世文化）
遠山淳（桃山学院大学国際文化学部教授、コミュニケーション論）
中島義道（電気通信大学電気通信学部教授、哲学）
藤原雅憲（名古屋大学留学生センター助教授、日本語教育学）
カール・ベッカー（京都大学総合人間学部助教授、比較思想史）
森住衛（大阪大学言語文化部教授、英語教育学）
吉野耕作（東京大学大学院人文社会系研究科、社会学）
早稲田みか（大阪外国語大学外国語学部助教授、社会言語学）
森岡正博（日文研助手、生物学）

●成果物
日文研叢書 14、津田幸男編『日本人と英語―英語化する日本の学際的研究―』（日文研、1998年3月）
●研究発表
1996年 5月 10日 津田幸男「年間計画の概要、共同研究の趣旨・目的」 中村敬「英語化現象の研究―領域と方法―」
1996年 5月 11日 大石俊一「反『英語支配』への視点―文学的ラディカリズムの立場で―」 津田幸男「言語と人権―映画『英語がなんだ!』を通して―」
1996年 7月 5日 高橋順一「北米インディアンの英語化に関する一つの事例」 早稲田みか「ハンガリーの国家・民族・言語」
1996年 7月 6日 楠瀬佳子「南アフリカにおける言語政策―英語と民族語との関係―」 吉野耕作「英語と文化ナショナリズム」
1996年 9月 13日 森住衛「英語教育における言語観の検証―英語の中にあられる日本人名の表記法を中心に―」 津田幸男「英語支配と英語教育―言語の主体性を求めて―」
1996年 9月 14日 岡戸浩子「日本における英語教育―外国語教育の多様化の視座から考える―」 石原昌英「英語教員免許と英語支配」
1996年 11月 8日 田中優子「日本文化を表現する言語の英訳について」 中島義道「人文科学（哲学）における英語（欧米語）支配」
1996年 11月 9日 伊藤陽一「『英語支配』の統計的評価」 カール・ベッカー「20世紀日本語の英語化」
1997年 1月 10日 阿部一「日本語における外来語」 真鍋一史「日本語の国際化を考える指標」
1997年 1月 11日 遠山淳「日本的コミュニケーションをめぐって」 藤原雅憲「日本語不信論の歩み―明治期から現代へ―」
1997年 3月 14日 高橋順一「国際組織と英語支配」 前田尚子「『母なるもの』について―日本人は欧米文化とどう闘ってきたか―」
1997年 3月 15日 井上治子「文化多元主義とアイデンティティー」 石井敏「日本人と英語の今後の関係」 総括討論「日本人と英語：その実態、影響、そして提言」

041

公家と武家―その比較文明的考察―

●研究域
第3研究域 文化比較（制度）
●共同研究期間
1996年（平成8）年4月～1999年（平成11）年3月
●研究の概要
本研究の意図は、日本の前近代社会において大きな力をもった公家（貴族）と武家という固有の階層に焦点を合わせて、それらの身分や機能のもつ意味、その秩序の形式、社会的役割といったものを浮かび上がらせようとするところにあった。併せて、アジアや中東、ヨーロッパなどの諸地域・諸民族の場合との比較、および相互間の比較を通して、武士層（騎士・職業戦士）が成長した地域と、文官支配が優越して武士の出現を見なかった地域との違いの歴史的な意味を、さまざまな角度から検討した。
とりわけ、日本社会においては「家」の形成と展開の問題を武家および公家の「家職」の特質との関わりのなかで取り上げ、ここを起点に普遍的

な観点からの検討に高めていこうと試みた。
●研究代表者
笠谷和比古（日文研教授、政治学）
●幹事
北川浩之（日文研助手、地球化学）
徐朝龍（日文研助教授、考古学）
●班員
青木淳（高知女子大学文化学部助教授、仏教美術史・宗教文化史）
井上勝生（北海道大学文学部教授、政治史）
井上浩一（大阪市立大学文学部教授、西洋史）
江川温（大阪大学文学部教授、西洋史）
大庭脩（皇學館大学文学部教授、東洋史）
小野芳彦（北海道大学文学部教授、情報学）
瀧谷寿（同志社女子大学文学芸学部教授、政治史）
加納重文（京都女子大学文学部教授、日本文学）
川嶋将生（立命館大学文学部教授、文化史）
源城政好（宇治市歴史資料館長、文化史）
下坂守（京都国立博物館学芸課普及室長、文化史）
杉立義一（日本医史学会理事、医学史）
鈴木董（東京大学東洋文化研究所教授、オスマン・トルコ史）
瀧浪貞子（京都女子大学文学部教授、政治史）
谷井俊仁（三重大学人文学部助教授、東洋史）
谷口昭（名城大学法学部教授、法制史）
竺沙雅章（大谷大学文学部教授、東洋史）
名和修（助陽明文庫文庫長、文化史）
西山恵子（宇治市歴史資料館主任、文化史）
橋本義則（山口大学人文学部助教授、政治制度史）
平木實（天理大学国際文化学部教授、朝鮮史）
平田茂樹（大阪市立大学文学部助教授、中国史）
平山朝治（筑波大学社会科学系助教授、社会経済史）
三木亘（元慶應義塾大学経済学部教授、西洋史）
村井康彦（滋賀県立大学人間文化学部教授、文化史）
石井紫郎（日文研教授、日本法制史）
王秀文（日文研客員助教授／大連民族学院、日本語学・比較文化）
落合恵美子（日文研助教授、家族社会学）
川勝平太（日文研教授、経済史）
クラウド・クラハト（日文研客員教授／ベルリン・フンボルト大学日本語科教授、日本文化・思想史）
千田稔（日文研教授、歴史地理学）
園田英弘（日文研教授、社会史）
光田和伸（日文研助教授、日本文学）
山折哲雄（日文研教授、宗教学）
●成果物
笠谷和比古編「公家と武家Ⅱ―「家」の比較文明的考察―」（思文閣出版、1999年10月）
●研究発表
1996年 4月 5日 趣旨説明、討論、本年度の研究計画打合せ
1996年 4月 6日 村井康彦「基調報告『貴族と家』」 コメント：石井紫郎
1996年 5月 31日 官文郷「家族の系譜の日中比較」 青木淳「中世的『結衆』の特質―像内納入品資料にみるイエと信仰―」
1996年 6月 1日 竺沙雅章「宋代の士大夫」 平山朝治「イエの形成と普及」 平田茂樹「宋代の科挙と宗教」
1996年 8月 2日 鈴木董「イスラム世界における『剣の人』と『筆の人』―前近代オスマン帝国の場合を中心に―」 永田エミリー「企業としてのイエー4つの酒造家と労働者―」

1996年 8月 3日	江川温「12世紀北フランスの貴族の親族意識」 源城政好「三条西家と家職」 谷口昭「家訓―家形成の最終形態―」
1996年 10月 25日	西山恵子「中世貴族と家業」 三木亘「イスラム世界における家族・部族の家」 大庭脩「前漢封建相統法について」 光田和伸「『家』と『山』―連歌の通世―」 橋本義則「『長屋王家』木簡にみる奈良時代の貴族―公的『家』検討の素材紹介をかねて―」
1996年 12月 13日	加納重文「九条兼家における家の意識」 瀧谷寿「王朝貴族の葬墓」 瀧浪貞子「官僚制と家」
1996年 12月 14日	井上浩一「ビザンツ人の名字と名前―イエの比較研究のために―」 下坂守「『寺家』の構造」
1997年 4月 11日	笠谷和比古「公家と武家―「家」研究の現状と課題―」 瀧浪貞子「官僚制と家」
1997年 4月 12日	落合恵美子「直系家族の歴史人口学」 名和修「五摂家の家名について」 川嶋将生「戦国期の公家―松殿忠顕をめぐって―」
1997年 6月 20日	土居浩「無縁墓地の系譜」 村井康彦「氏上と氏長者」
1997年 6月 21日	竺沙雅章「唐宋時代の葬送と追薦」 井上浩一「遺言状にみるビザンツ貴族のイエ意識」
1997年 8月 1日	瀧谷寿「平安時代の貴族の葬墓」 江川温「親族の賛同（Iaudatio Parentum）―貴族の所領寄進と親族関係―」
1997年 8月 2日	三木亘「シリアの家族について」 谷口昭「藩政史料の存在構造」 青木淳「イエの僧、あるいは僧のイエ」
1997年 10月 24日	源城政好「三条西家の法事について―『実隆公記』の法事記事から―」 加納重文「平安末期における公家の『家』意識」
1997年 10月 25日	下坂守「中世寺院内における親族関係―『山徒』の例を中心に―」 平山朝治「イエ社会の盛衰と妹の力」 杉立義一「京都の医家―医家人名録と医家門人帳―」
1997年 12月 12日	瀧浪貞子「蔵人所の成立」 西山恵子「中世公家と鎌倉幕府」 井上勝生「幕末の官廷政治」
1997年 12月 13日	川嶋将生「葉室光忠と松殿忠顕」 大庭脩「中国の武家」 平田茂樹「宋代の垂廉聴政―内朝と外朝を手掛かりとして―」
1998年 1月 23日	施超倫「孝明天皇の国家意識について―安政5年の条約問題をめぐって―」 橋本義則「律令国家と喪葬」
1998年 1月 24日	徐朝龍「長江文明の盛衰」 平木實「朝鮮王朝国家における王権の特徴の一側面」 名和修「五摂家の成立過程」
1998年 4月 10日	杉立義一「孝明天皇の病死をめぐる医学史的所見」 エドワード・J・シュルツ「高麗時代における武人の成立と崩壊（The Rise and Collapse of the Military in Koryo）」
1998年 6月 5日	官文郷「日本古代における通婚圏と出自―中国古代社会の同姓不婚と比較して―」 鈴木董「『貴族』なき社会における名家の意味」
1998年 6月 6日	井上浩一「11世紀ビザンチンにおける貴族の紐帯―婚姻と主従関係をめぐって―」



		谷井俊仁「清律における親族観念―謀殺人を中心に―」
1998年 8月 7日	和歌山県立図書館所蔵、紀州藩政文書の閲覧および研究討議	
1998年 10月 2日	石井紫郎「ウジからイヘヘという図式について―吉田孝氏の業に寄せて―」 辻垣晃一「鎌倉時代の擬制的親子関係」 江川温「『親族の賛同』再論」 笠谷和比古「『家』の概念と『家』形成の比較文明史」	
1998年 10月 3日	竺沙雅章「北条の家譜」 下坂守「山徒の『家』の相続」	
1998年 12月 4日	杉立義一「医師の家業継承について」 源城政好「三条西家の家業の成立について」 村井康彦「『氏長者』考」	
1998年 12月 5日	瀧浪貞子「藤原氏と中臣氏」 大庭脩「中国古代の武士の『家』」 平木實「朝鮮時代の郷村における郷飲酒儀礼について」	
1999年 1月 29日	李曉「喫茶と養生についての中日比較―唐・宋と鎌倉・室町を中心として―」 川嶋将生「戦国期の公家と将軍―松殿忠顕を事例として―」 ヘスング・チュン・コー「朝鮮時代における家族と女性」	

042 東アジア地中海世界における文化圏の形成過程―3世紀から7世紀にかけて―

●研究域
第4研究域 文化関係(旧交圏Ⅰ)
●共同研究期間
1996(平成8)年4月～1999(平成11)年3月
●研究の概要
ヨーロッパ・地中海にみられるように、「地中海」を取りまく地域は、まさに海域を介して特有の地中海文化圏を形成した。それは、東アジアにおいても同様であったと考えられる。日本海・渤海・黄海・東シナ海などによって構成される海域は、3世紀から7世紀にかけて、中国大陸・朝鮮半島・日本列島において政治状況が激動の時代を迎えた。この東アジア地中海ともいうべき地域に、この激動の連鎖に対応した文化圏が形成され、その伝播と受容には多様な形態がみられたのである。
このような視点から、本研究では、歴史学、考古学、宗教学、文学、地理学の方法論を総合的に適用することにより、「東アジア地中海文化圏」の成立過程を試論として提示した。
●研究代表者
千田稔(日文研教授、歴史地理学)
●幹事
上垣外憲一(日文研助教授、比較文化)
光田和伸(日文研助教授、江戸文学)
●班員
相原和邦(広島大学教育学部教授、日本語学)
青木淳(高知女子大学文化学部助教授、仏教美術史・宗教文化史)
東潮(徳島大学総合科学部教授、東アジア考古学)
内田忠賢(お茶の水女子大学文教育学部助教授、歴史地理学)
宇野隆夫(富山大学人文学部教授、考古学・考古社会学)
王勇(杭州大学日本文化研究所センター所長、中日関係史)
大形徹(大阪府立大学総合科学部助教授、中国哲学)
笠井敏光(大阪府羽曳野市教育委員会文化財保護課主査、考古学・言

語文化学)
金子裕之(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター考古計画研究室長、日本考古学)
亀田修一(岡山理科大学総合情報学部助教授、考古学)
木下尚子(熊本大学文学部助教授、考古学)
木原克司(鳴門教育大学学校教育学部教授、歴史地理学・考古学)
徐光輝(龍谷大学国際文化学部講師、高句麗考古学)
菅谷文則(滋賀県立大学人間文化学部教授、考古学)
高橋誠一(関西大学文学部教授、歴史地理学)
高橋徹(朝日新聞社大阪本社編集委員、東アジア文化史)
高橋美久二(滋賀県立大学人間文化学部助教授、考古学・歴史地理学)
武光誠(明治学院大学一般教育学部助教授、日本古代史)
多田伊織(白鳳女子短期大学国際人間学科、比較文化学)
田中俊明(滋賀県立大学人間文化学部助教授、朝鮮古代史)
中村圭爾(大阪市立大学文学部教授、東洋史)
野崎充彦(大阪市立大学文学部助教授、朝鮮学)
服部(佐野)静代(滋賀大学教育学部講師、歴史地理学)
福永光司(京都大学人文科学研究所名誉所員、中国思想史)
彭飛(京都外国語大学外国語学部助教授、比較文化)
松下煌(東アジアの古代文化を考える大阪の会、東アジア古代文化論)
宮城洋一郎(皇學館大学社会福祉学部教授、仏教学)
宮地たか(奈良文化女子短期大学教授、哲学)
山近久美子(防衛大学校人文科学教室助手、歴史地理学)
和田萃(京都教育大学教育学部教授、日本古代史)
井波律子(日文研教授、中国文学)
黄曉芬(日文研外来研究員／京都造形芸術大学非常勤講師、考古学)
アイリーン・ガッテン(日文研客員教授／ミシガン大学日本研究センター研究員、日本古典文学)
姜信約(日文研客員教授／仁済大学校教授、文化人類学)
徐朝龍(日文研助教授、考古学)
杜勤(日文研客員助教授／華東師範大学外国語学院第二学部副学部長・助教授、言語文化学)
エドウィナ・バーマー(日文研客員教授／カンタベリー大学アジア言語学科シニアレクチャー、歴史地理学)
安田喜憲(日文研教授、地理学・環境考古学)
頼富本宏(日文研教授、仏教史・仏教美術)
李曉(日文研客員助教授／山東大学二世紀山東発展研究センター副主任・助教授、歴史学)
李均洋(日文研外国人来訪研究員／国立西北大学外国文学研究室助教授、経済学)
●成果物
千田稔編著『海の古代史―東アジア地中海考―』(角川書店、2002年4月)
●研究発表
1996年 5月 24日 千田稔「地中海文化の比較論への視座」
1996年 5月 25日 福永光司「『船』の文化について」
1996年 7月 19日 木原克司「船に関する出土遺物」
1996年 7月 20日 大形徹「龍の船と鳥の船」
1996年 9月 13日 木下尚子「貝(殻)の文化性」
1996年 9月 14日 西藤清秀「鳥の山古墳の発掘」
1996年 12月 29日 宮城洋一郎「古代における航海安全祈請の儀礼について」
1996年 12月 30日 福永光司「中国古代の海神信仰」
1997年 3月 1日 張従軍「中国東方の太陽神と月神」 岡山真知子「古代における辰砂の生産と流通」
1997年 3月 23日 金子裕之「たまふりの琴」 田中俊明「玄琴と加耶琴」
1997年 5月 16日 笠井敏光「考古資料にみるイレズミ」
1997年 5月 17日 名嘉真宣勝「沖縄のハジチ(針突)習俗」
1997年 7月 25日 和田萃「古代の玉をめぐる」

1997年 9月 19日 宇野隆夫「玉(たま・ぎょく)の道」
1997年 9月 20日 東潮「北朝・高句麗の壁画―基主図像と鬼神図像―」 黄曉芬「古代中国の墓制とその変遷」
1997年 11月 21日 徐光輝「高句麗の鉄器」
1997年 11月 22日 野崎充彦「鉄と水神信仰」
1998年 3月 27日 宮地たか「鏡背文様の変容について」
1998年 3月 28日 岸本直文「三角縁神獣鏡について」
1998年 5月 15日 山近久美子「藤原京をめぐる問題」
1998年 5月 16日 亀田修一「百済の都城と寺院」
1998年 7月 10日 中村圭爾「六朝時代建康の台城・都城とその周辺」
1998年 7月 11日 小方登「衛星写真・画像の歴史景観への応用」 千田稔「中国・朝鮮半島の都城復原と衛星画像」
1998年 9月 11日 佐野静代「若水・常世・海人族」
1998年 9月 12日 木下尚子「広田貝塚と環シナ海世界」
1998年 11月 20日 今回の討議テーマ「伊勢神宮」 神宮徴古館・農業館など見学
1998年 11月 21日 矢野憲一「徴古館資料からみた伊勢神宮」
1999年 3月 10日 第13回国際研究集会「道教と東アジア文化」 ～12日

043 大正期総合雑誌の学際的研究

●研究域
第1研究域 動態研究(基層)
●共同研究期間
1997(平成9)年4月～2000(平成12)年3月
●研究の概要
先に、4年間にわたって『総合雑誌『太陽』の総合的研究』を実施したが、今回はその継続的發展として、日露戦争前後の明治末期から関東大震災までの大正時代全般を対象に設定し、国際関係と国内動向を照らし合わせつつ、政治・経済・科学技術・社会・学問・思想・芸術・風俗の諸分野にわたって、『太陽』を中心としつつも、新たに登場した『中央公論』や『改造』などとの比較検討をまじえつつ言論界の動態研究を行った。
日露戦争前後の日本文化の動向は、「一等国」に近づいた自信と重化学工業化への産業構造の急激な転換、社会矛盾の激化と民衆暴動、知識層の倦怠感、大逆事件、「韓日併合」と「満州」の利権問題、明治の終焉、第一次世界大戦の受け止め方などをめぐって、言論の多様化と複雑化、分裂が進行する時代であり、これを総括的に把握することは困難をきわめる。
そこで、各界ごとの動向に多角的にアプローチし、相互に突きあわせて、並行現象や交差現象を突きとめることで、この困難の解決を図ろうとした。
●研究代表者
鈴木貞美(日文研教授、日本文学)
●幹事
稲賀繁美(日文研助教授、比較文化・美術史)
●班員
浅岡邦雄(白百合女子大学図書館嘱託、メディア史)
池内輝雄(筑波大学文芸・言語学系教授、日本文学)
石田秀実(九州国際大学経済学部教授、倫理学・哲学)
大塚協太(静岡県立大学国際関係学部助教授、社会(家族))
井上健(東京工業大学外国語研究教育センター教授、比較文化)
今村忠純(大妻女子大学比較文化学部教授、日本文学)
岩見照代(麗澤大学外国語学部教授、女性史)
ウルリケ・ヴェール(広島市立大学国際学部助教授、女性史)
エリス俊子(東京大学大学院総合文化研究科助教授、比較文化)

大和田茂(東京都立城北高等学校教諭、思想)
小田三千子(東北学院大学教養学部教授、言語社会学)
梶山雅史(岐阜大学教育学部教授、教育学)
柏岡富英(京都女子大学宗教・文化研究所教授、社会学)
金子務(帝京平成大学情報学部教授、出版流通論)
加納孝代(青山学院女子短期大学教授、キリスト教)
鎌田東二(武蔵丘短期大学助教授、哲学)
北岡伸一(東京大学大学院法政政治学研究科教授、国際関係論)
北川勝彦(関西大学経済学部教授、経済学)
佐伯順子(帝塚山学院大学文学部助教授、日本文学)
佐々木英昭(名古屋工業大学工学部助教授、比較文化(英米))
佐藤一樹(二松学舎大学国際政治経済学部助教授、比較文化)
佐藤バーバラ(成蹊大学文学部教授、社会(倫理))
杉岡津岐子(吉備国際大学社会福祉学部教授、心理学)
成恵卿(日本大学国際関係学部助教授、比較文化)
銭嶋(同志社大学言語文化教育研究センター講師、比較文化)
銭国紅(大妻女子大学比較文化学部専任講師、比較文化)
竹村民郎(大阪産業大学経済学部教授、経済史)
張競(明治大学法学部助教授、比較文化)
坪内稔典(京都教育大学教育学部教授、日本文学)
坪内祐三(目白学園女子短期大学非常勤講師、ジャーナリズム)
中川成美(立命館大学文学部教授、比較文化)
芳賀徹(京都造形芸術大学長、比較文化)
林正子(岐阜大学地域科学部教授、比較文化)
原秀成(図書館情報大学図書館情報学部講師、出版論・法制史)
藤本寿彦(都留文科大学文学部非常勤講師、農業・詩)
正木晃(白鳳女子短期大学国際人間学科助教授、宗教(仏教))
増田周子(徳島大学総合科学部講師、日本近代文学)
三谷憲正(佛教大学文学部助教授、比較文化)
宮寄真素美(愛知県立大学文学部助教授、日本近代文学)
山口昌男(札幌大学文化学部長、文化人類学)
游環芸(台湾玉山社出版編集者、児童文学・日台関係史)
呂順長(神奈川大学人文学研究所客員研究員、比較文化)
渡辺守雄(九州国際大学法学部、国際関係)
井上章一(日文研助教授、比較・風俗)
岩井洋(日文研客員助教授／関西国際大学短期大学部助教授、宗教社会学)
大嶋仁(日文研客員教授／福岡大学人文学部教授、比較文学・比較思想)
上垣外憲一(日文研教授、比較文化(韓国))
小松和彦(日文研教授、文化人類学)
白幡洋三郎(日文研教授、造園学・産業技術史)
園田英弘(日文研教授、社会学)
ウィリアム・ジェファースン・タイラー(日文研客員助教授／オハイオ州立大学東アジア言語・文学科助教授、日本現代文学)
ロイヤル・タイラー(日文研客員教授／オーストラリア国立大学アジア研究学部日本センター教授、文芸(日本古典))
田口律男(日文研私学研修員／広島文教女子大学文学部助教授、日本近代文学)
戸塚隆子(日文研客員助教授／日本大学短期大学部助教授、日本近代文学)
光田和伸(日文研助教授、文芸(和歌・俳諧))
李応寿(日文研客員助教授／世宗大学校人文科学大学副教授、韓国比較演劇学)
●成果物
鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』(思文閣出版、2001年7月)
●研究発表
1997年 4月 18日 明治期『太陽』の共同研究報告 先行研究の討論 『太陽』共同研究の報告(Ⅰ)



1997年 4月19日	『太陽』共同研究の報告 (2) 『太陽』共同研究の報告 (3)
1997年 6月20日	日露戦争の総括と日露戦後経営をめぐって 鈴木貞美「日露戦争の総括をめぐって」 三谷憲正「日韓併合への言説の動向」
1997年 6月21日	呂順長「日本人の中国人留学生観」 金谷美和「華北と満州における民芸運動」 浅岡邦雄「明治初期の出版メディア」
1997年 7月18日	原秀成「博文館と近代出版流通の確立—商業思想・広告・著作権—」
1997年 7月19日	鈴木貞美「『中央公論』に見る日露戦後方針」 藤本寿彦「『反省 (会) 雑誌』 (『中央公論』前身誌) について」
1997年11月21日	中川成美「女性表象とメディアとスキャンダル」
1997年11月22日	梶山雅史「博文館と国定教科書問題」
1997年12月19日	佐藤バーバラ「新しい女性”New Women”“モダン・ガール」 ウルリケ・ヴェール「1913年の『新々婦人』と『中央公論』特集」
1997年12月20日	馬興国「『中国東北地区と日本』に関する中国における研究動向」
1998年 2月20日	岩見照代「大正期の女性論をめぐって」 大和田茂「シベリア出兵をめぐる『太陽』と『中央公論』の論調を比較する」
1998年 2月21日	鈴木貞美「『中央公論』『回顧五十年』をめぐって」
1998年 4月17日	大塚協太「『太陽』『中央公論』の『新しい女』特集における家族観」 竹村民郎「日本の貿易と『太陽』特集『海の日本』」
1998年 4月18日	石川肇・小峰慎也「『太陽』特集『十九世紀』を読む」 鈴木貞美「近代の超克」思想は日露戦争前後から」
1998年 6月19日	三谷憲正「日韓併合をめぐる言説」 芳賀徹「『中央公論』『新しい女』特集の評価」
1998年 6月20日	林正子「ドイツ思想・文化受容の動向」 鈴木貞美「フリーディスカッション—問題提起—」
1998年 7月17日	銭嶋「明治・大正期、新しい東洋研究の成立—雑誌の役割—」 金子務「石原純と原阿佐緒」 鈴木貞美「明治の終焉と『大正新時代』をめぐって」
1998年11月20日	佐藤一樹「文化的対外観の形成」 小田三千子「女子高等教育の日米比較」 坪内祐三「『中央公論』と『新公論』の比較研究」
1998年11月21日	今村忠純「大正演劇の諸問題」 正木晃「新宗教と超常現象」
1998年12月18日	佐々木英昭「男女学生交際論の諸言説—明治38年—」 鈴木貞美「『近代』という概念」
1998年12月19日	坪内稔典「『日本及日本人』と詩歌」
1999年 6月18日	松田清「オランダ出版史から見た書店主フランソワ・ハルマ」 鈴木俊幸「江戸時代の書籍流通」
1999年 6月19日	稲岡勝「明治前期小学校教科書はどう作られたか—『東京府地理教授本』を例として—」 浅岡邦雄「明治20年代の貸本業—「貸本目録」と業態をめぐって—」 (コメント:大竹正春) 宮下志郎「フランスの貸本屋、及び出版史研究」
1999年 7月16日	劉建輝「19世紀後半の上海と総合雑誌の発生」 大塚協太「『中央公論』における知識人の家族観」 佐伯順子「男性の同性愛とその文学的表象をめぐって」
1999年 7月17日	原秀成「大正デモクラシーと明治文化研究会」
2000年 2月 7日	稲賀繁美「岡倉天心とインド」

	リース・モートン「モダニズムと『みだれ髪』・鉄幹の『むらさき』」
2000年 3月17日	増田周子「雑誌『随筆』をめぐって」
2000年 3月18日	報告書うちあわせ

044	日中考古学の文化比較研究
●研究域	
第2研究域 構造研究 (自然)	
●共同研究期間	
1997 (平成9) 年4月～1998 (平成10) 年3月	
●研究の概要	日本文化の基層の形成に大きな影響を与えたのは中国文明であった。その中国文明の実態を、環境考古学・考古学・歴史学・遺伝学・生態学・古植物学・動物考古学・地球化学・地質学・哲学・文学・美術史・民俗学…など、関連するさまざまな分野を可能な限り動員して、国際的、学際的に究明しようとした。
	そうした大きな鳥瞰図を構えることによって、中国文明の全体像に少しでも近づくことが可能になり、日本文化の基層の謎のいくつかが解明された。(公募研究)
●研究代表者	
高崇文 (日文研客員助教授／北京大学考古学部助教授、考古学)	
●幹事	
安田喜憲 (日文研教授、環境考古学)	
●班員	
飯島武次 (駒澤大学文学部教授、考古学)	
稲畑耕一郎 (早稲田大学文学部教授、考古学)	
岡内三真 (早稲田大学文学部教授、考古学)	
岡村秀典 (京都大学人文科学研究所助教授、考古学)	
金原正明 (天理参考館考古美術部学芸員、環境考古学)	
小南一郎 (京都大学人文科学研究所教授、中国古代文化論)	
佐藤洋一郎 (静岡大学農学部助教授、遺伝学)	
菅谷文則 (滋賀県立大学人間文化学部教授、考古学)	
高橋学 (立命館大学理工学部助教授、環境考古学)	
竹村恵二 (京都大学理学部助教授、地質学)	
外山秀一 (皇學館大学文学部助教授、環境考古学)	
中村慎一 (金沢大学文学部助教授、考古学)	
宮本一夫 (九州大学文学部助教授、考古学)	
森勇一 (愛知県立明和高等学校教諭、環境考古学)	
井波律子 (日文研教授、中国文学)	
梅原猛 (日文研顧問、哲学)	
北川浩之 (日文研助手、地球化学)	
高文漢 (日文研客員教授／山東大学外国語学院東方言語文学部、日本語学・日本文学)	
徐朝龍 (日文研助教授、考古学)	
千田稔 (日文研教授、歴史地理学)	
寺澤薫 (日文研客員助教授／奈良県立橿原考古学研究所総括研究員、考古学)	
樋口隆康 (日文研客員教授／奈良県立橿原考古学研究所長、考古学)	
本郷一美 (日文研中核的研究機関研究員、考古学)	
●研究発表	
1997年 6月 8日 小南一郎「商周青銅器と礼の形成」	
	今後の研究の進め方について
1997年 7月 9日 岡村秀典「戦後楚墓の発掘」	

	今後の研究の進め方について
1997年10月 6日 高崇文「楚国喪葬礼制考」	
1998年 1月26日 張從軍「中国の蛇信仰について」	
	飯島武次「中国周文化考古学研究」
	高崇文「楚国喪葬礼制考」

045	家族と人口の歴史社会学
●研究域	
第2研究域 構造研究 (人間)	
●共同研究期間	
1997 (平成9) 年4月～2000 (平成12) 年3月	
●研究の概要	関連が深いにもかかわらず、方法的な違いなどからこれまでなかなか対話のすすまなかった家族史学と歴史人口学。この両分野を有機的に結合させる試みがこの研究の目的であった。
	日文研では、これまで大量の近世人口史料を収集してきた。自他ともに全国一と認められているこれらの史料を駆使することが可能であるので、これらを基礎的素材の一例として活用しつつ、〈demo-family system〉＝人口・家族システムともいうべきものの解明をめざした。これにより、日本の人口・家族システムの特徴はなにか、という問いに答えを出したいと考えた。
	もちろん、日本という枠で一つのシステムを想定することは妥当なのか、地域的多様性や、逆に国境を越えて広がる共通性はないのかといった問題も検討された。
●研究代表者	
落合恵美子 (日文研助教授、家族史・家族社会史)	
●幹事	
黒須里美 (日文研助手、社会学・人口学 平成11年4月～麗澤大学外国語学部助教授)	
テモテ・カーン (日文研助教授、比較文化論)	
●班員	
江川ひかり (立命館大学文学部助教授、西アジア史)	
太田素子 (共栄学園短期大学社会福祉学科助教授、日本史)	
岡田あおい (帝京大学文学部助教授、家族社会学)	
小野芳彦 (北海道大学文学部教授、情報学)	
川口洋 (帝塚山大学経営情報学部助教授、地理学)	
岸本美緒 (東京大学大学院人文社会系研究科教授、中国史)	
鬼頭宏 (上智大学経済学部教授、経済史・歴史人口学)	
木下太志 (愛知江南短期大学教授、人口人類学)	
河野綱果 (麗澤大学国際経済学部教授、人口学)	
小島宏 (国立社会保障・人口問題研究所国際関係部長、人口学)	
斎藤修 (一橋大学経済研究所教授、経済史・歴史人口学)	
坂本勉 (慶應義塾大学文学部教授、トルコ史)	
佐々木陽一郎 (聖徳大学人文学部教授、経済史)	
沢山美果子 (順正短期大学幼児教育科教授、日本史)	
清水浩昭 (日本大学文理学部教授、社会学)	
高木正朗 (立命館大学産業社会学部教授、社会学)	
高橋基泰 (愛媛大学法文学部助教授、西洋史)	
田代和生 (慶應義塾大学文学部教授、朝鮮史)	
津谷典子 (慶應義塾大学経済学部教授、人口学)	
坪内良博 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授、社会学)	
坪内玲子 (龍谷大学経済学部教授、家族社会学)	
友部謙一 (慶應義塾大学経済学部助教授、経済史・歴史人口学)	
仲井 (高橋) 美由起 (一橋大学大学院経済学研究科博士課程、経済史)	

	中里英樹 (松阪大学政治経済学部講師、社会学)
	成松佐恵子 (NHK学園講師、日本史学)
	羽中田岳夫 (彦根市総務都市史編さん室技師、日本史)
	浜野潔 (京都学園大学経済学部助教授、経済史・歴史人口学)
	原俊彦 (北海道東海大学国際文化学部教授、人口社会学)
	東昇 (愛媛県歴史文化博物館学芸員、日本史)
	廣嶋清志 (鳥根大学法文学部教授、人口学)
	ハラルド・フース (ドイツ日本研究所研究員、日本史)
	藤田苑子 (慶應義塾大学文学部助教授、西洋史)
	松浦昭 (神戸商科大学商経学部教授、経済史)
	松下敬一郎 (龍谷大学社会学部教授、社会学・人口学)
	三浦忍 (九州産業大学経済学部教授、経済史)
	溝口常俊 (名古屋大学文学部教授、地理学)
	宮坂靖子 (奈良女子大学生生活環境学部助教授、家族社会学)
	村越一哲 (駿河台大学文化情報学部助教授、経済史・歴史人口学)
	村山聡 (香川大学教育学部助教授、西洋史)
	山本準 (鳴門教育大学学校教育学部助教授、社会学)
	吉田光男 (東京大学大学院人文社会系研究科教授、朝鮮史)
	米村千代 (千葉大学文学部講師、社会学)
	石井紫郎 (日文研教授、法制史)
	クリストファー・ウィルソン (日文研客員助教授／オーストラリア国立大学社会科学研究所研究員、歴史人口学)
	笠谷和比古 (日文研教授、日本史)
	侯楊方 (日文研客員助教授／復旦大学中国歴史地理研究所助教授、歴史人口学)
	連水融 (日文研客員教授／麗澤大学教授、経済史・歴史人口学)
	山田奨治 (日文研助教授、情報学)
●研究発表	
1997年 5月16日 Tamas Farago “Servanthood, Life Cycle and Household in Early Modern Hungary” Griffith Feeney “Japan’s Demographic Transition: 1884-20??”	
1997年 5月17日 津谷典子「短期的経済ストレスと世帯内関係の死亡への影響」 Griffith Feeney「ワークショップ (1) “The Life Table in Historical Demography”」 BDS班&データベース班「ワークショップ (2) 西条データからの人口指標作成」 「ワークショップ (3)」	
1997年 6月20日 「ワークショップ (1) 入力プログラム (VBDS) 講習会」 小野芳彦、黒須里美、森本修馬「BDSからデータベースまで」 高橋美由起、中里英樹「XAVIERデータベースの基礎テーブル」 黒須里美、森本修馬「NISHIJOデータベースの基礎テーブル」 小野芳彦、黒須里美、森本修馬「人口学基本統計の出し方Step by Step」	
1997年 6月21日 浜野潔、黒須里美、森本修馬「NISHIJOデータベースから見る結婚」 「ワークショップ (2) データベースの活用」 「ワークショップ (3) 班活動」	
1997年 7月18日 「日本—ケンブリッジ・マイクロシミュレーション・プロジェクトについて」 中里英樹「近世東北農村における親子同居の規定要因」 廣嶋清志「親子同居の分析モデル」	
1997年 7月19日 Jim Oeppen “objectives and methodology of Kinship Simulation”	



	「ワークショップ(1) 班活動」
	「ワークショップ(2) データベースの利用」
1997年 11月 14日	クリストファー・ウィルソン “What do demographers study and why?: a discussion of fertility and replacement” 川口洋 他「ニューラルネットを用いた古文書文字(年齢表記)の認識: 宗門改帳古文書画像データベースを用いた実験結果」
1997年 11月 15日	森本修馬「宗門改帳のデータベース化と分析」
1998年 3月 12日	Ge jianxiong “Migrations in Pre-modern China: Main Types and Their Effects” 坪内玲子「近世武士における家系の継承と人口学的要因—会津藩藩士の場合—」
1998年 3月 13日	浜野潔「京都町人の移動サイクル—下京区志水町—」 永田メアリ「家族対個人—下守屋と西条の改名—」 森本修馬、高橋美由起「SHUMAプログラムからのデータベース構築とその分析—二本松藩郡山下町の事例—」
1998年 6月 19日	クリストファー・ウィルソン “1. Introduction: the place of the new volume in historical demography” クリストファー・ウィルソン “2. Data gathering and organization”
1998年 6月 20日	クリストファー・ウィルソン “3. Issues in demographic analysis” クリストファー・ウィルソン “4. Results and conclusions” クリストファー・ウィルソン “5. General discussion”
1998年 10月 9日	森明子「中欧における家族史研究のひとつの傾向—ウィーン大学経済史社会史研究所を中心に—」 藤田苑子「歴史人口学と歴史学」
1998年 12月 18日	鬼頭宏「問題提起: 近世日本の出生力とその要因」 津谷典子「近世東北農村の出生力パターンからみた関引」 太田素子「同時代人のみた子返しの習俗—文書史料による近世出生コントロール研究の可能性について—」 沢山美果子「出産と身体: 近世: 補遺—妊娠・出産への接近のための資料と方法を中心に—」
1998年 12月 19日	宮坂靖子「明治末から大正期の乳児死亡について—アルファ・インデックスを手がかりに—」
1999年 1月 9日	「18世紀東アジア親族比較研究」プロジェクトの概要 嶋陸奥彦「戸籍を通して見た朝鮮時代後期の家族の形態」 ヘスング・チュン・コー「朝鮮時代の刑事判例を通して見た家族と女性」
1999年 7月 9日	成松佐恵子「村の経済・庄屋家族の経済」 バルト・ガーンズ「近世ネーデルランドのコンパニーにおける家族の役割と会社の存続—日本との比較—」
1999年 7月 10日	服部緑地日本民家集落博物館見学(解説: 森隆男)
1999年 10月 29日	高橋基泰「村の相伝・近代英国編: 親族構造・相続慣行・世代継承」 吉田光男「移動する人しない人: 朝鮮近世士族家門の形成と『邑』空間」
1999年 10月 30日	侯楊方 “Household Structure in China: a case study of Jiangxi Migrant in 1724” 渠昭「中国農村部の切り絵: 作り手としての女性と生命観」
2000年 2月 29日 ～3月 1日	シンポジウム「ユーラシアプロジェクトの成果と挑戦」 1995～2000」Part 1 【第一部 国際比較研究】 速水融「ユーラシアプロジェクトの成果と挑戦」

	トミー・ベングソン、キャメロン・キャンベル「ユーラシア諸社会における経済ストレスと家族: プロジェクトの課題と方法」 レンゾ・デローザス、ミシェル・オリス「運命を決する数年間: 乳幼児死亡の比較分析」 ジェイムズ・リー、落合恵美子、王豊「ユーラシアの家族組織と人口学的行動: メタ地理学の検証」 ジョージ・オルター「マルサスを書き直す: ヨーロッパとアジアの人口再生産体制」 トミー・ベングソン、キャメロン・キャンベル「経済条件および社会経済的地位と死亡率: 短期経済ストレスの効果」 津谷典子「経済変動および世帯要因と高齢期死亡: 歴史的社会的比較分析」 【第二部 国内研究】 速水融「前近代日本の歴史人口学的地域性」 木下太志「死亡」 黒須里美「結婚」 浜野潔「都市人口」 落合恵美子「世帯」 岡田あおい「継承・相続」 沢山美果子「出産・子育て」 総括コメント: 立木成文、森岡清美、安場保吉、中野卓、前田卓、藤井勝
--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2000年 3月 17日 ～18日	「ユーラシアプロジェクトの成果と挑戦1995～2000」Part 2 鬼頭宏「日本における人口史料: 所在情報と収集活動」 川口洋「歴史人口学班: 人口移動」 溝口常俊「統計と地理分析」 Ron Lesthaeghe “Demographic change and the politics of morality in Europe’s heartland: Belgium 1500-2000” 村山聡「西日本地域における宗門改帳の収集」 小島宏「スパイスロード班」 松浦昭「史料としての宗門改帳」 津谷典子「歴史人口学班: 出生(黒須里美報告)」 小野芳彦「情報処理班: 宗門帳データベースと家譜データベースの作成」 川口洋「『江戸時代における人口分析システム (DAN-JUROver2.0)』の公開」 坪内玲子「家族史班: 武家公家グループ報告」 河野稔果「人口統計班」
----------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

046	将棋の戦略と日本文化
●研究域	
第3研究域 文化比較(思想)	
●共同研究期間	
1997(平成9) 年4月～1999(平成11) 年3月	
●研究の概要	将棋は、チェスや中国将棋とともにインドの古代ゲームであるチャトランガに由来し、日本で古来より独自の発達をとげて、ユニークかつ複雑性の高いゲームとなった。ゲームとして広く普及し、日本の社会生活のなかに浸透している。

	一方、将棋は、剣道などとともに、日本人の勝負感覚に少なからず影響を与えてきた。その勝負哲学は、個人の交渉から組織の経営、さらには外交にいたる人間社会のさまざまな場面に応用できる内容をもっている。 本研究は、将棋というゲームおよびその戦略を基礎に、「勝負」という切り口を通して新たな日本文化論を試みた。
●研究代表者	
尾本恵市(日文研教授、人類学・日本人論)	
●幹事	
山田奨治(日文研助教授、応用情報学)	
●班員	
飯田弘之(静岡大学情報学部講師、情報学・人工知能論)	
池田知隆(毎日新聞社学芸部副部長、マスコミ論)	
伊藤亜人(東京大学大学院総合文化研究科教授、文化人類学)	
木村義徳(将棋博物館長、ゲーム論・歴史学)	
小暮得雄(平成国際大学法学部教授、刑事法学)	
竹村民郎(大阪産業大学経済学部教授、経済史)	
旦代晃一(京都大学名誉教授、数学・論理学)	
西田利貞(京都大学大学院理学研究科教授、霊長類学・行動学)	
野崎昭弘(大妻女子大学社会情報学部教授、社会情報学)	
米長泰(秋田工業高等専門学校教授、都市工学)	
山口昌男(札幌大学文化学部長、文化人類学)	
若島正(京都大学大学院文学研究科助教授、ゲーム論・文学)	
井波律子(日文研教授、中国文学)	
井上章一(日文研助教授、建築史・意匠論)	
大橋良介(日文研客員教授／京都工芸繊維大学工芸学部教授、哲学)	
笠谷和比古(日文研教授、歴史学)	
木村汎(日文研教授、政治学)	
黒須里美(日文研助手、社会学)	
早川聞多(日文研助教授、美術史)	
光田和伸(日文研助教授、文学)	
●成果物	
尾本恵市編著『日本文化としての将棋』(三元社、2002年12月)	
●研究発表	
1997年4月18・19日 自由発表	総合討論
1997年 6月 23日	木村義徳「将棋の歴史(1): 持駒再使用のはじまり」 米長泰「棋士の棋風特性の分析」
1997年 6月 24日	光田和伸「連歌における対局観と次の一手」 山田奨治「弓術における戦略と思想」
1997年 9月 29日	飯田弘之「思考ゲーム: コンピューター vs. 人間名人」 若島正「詰め将棋とチェスプロブレム」
1997年 9月 30日	木村義徳「将棋の歴史(2)」 井波律子「三国史にみる勝負」
1997年 11月 28日	笠谷和比古「戦国武士の陣立てと将棋の戦略」 尾本恵市「谷沢永一氏の『五輪書に学ぶ勝ち方の極意』を読んで」
1998年 1月 26日	井上章一「様々な将棋論—江戸から近代まで—」 早川聞多「江戸風俗の中の将棋」
1998年 1月 27日	伊達宗行「江戸期の科学と詰め将棋」 飯田弘之「詰め将棋とコンピューター: 解法と創作」
1998年 3月 12日	木村義徳「将棋とギャンブル」 谷岡一郎「ギャンブルと日本人」
1998年 3月 13日	旦代晃一「チェスと将棋」 米長泰「コントラクト・ブリッジについて」 木村汎「日本式交渉—特殊性と普遍性—」 尾本恵市「将棋の格言に思う」
1998年 5月 8日	米長泰「羽生およびトップ棋士の棋風分析」 入江康平「武道伝書に見る勝負観」
1998年 5月 9日	自由討論

1998年 7月 10日	唐権「囲碁の日中文化交流史」 小暮得雄「将棋と袁彦道」
1998年 9月 25日	竹村民郎「遊楽としての将棋とプロ化の諸相: 実力名人制の成立に関連して」 十時博信「将棋と落語にみる江戸文化」 実演: 十時博信(三山亭多楽)「将棋の殿様」
1998年 9月 26日	清水康二「考古学と将棋の駒」 旦代晃一「平安将棋の謎」
1998年 11月 20日	熊沢良尊「16世紀における高級駒・水無瀬駒とその位置付け」 佐伯真一「鎌倉時代の大将棋について」 大内延介「将棋の来た道—その後の進展—」 東公平「作家の書いた観戦記」
1999年 1月 22日	増川宏一「江戸の家元制度と将棋家」 水口藤雄「徳川家康と囲碁との関係」
1999年 1月 23日	旦代晃一「『普通唱導集』等についての私見」 米長泰「コンピューターによる棋風分析: 大山と升田」
1999年 3月 12日	西田利貞「チンパンジーの闘争戦術」 総合討論: 将棋の将来
1999年 3月 13日	総合討論

047	日本社会における会合の実態とその持つ意味についての歴史的研究
●研究域	
第4研究域 文化関係(旧交圈Ⅱ)	
●共同研究期間	
1997(平成9) 年4月～1998(平成10) 年3月	
●研究の概要	日本社会を歴史的に考えるとき、「宴」がもつ意味は非常に大きい。宴とは、あるひとつの関係を共有する人々が集まって酒食を共にすることであるが、その態様は年中行事的なものから政治的、宗教的、親睦的ときまざまであり、人間関係の上下も絡みつく。 本研究は、宴の種類、形式、階層差、地域差等を明らかにし、宴がその社会においてどのような意味をもっていたかを考察することを通じて、現代まで継続している日本社会の基本的な人間関係の手がかりを得ようとした。(公募研究)
●研究代表者	
小泉和子(日文研客員教授／小泉和子生活史研究所代表取締役、日本家具・道具史)	
●幹事	
井上章一(日文研助教授、建築史・意匠論)	
●班員	
飯村均(財福島県文化センター遺跡調査課文化財副主査、考古学)	
伊藤正義(文化庁文化財保護部記念物課調査官、中世史)	
入間田宣夫(東北大学東北アジア研究センター教授、古代・中世史、国際文化論)	
小野正敏(国立歴史民俗博物館考古研究部助教授、考古学)	
川本重雄(北海道工業大学工学部教授、日本建築史)	
毛塚万里(武蔵大学人文学部、中世史)	
佐々木利和(東京国立博物館資料第二研究室長、アイヌ民俗学)	
志田原重人(比治山女子短期大学助教授、民俗学)	
高埜利彦(学習院大学文学部教授、近世史)	
玉井哲雄(千葉大学工学部教授、日本建築史)	
豊見山和行(琉球大学教育学部助教授、沖縄史)	



堀内明博（助古代学協会、考古学）	
モリス・マーティン（千葉大学工学部講師、日本住宅史）	
吉田光男（東京大学大学院人文社会系研究科教授、朝鮮史）	
●研究発表	
1997年 5月 9日	入間田宣夫「武家儀礼（宴会）の席次にみる権力編成原理」
1997年 5月 10日	佐々木利和「19世紀のアイヌの酒宴」 志田原重人「中世の年中行事と宴」
1997年 9月 25日	長岡京発掘現場にて見学
1997年 9月 26日	飯村均「東国の宴会の実像」 川本重雄「『年中行事絵巻』・『類聚雑要抄』に見る正月大饗」 小泉和子「『類聚雑要抄』にみる平安時代貴族の宴会における飲食器と供膳具」 玉井哲雄「宴会における民家のつかわれ方」

## 048 画像資料が物語る身体の文化史

●研究域
第5研究域 文化情報（日本における日本研究）
●共同研究期間
1997（平成9）年4月～2000（平成12）年3月
●研究の概要
日文研が所蔵する生活風俗に関する高精細画像資料が、身体（病の身体、性の身体）の本質を見事に再現してくれる。こうした画像には、実に豊富で、かつ複雑に集約された文化情報を提供してくれる。
本研究は、こうした画像資料の集中的、多角的分析を通して、新しい、より立体的な身体の文化史を築き上げようとする試みであった。
ここで要求される多角的分析は、とうてい1人の研究者が単独でなしうるものではない。たとえば、ある図の背景には幕末に起きた麻疹の流行という医学史の事実があるが、これらの絵に潜む意味を完全に解明するためには、疫鬼信仰の変遷、食生活の歴史、日本美術史における擬人化の意義、それに病の社会学と経済学などの多様なテーマを検討しなければならない。画像資料とは、そうした意味で、まさに学際的、総合的な研究方法を求めているのであった。
●研究代表者
栗山茂久（日文研助教授、比較医学史）
●幹事
早川開多（日文研助教授、美術史）
●班員
浅野秀剛（千葉市美術館学芸課学芸係長、美術史）
石田秀実（九州国際大学経済学部教授、哲学）
ミヒェル・ヴォルフガング（九州大学言語文化部教授、医学史）
川部裕幸（成城大学民俗学研究所研究員、民俗学）
酒井シヅ（順天堂大学医学部教授、医学史）
桜井謙介（元塩野義製薬㈱油日ラボラトリーブ主任研究員、本草学）
白杉悦雄（東北芸術工科大学教養部助教授、東洋思想史）
シワニ・ナンディ（元日文研中核の研究機関研究員、技術論）
タイモン・スクリーチ（ロンドン大学助教授／学習院大学訪問研究員、美術史・文化史）
鈴木見仁（慶應義塾大学経済学部助教授、医学史）
鄭金生（中国中医研究院中国医史文献研究所研究員／茨城大学人文学部外国人研究者、医学史）
中村るい（トキワ松学園横浜美術短期大学非常勤講師、美術史）

畠山豊（町田市立博物館主査・学芸員、日本民俗学）	
昼田源四郎（福島大学教育学部教授、精神医療史・精神病理学）	
パトリシア・フィスター（白鳳女子短期大学国際人間学科助教授、美術史）	
福田真人（名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授、医学史）	
カール・ベッカー（京都大学総合人間学部教授、比較思想史）	
真柳誠（茨城大学人文学部教授、医学史）	
山田慶兒（日文研名誉教授、科学史）	
山田洋子（京都大学大学院教育学研究科教授、発達・言語・文化心理学）	
横田則子（甲南女子大学文学部非常勤講師、日本近世史）	
吉田忠（東北大学東北アジア研究センター教授、科学史）	
梁永宣（北京中医薬大学医史文献教研室講師／茨城大学人文学部外国人研究者、日中の比較・医学史）	
井波律子（日文研教授、中国文学）	
稲賀繁美（日文研助教授、比較文学・比較文化）	
ジョン・ウォレス（日文研客員助教授／ウィスコンシン大学助教授、日本文学）	
落合恵美子（日文研助教授、家族社会学・歴史人口学）	
姜信杓（日文研客員教授／仁済大学校人文社会学研究所教授、人類学）	
黒須里美（日文研助手、比較家族人口学）	
ヒュー・シャピーロ（日文研客員助教授／ネヴァダ州立大学助教授、東洋史）	
スミエ・ジョーンズ（日文研客員教授／インディアナ大学教授、文学）	
ジョン・タダオ・テラモト（日文研客員助教授／カンザス大学助教授、日本美術史・日本画）	
原正一郎（日文研客員助教授／国文学研究資料館研究情報部助教授、情報工学）	
梁嶺（日文研客員教授／北京中医薬大学基礎医学院中医診断教研室教授、漢方医学史）	
●研究発表	
1997年 5月 16日	栗山茂久「共同研究の趣旨について」 畠山豊「疱瘡絵と麻疹絵のことなど」
1997年 5月 17日	浅野秀剛「近世浮世絵春画の流れ」 早川開多「初期浮世絵春画の特質」
1997年 7月 11日	中村るい「理想的身体比率の追求：ギリシャのカノンと現代の身体美」 落合恵美子「『品のいい主婦』と『官能的な白人女性』—戦後日本雑誌における女性の表象—」 酒井シヅ「麻疹絵にかんするいくつかの問題」
1997年 7月 12日	白杉悦雄「『飲食養生鑑』『房事養生鑑』にかんするいくつかの問題」 早川開多「初期浮世絵春画・その2A」 浅野秀剛「初期浮世絵春画・その2B」
1997年 11月 21日	全員討論「幕末の麻疹絵に見える諸問題」
1997年 11月 22日	浅野秀剛「初期浮世絵春画・その2A」 早川開多「初期浮世絵春画・その2B」
1998年 1月 16日	中谷一「顔貌・筆法：17～18世紀中国肖像画における顔部描写の変貌にかんする一考察」 鈴木則子「麻疹絵と麻疹の医学」 川部裕幸「疱瘡絵にかんするいくつかの問題」
1998年 1月 17日	浅野秀剛「初期浮世絵春画・その3A」 早川開多「初期浮世絵春画・その3B」
1998年 3月 14日	ティモシー・クラーク「歌麿展における春画の反響」 ウィリアム・ジョンストン「江戸の梅毒」
1998年 3月 15日	ジョシュア・モストウ「国貞の春画における男色といき」 延広真治「落語の中の性」 芳賀徹「徳川文化における性の魅力」
1998年 5月 15日	栗山茂久「身体観と身体感（その1）：筋肉質の肉体に現れる魂」 シワニ・ナンディ「インターネットで探る身体の文化史・歴史的画像資料を中心に」 ヒュー・シャピーロ「中国における神経衰弱の前史：画

像資料が提起する問題」	
1998年 5月 16日	早川開多「溪斎英泉『枕文庫』・その1」
1998年 7月 17日	小松和彦「酩酊について・その1」 白杉悦雄「『飲食養生鑑』『房事養生鑑』・その2」
1998年 7月 18日	早川開多、浅野秀剛「溪斎英泉『枕文庫』・その2」
1998年 9月 25日	真柳誠「日中の医薬画像資料（中世以前）」
1998年 9月 26日	早川開多「仏像における身体表現」 早川開多「溪斎英泉『枕文庫』・その3」
1998年 11月 20日	鈴木則子「江戸後期の入浴と美女」 山田奨治／コメント：原正一郎「コンピューターを通して見る浮世絵の顔」
1998年 11月 21日	早川開多「溪斎英泉『枕文庫』・その3」 宗田文庫資料の検討
1999年 1月 22日	高島文一「人体内景図（特に脂膏・脂膜・脂膜）について」 館野之男「X線写真読影レポート—言語で記述する欧米とスケッチ重視の日本—」
1999年 1月 23日	吉田忠「胎児の図像」 福田真人「美しく透明になる身体」
1999年 3月 19日	ヴァンサン・バラス「ガレノスが見た理想的身体」 頼富本宏「仏教タントラの身体観—とくにチャクラとナーディーについて—」
1999年 3月 20日	ウィリアム・ラフレール「日本中世時代のパラダイムにおける科学と医学と宗教—六道思想に関する絵巻のデータから学ぶ—」 栗山茂久「身体観と身体感・そのⅡ：解剖図と春画の関連について」
1999年 5月 21日	内藤くすり博物館見学
1999年 5月 22日	昼田源四郎「反逆する身体—江戸時代の神経症—」 北川央「江戸時代の引札」
1999年 7月 30日	山田洋子「日仏大学生のイメージ画にみる『たましい』の形と死生観」 石田秀実「『修真九転丹道図』について—日本に渡来した内丹書—」
1999年 7月 31日	戸矢理衣奈「ヴィクトリア朝の女性の肌、下着意識の変容」 尾鍋智子「西洋透視画法に対する江戸後期日本の二つの反応—絵師北斎と蘭学者遠藤の場合—」
1999年 9月 17日	ジョン・タダオ・テラモト「『病草紙』をどう解釈すべきか」 梁嶺「舌を診る歴史について」
1999年 9月 18日	稲賀繁美「岩明均『寄生獣』における身体の画像表現」 早川開多「江戸時代における性愛観—鈴木春信を中心に—」
1999年 11月 19日	鄭金生「中国歴代の本草図とそのイラストレーターの関係」 総括討論：画像資料が何を物語るか
1999年 11月 20日	パトリシア・フィスター「近代美術における身片」
2000年 1月 18日	第15回国際研究集会 ～21日「『身体観』と身体感の歴史」

## 049 日本における怪異・怪談文化の成立と変遷に関する学際的研究

●研究域
第2研究域 構造研究（社会）
●共同研究期間
1997（平成9）年10月～2001（平成13）年3月
●研究の概要
怪異・怪談、あるいは怨霊・妖怪変化をめぐる文化は、日本の文化史の形成と展開に重要な役割を果たしてきたことが認められながらも、その否定的な意味あいが強かったために、関連学問諸分野において、これまで周辺的な位置づけしかなされず、学問的に真正面から取り組まれることがなかった。
本研究は、こうした従来の消極的な「慣行」から脱却し、あくまでも文化史的観点に立ちつつ、諸外国における研究成果も取り入れつつ、各時代について、歴史・信仰・文学・美術・芸能・地理（空間論）・建築物・ジェンダーなど、多面的・学際的に分析することを通じて、その総合的・立体的な把握をめざした。また、豊富な資料の存在の確認や、それらの研究利用法の開拓も試みた。
●研究代表者
小松和彦（日文研教授、文化人類学）
●幹事
長田俊樹（日文研助手、言語学）
山田奨治（日文研助教授、応用情報学）
●班員
青木淳（高知女子大学文化化学部助教授、仏教美術史・宗教文化史）
阿部泰郎（名古屋大学大学院文学研究科、宗教学）
板橋作美（東京医科歯科大学教養部教授、文化人類学）
アダム・カバット（武蔵大学人文学部教授、近世文学）
京極夏彦（作家、近世・近代文化論）
スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学教授／立教大学客員研究員、近世文学）
諏訪春雄（学習院大学文学部教授、近世文学）
高田衛（東京都立大学名誉教授、近世文学）
高橋明彦（金沢美術工芸大学美術工芸学部助教授、近世文学）
武田雅哉（北海道大学大学院文学研究科助教授、中国文学）
武光誠（明治学院大学一般教育部助教授、古代史）
田中貴子（京都精華大学人文学部助教授、古代文学）
辻惟雄（多摩美術大学長、美術史）
常光徹（国立歴史民俗博物館民俗研究部助教授、口承文芸論）
徳田和夫（学習院女子大学国際文化交流学部教授、中世文学）
西山克（京都教育大学教育学部教授、中世史）
橋爪紳也（大阪市立大学文学部助教授、建築史）
服部幸雄（日本女子大学人間社会学部教授、芸能史）
兵藤裕己（成城大学文芸学部教授、中世文学）
宮田登（神奈川大学経済学部教授、民俗学）
安井真奈美（天理大学文学部講師、民俗学）
山口昌男（札幌大学長、文化人類学）
横山泰子（法政大学工学部助教授、演劇史）
赤坂憲雄（日文研客員教授／東北芸術工科大学教養部教授、日本思想史）
井波律子（日文研教授、中国文学）
井上章一（日文研助教授、建築史・意匠論）
内田忠賢（日文研客員助教授／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授、人文地理学）